F13
c.28
F13-Sa28-ケ
1200500763343
X
複写

部

K-Ls-86

坂口安吾

けがちのい

春陽堂

F13
SA28
7
7

坂口安吾著

いのちがけ

春陽堂版

1017
23

目次

木々の精、谷の精……一
黑谷村……二九
イノチガケ……五五
前篇　殉教の數々……五六
後篇　コワン・シローテの殉教……七九
その一　船出……七九
その二　上陸……八六
その三　江戸……九一
その四　イノチの日……一〇三
風人錄……一〇九
波子……一一七
竹藪の家……一四九

木々の精谷の精

一

修吉が北越山中の秋山家を訪ねたとき、恰もそれを見るために遥々やつてきたやうに、まづ佛像のことを尋ねた。

佛像は彌勒だといふ話であつた。觀音に似た女性的な柔和な相をし、半跏して、右手で輕く頬杖をついて靜思とも安息ともうけとれるやうな姿をした像である。この彌勒像の柔和な顔にきざまれた不思議な微笑に就いて、かねて友達の野澤から屢々話をきいてゐたのだ。野澤の姉が秋山家の當主に嫁してゐるのである。

玉木修吉は佛像の研究家でも蒐集家でもなかつたし、また上代文化に特別造詣のあるわけでもなかつたので、この佛像の話に興味を覺えたことが殆んどなかつた。

夏が近づいたとき、野澤と旅の話をした。そのとき、秋山家で一夏暮してみないかといふ話がでたのだ。山中だから涼しいうへに、ほど近い谷間には温泉のわく部落もあるといふ話であつた。牛肉や海のものが食へないぐらゐの不自由を忍べば、たまじ山間の温泉宿で隣室の絃歌や喧騒に惱むよりはましだらうと野澤は言つた。

「奇妙な微笑をたたへてゐる彌勒像のあるうちだね」と、修吉は思ひついて言つた。

「そのうちなんだよ。ところで——」と、そのとき野澤が語つたのである。「そこの娘が、つまり僕の姪に當る娘なんだが、君はかういふこぢつけた見方がきらひかな。年頃になるに從つて、彌勒像の性格だ。二年前の話だが、十九の年に見合ひして、近村の豪農の息子と結婚することになつたのだ。見合ひから歸つてきての言ひぐさが、あんな美男子は始めて見た、少女歌劇の男役よりも綺麗だと思つたなんて、他人のお聟さんでも見物してきた話のやうに笑ひながら言つたさうだ。好きなのかと訊くと、大好きだと答へたので、結婚させることになつたわけだ。ところが、あと十日ほどで結婚式といふ時分になつて、その娘が、誰ひとり知らないうちに婚家の方へ電話をかけて、結婚をやめることにしたからといふ通知をしてしまつたさうだ。緣談はおぢやんになつたが、娘の態度が至極あつさりしたもので、自分のしでかしたことを一向に一大事だとは思つてゐない風なので、兩親も叱りやうに困つたといふ話なのだ。これが突飛な行動の第一回目で、その次には、夜中に屋敷をぬけだして、山奥へ失踪したことがあつたさうだ。急に死ぬ方が綺麗

のやうな氣がしたからだと言つたさうだよ。生れつき一冊の文學書も讀む氣になつたことのない娘で、泣顔の想像ができないやうな呑氣な風があるのだが、僕がまた女の神祕といふやうなものに興味を持ち、いくらかそれにこだはりすぎるせゐかも知れぬが、彌勒の微笑に似た祕密なものが目の中に感じられて、なんとなく行末が氣にかかる娘なんだね」

盛夏がきて、愈々二人が秋山家へ出發といふ當日に、のつぴきならない用ができて、野澤は同行できなくなつた。先方では既に用意をととのへて待つてゐることだから、と、修吉だけ一足先に行くことにした。野澤は用をかたづけて、四五日あとには追ひつく筈であつたのだ。しかし、結局彼は一夏中多忙に追はれる破目になつて、修吉の長い滯在中、つひに姿を現さずにしまつたのだが。

修吉は娘にからまるいくつかの話をきいた後になつても、佛像の神祕な微笑をいふものを、身を入れて考へてみたことはなかつた。なるほど一夏の温泉宿も月並だ。いくらか騒温であるにしても、山中の豪家で暮す一夏が、多少は新鮮であるかも知れない。修吉はさう考へて、漫然と行く氣になつてしまつたのだ。

修吉は部屋へ案内してくれた十七八の下婢に向つて、佛像のありかを尋ねてみた。その下婢は、まつしろな肌に、眼の色すら青くはないかと疑はれるほど異國風な顔立で、ふさはしい衣裳をまとうてゐたなら、都會でも目立つだらう、と彼は思つたほどだつた。佛像よりもこつちの方がいいのぢやないかな、と、そんな氣持がしてゐたのである。

「そこにあります」

意外にも、下婢はきはめてあつさりと、部屋の床の間を視線で示した。なるほど、そこに佛像があつた。氣付かずに、尋ねたことがてれくさいほど、人間なみの大きさをした木像であつた。

「いつもこの部屋におくのかね」

下婢は修吉の質問がのみこみかねて、しばしぼんやり顔をみつめた。ふだんはめつたに使はない特別の客間ださうだが、野澤が佛像を好んでゐるから、この部屋を特に二人の使用に當てたのだといふ。

かうして彼は娘の顔を見ないうちに、まづ佛像を見たのであつた。

なるほど彌勒の像である。臺に腰かけた姿勢なのだが、右足を左膝の上へのせてゐる。さうして右手の指先を輕く當てて頬杖をつき、物思ひとも憩ひともつかぬ風

をして、かすかに笑つてゐるやうである。立上つたら、ちやうど四尺七八寸の仔鹿のような敏捷な婦人の姿になりさうだ。胴體や手足は調にくらべていくらか細く、飛鳥天平の佛像に似て現實的な肉體の線をよほど離れたものであつたが、注目すべき一事には非現實的な曲線からみづみづしい肉感があふれあがつてゐることだつた。飛鳥天平の肉體の線は、内面の靜寂を象徴して、肉感を超えてゐるのが普通なのである。鎌倉頃の觀音や地藏の像には、工匠達がその憧れの肉體をそこにもとめたかのやうに、その肉感のなやましさに見る人々を呆氣にとらせるものがある。然し、それらの肉體の線は飛鳥天平の象徴的な手法と異り寫實的な手法であつて、現實の女體さながらなのが普通である。この彌勒は現實を夢幻的に歪めてゐること飛鳥天平のものにちかいが、その甚しく非現實的な肉體から見れば、みづみづしい肉感を縹渺と放つてゐるのである。凝視めてゐると、涯の知れない遠さのなかにあるやうなその肉感が、ひどく身近くせまつてゐるので、妖しい思ひになるのであつた。

この肉感に氣付いたうへで顔の表情へもどつてくると、笑ひの神祕がよほどはつきりと分りかけてくるやうだ。モナリザの笑ひとも通ふ。もつと素直で、さり氣ない笑ひなのである。さうして、笑ひを意識して視るのでなければ、それを見逃してしまひさうな幽かな笑ひの醫にすぎない。そのくせ、いつたん意識してしまつたあとでは、笑ひに魅入られてしまつた風に、それが深く絡みついてくるやうになる。またその顔の美しさが、ひどく靜かで、清潔だ。血を吸ひ飽いた寶石の冷たさよりも靜寂である。また、安らかなものであつた。

二

その村の名を木暮といつた。

谷川の水面から目測して、ざつと二三百米、四五百米の小さな山波にかこまれた變哲もない山間の部落風景にすぎないのだが、それでもひとつ、これは綺麗だと感じた場所は、かなり深い谷へ降りて、小さな瀑をなしたしじまを見たときだつた。

それはこの村へきて、五六日目の出來事であらうか。修吉は、秋山家の例の娘の道案内で、しみつくやうな蟬しぐれを頭上に殘して、白雲ながらうすぐらいこの谷底へ降りてきたのだ。

娘の名を葛子といつた。かつら子とよむのださうな。

木暮村へ到着匆々、まづ下婢の美貌にたじろいだのが皮切りで、その後村を歩いてゐると、藁屋根の釣瓶の水を汲む娘や、柴を負うて山を降る女達、また往還の日當りに干飄をほす女などに、出會ひがしらに思はず振向きかけるやうな美人を見出すことが多い。勿論かうした山中のことで、美人を豫期してゐないのが過大な驚異を與へるわけだが、脚絆に手甲のいでたちで、夕靄の山陰からひよいと眼前へ現れてくる女達の身の輕さが、牝豹の快い彈力を彷彿させ、曾て都會の街頭では覺えたことがないやうな新鮮な情欲を與へたりする。

さういふ中でも特に念頭を去らないのが、あの下婢の異國風な、古の希臘の女の思はせる顔なのである。整ひすぎてゐるために、却つて餘程迫力が薄れるやうな思ひがする。この下婢はお妙と言つた。この村では上流に屬する家の娘ださうだ。

葛子はお妙のやうに整然とした美貌ではない。生きてゐるのは、その目であつた。そのために顔も頬も生き生きとして、また眼や鼻の陰影すら、いつも動きを感じさせるやうである。さうして暴動が敏捷で、動作のたびにいつも突然を感じさせ、そのゐる場所に、常に彼女の身から閃めく變化を與へる思ひをさせた。

ありていに言へば、修吉はお妙を念頭におきながら、葛子のその新鮮な現れのために、いつかお妙の幻が掻き消されてゐることに、なぜか抗意を覺えるのである。掻き消やされた幻をいたむ思ひがするのであつた。あはれむ思ひもするのである。

その思ひがさせた仕業であるかも知れない。ある日のこと、修吉はこの村のあちこちで見た美貌に就いて、それから特にお妙の稀な美貌に就いて、葛子に語つた。

「牝豹のやうに彈力の深い美貌の女が山から降りてくるのも見ました。また黄昏の靄の中で釣瓶の水を汲んでゐる娘の姿を、自然の生んだ精氣のやうな美しさに感じたこともあるのです。また太陽へながしめを逆りかねない思ひのする健康な野獸の意志を生き甲斐にした日向の下の女も見ました。その人たちがその各々の美しさで、僕をうつとりさせたわけですね。この村の自然は至極平凡な山中風景にすぎないのですが、それはいはば各々の精氣のやうなあの美貌を生みだしたあとの脱殼だからで、このありきたりの風景も、あれらの美貌が加はると、生き返るやうに爽やかになります。さう言へば、なるほど、都會でも同じことは言へますね。新鮮な建築の精氣のやうな女もあれば、逆刀の精氣のやうな女もあります。然

し都會の場合では、美貌を生んだ背後の自然が、その各々の生みだした美貌のために、この山中の自然のやうにめざましく生き返ることがありません。むしろ背後の自然の方が彼女たちを助けるやうな風ですね。この村の美しい女達は、いつも各々のふるさとを生きかへらせてゐるかのやうに、めざましい。とりわけあなたの召使のお妙の美貌には驚いたのです。それに、あの整然とした美貌だけは、どうしても、ふるさとが見當らぬやうです。この村の自然に、あれを生みだした母胎がなく、この村とお妙の二つを結んでゐる脈絡をもとめる餘地がありません。さうして、お妙の美貌には、ふるさとのない虚しさとまた悲しさが沁みついてゐますね。凝視めれば却つて形が消え失せて、すべてが皆無になるやうな、よるべなさがあるのですね。かうして、一夏の無獣を賭けた氣輕な旅行が、僕の却々に忘れがたい思ひ出になりさうですよ」

そのとき葛子が答へたのである。

「この村に、お妙よりも綺麗な娘が、もう一人ゐるのですよ」と。こだはりの跡形もない聲なのである。笑つてゐる。さうして、目に燃えてゐる光のあることを見逃すわけにはいくまいが、遊びなら何を措いても逃さぬといふ無邪氣な子供は、いつもかういふ眼付であるに相違ない。「志緒乃といふちやうど私と同じ年の娘なのです。さあ。さつそく會見にでかけませうよ。おめかしなさい。さうして、東京へ歸れなくなる覺悟をきめて下さいね。都會にだつて、ざらに見當る筈のない美人ですもの」

葛子は、すでに立上つて、修吉が彼女について立上るのを疑ひもせぬ樣子であつた。とはいへ、思ひあがつてゐる風はない。人を呑んでゐる風もない。子供はいつもこのやうに無邪氣にひとり決めこんでゐる、さういふ風があるだけである。

かうして、二人は連立つて出掛けることになつたのだつた。——あの谷底の薄暗がりの淵を見たのは、この日であつた。

二人は志緒乃の家へ行つた。然し志緒乃はゐなかつた。水浴にでかけて行つたといふのである。そこで二人は水浴の場所へ向つて足を向けた、そこが即ちこの谷底であつたわけだ。

谷底は、四方が花崗岩の絶壁であつた。前面の壁は二百米を超えてゐるに相違ない。流れの上下はいづれも突然曲折して、岩壁の彼方へ流れの姿を消してゐるから、淵はちやうど古沼のやうにひつそりと、絶壁の底に深い

碧の色をたたへてゐるのである。その水の厚みの深い色をみては、主だとか妖精だとか思ひつかずにゐられないのが自然であるし、掌にすくつた水まで、同じ厚味のねつとりした深い碧い色のやうに思ひたくなる。水の上を歩くことが出來さうな、厚味の深い澱んだ色の絨毯なのだ。この谷底へ獨りで降りて來たのでは、いささか凄味がきつすぎて、ひとりぢやとても水中へ片足入れる氣にもなれない。

然し、實際の水深は、せいぜい大人の胸までで、ちやうど泳ぎに手頃ださうな。空が頭上に小さくて、泳ぎながら見上げると、なぜか樂しい氣になるさうだ。

志緒乃はそこにゐたのであつた。三人の裸女が岩の上にやすんでゐた。

三

この谷底まで降りてくるのが、並たいていの苦勞ではなかつた。木の幹に突當つたり、縋りついたり、思はず枝に、ぶらさがることになつたり、轉ぶことを食ひとめるのに汗だくだつた。やうやく木の間をわけでると、今度は岩を辷らぬやうに降りて行くのが一苦勞といふことになる。こんな難路をわざわざ降りて水浴にくる娘達の氣が知れないが、然し、愈々水面の見えるところへきて、下の方にひつそり澱んだ深い色を見たときには、なるほどさすがに修吉にも、ちよつと疲れを忘れるやうな氣になつた。それはたしかに美しい。我々の生活のある世界とは違つた感じの美しさである。

然し、修吉が水の色と同じぐらゐに驚いたのは、この谷底へ降る葛子の姿態であつた。

彼女もむろん木の幹に突き當つたり、危ふく枝にとりすがつたりすることは變りがないが、同じ苦勞の動きにもこたしが如何にも餘裕があつた。それは慣に馴れてゐる熟練のせゐと意味が違ふ。轉ぶことを食ひとめるのが精一杯のきはどい時でも、その美しさを取逃さない自然の意志を忘れたためしがないといふ意味なのだつた。そのくせそれを意識してゐる加工のあとはないのである。萬事が甚だなげやりで、自由でもあり、自然でもあつた。つまづく姿も美しい。危ふく足をふみしめて枝にとりつく姿も綺麗だ。閃く足も、流れる手も、走る腰も、すべてが常に新鮮な情感を失ふ時がないのであつた。

修吉は、疑ぐらずにはゐられなかつた。この美しさを葛子自身が意識しない筈があらうか。意識してゐる跡のな

いのが、一さう癪だ。志緒乃といふお妙以上の美人がゐると答へたときの、あのこだはりの微塵もない自然な調付を思ひだしてみるがいい。企らみの陰がないのである。驢に燃える炎はあつても、それが却つて無邪氣さのあかしになつてゐるだけだ。邪念を汲みだす餘地がないから、一さう腹が立つ氣になる。さうして、ちよつと憎くなる。自分の魅力を本能的に知つてゐるのだ。それどころか、修吉がすでに自分の魅力から脱けだすことができないこともその本能がのみこんでゐる。お妙の美貌も、村随一の美人だと自分で折紙つけてゐる志緒乃の美貌も、恐らく自分に比較して言つた覺えはないのであらう。自分は一段別なところへ置いてしまつてゐるらしい。修吉はさういふ風に思ひこみたくなるのであつた。

然し葛子の閃く足や、流れる手、走る腹のどの一ケ所にふと目をとめてしまつただけでも、忽ち怒りも憎しみもただ跡形なく霧散して、想念のすべてのものは、目に沁みわたる冴え冴えとした情感にさらひとられてしまふのである。つまづいた木の根をエイと蹴りすてて次の急坂を脱んで葛子の閃く溝へを見るがいい。修吉はただ快い絢にのまれて、うつとりと餘念を去らずにゐられない。讃嘆の溜息を洩らしかねない思ひになつてしまふのである。

結局邪念も企らみも有りやうのない娘なのだつた。彼女の前に立つてしまへば、さういふほかに法がない心になつてしまふのである。ひたすら無邪氣で、明るい。忽ちのうちに人に親しみ、垣を知らず、こだはりに馴れず、悪意をもたない。寛大で、優しいのである。結果に於て人を傷める棘はあつても、それは彼女の意志ではないのだ。可憐な天性の魔女なのである。秘密がこもつてゐるにしても、透明なものを感じさせ、清潔な思ひを人に與へる。恐らく人はこの娘から香氣を描くことができても、その體臭を描くことはできまいと彼は思つた。

「まあ、綺麗だこと！　志緒乃！　着物をきちや、だめ！」

葛子は岩を降りながら叫んだ。鋭い叫びは谷の靜寂に木魂して、四方の岩壁に幾たびかひびき、またその奥へ餘韻を消した。

葛子は水際の岩の上へとび降りた。さうして志緒乃のかたはらへ進み、裸の肩へ手をかけた。その掌を志緒乃の冷たい肌へ當てて、胎内の新鮮な氣が流れてゐるのを樂しむやうな風である。

「たべちやいたいやうな肌だこと。できたてのアイスク

リームのやうだ」葛子はさう言ひながら、志緒乃の背中にもよつと頬を押しあてた。「お前だけこんな綺麗な肌をもらつて、癪にさはる人だねえ。東京のお客様が木暮村の女王様を見たいんだつてさ。さあ着物きなさい」

その言葉が終つたときは、葛子がついと志緒乃のかたはらを離れる時と同時であつた。すでに葛子は水際にゐて、戯みの色をみつめてゐた。

なるほど、葛子を映すには、このひつそりした潔い碧がふさはしいかも知れなかつた。この村の各々の風景に、その各々を母胎にして美貌の女を見出すことができるやうに、この谷底の精氣が化して娘の姿をなしてゐるなら、さしづめそれにふさはしいのが葛子である。修吉は思つた。この娘を全裸にして、この水中にたはむれさせてみたいものだ、と。そのとき、葛子が修吉を見て、話しかけた。

「この谷の色、すこうし淒味がありすぎるであう。この水色ぢや、とても私は泳ぐ氣持になれませんわ。それに私は鐵鉛だから」

葛子は水際にしやがみ、指先を水に浸してぴしやぴしやはじいた。

「つめたい水。こんなところに一分間もはいつてゐたら、私の貧弱なからだ、攫せちやふでせう。志緒乃は文學少女だから、こんなところで泳ぐのが好きなんですよ」

「村の人達はみんなこの谷へ泳ぎにくるわけぢやないのですか」

「どう致しまして。ここにゐらつしやる御三方の御專用です」

なるほど――修吉は思つた。葛子の言葉の中には、この村の或る人々の生活を、歴々とその念頭に描きださせるものがあつた。それは彼に靜かな挑撥を感じさせ、また快いユーモアを感じさせた。

葛子の言葉の中から、この村落の或る生活を描きだしてくるためには、文學少女といふ言葉を、志緒乃の人柄に並べてみればそれで足りる。そこで、志緒乃の人柄を理解するには、まづ都會地の驟病質な文學少女を思ひ浮べ、その人柄の全然逆な型を思へば、すでにいくらか當つてゐよう。

志緒乃に脚絆手甲をつけさせ、柴を負はせ、さうして夕鶴の山氣の中を歩かせたなら、恐らく村の青年達を惱殺するにふさはしいこの村落の精氣がなしした美女の姿になるかも知れない。腰は野獣の柔軟さを持ち、踏む足は輕く彈力にとみ、牝豹の艶麗な感覚を彷彿させるに相違

なかつた。またこの人を爐邊に坐らせ、若者達にとりかこませ、さうして彼等の野心をかくし然し甚だ不器用にその情慾をむきだしにした雜談の花の中に置くがいい。志緒乃の顏は生き生きと輝き、語る言葉はすべてが機智に溢れてみえ、野性的な身のこなしも高い笑ひも、いかなる華奢な美女たちよりも纖細に若者たちの情慾をそそり、うつとりさせるに相違ない。いかにも女王の姿なのだ。

然し、志緒乃を文學に組み合はすのは落語的な效果を生むにすぎないのだ。すでに都會の感覺と組み合はすのが不自然である。文化とか理智といふものと並べておいて、さて、この娘の印象を人に尋ねてみるがいい。爐邊に坐り若者たちに圍まれたときのあの隔離たる光彩は、もはやそこには有り得ない。感覺の鈍さとか、精神美の低さとか、下品さとか、そのやうなものを人々は印象したと答へるだらう。この女が文學少女であるとしたら、まづ普通、それをきいた人々は憤慨するに相違ない。

然し、山中の僻地では、このやうな文學少女があることも、必ずしも失笑を生む種にはならない。まづ、このやうな奥山の生活に、都會なみの文學を考へる方が可笑しいのだ。幾つも山を越えなければ汽車にも乘れぬ山中で、名前を知らぬ人に逢ふのが奇蹟のやうな振幅のない生活である。

こんな棄てられた生活の中に、文學青年なんていふ柔弱男子の住む餘地が有り得ようとは考へられない。恐らく事實ゐないのだらう。そこで、缺けたものがあれば一方に補ふものがあるといふ理窟が成立つといふことだから、柔弱男子のたてまへを補ふ娘が現れてくる理窟になる。柔弱男子を育てる餘地はすくないのだが、もともと柔弱な女子だから、文學少女が出來上るのは奇蹟ぢやない。

彼女達は、都會の少女がとつくに忘れてゐるやうな素朴な感傷の限りをこめて、都會の少女がもはや鼻もひつかけない月を仰いで泣いたりする。柔弱男子がゐないからそれを笑殺する感覺は村全體にないのである。若者たちには、それが至高の美女である。文學がさういふ形で生きてゐるのだ。

この谷底は御三方の御專用だといふのだが、御三方の鞭のやうに彈力の深い全裸の姿を谷底の岩の上にたはむれさせても、彼女等が手甲に脚絆のいでたちで山を降りてくるやうな詩情の潔さを生みはしない。谷底の水をあがつた妖精の清絶感をだいぶん離れてゐるのである。

この谷底の感情に一向つながるもののない野獸の意慾の娘達が、ほかに誰ひとり來る者もない谷底へ好んで水浴にくるといふ思ひがけないその感傷が愉快であつた。都會ではこの事柄が落語的だが、この山中では、それが素直な自然なのだ。それが素直な生活なのである。

若者達は彼女達のその生活に神秘を受け、驚異を感じ、讃美をおくり、彼女達もそれを甚だ素直に受けて、また自らのこの生活を限りなくなつかしんでゐるのであらう。

志緒乃はたしかに整つた顏立だつた。それは健康と常識が目鼻の線を描いたやうな顏立だつた。

「この村の青年たち、志緒乃に言葉をかけられただけで、自慢の種にするほどですのよ。ぼうとして、返事もできなくなるぐらゐ」

戻り道、あの峻嶮を小枝に縋つて登りながら、葛子は、後に從ふ修吉に言ふのであつた。

「志緒乃が文學少女だから、この村の若い衆がみんな文學青年になりかけたさうで、うちのパパ、木暮村の村長先生、大弱りです」

秋山家の北面の離れに、親戚の病少年が保養にきてゐた。都會の暑熱を避けるためだ。

少年の病は結核性關節炎であつた。

膿は腰、腹のあたりから、肉を破つて、でてくる。少年は片足ギプスに包んでゐるのだ。松葉杖に縋つても、歩行は甚だ不自由である。年は十七。然し、長い病臥のために、殆んど發育がとどまつて、見たところ十二三の幼さであつた。

夏の三ケ月ぐらゐづつこの山中へ避暑にくるのが、ここ數年間病少年の習ひになつてゐるのださうだ。そのあひだ、一回ぐらゐ、ギプスを換へに東京へ行くこともある。ギプスを換へて四五週間もたつ頃になると、そろそろ身邊に膿の惡臭が漂ひはじめる。やがて部屋へ一足はいると、もう惡臭に堪へがたい日がくるやうになる。そこでギプスを換へなければならないのだ。

少年は葛子の從弟に當つてゐた。

この少年は、苦痛のほかには、人間らしい感動を表はすときがないといふ。父母弟姉が時々見舞ひにやつてくる。いらつしやいも言はないし、立去るときに、さよならも言はない。さうして立去つたあとになつても、悲しむ風はまつたく見せない。もう東京へついたかしら、

と、思ひだして突然人に訊ねてみたりするさうだから、やはり親しい人々を考へてゐないことはないのだ。そこで少年の淋しい心を思ひやつて、いたはりの籠つた返事でもしたら大當て違ひで、返事なんかきいてやしないよといはんばかりに死んだやうな顔をして視線も向けないさうである。

ある日、修吉は、裏庭の藤棚の下に休んでゐる葛子と少年に出會つた。少年と修吉は大きな建物の兩端に住まつてゐるうへ、少年はめつたに部屋をでないので、顔を見たのがその時はじめてのことだつた。

「やあ」と、修吉は少年に挨拶した。

少年は、素知らぬ風をしてゐた。

「だめですよ。こんな奴、相手にしたつて。馬の耳に念佛より感じがないんですもの」

と、さう言ひながら、葛子は少年の喉をくすぐつた。

「人間なみの挨拶ぐらゐ覺えなさいよ。こら！」

少年はまつたく無感動である。喉をくすぐる葛子の手をいくらかうるさげに首を動かしただけだつた。少年は藤棚の下に蓆をつくつて横臥してゐた。ギプスのために、膝かけるわけにはいかないのである。

顏色が透きとほるやうな蠟色だ。人形のやうに美しかつた。

「をぢさんに何か話していただきなさいな。すこしぐらゐお世辭を使つて」と、葛子は、今度は指で蠟人形の頬を押して、言ふのである。「こんな顏して、恐縮使ひの豆本ばかり讀みたがつてゐるのですよ」

少年の鼻の始末に毎日苦勞するさうだ。

傷口は膨つた鼻が露出してゐるやうな具合に突起してゐる。さうしてむつと顏をつつむ死臭のやうな膿の臭ひだ。看護婦もいやがる。表面にでることのない心理なのだが、病少年の感覺はそれに對して敏感だつた。看護婦の世話を嫌ふのである。そこで家では、母親が、もつぱらガーゼを取換へてやる。

ところが毎年この山中へ來るあひだだけ、母親の手がいらなくなるのだ。葛子が毎日ガーゼを取換へてやるからである。少年はそれを決していやがらない。

葛子のやりかたは粗暴だ。ピンセットを火箸のやうにガチヤガチヤ使ふ。

「うう。くさいたあ」葛子はそんな風に言ふだらう。修吉は二人を見ながら空想する。「人の身になつて、考へてごらん」

さう言ひながら、古いガーゼを少年の鼻先へ突きつけ

ようとしたりする。顏をしかめて投げすてる。さうされながら、葛子に親しむ思ひを增すばかりの病める少年の心を思ふ。

また修吉は思ふのだ。さうされながら、まじろぎもしない蠟人形の冷めたい顏を。——どうせ葛子のやることは氣紛れにすぎないのだが、もし、少年が透きとほる蠟人形の美しさをもたなかつたら、この看病が幾日つづくものだらう、と。

修吉は、葛子が病少年に頬ずりしながら、かう言つたのを忘れなかつた。

「あなたはいつまでも大人にならないから、いいわね。おとどしも、去年も、今年も、ちつとも變りがないんですもの。子供の奴、ぢき大人になるから、きらひだよ」

さういふことがあつてから、修吉は日に幾たびか佛像をぼんやり眺める習慣がついてしまつた自分に氣付いた。佛像の慈容の深い靜寂に、葛子のもつ人柄を結びつければ、結びつかないこともなかつた。然し、佛像を見てゐるときは、さういふ意識が殆んどはさまる餘地がない。藝術の傑れた個性は獨特の世界を創造する。その獨特の性格は葛子の存在を必要とするものではなかつた。

然し、また、病少年と葛子の並んだ姿を見てのちは、特別の空想によつて、佛像の靜かな微笑を、その顏形たる肉感を、眺めることも多かつた。

修吉の部屋の前には瀧がある。大小樣々の岩石が重なりあつて上へ上へ盛りあがつてゐる。岩石にしがみついた木の根がある。それらの樹木が頭上に蔚蒼と梢を張つて、盛夏に冷え冷えとした日陰を絶やしたことがない。いつも蟬がなきしぐれてゐる。書見に疲れた目をあげても、心はあまり晴れ晴れとしない。

ふと振向いて佛像を見ることになる。つい立上つて、結局佛像の前まで行つて、坐りこんでしまふのである。

「やつぱり藝術はすばらしいものだな」

と、修吉は、佛像の前に坐りこんでしまつたときのこの感想が、ちかごろでは癖になつてしまつてゐた。

佛像は靜かであつた。葛子の閃く姿態が日頃修吉の目の中へ差込むやうな、鋭い情感はないのである。突きさしてくるものはない。すべて甚だやはらかだつた。ひろびろと靜かなものが、はるばると、身にせまつてくる思ひであつた。

涯の知れない透明な波に幾重にもまかれてしまつたやうである。茫洋として掴まへどころがないのであつた。

そのくせ、珠玉の美をこめた顔が、柔軟の生理をつくした肉感が、秘密のすべてを暗示した靜かな微笑が、まがひなく刻みだされて、すぐ眼前に歴然とあるではないか。

「かういふ奴にかかつては、この現實の美といふものも、かたなしだな」

何よりも、安らかな思ひがするのである。重さを一皮脱いだやうな、ほつとした、憩ひを感じてしまふのである。現實の犇めいてくるどぎつさには、こんな安らかな餘裕がない。その犇めいてくるどぎつさが現實の魅力であるには相違ないが、それだけ滿しきれない大きなものが、ここにひろびろと盡され、さうして、遊樂してゐる。

修吉は、佛像を凝視めるさきに蠟人形の病少年を置きながら、考へてみることがあつた。頰にあてた彌勒の指は、膿のために濡れてゐる。あたりに澱んだ膿の悪臭が厚くたちこめてゐるのである。然し、汚れた指によつて[illegible]をつく彌勒の顔は、彼の想念がどう足掻いても、不[illegible]の翳をとどめない。

彼はまた病少年の膿を吸ふ彌勒の口を考へてみた。病少年の腹のあたりに、十ちかい傷口があるさうだ。それは腐つた腸のやうに突起して、膿を流してゐるのである。それらの突起を口にくはへて膿をすする彌勒の樣子を考へてみる。膿をごくごくのみこんでゐる。さうして、顔をあげたところだ。素知らぬ風をして、輕く頬杖をつき、かすかに笑つてゐるのである。口のまはりは厚味の深い鶏色の膿でぬるぬると濡れ、顎の方へ汁が流れて、したたつてゐる。

靜かな笑ひは輝くばかりに美しい。深い秘密はむしろ清潔をますばかりである。胸に幼兒をいだいてゐる聖母の乳くさい匂ひすらない。聖母には秘密をもたない不潔さがあるせゐかな、と修吉は思つた。

結局至高の靜寂であり、美しさだと思ふ以外に法がなかつた。

然し、こんな目覺ましい美しさが、また、あらゆる微妙な生理をこめた肉感が、目をつぶると、みんな消え失せてしまふのである。それはいささかも誇張のない事實なのだつた。この佛像の美しさは、一旦視線をそらしたときは、描くことができなくなる。

はじめは、それが、修吉の最も物足らないところであつたが、日を經るにつれて、やがて甚だ快いものとなつてきたのであつた。振向いて、視線を綠蔭に向けてしまへば、綠蔭がすべてのものになるのである。その素直さ、その淡泊さ、それが甚だ快さを與へてやまぬものとなつた。

さうして彼は葛子の閃く情熱の鋭さを、時々厭うてみるのであつた。

ある日、お妙が茶菓をもつて、彼の部屋へはいつてきた。

修吉は蟬がいくらかうるさくて、障子をしめて、書見してゐた。盛夏であるが、山中の涼しさは、白晝とざした部屋にゐても暑さを感じることがない。室内が煙草のけむりで濛々してゐた。

「旦那さん。すこし障子をあけましたら？」と、お妙が低い聲で言つた。

「や。なるほど」修吉はお妙の言葉の原因がやうやく分つて、叫んだ。

修吉は障子を開け放すお妙をみつめた。なるほど、ひらかれた外の景色も爽やかであつた。然し、お妙が美しかつた。お妙の横顔の美しさ、優美な線で描かれた色の白さ。その向ふにある綠蔭が、お妙の白さをぬきだして、靜かであつた。

汚れといふものが塵ほどもない美しさである。冴え冴えと目にあざやかな涼氣を與へてくるやうである。目をつぶれば、あとにとまらぬ美しさである。これほどの目覺めるやうな美しさが、ふと目をそらせば、すぐに消え失せて、ないと云ふ。そのはかなさが、また美しい。この現實のあくどい印象の數々が、すべてお妙の幻を掻き消すためにあるやうである。そのいたましさが、一さうお妙を塵もとどめぬ清淨なものに思はせる。

「お妙さん」と、修吉は話しかけた。「この佛像、誰に似てゐると思ひますか」

お妙は即座に嫣然と笑つて答へた。

「お嬢さまにそつくりでせう。みなさん、同じ思ひですこと」

お妙も信じて疑はぬのである。

「なるほど、ね。あつはつは」

言はれてみれば、如何にもまさにその通りである。お妙に似てゐると思つたのは、ただ、目をそらせば、その各々の美しさが、忽ち消えてなくなるだけの點である。

お妙にはこのやうに秘密の深い微笑はない。このやうな妖しい肉感の情炎もない。さうして、お妙の唇は膿に汚すことができない。ごくごくと膿をのみこむお妙の姿は在り得ないのだ。

「東京から到來したお菓子ださうでございますから」

雪ひつかつてきた口上を思ひだしたのであらう、お妙

は障子を開け放してから、急須に湯をさして茶を注ぎながら、さう言つた。すぐ目の前にまつしろな[illegible]がみえる。さうして、動く手首がみえる。

茶をいれ終つて嫣然と立つ異國風な幼い顔を、修吉は又ないものに眺めつづけた。今消えるのだ。立ち去れば、もう、幻の中にすら住むことのない顔なのだ。

五

そのうち、こんな出來事があつた。やがてそれが一夏を悲劇でとぢる序曲となつた。

秋山家は山の中腹に位して、村の往還を下に見てゐる。裏門をでると、山づたひに隣字へ通じる間道にでるのである。この間道はぶなの密林をくぐつて行く。するとぶなの密林がそのまま山にはいらうとする所へきて小さな沼のふちへ出る。脂ぎつた山の緑が沼の上にかぶさつてをり、また、沼の平地のふちのまはりはぶなの密林がとりまいてゐて、いつも陰氣で、濕つてゐる。ぶなは巨大な喬木である。薪木以外に物の役にたたないさうで、伐採することがまづないから、山中でぶなといへば伸び放題の巨木ぞろひで、林の下は日盛りにも洩れる光[illegible]いくらゐ、澱みの中はいつも靜かで濡れた感じだ。

沼の水面は一面菱が密生して、大の[illegible]ないのである。[illegible]なぞ想像させ、[illegible]沼のふちから山へかかつて、一山越十と、隣字の小さな部落で、お妙の家がそこにあつた。

お妙の祖母は秋山氏の乳母であつた。さういふわけで、お妙の父母もしよつちう秋山家へ出入りするし、お妙の祖母は、もう七十を越してゐるが、殆んど毎日秋山家へやつてきて百疊敷もありさうな臺所の爐端に坐つてゐるのである。襁褓として、甚だ陽氣だ。人を見れば話しかけて、笑ひさざめき、座敷に酒宴が始まれば給仕のついでに踊つてみせる。秋山家の主のやうなものである。

そんなわけで、修吉はお妙一家と忽ち親しむやうになつた。

修吉は秋山家の裏口からでて間道を通り、お妙の家の前を通つて、夏帽といふ見晴らしのひらけたところへ登つてくるのが好きだつた。晴れた日は大概そこへ散歩に行く。さうして、散歩歸りには、お妙の父母たちと話しこんでくることもあつた。

ある日ぐれ、散歩の歸りにお妙の家へ顔をだすと、そ

ここにお妙が居合はせた。お妙は生家へ用たしにきて、ちやうど馬るところであつた。二人は一緒にたそがれの間道を歩いて歸つた。

その時まで、沼の水面を隱してゐる水草がなんといふ名前であるのか、修吉は知らなかつた。お妙に尋ねて、それが菱であることをやうやく知つたわけである。

菱の實は食用になるさうである。鬼の角を前後左右に生やしたやうな菱の實を修吉も見た覺えがあつて、奇異な形に一驚した記憶をもつてゐたのであつた。

「これが菱か」と、修吉は日頃知らずに見馴れてゐたその水草をなつかしんだ。

「どれ」修吉は雜草をわけ、沼のふちへ降りようとした。菱を採つて眺めたいと思つたのである。

「まあ。旦那さん。その菱は――」と、お妙がうしろから小さく叫んだ。「それは、いけません」

「ほう。採るわけにいかないのですか」

「はい」

戻つてきた修吉に、お妙はにつこり笑つて言つた。

「不吉な沼ですから、この菱の實はとる人がありません」

「なるほど。不吉な傳說があるのですね」

「はい」

お妙の顔は靜かであつた。不吉な話を强調してみせようとする憂みも怖れも表はしてゐない。素直で、さうして安らかであつた。たそがれの森のくらやみに浮きだして夢のやうに美しい。

「この沼に身を投げて死んだ人がたくさんあります。水が汚れてゐますので、この菱に手をふれるものがありません」

きいてみれば、傳說があるわけでもなかつた。この村の自殺者達が屢々ここを死場所にする。いはばこの村の三原山といふわけだ。ただそれだけの意味であつた。

こんな村にも自殺者がある。――山、森、谷。さうして、空。それと同じ自然のやうに思ひたくなる村人達が。けれども、自殺は一年にひとつぶたつは絶えたためしがないさうな。貧乏もある。病氣もある。希望をすてた孤獨者もある。この村の自殺者達はむしろ概ね年寄に多く、失戀自殺といふことが却つて稀であるといふ。村落の生活は花がすくなく、暗いのである。

修吉は、然し、この陰鬱な沼の呪ひを忽ち忘れてゐたのであつた。生き生きと殘るものはただ花やかな記憶のみ。さうして、ぶなの森のそぞろ歩きに思ひだすのは、たそがれの靄の中に浮きだしてゐたお妙の顔のことであ

つた。その顔が森のどこかに今もなければならぬやうな親しい思ひが湧いてくる。暗い森が今は花やかな徑であつた。「はい」といふお妙の返事が沼のほとりに漂うてゐる氣配であつた。

然し、この沼のほとりから、暗い話が、やはり始まる。

ある日のこと、修吉がいつもの道を夏峠まで散歩して沼のほとりにさしかかると、その時もたそがれ近い時刻であつたが、思ひがけなく病少年の姿を認めた。

少年は沼のほとりのぶなにもたれて、暮れようとする沼を見てゐた。あたりには附添ひの女の姿もなく、葛子の姿も見當らなかつた。

門外ではついぞ見かけたことのない姿であつたし、たつたひとりが不思議であつたが、多分、附添ひの誰かに用ありつて置去りにされたのだらうと考へた。修吉は少年の前へ歩いて行つて、やあ、と言つた。少年の表情は微塵も動いた氣配がない。一瞥を與へようともしないのは、いつもの通り、同じことだ。「葛子さんは……」ときいてみたが、少年は返事しなかつた。

何をきいても素知らぬ風で、返事をしない。それも亦、これが始めてのことではないから、何ひとつ推察のてがかりがなく、ぶなの木に物を言ふやうである。歸りませうと言つてみたが、それも素知らぬ風であつた。

さりとて、附添ひの姿が見えない以上、病少年を森の中へ置き殘して、自分だけ歸やせしまふわけにいかない。修吉はやむを得ず叢の上へ腰を下した。かうして低い姿勢になると、沼地の濕氣が冷え冷えとせまつてくるのが分るやうで、この沼のいやらしい濁つた感じがあざやかになる。

そのうちに、少年は松葉杖を當て直して、ぶなの木にもたれてゐた背中を離した。さうして、修吉になんとも言はず、ひよんひよんと森の小徑を戻りはじめた。修吉もそのあとについて戻つてきた。

秋山家では、すでに騒ぎがもちあがつてゐた。少年を探しはじめたところであつた。誰ひとり氣付かぬうちに、見えなくなつてゐたのださうな。まづ第一に少年の專用便所をかきまはしたと云ふのであつた。誰の思ひも、そこへ墜落したことを、先づ、まつさきに思つたさうだ。

とにかく無事に戻つてきたが、何をきいても例の素知らぬ風だから、敢てきかうとする者もない。きくだけ馬鹿な思ひを深める。

「歩いてもゐたくならうぜ。この子のあこがれは、歩くことさ」

と秋山氏は言つた。たしかに一理あることだ。秋山氏は甚だ陽氣で、單純である。葛子のやうに敏捷な娘がなんのはずみで生れたらうと思はれるぐらゐ、二十四五貫の脂肪ぶとりで、涼しい山中に、たつたひとり汗を流して、いつも裸でふうふうしてゐる。

「俺のあこがれも、歩くことだぜ。坊と同じだ。思ひ當る」

秋山氏は、酒だ酒だと怒鳴りながら、團扇でばたばた胸をあほいで、行つてしまつた。

修吉もその出來事を忽ち忘れて、夜をむかへた。

夜になつて、秋山夫人が修吉の部屋へ訪ねてきた。夫人は野澤の姉に當る人である。

「沼のほとりにゐたのですつてね。をかしな子供、どんな風にしてゐたのでせう？」

「どんた風にと云つたつて、あの坊つちやんの樣子は、いつに限らずたつたひとつですから。とにかく、ぶなにもたれて、例の顔付でしたね」

秋山夫人の疑ひは、自殺であつた。

葛子もそれをやりかけたことがある。秋山夫人は、子供達の子供らしさをそのまま信用することができなくなつてゐるのであつた。大人の心にあるものはみんな子供の心にもある。——愛情からでた警戒のためにさういふ怖れを秋山夫人は感じてゐる。

「あんな子供も、死ぬ氣になることがあるでせうから」と、然し、夫人は自らの疑惑にも半信半疑の樣子であつた。

あの沼でたくさんの人が自殺したこと、それを少年も話にきいて知つてゐる。それゆゑ死ぬ氣になつたとすると、さしづめあの沼へ出掛けるほかに智慧の働くことはあるまいと夫人は言つた。

なるほど自殺は子供達にも有りうるだらう。まして病弱な子供の心は病的に歪んでゐるから、大人の心も思ひつけないことがあらうと修吉は思つた。然し、理由がなければならない。病弱とはいへ、抽象的な厭世觀から自殺するとは思はれぬ。

秋山夫人もその心配の根據に就いては語らなかつた。これといふよりどころのない不安であるかも知れなかつた。修吉も亦尋ねようとはしなかつた。

葛子と少年。修吉は二人を並べて考へて、今までは氣付かなかつたひとつのことが分つてきた。それは人間の脆さであつた。それのもつ妖しさ、美しさだつた。今に

もこはれてしまひさうだ。

葛子が病少年をこはしてしまひさうである。ちやうど人形をこはすやうに。さうして、葛子も亦、こはれてしまひさうである。

火遊びといふ言葉がある。それを、然し、修吉は二人の場合に空想しながら、實は信じてゐなかつた。少年は身動きにすら不自由の多い病人だつた。その心も亦病み疲れて、遊びの言葉を嘗てはめてみる餘地のない哨さであつた。

慰め、さうして、甘い言葉。いくたびか傷になれた大人の心も、虚飾の甘美な快さから脱けきることは容易ではない。その一生をシニツクの思辨で通した大人たちでも、思辨では割切りがたい甘さが殘つてゐるものである。ヴォルテールとかショオといふ老齢の哲人のみが、生氣や肉體の磨滅と共に、やうやく甘さを脱却したシニムスの完璧の相を示すらしい。

この少年はその病弱の肉體のために、思辨の國を通らずに、すでに年老いたシニスト達の心に住んでゐるやうだつた。その父母の見舞ひにすら、いらつしやいも、さようならも述べたことがないといふ。又それらしい感傷を示したことがないといふ。修吉を見る眼付にしても、木石を見てゐるそれと全く同じことだつた。

修吉はこの少年のうちに遊びの明るさを見る思ひにはなれなかつた。

なるほど、遊ばれる餘地はあり得たわけだ。修吉は、はじめて思ふ。それが次々に繪卷物をくりひろげる。それにしても、自殺はちよつと思ひ浮べる氣持になれない。

少年の肉體は、自殺を思ふことが不可能なほど、すでに死に近づいてゐるのであつた。腕も首も、ちよつと力をいれて握れば、ポキポキ折れてしまひさうだ。この少年を殺すには、抵抗も、苦悶も、血潮も思ふことができないほどだ。人形と同じやうにこはれることがあるだけに見える。

そこで修吉は考へる。葛子はこの少年のこはれさうな美しさを最も知つてゐたであらう、と。それにしても、臓の悪臭を差引いてなほ殘るほどの愛情を、その陰惨な祕密のゆゑに、反撥したくなるのであつた。とはいへ、その反撥の表皮を破つて、呀え呀えとした幻が靄かに泡みてくることを否むわけにはいかなかつた。

秋山家の裏庭に、大きな柿の木の切株があつた。あるとき、裏庭を歩いてゐると、女中のひとりが、この切株

の由來に就いて語つてきかせたことがある。

秋山家に長次といふ下男がゐる。四十五六の小さな男だ。この下男が柿の木から落ちて足を折り、不具になつた。去年の秋のことだといふ。それ以來、この木を切つてしまつたのでゐる。

柿の木の下に葛子がゐた。長次は葛子の頼みをきいて、柿の實を採りに登つたのだ。上へ上へと登つていつて、枝が折れ、落ちたのだつた。長次は柿の木の下にのたうつてゐて、匍けつけた人々の顔をひとつひとつ必死に凝視めて、かたはらに落ちてゐる柿の實のひとつをさぐり、お嬢様に、お嬢様に、と差出しながらさう言つたさうだ。

長次は今も尚秋山家に使はれてゐる。鶏小屋の世話をしてゐるのであるが、無闇に卵を飲んでしまつて仕方がないと女中達が言つてゐる。修吉を見ると、松葉杖の歩みをとめて、小さいくせに、見下すやうな調付をする。誰を見るときも、さうらしい。哲人のやうに偉らそうな調付をして人をヂツとみつめるが、それが如何にも憂鬱がある。女中達はびつこ、びつこと冷やかすのだが、なるほど冷やかしてみたくなるのだ。すると彼は一方の松葉杖をふりあげて、その見幕たらないのである。白痴のやうな妻女があり、子供が七人もゐるさうだ。

ここにも、ひとりの軽蔑者がある。これも、こはされたひとりであつた。こはされた人は木像のやうに何も知らない。切株のあたりの土には、のたうちながら長次が掴んだ爪のあとが今もあるやうに思はれるほど、こはれた表が生々しく當時を語つてくれてゐるのに。——長次の話をきいたときも、また修吉は葛子を憎む思ひを感じてゐた。

何よりも修吉が厭ましいのは、掴まへればきつと逃げてしまふやうな葛子の軽さであつた。常に祕密と裏切りを感じさせ、さうして獨寡の不安と怖れを思はせる。修吉はそれを憎まずにゐられなかつた。愛するまへに、すでに疲弊に疲れさせてしまふのだ。

聖賢高僧を墮落させ、仙人行者の遥力を失はしめるのはいいとして、いちばん愚かな男の力に征服される危ふさである。さうしてすでに閃きも輕さも失せた脱殻のやうな女に化してしまはないと言へるだらうか。修吉はまたそれを憎んだ。

秋山夫人がひらいてくれた窓のやうな言葉がある。死といふ言葉だ。それが俄に新鮮な想念の火をともしてくれる。この娘の危なさに、百萬人の憎しみと鉄婚がこも

つてゐるだらう。そこから葛子を救ひだすには、殺すか、死なすかすることだ。今のうちに、こはしてしまふことである。

そんなことを考へるが、この葛子の爽やかな幻が浮んだときには、かなはない。

お妙が修吉にこんなことを言ふ。

「旦那さん。お嬢さま、かはいらしいとお思ひでせう」

「さて」修吉は胸を張りながら威張つて答へる。「僕はお妙さんの方が好きなんだがな」

お妙はてんでとりあはない。

「お嬢さま、男の方の寫眞が一枚欲しいんですつて。なんべん見ても見飽きない寫眞が。旦那さん一枚差上げなさいませ」

「僕はまたお妙さんの寫眞が一枚ぜひとも欲しいものだね」

「あら。東京のお方にも似合はない。羞しがつてらつしやいますこと」

と、お妙が修吉を冷やかすのだつた。

六

修吉は秋山家から山つづきの禪寺へでかけて、朱明、座禪三昧に耽ることの快味を知つた。早朝の寺の本堂はいいものだ。山氣堂に滿つといふ感じで、家庭の精神の低さとは全然異つた遠い國へ連れ去つてくれる。まことに靜かで、心は常のものではないが、平靜である。うたたねとは勝手の違ふねむたさで、坊主がお經を讀んだりしても、そのねむたさは深まり、沈むばかりといふ太平樂な有樣であつた。一坐りして、朝陽のさした外へでると、自の覺める爽快さだ。一週間と坐らぬうちに、悟りをひらいてしまひさうだ。

あるとき、例の如く朝陽のさしかけた本堂へ坐りこんで太平樂をきめこんでゐると、おくれて這入つてきた者がうしろへ坐つた氣配がして、やがて山寺には思ひもよらない花やかな香料の匂ひが漂つてきた。それはかねて覺えのある葛子のものに相違ない。修吉は憤然とし、また呆れかへらずにゐられなかつた。事々に悟りを妨げる奴である。

外へでると、葛子が冷やかして言つた。

「悟りすましてゐましたね。うちのお客さんたち、一夏ゐるうちに、たいがい座禪やりだすのよ。活動寫眞や酒場がないと、山寺が代用品になるらしいわ」

葛子は修吉の手をとつた。それを兩手で握りながら、笑つて言ふ。そのこだはりのなさが爽やかで、修吉はあまり呆氣なくその透明な現實に冴え冴えとすひこまれてゐる自分の姿が、少々馬鹿に見えるぐらゐだ。

「急にお話したいことがあつたんですもの。私たいへんな寢坊でせう。早く起きて、ここへくるのに大變でしたわ。まだ朝のお食事には早すぎるでせう。あなたの好きな夏峠まで歩きませうね」

ところが、沼のほとりへくると、葛子は立止つた。

「坊がぶなに凭れてゐたのは、どの木でしたの」

葛子は修吉の返事をきくと、そのぶなの幹に凭れて、沼を凝視めた。

「お分りでせう。あの子死ぬつもりで沼をみつめてゐたんですわ。死んでしまへばよかつたのに」

「あなたの入智慧ですね」

「どう致しまして。大人の方に分らないことですわ」

と、葛子は平然たるものである。「大人たち、死ぬこと色々とむつかしく考へるでせう。私達さうぢやないんですよ。理窟がないんですもの。自分ながら、自殺したつて、まさかに死ぬとは思つてゐないほどですのよ。莫迦々々しすぎるから大人に分る筈はないわ。でも、ママ、分つたんですね。あの晩あなたに相談したでせう。ママつて、違ふものですね」

「僕にその話をしたくなつたのは、どういふわけですか」

「話しいいから。ママたら、怒るでせう。だつて、私達毎日ダイス振るでせう、十六が五へん續いたら、死んぢやう約束したでせう。四年昔の約束ですもの。秋がきて別れるとき、たうとう今年、出なかつたわ。今年もまたね。今年も。すると、あの日、たうとう出たでせう」

「ぢや、もう、死ぬのはやめることにしたのですね。さうでせう。それがいい」

葛子はそれには答へず、修吉の手をとつて笑みかけた。

「夏峠へ行つてみませう。三年ぐらゐ登つたことがありませんわ」

朝の夏峠は爽やかだつた。なだらかな草原が、はるかの下に靄の中までつづいてをり、その底の靜かな沼が光つてゐた。

峠を降りて、お妙の家の前までくると、老婆が洗濯してゐた。

「お早よう。婆やよ」

葛子は老婆が笑つて並べておいた洗ひ物をとりあげて、ひとつづつ、干しはじめた。

「まあ。お饒機」
「婆やの若かつたころ、村の人達ちよん髷ゆつて段々畑
鬱しでた？」
「御冗談でございませう。七三に分けたハイカラ頭で、
今時の都風に、それ、この旦那の頭がそつくりそのころ
の若い衆でございますよ。いい男ぞろひでね。下落した
のは若い衆と地酒の味だ。この節の村の娘とのんだくれ
は、氣の毒なものでございますよ」
「うちのパパ松の木に縛つておいて、婆やあひびきした
んだつてね」
「あはははは。お饒機も、おつつけ、あることでござい
ますよ」
と、この連中の話ときたら、呑氣なものだ。葛子は村
人たちの話題の中に自由に滑りこんで行く。
笑ひながら、ひとつづつ洗濯物を竿に通す葛子の姿態
が、のびのびとして爽快だつた。家庭の勞働に沁みつい
てゐるせまい感じも暗さもない。見てゐれば、文句なし
にその透明な情熱にまきこまれずにはゐられなくなる。
今のさつき自殺の話をしてゐたのが、同じひとりの娘
なのだ。自殺の話にこだはることができなくなつてしま
ふのは、やむを得ないところであらう。どこへでも自由
に滑つて行くだけだ。どのひとつを靜止の姿で捉へるこ
とも、ただ馬鹿々々しくなるのである。

七

然し、葛子がほんとに身を投げて、死んでしまつた。
夏の終りのことである。
死んだといふ事實のほかには、修吉に分ることがひと
つもない。
葛子の行方が知れない。死んでゐるかも知れない。さ
うして、人々が騒ぎはじめたとき、修吉が誰にもまして
その心配を信じなかつた。「冗談でせう。自殺なんか、
する筈がない」
然し、人々は例の沼をかきまはした。竿に蒙がからみ
つき、下から濁つた水面が現れてくるばかりである。
葛子が死んだとすれば、あの谷底の潭だらう。修吉は
そんなことを考へた。[illegible]念は沁々美しいものだつ
た。さうして自分の思ひつきを人々に語つてみた。果し
てそこに葛子の死體が浮いてゐた。それを言ひ當てた修
吉は、その想念の美しさには溺れてゐたが、それが實際
ありうることを殆んど信じてゐなかつた。さうして、美

しい想念が事實となつた話をきくと、忽ち想念の美は搔
き消えて、ただ暗澹たる空虛をみつめたのみだつた。
葛子は水を殆んど呑まずに死んでゐたさうだ。飛びこ
む前に氣を失つてしまつたのだと修吉は思ひこんでゐる
のである。
一夜の通夜をすまして、その翌日、修吉は東京へ歸つ
た。
歸るとき、お妙の祖母から讓つてもらふ約束だつた下
手物の德利や茶碗を、お妙がもつてきてくれた。それを
つめこむ場所がなくて、二人はトランクを拵きまはした。
「もう、お妙さんにも會へないのだね」
「また遊びにいらつしやいませ」
「今度くるとき、お妙さんはお嫁さんになつてゐね」
「さうかも知れません」と、お妙の返事は明快である。
「男の子ができたら、お妙さんは何に育てるつもりだら
う？」
「海軍の軍人」
「へえ」
「叔父さんが海軍の水兵です。外國からの便りやおみや
げを貰ふことがありますでせう。ねむる時も離したくな
いほど、それがなつかしくてなりません」

お妙の心は甚だ素直だ。山中の人の心がすべて素直の
やうである。葛子を理解する鍵のひとつも、そのへんに
あるかも知れない。修吉はそんなことでも思ひつくのが
精一杯のところである。
お妙と葛子と彌勒の像と三つの美しいものを知つた
が、どのひとつが最も深く印象に殘り、思ひ出の中に生
きるだらうかと修吉は思つた。
さうして、立去りがたいのは、彌勒の像の前であつた。
彌勒の像の前に立つと、葛子もその中にをり、お妙も
その中にゐるやうだつた。さうして、人間の祕密のすべ
てがあるのだが、小さな生死だけがない。
この村は賭博の盛なところである。一般に雪國の山中
は概ねさうだといふことだ。多は仕事がないからである。秋山夫人は出入りの者と一戰して多毎に小氣味よく
莫大な敗北ぶりを見せるさうだが、案外なのが葛子で、
ある晩手合せが始まつたとき、修吉が見てゐると、葛子
は勝負に執着がすくなかつた。熱中することがないので
ある。その姿見が修吉を驚かした。この葛子が佛像にい
ちばん似てゐるやうだなと彼はその時思つたのだ。
この佛像は怨恨と嘆れを持つてゐないやうだ。この佛
像の深い祕密を、それが高めてもゐるのだが、また佛像

の印象を稀薄にするのもそれのためだ。直接深刻なものが微塵もない。

少年の臆を吸はしても悔恨がない。人を殺しても悔恨がない。この佛像はさうである。人を救つてくれさうもない御面相だ。しよつちう人を苦しめて、傷けながら、高めたり、ほつとさせたりしてくれる。さういふ御面相である。

いくら明朗で、また透明でも、生身の人間はかうはいかない。あの葛子でも、悔恨や嫉れの翳が全然なかつたわけぢやない。強いて探せば、思ひ當ることがある。

「いいなあ」修吉は思つた。この佛像を見てゐると餘念の浮かぶ餘地がないから、助かるのだ。

「あの坊つちやん、どうしましたか」

通夜のとき、修吉は人にきいてみた。

例の通り、素知らぬ風だといふことである。顔色ひとつ動かさないし、赤の他人の話のやうに聞き流して、こまかく穿鑿したがる風もなかつたさうだ。

なぜ葛子は死んだ？　なぜ少年は死なない？　さういふ「なぜ」を修吉はみんな忘れてゐることにして、ことさら考へることを避けたがつた。

葛子の死んだことも忘れよう。さういふ彼の希ひであつた。

かつて可憐なひとりの娘がこの山中にゐた。ゐたといふ事實だけが、すべてである。その考へを、彼は佛像から汲はつたのだ。

彼が愈々村を去る時、乘合の止まるところまで、お妙が送つてきてくれた。

「あの山の向ふに、もうひとつ高い山が見えるでせう」往還で、乘合を待ちながら、お妙が山を指した。「あの山に、昔、鬼がゐたんださうです。あるとき、お姫さまをさらつてきたら、神様が憐れんで、お姫様を百合の姿にしたんですつてね。どの百合がお姫様やら分らなくなつて、今でも、百合をつむ人に鬼が祟りをすると言ひます」

「ぢや、あの山には百合がたくさん咲くわけですね」

「さう言ひますけど、見てきた人はありません」

さうして、乘合が動きだすと、お妙が言つた。

「お達者でお暮しなさいませ。今度は六月ごろいらつしやいませ。山の躑躅がなにより綺麗でございます」

お妙のまつしろな顔が、みるみる小さくなつてしまつた。

車窓から、鬼のゐたといふ山を見ながら、修吉は思つ

た。どうやら、お妙は、あの山の百合の精かも知れないな、と。これで村の美女たちも、みんなやうやくその故里がきまつたやうだ。

葛子も、あの谷底から生れて、あの谷底へかへつたのだらう。まあ、そんな風に思ふのが、この一夏の感傷にちやうど手頃なしめくくりだ。修吉は思つた。

輕便鐵道の停車場で、偶然、修吉は野澤に會つた。彼は慌てて駆けつけてきたところであつた。

「へえ。さうかな。年頃の娘が原因もなく死んぢやうかな。どうも俺には呑みこみにくいな。男なんかがあつたわけぢや、ないのかな」

「あつはつは。君まで、さう思はずにゐられないとは、どうも都會の感情はせちがらいな」修吉は高らかに笑つた。

「山へいつたら、例の君の愛人の彌勒の像にきいてみたまへ。あれの語つてゐることが眞相だね」

「うつふ。一夏のうちに、俺のお株をとつてしまつたぢやないか」

二人は曖昧宿のやうな薄暗い旅館の座敷で、二時間ばかり酒をのんだ。

「あの村に、森下の仙藏といふ蕎麥打ちの達人がゐるんだがね。君もその蕎麥を食つてきたに相違ないが」

「うむ。今朝出發の朝食にも、それを馳走になつたばかりだ」

「それから倉之助の蕨餅といふのがある」

「それは知らない」

「いづれも逸品だね。田舎の感覺は、線が太いが、案外デリケートなものだ。さうして、ほんものだね」

夏の終りは、山がそろそろ荒れだす時だ。嘯れると思ふと、黒雲が走り、雨がばらばら落ちてくる。蟬の明滅が、波のやうに、湧き起つては、また、ひく。

同じ山中の村落でも、停車場のある村までくると、よほど下界へ降りてきた感情になつてしまふものだ。さうして、野澤と卓をかこみ、久かた振りに都會の感情に立返つて物を眺める恰好がついてしまふと、さつき別れた木暮村が、よほど違つた相貌で、修吉の心に生れ變らうとしてゐるのである。

お妙も彌勒も、もはや案外遠いところへ飛び去つてゐる。

まざまざと生きてくるのが葛子であつた。その死がいかにも惜しいものに思はれる。あの感情の深い姿態が忘れられない。あの山にゐたときは、葛子の死に、何より

同感したのであつたが。

人の心は當てにならない。たつた二十キロの山道を草が走つてくるうちに、もう、これである。柄にもなく、未明に起きて山寺に坐つたことなど、思ひだしても、笑ひだしたくなるばかりだ。

「なるほど、な。葛子さんも、案外、死にたくなるやうな心の祕密があつたかも知れないな」

「わつはつは。君も彌勒にだまされて、うかうか一夏過したのだらう」

二人の思ひは、死んだ葛子を追懷する同じ暗さに、自然落ちて行くやうだつた。

黑谷村

矢車凡太が黒谷村を訪れたのは、蜂谷龍然に特殊な友情や、また特別な興味を懷いてゐたためでは無論ない。まして、黒谷村自體に就ては、その出發に先立つて、已に絶望に近いものを感じてゐたのだが、それでも東京に留まるよりはましであると計算して、厭々ながら長い夜汽車に搖られて來たのだ。

夏が來て、あのうらうらと浮く綿のやうな雲を見ると、山岳へ浸らずにはゐられない放浪癖を、凡太は所有してゐた。あの白い雲がうらうらと浮いて、沁むやうな山の季節を感じながら、餘儀ない理由で都會に足を留めねばならぬとき、彼は一種神經的な激しい渴渴を感じて、五感の各部に妙な渴きを覺えながら、不圓不眠症に犯されてしまふ。特別な理由があるわけではないが、彼の半生を二つの風景が支配してゐた。一つは言ふまでもなく山岳であり、そして他の一つは、あのごもごもとした都會の雜沓であつた。この二つの中へ雜るとき、彼はただ、何といふこともなく確かに雜るといふ實感がして、深く身體の溶け消えてゆく狀態を意識することが出來るのであつた。日頃負うてゐる重荷をも路傍へ落し忘れて、靜かにそして百方へ撒かれてゆく輕快なリズムを、耳を澄ませば一種じんじんと呀え渡る幽かな音響に、聽き分けることも出來るのであつた。彼は元來脆弱な體質で、山に登攀することの苦痛は並大抵たものではなかつた。しかし山を降りてからのまる一年、またうらうらと雲の浮く季節になるまでといふもの、追憶の中に浮び出る青々とした山脈の姿は、その彷彿とした映像の中に登攀してゐる夢の線が、その時は嘗て苦しむこともなく、ただひたひたと四方の暗闇に驚羨してゆく愉快な實感を感覺させるのであつた。眞の洗獸にゐて思ひ出す雜沓の羞愛と同樣に、雜沓にゐてふと紛れ込む山脈の映像は、恰も目に見え、耳に呀え、皮膚に沁みる高い香氣を持つものであつた。それは丁度使ひ古して疲勞困憊した觀念が、その故郷に歸滅してゆくかのやうな懷しさを持つものであつた。その劇しい鄕愁に犯された瞬間に、彼は身體の隅々に强烈な渴渴を感じながら、もしその時この雜沓の中で一ぺんに氣絶したなら、何かふうわりとした夢幻的な方法で、次の瞬間にはその身體が山へ運ばれてゐるのではあるまいかと思はれたりした。そんな時だ、手の置き場所が分らなくなつて、手がそれ自身意志を持つ動物であるかのやうに、肩や腰や背や空や、あてどもなく走り囲し蠢ぎはじめるのは。――そんな一日のこと、彼は雜沓のさ中で、ふと蜂谷龍然を思ひ出したの

だ。それは別に深い意味があるわけではない。彼は旅費が不足してゐた、そして龍然は山奥に棲んでゐた。

龍然は、學生時代には、凡太とそれ程親密な間柄ではなかつた。ただ、二人共ほかに親しい級友を持たなかつたので、かなり親しい友達のつもりで、時々往復し合つてゐた。結局卒業してしまふまで、「あります」「あなた」といふやうな敬語を用ひ、相手がうるさくて堪へられない時や酒のうへなぞでは、別段怪しみもせずぞんざいな言葉を、その時だけは極めて自然に使ひ合つたりしてゐた。龍然はとりわけて才のある男でもなく、一見さう見える通り、實際もごく平凡な好人物であるやうにしか考へられなかつた。取柄といへば、意地の悪いところをまるで持たないことと、田舍者じみてゐるくせに、都會的な感覺なり見解なりを、平凡ではあるがしかし本質的に持ち合せてゐたことだつた。龍然は父母もなく妻もない一人者で、黒谷村の瞰攬寺に若い住職であつたが、凡太がふと彼を思ひ出した瞬間には、まだ一度も見た筈のない龍然の法衣を纏ふた姿が、何等の不思議さも滑稽味もなく歴々と其處へ立ち現れた程、本來坊主くさい男だつた。額をつき合してゐたら、一時間でも退屈するであらうのに、一夏起居を共にするとしたら、考へただけでも重くならざるを得ない。まして、彼の調べた地圖によれば、黒谷村は成程山奥には違ひないけれども極くありふれた山間の盆地にすぎないやうであつた。しかし其の年、凡太は次々に起る不愉快な出來事に蝕まれて自棄まじりの重苦しさを負擔してゐたから、東京にゐて憂鬱の尾を噛みしめるよりはまだしもましであらうと考へ、リュックサックを背にして夜汽車に乘り込んでみたが、重荷は汽車の速力に從つて深くなるやうにしか思はれなかつた。

翌朝山間の小驛に下車して、ぼろぼろと零れた十人ばかりの人々と屋根もないプラットフォムに取り殘されてみると、思ひがけない龍然の姿が出迎へに出てゐた。彼は草鞋を履き、袴のやうな古めかしい背廣服に顏色の悪い丸顏を載せて、零れた人々を一人づつ眺めるやうな恰巧をしながら、よろよろと彼を探し廻つてゐた。やがて龍然は彼を認めて、五六間離れたところから片手をぶら下げた何か細長い物をクルクル振り廻しながら、ぼつぼつと歩み寄つてきて「いやあ――」と言つた。此の並はなれてあけ放した至極あたりまへな物腰が、凡太を全く喫驚させたのであつた。そしてその時から、彼はもはや豫想して來た重さとはまるで違つた何とはなしに親密な

氣持へ、自然に轉化させられてしまつてゐた。龍然が片手にクルクル振り廻してゐたものは、も一つの草鞋であつた。彼はそれを凡太に履かせて、二人は其處から十里ばかりの山路を歩くのである。

人の氣配のさらに無い山路に危大な孤獨を噛みしめながら、谷風に送られて鬱渺と喘ぐことを、凡太はむしろ好んでゐた。それは苦しいには違ひない、疲勞困憊の擧句、えねるぎいといふものを硅質のものを胎内に感じ當てることが出來なくて、汗ばかりべとべとと、まるで身體全體が滴れてゆく粘液自體であるやうに思はれ、仰ぐと、たまらない明るさばかりがカンカン張り詰めてゐて、眩暈がくるくる舞ひ落ちながら、逞ましい空虛と太々とした山の心が一度にぐつと瞬間の暮を開く。山一面に蟬の音がぢいーと冴えて、世界中がただそれだけであるやうに感じられてしまふ。流れ込む汗を喰べながら、一種の泥醉狀態に落ちて、其處いらの岩蔭にへたへたと崩れたならもうそれなりにどうなつても構はない、自分の身體を人の物程も責任を持つ氣がなくて、やりきれない自暴自棄で明るい空を仰ぐと、自分といふ一個の存在がみじめで懷しくて堪らないのだ。

山路へかかつてものの一里と行かぬ頃から、凡太は已にそんな泥醉狀態に落ちてゐたが、不健康な色をした龍然は、しかし馴れてゐると見えて、初めからただたどしい足取りのまま亂れを見せないのであつた。連のあることをもはや忘れつくしてゐるもののやうに、沈默を載せてぼくぼく辿つてゐた。實際、あれだけの長い距離の間に、二人の人間がお互の存在に意識を持ち合つたのは、谷川へ降りた時あの時一度だけではなかつたのか。思へばあれは、長い距離の丁度中頃に當る邊りであつたに違ひない、何か目印でもあるのであらう、龍然は突然谷川の曲點を指し示してあそこで休もうではないかと言ひ出した。見下せば、水音はきこえるが、水の色さへ定かには目に映らない深い深い谷であつた。急峻な藪を下る時ひとたび足を滑らしたならば危險極まるものであるし、降りるには降りても、又登る時の苦痛を考へたなら、なまなかの休息には樂しみを豫想する氣持にもならないのであつた。しかし龍然は言葉を捨てると何の躊躇もなくはや藪の中へ足を降ろしはじめたので、同じ動作を凡太も亦行はざるを得なかつた。しかし降りはじめてみると、むしろ危いのは龍然の足どりだつた。彼はしかつめらしい自信顔で凡太を庇ふやうに時々ふり仰ぎながら、そのくせ彼自身危い腰つきで、どどうつと一二間滑り

落ち、辛うじて立ち止ると自分の樣子には一向無反省で、いましめの眼をけわしくぢつと凡太の足もとへふりそ注ぐのが一つの滑稽であつた。此の道を通る時、龍然は恐らくこの同じ場所で同じ休息をとる習慣にちがひない。降り切ると、當然の順序のやうに衣服を脱いで紅葉の枝に懸け、谷川へジャブジャブ潜り込んでしまつた。谷川は此の場所だけはかなり廣さもあり、深さも場所によつては鳩尾まではあるのだつた。龍然は腹を下に兩手を擴げてブクブクとやつたり、急に背を下にしてヒラリヒラリと體をかはしながら又腹を下にしてみたり、凡そ泳ぎ以外の色々の術を試みるのであつた。谷底の木暗いしじまで握飯を食べ終ると、龍然は凡太にもすすめておいて、自分は平たい岩塊の上へ仰向けに寢轉び、やがて深い睡りに落ちてしまつた。肋骨や手足の關節が目立つて目に沁みるその不健康な裸體を見てゐると、まるで痩衰へた河鹿が岩にしがみついてゐるやうにしか思へないのであつた。魂などといふものは勿論、およそ「生きてゐる」といふ何等かの證據を、まつたく何處にも見出すことの出來ない殘骸といふ氣がした。凡太は陡る氣持にもならなかつたので、それから龍然が目を醒ますまでの三時間ばかりといふもの、變に淋しい自棄な氣持になつて、水へがぼがぼ潜つてみたり、ふと氣がついて頭をあげると谷の枝枝に鳴りわたる風音が耳についてきたり、上の藪を這つてゆく縞蛇に出會つたりした。

二人が黒谷村の峠まで辿りついたとき、もう黄昏も深かつた。熊笹の中から頸だけを延して顧れば、今來た路は鬱重もの山波となつて、濃い紫にとつぷりと落けてゆくのが見えた。山に遠く蜩の沈む音をききながら峠を降ると、路は今迄とはまるで別な平凡な風景に變つてきた。山といふ山はみな段々の水田に切りひらかれて、その山嶺まで稻の穗が、壹ならば青々と見えるであらう波を齋條と戦がせてゐた。時々山毛欅の杜が行く手を脅かす位ゐなもので、あの清冽な谷川も、ここではすぐ目の下に、あたりまへの川の低さになつてしまつた。黒谷村字黒谷は、黒谷川に沿うて一列に並んだ、戸數二百戸に滿たない村落であつた。丁度夜がとつぷり落ち切つた頃二人は村端れの居酒屋を潜つて、意外に安價な地酒を抑んだ。二階の窓を開け放すと、裏手はすぐ谷川で、たしかに深い山らしい涼しさが、むしろ膚に寒々と夜氣を運んできた。遠くから又遠い奥へ鳴り續いてゐる谷川のせせらぎを越して、いきなり空へ撃ちてゐる山々の逞ましい沈默が、頭上一杯に壓しつけて酒と一緒に深く滲みて

くるのだった。龍然は不思議に酒に強く、凡太に比較して殆んど醉を表はさなかったが、時たま思ひ出したやうに、ひどく器用に居酒屋の女中を揶揄ったりした。それがその瞬間には板についてゐて、驚くと、度膽を抜かれた瞬間には、もともとの妙に取り澄してゐる彼の風貌が、それはそれなりに龍然そのものであった。凡太はむやみに面白くなって、慎みを忘れて泥醉してしまった。居酒屋の女中は醉った凡太をとらへて、しきりに淫をすすめるのであった。挨拶に出て來た年老いた内儀もそれへ交って、

「和尚さんはいい人がおありですからおすすめはしませんが、客人はぜひ今夜はこちらへお宿りなさい」

なぞと、あたりまへの挨拶のやうに述べるのであった。

「來るさうさうから餘り立派な記念でもないから、今夜だけは寺でねる方がいいさ」

龍然は洒脱な物腰で、彼のためにそんな斷りを述べた。女達のさわがしい二の句を一つ殘さず斷ち切って、巧みに話題をそらしてしまふ程それは苦勞人らしい物腰で、女達は「和尚さんの意地わる……」なぞと言ひながら、龍然の口ぶりを面白がって笑ひ崩れてしまった。二人は賑やかな見送りを受けて居酒屋を立ち去ったのだ。

それは實際賑やかな見送りと言ふべきであった。なぜならば、其處にだけ一塊の喚聲が群れてゐて、それをすっぽりと包んだ一面の暗闇はただしんしんとするばかり、その喚聲のすぐ周圍でさへ、耳を澄ませども見えるものは聽えるものは無いからだった。やがて暫くして、深い谷音ばかりはっきり耳についてきた。――これは、凡太が黒谷村へ足を踏み入れた第一日の印象だった。居ってみると、一見平凡な黒谷村も、變に味はひのある村だった。

黒谷村は猥褻な村であった。氣樂な程のんびりとした色情が、――さう思って見れば、蒼空にも森林にも草原にも、だらしなく思はれる程間の抜けた明るさを漂はしてゐた。凡太は一日山の段々畑をいくつか越えて何氣なく足を速めて逍遥してゐると、穂の間から上半身をあらわした若い農婦がだしぬけに顔をあげて、健康な（HALLOO!）を彼の背中へ叫びかけた。凡太は丁度山嶺に片足を踏みかけてゐたので、ふりかへると遥くはるかな風景が、その中へ農婦の姿をも點描して深々と目にしみてきた。彼は壯快を感じて元氣一杯な（HALLOO!）を返しながら山の裏側へ消え込んでしまったが、考へてみると一つ足りない氣持があった。その夜、その話を龍然にしてみると、果せるかな、それは夜這ひへ誘ふ黒谷村

一般の招辭であるといふのだった。さう言はれてみれば、ある日のこと、尾根傳ひに國境へ通ふ風景の良い路で、蕨を乾してゐる娘から明らかに秋波を送られた經驗もあった。その後凡太は、色々の場所に色々な樣式で、之と同じ事情に幾度となく遭遇した。しかしそれは、猥褻と呼ぶには當らない、むしろ透明とか悠久とか、そんな漠然とした親密な名辭で呼ぶにふさはしい程凡太の膽に奥深く觸れて來るものがあった。其は單に隱されてゐるものを明るみへ曝したといふばかりで、むしろ徹底した氣樂さが、たとへば振り仰ぐ空の明るさのやうに、坦々として其處に流れ、展開してゐるにすぎない。一年の半は雪に鎖され、殘りの半さへ太陽を見ることはさして屢でないこの村落では、氣候のしみが人間の感情にもはつきり滲み出て來るのだった。夏も亦一瞬である。あの空も、あの太陽も、又あのうらうらとした草原も樹も。……さういふ果敢無さが慌ただしい色情の裏側に　むしろうら悲しくやるせない刻印を押してゐるやうに思はれて、物の哀れとも言ふべきものが、佗しく胸に沁みて來るばかりであった。そして凡太は、さういふ色情の世界に居つくと、途方もない氣樂さを感じ初めて來たのだった。それは單に村の風俗に就てばかりではない、この平凡な盆地の山も木も谷も、それら全體にわたって、じっとりと心に馨く一つの風韻がわいてきたのだった。それは凡太の好色に汚名をきせるのも一理窟ではあるが、いったい凡太は、この旅の出發に當って、期するところ餘りにも少なかったのがこの際大きな儲け物であったのだ。それには橡殼寺の住み心地も、黒谷村の風韻から別にして計算してはならなかった。

黒谷村逗留の第一夜、龍然から與へられた橡殼寺の離れにおさまってみると、その瞬間から已に借物といふ感じはせずに、いつか昔馴み古したことのある自分の家といふ氣樂さだけが意味もなく感ぜられてならなかった。寺には龍然のほかに使用人も無かったし、その龍然とも必要のない限りは顔を合はさずにも暮すことが出來たし、顔を合したところで、龍然の方では凡太を別に客らしい意識では待遇もしなかったので、食事なぞも好きな時に臺所へ探しに行けばそれでよかった。時々むしろ龍然の方で、彼が遊びに訪れたやうな顔付で凡太の離れを訪問するが、實際それ以外へ物でも讃讃でも、まして卑屈でもなく、第一凡太にしてからが、その時は龍然の方が遠路の客人であるとしか考へられないのであった。二人は寂寞んだまま何の話も交へないで、ただ漫然と二時

間三時間を過すこともあつたが、出發する前に豫想したやうな退屈や氣づまりは全く感じることも無かつたし、そのうちに二人とも飽り込んで、やがて一方が目を醒して散歩に出てしまふと、間もなく一方も目を醒して、がらんとした寺の空虛を噛みしめながら、初めから自分一人で其處に寢てゐたやうに考へながら自分の營みに立ち去つてしまふ。この氣樂さから身體を運び出して漠然と黒谷村を彷徨すれば、村がいかにものんびりと胸に滲みるのは尤もな話であつたが、それにも增して、本來敏感寺そのものの內側にも淫靡な氣が漂うてゐたから……。それは每晩のことだつた。氣のせいか、多少は音を聞かる程度音が、しかしかつかつと甃を鳴らしながら、山門を潛つて龍然の書院へ消え去るが、それは夜每にここへ通ふ龍然の情婦であつた。もとより龍然は、わざと情婦を凡太に紹介することもしなかつたけれど、さりとて隱し立てするわけでは無論ない。靜かすぎる山奥の夜であるから、うむうむと頷く聲が聽えたり、日本の豪手は北亞米利加ではないだらう等と、愚にもつかない話聲も洩れてきたりするが、流石にまれには女の泣く音も聽えたりしてそれらしい情景を想像させることもあつた。激しい嗚咽が長々と消えない夜も、龍然は別に凡太の手前をつくろつて、それを隱しだてする氣配も立てはしなかつた。彼の方でもことさらに聞き耳を立てるわけではなかつたから、つじつまの合はない物音が時たまぽつんと響れてくる程にしか過ぎない、戀といふ感じよりは、どう思ひめぐらしてみても尋常の人の世の營みを越えた刺戟は全く受けることがなかつた。ただ女が、農婦よりはいくらか程度の高い教養を持つ人であることを、漠々感じることが出來てゐた。それだけの話で、かなり長い後まで、女の名前は勿論、女の顏さへ見知ることなく過してゐた。さういへば、一度だけその後姿を見かけた黃昏があつた。それは二人が打ち連れて間道を拔けながら隣字の溫泉——といつても一軒の宿屋が一つの湯槽を抱えてゐるにすぎないのであるが——へ憂りに行く途中のこと、丁度本道と間道との分かれ路にあたる聞蒼とした杉並木で、本道を歩いて村へ歸る束髮にした女人の大柄な形をみとめたのであつた。三本路のことであるから、別に變れ違つたのでもなく特別な注意もしてゐなかつたので、凡太はその顏を見なかつたが、暫くして、あれが俺の女で苫屋由良といふ名前だと龍然はふと言ひすてた。實はその時、ほんのわづかではあつたが、まだそれを口に出さない龍然の沈默の數秒の間に、已にそれを感じさせる

何がなしの感傷があつたので、凡太は疾くそれを悟ることができて、どんよりと澱んだ黃昏のなかへ波紋を描きながら擴がつてゆく太い憂鬱を味はつてゐた。そして龍然が口を切るまでの短い沈默を、堪へがたい長さに壓しつけられてゐたので、その言葉をきいた時にははや振り返る氣持にもならなかつた。しかしとにかく振り向いて、女の後姿よりはむしろその前方に暮れかかつてゐる巳に漠然とした山々の紫を、ぢつと目に入れて頸を戻したのであつた。それでも氣のついた限りでいへば、女は浴衣をきてゐたが、その著こなしが確かに都會生活を經てきたにちがひない面影をあらわしてゐた。ただそれだけの觀察であつた。二人は又こつこつと狹い間道を歩いて、その時もはや龍然の物腰にはいつもの殘骸といふ感じしか見當てることは出來なかつたが、しかし凡太の心には、深い哀愁が長く長く尾をひいて消え去らなかつた。一體この朝夕、龍然の超然とした物腰には、隱しがたい陰鬱な影がほのかに滲み出てゐることを、凡太は見逃すわけにいかなかつた。凡太の思ふには、これは一つには女の事情でもあらうと一人心に決めてゐたために、そのために何故ともなく、淋しい思ひが尙强く胸にこたへてきた。しかし溫泉で酒をくんでも、女の話には、もはや龍然は一言だにふれなかつた。

いつとはなく盆に近い季節となつて、夜每に盆踊りの太鼓が山の上に鳴りつづいてゐた。盆とはいへ、この邊りでは八月にそれを行ふ習慣であるから、もう夏もすつかり闌けて、ことに晝は、蟬の音にさへ深い哀調が流れてゐた。その朝、龍然は五里ばかり離れた隣村の豪家から使ひを受けて、かねて知り合ひの其處の次男が急死したために、通夜に招かれて一泊の旅に出掛けてしまつた。ただ一人でぽんやりと夜を迎へたら、蜩と共にとつぶり落ちた夜の太さに堪らない氣持がして、かねて馴染の居酒屋へ醉ひに行かうかとも思案したけれども、尙滿ち足らぬ氣持があつたので、凡太はガランとした本堂へ意味もなくぐつたり坐り込んでゐた。燈明を點してみたり、又一度坐り直して暫らくして、又立ち上つて冷い床板をぐるぐる歩き廻つたりしてゐるうちに、橄欖院呑草居士といふ位牌を一つ、もう埃にまみれてゐるものを見出したのであつた。彼はぢつと考へて、又一度坐り直したが、いつの間にやら夢の心地で、經文を唱へはじめてゐた。彼は坊主ではなかつたが、學生時代には印度哲學を專攻したために、二三の短い經文はおぼろげながら諳んじてゐたから。一體位牌そのものの出現が孤獨を滿喫

してゐる凡太にとつて少なからぬ神祕であつたのに、以前彼は龍然からこの寺の先住に就て妙な話をきかされてゐた。それは一應噴飯に價する無稽な話に思はれたが、笑ふ相手もなく孤りでゐるこの時には、別に滑稽味もなく素直に先住の面影が浮んできた。それ故凡太は、噴き出す事もせずに、こんなしかつべらしい端坐を組んで誦經をやり出したのであつた。その話といふのは斯うであつた。檄欖寺の先々代は學識秀でた老僧であつたが、酒と茹蛸が好物で、本堂に賭博を開いては文字通り寺錢を稼いで一醉の資とするのが趣味であつた。町へ出る度に、茹蛸を仕入れて歸るのが樂しみであつたが、一日、まるまるとした入道を仕入れたので滿悅して山門をくぐつた。その夜も賭博があつて、和尙は焦燥を殺してゐたが夜が白んで一同全く立去つてしまふと大いに滿足して庫裏へ出掛けて行つた。さて、がたがたと鳴る重い戸棚をやうやくに開けて、ぼやけた雪洞をふと差し入れて見たところが、棚の片隅にぴつたりと身を寄せて、まるまるとした茹蛸は大變まじめな顏をして自分の足をもぐもぐ喰べてゐる最中であつた。蛸は眞面目であつたから、暫くの後やうやく盥りを受けてゐる事に氣づいて、ひどく恥ぢらつて赤らみながら顏を背けてむつとしたが、和尙は喫驚してモヂモヂと立ち去ることを忘れてゐたものだから、蛸はぶんと拗ねて輕蔑を顯はし、食へ、といふやうに一本の見事な足を和尙の鼻先へぬつと突き伸した。和尙は大いに狼狽して、そそくさと小腰をかがめ、命ぜられる通りこれを切り取つてうろたへながら本堂へ戻りついたが、とにかく變てこな氣持と共に之をモクモク呑み込んでしまつた。その翌日から和尙は全く發狂して、やたらと女をペロペロ舐めたがり乍ら、間もなく黃泉の客となつた。と、そんな話を一夜龍然はぽつぽつと凡太に語つた。凡太はこの話をきいて、あまり面白い話なのでこれはつくり話であらうと直ぐさま思ひついたから、笑ひながらさう龍然に訊ねてみると、彼もあはあはと笑ひながら暫く默つてゐたが、とにかく蛸に色情を感じたのは坊主らしくて面白いではないか、と照れ隱しのやうな眞顏でさう言つた。その言葉は不思議に劇しい實感を含んでゐたので、そのとき凡太は忘れ難い感銘を、深く頭に沁みこませてしまつた。恐らく龍然の女は軟體動物に似た皮膚を持つ肉體美の女であらうと、そのとき凡太は卽座にさう決めた。そして彼はこんな好色な話題を交しながら、猥褻とはまるで別な、やるせない一脈の寂寥を龍然の殘骸から感ぜずにはゐられなかつたのだ。

——そして事實、龍然の女はたしかに肉體美の女であつた。なぜに分るかといへば、この靜かな夜本堂に經文をあげてゐたら、凡太はゆくりなく苫屋由良の來訪を受けたからであつた。

「矢車さん矢車さん……」

はじめはさういふ聲を幻聽のやうに凡太はきき流してゐたが、するとすぐ「ごま化しながらお經をあげてゐますこと」といふ聲が、個性を帶びてはつきり背筋に觸れてきた。凡太は愕然として振り返ると、本堂の丸柱と並んで、大柄な女が一人うつすらと立ちはだかつてゐた。凡太はあまり不思議なことなので……いや、不思議とはいふもののこれは情景の說明ではない、凡太の意識內容の說明であるが、この咄嗟の瞬間に、彼はしばらく氣拔けのやうな驚愕を味得して、呆然としたままその思惟を一時に中絕してしまつた。元來、これは必ずしも定則ではないけれども、凡太は屢孤獨に耽つてゐる折、突然人像の出現に脅やかされるとき、現前に轉來した事實とはまるで別な一種不可解な無音無色の世界へ踏み迷ふことがあつた。それは出現した人間の個性とは凡そ無關係なもので、第一その場合その人を多少なりとも認識したものかどうかさへ疑はしい程咄嗟な瞬間の出來事である

が、なぜかぎよつとして、ばたばたと轉落する氣配を感ずるうちに、自分一人の何物かを深く鋭くぢいつと見つめてしまふのであつた。もはやその時それは一種の夢にちがひない、突然開かれたその門を茫漠と歩いてゐるうちに、凡太は彼の一生に於て、恐らくは最も孤獨な、あらゆる因果を超越してただ寂寞と迫つてくる一つの虛無、——何か永劫に續いてゐる單調な波動を、やりきれぬ程その全身に深々と味つてしまふのであつた。暫くして彼はその狀態から覺醒しはじめるとき、まづ何事か熱心に暗中摸索を試みる情緖の蠕動を感じて、やがてしんしんと澄みきつてゐる白板の中へ次第にありありと現像する外界を漸次再認するのであつたが、彼はこの夜もその同じ過程を經過して漸次現實の靜寂が耳につきはじめてくると、其の時靜かな夜氣の中にふと湧き出でて次第に波紋を擴げてゆく狂躁な笑ひ聲を鋭く耳に聽いた。しかし彼は、この覺醒の瞬間に於ては、もはや絕對に物に驚くといふ心情を消失してゐる習慣であつたから、泰然として憂のやうに蹲くまりながら、ぢつと下から由良の顏を見上げた。

「あなたもいくらか氣狂ひですね。龍然もやはり氣狂ひです……」

由良のぺらぺらと流れる調高い聲を聽きながら、彼はしかしこのふくよかな肉附を持つた女が、粗雜な言葉とは全く逆に妙に古風な瓜核顔をしてゐること、それは古い繪草紙の人物のやうな一種間の拔けたおとなしさへ表はしてゐること、かなり酒に醉ひ痴れてゐること等を一纏めに感じ當ててゐた。凡太はどうしたはずみか、大變まじめに端座して「僕は氣狂ひではありません」とごもごも答へてからはじめて我に返つたが、女はその聲にはまるで構はず、左手をまづべつとりと床板につき下して重心をそこへ移しながら、崩れるやうに腰を落して兩足を投げ出した。

「今晩は。はじめてお目にかかりましたね」

「今晩は。はじめてお目にかかりました」

「龍然は留守でせう――？」

「今夜は歸るまいと思ひます。御存知ですか？」

「出掛けるとき、さう敎へに來ましたから――」

「ああ成程――」と凡太は當然なことに暫く慚愧して耳を伏せたが、つらつら思ひめぐらすに、これは當然慚愧するには當らない根據があると氣がついた。龍然は今朝早く使ひを受けると、特別に支度を必要としない男のことだから、已に魂は遠くなしといふ骸骨にポクポクと聲音をひびかせて、すぐさま山門から空間の方へ消失してしまつたが、あの姿で女のところへ留守を知らせに立ち廻るほど纖細な精神を含蓄してゐようとは、これは實際奇蹟であり不合理であり驚愕であり滑稽であり、――そして、考へてみれば胸にこたへてくるものがあつた。凡太は長大息を嚙み殺して白い顏をした。

「龍然は妾をずゐ分可愛がつてゐますわ」

「さうですね。そのやうに見えますね。僕は友達といふのは名ばかりで、ろくすつぽ話もしたことがないのですし、同じ寺に寢起きしてゐても二三日顏を合はさずに暮すことさへよくあるくらゐですから、あの男に就ては實際のところ何も知つてゐないのです」

「龍然は、でも、あんまり悧巧な男ではありませんわね。冷たくて冷たくて、時々ぽんやり何か考へごとをしてゐてやり切れないのです。妾を可愛がるのはいいけれど、とにかくさういふ氣持を自分で反省するとき淋しい自己嫌惡を感じるのは苦痛だから、可愛くても可愛いいといふふうに思ふのは厭だ厭だと言ふのですわ。それでゐて氣狂ひのやうに劇しく妾を抱くのです。龍然の淋しい氣持は妾にも大概分りますけれど、表へ出す冷たさが妾にはあき足らないのです。龍然は莫迦野郎ですわね。龍然

はほんとうに莫迦野郎ですから、妾は別れる氣持になりました――」

「ははあ……それは今朝のことですか――？」

「いいえ、ずつと昔からですわ。でもほんとうに決めたのはたつた今しがたなんですわ。村に女衒が來てるのです。三月と盆は女衒の書き入れ時ですから。妾はずつと昔にも一度女衒に連れられて村を出たことがありました。お分りですか？　凡太さん……妾は今も女衒と一緒に寢てきました。あははははは……嘘、嘘、嘘、一緒に酒をのんできただけ……」

由良は床板を强く支へてゐた兩腕をするすると滑らして横に倒れると一本のだらしない棒となつてしまつた。

「女衒は上玉だつて大悦びでしたわ。妾はそれを敎へてあげに此處へ來たのです」

「僕にですか――？」

「さう。誰にだつて敎へてやりたいから、あなたにも敎へてやりに」

由良は顏を拾ふやうに持ち上げたが、又それを兩腕の中へすつぽりと落して、もう拾ひあげようとはしなかつた。かなり深く醉ひ痴れてゐるのだ。そこで凡太はぢつと腕を拱いて、――實は途方もない別なことを――一心に考へはじめたのであつた。いや、別なことを考へはじめたと言ふよりは、何も考へない思惟の中絕へ迷ひ込んだと呼ぶ方がむしろこの際又しても正しいのであつた。凡太はこの數年來、常に現實の事實に充分に浸ることが出來なくて、全てが追憶となつてから、その時幻を描き出してのち、はじめて微細な情緒や、或ひは場面全體の裏面を流れてゐた漠然たる雰圍氣のごときものを、面白く感じ出す不運な習慣に犯されてゐた。ありていに言へば、この男は如何なる面白い瞬間にも、それに直面してゐる限りは常に退屈しきつてゐて、今のことではない、その昔經驗した一場面の雰圍氣へ、何時ともなしにぼんやりと紛れ込んでしまつてゐる。音樂をきいてゐてさへ、スポオツを見てゐてさへ、無論矢張りそれはその通りで、現在ショパンの音樂をききながら、それにすつかり退屈を感じて、いつか聽いたモツアルトの旋律を思ひ出してそれにうつとり傾聽してゐたり、一疊の走者を見てゐながら頭の中でそれを三疊へ擴いて盛んに本疊登疊を企てさせて興奮してゐたり、さういふ場當は日常茶飯のことで、それでゐてショパンの音樂を聽いてゐなかつたわけでもない證據には、他日又その瞬間を實に樂しく彷彿と思ひ出して來るのであつた。ショパンはいい、ショ

パンの音樂は實に素敵だと夢を追ふやうに慌ただしく知人達に吹聽しながらショパンの演奏される日を待ちかねて音樂會場へ殺到するのだが、さて腰を下してぢつとしてゐると幕も上らぬ頃から又してものべつ幕なしにうんざり退屈しきつて、演奏の終る時までやたらに別のことばかり考へてしまふ。興奮することを知らない男かと言へば、それは斷じてさうでない、ただ、大いに激昂して叫喚亂舞に耽溺してゐる最中に、興奮してゐることに就て波のやうな退屈を感得し、落膽してしまふのであつた。

由良の肢體はだらしなく床板の上に寢そべつてゐたが、凡太の丹誠によるほのかな燈明のおかげで、幸ひそれは人魚のやうに可憐に繊渺とした童話風な纖情をそそつた。凡太は腕を拱いて凝視してゐたが、やがて波のじつとりと落ちた廣い廣い海原に、倉皇と泡面を走る遙かな落日を、その皮膚にすぐ近くひたひたと感じはじめてゐた。それは遙かな海であつた。已にとつぷりと暮れた東南の紫は次第に深くくろずみ渡り、西方の水平線にはわづかに殘る薄明が廣い寂寥を放つてゐたが、そのとき、深くうなだれた一人の男が永遠に歸らんとするものの如く、足を速めて西へ西へ海原を歩く像を見出してゐた。鋭い影は一線に海を流れてすでに深い背の闇に溶け去つてゐるが、男はそのただ一つなる決意のみを心とする人の如く、ひたすらに歸らんとして疲れた足をいそがせてゐる、しばらくして、ものに怯えた人の如く、男はふと頸をめぐらして背の闇をぬすみみた。そして……うう、「如是我聞、如是我聞――」、算を亂して逃亡する自我の滅裂を感じながら、居ずまひを立て直した凡太は、勇氣をふりおこして經文を呟きはじめたのであつた。それも束の間のこと、ぶつぶつ煮える呟きも次第に引き去れば、山上の金比羅大明神の前栽に鳴りひびく盆踊の樽太鼓のみ、靜かに脊髓に沁みついてきた。そのとき由良ももつくりと起きた、暫らく手を床について、重たげな頭をぢつと下に向けながら、樣々な音響を耳にこまかく選りわけてゐるやうな形であつた。

「踊りの太鼓がきこえますわね……」

「さう、トントントトトトン……と、はあ、きこえる」

「行つてみませうか」

由良はふらふら立ち上つて、燈明の方をぢつと見てゐたが、がつかりして笑ひ出した。

「ほら、燈明をぢつと凝視めてごらんなさい。くすぐつ

たいやうに、ちろちろ氣どつて搖れはじめる……氣のせゐばかりぢや、ありませんわね。厭な奴。あああ――」

歩き出してみると、凡太の杞憂したほど由良の歩行は亂れてゐなかつた。風は死んでゐたが、夜氣そのものが冷え冷えと膚に迫つて、その度に冥想すべき何等かの思考力を植ゑ落してゆくもののやうな沈鬱な過程が感ぜられた。橄欖寺の裏手から墓地を抜けると、杉並木の嶮しい間道がものの四五丁もして、やがて鬱蒼と山毛欅の林に圍まれた金比羅大明神へ續くのであつた。歩いて行く先々にぶつんと途切れる蟲の音は、その突然の空虛で凡太の心をおびやかして、その激しい無音狀態がむしろうるさい墻へがたい饒舌に思はれてくる、なぜかと言へば自分自身の精神が湧く波の如く饒舌なものになりはじめるから。零れ落ちる月明を頼りに、やうやく山毛欅のこんもりした金比羅山の麓まで辿りつくと、それらしい燈火は何一つとして洩れて來なかつたが、ごやごやした人群の喚聲が、葉越に近くききとれた。その山へ差しかかつてはじめて、かなり劇しく喘ぎ出した由良を助けながら、境内の平地へ一足かけて、ぬつと頭をつき出すと、群れてゐる群衆の分量とは逆に、點つてゐる提灯の燈りは思ひがけないほど乏しい數だつた。ぼんやりと浮かび出てゐる薄ら赤い明りから人群の大部分はむしろはみ出してをり、外側から無論見えない樽太鼓を中に、村の衆は男女を問はず廣い花笠に紅白の襷をかけて、唄ともつかぬ盆唄を祈禱のやうに呟きながら、單調な圓舞を踊つてゐた。それは實際 der Reigen と呼ぶにふさはしいものであつた。九月にはもう劇しい雨雲の往來、やがて山といふ山の木々に葉が落ちつくして、裸の枝ばかり低い空一面に撒きちらされた山を、いそがしく落葉をたたいて時雨が通る。十一月も終る頃にはもはやとつぷりと雪に鎖されて、年かはり、山の曲路に煤けた吹き溜りの雪がやうやく蒼空に消え失せるときは五月、明るい空を山一杯にほつと仰ぐともう夏の盛りが來てゐた。一年の大部分は陰鬱な雲に塗りつぶされて、太陽の光を仰ぐといふことは一年にただ一回の季節であつた。瞬間に夏も亦暮れる、そして生活も暮れてしまふ。蒼い空の在ることさへ忘れつくして、濕つた藁屋根の下に村人たちが呟くであらう暖れた溜息が、明るい夏空の裏側に透明な波動となつて見え透いてゐる。黄昏に似た慌ただしさで暮れてゆく一瞬の夏に縋つて、あの蟬の音に近い狂躁を村の人達は金比羅山に踊るのであつた。同じ氣候の染を負うて鈴蘭の咲くころ、乙女達が手を執りながら青い草原

に踊る北歐のライゲンは、凡太の古來最も共鳴を感ずる一情景で、凡太は彼自身の心細い生存を、このやうな甘美な狂躁と共に空へ撒きすてて死滅へまでの連鎖を辿りたいと、日頃念願して止まなかつた。彼が止みがたい放浪を感ずるのも、一つにはこの狂躁の染が、あまりやるせないリズムを低く響かせるから。——凡太は金比羅大明神の前栽に、深く深く流れてゐる感慨の香氣に壺せながら、それに溶けてゆく無我のよろこびを感じた。

圓舞をとりまいてゐる觀衆の圓陣を、さらに二人は遠くから默々と一廻りした。このとき、しかし凡太の浸つてゐた靜かな雰圍氣は、さう長くは續かなかつた。——唱い群衆の中頃から一つの頭がゆらゆらと搖れて出て、由良の背中を追うて來たが、「姐さん、一寸お願ひが：：、そんな低い聲を耳にしたまま、凡太はしかし一人五六歩ばかり前方へ歩きすぎて靜かに振り向いた。それは、角帽に頭を商人風に當つた、一見どこやらの番頭といふ風態の小男であつた。二人の男女は早口に何か二三受け答へしてゐたかと思ふうちに、由良は間もなくさつさと男から離れて凡太の方へ近寄つて來たが、その顏には氣の拔けきつて感情といふもののまるで無い白さを漂はして、ぢつと凡太と顏を向き合はせた。

「さよなら……」

「さよなら」

「——あいつ、さつきお話した女衒……」

「女衒？——」

その時由良はもう振り向いて——背中を彼等二人の方へ向けながら、一人ぶらぶら群衆から離れて空を見ながらぶらついてゐる女衒の方へ、歩き出してゐた。見てゐると、二人は何事かひそひそ相談してゐたが、やがて女衒はまだその方をぼんやり見つめてゐる凡太の姿に氣づいて、遠くから會釋した。凡太はひどく狼狽してそそくさ會釋を返したが、氣まづくなつたので、一人ぼくぼくと又一度かなり大きい圓陣を、時々立ち止つては中の踊りを覗き込みながら歩いた。それから、思ひ切つて金比羅山を振り棄てると、いま登つてきた坂道をすたすたと黒い黒い塊の中へ速足で下りはじめたが、自然の加速度で猛烈な速力となり誠までは夢のうちに降りたまま、誰でも止ることが出來ずに次の坂道へ十歩ほど餘勢で駈けてほつと止つた。凡太は其處から、何の氣もなく今駈け降りた山を振り仰いだが、もはや群衆の喚聲もさだかではなかつたし、燈火も無論洩れ落ちては來ない、唯ひたひたと流れるやうな哀愁が、深い一種の氣分となつて彼

の胎内を隈なく占領してゐた。凡太はそれにぢつと浸りながら、本街道に沿うて平行に流れてゐる嶮しい間道を傳ひ、ひつそりと晉の落ちた山を二つ越えてから本街道へ現れてみると、もう黒谷村の家並を遠く通過して、能笹ばかり繁茂した黒谷峠のただ中へ、間もなく迷ひ込むばかりの、そんな地點に當つてゐる憂鬱な杜だつた。凡太はいそがしく廻れ右をして、今度は本街道傳ひに黒谷村へ戻りついたが、恰も長い長い歴史の中を通過してきたかのやうに感じながら、居酒屋の灯を見出してそれを潜つた。居酒屋の女中も盆踊りにまよひ出て、ほの暗い土間の中には老婆が一人睡ぶたげな屈託顏をしてゐたが、凡太は二階へ通らずに、一脚の卓によつて酒を求めた。

「もう若い者はいつこうに踊りに夢中でして——」と、老婆は黒谷村に不似合な世馴れた笑ひを浮べながら、この村では出稼ぎの女工達も踊りたいばかりに盆を待ちかねて歸省するが、なぞと語つた。凡太はむやみに同感して、深くうなづいてみせた。此處へ來て酒を掬むに、あの甘美な哀愁はなほ身邊を立ち去ることなく低く四方に蹌踉し、むしろその香はしい震幅を深くするやうに感ぜられた。彼はこの旅に出て以來といふもの、この夜ほど深い滿足と共に杯を把りあげたことは無かつたので、盛んに饒舌を吐きちらしながら盃を重ねてゐたが、遂ひには輕快な泥醉狀態に落ちて、老婆を相手に難解な術語などを弄しながら人生觀を論じ初めたりしたが、老婆は至極愛想が好くて、「さうですぜの、ほんとうに、その通りですぜの」と相槌を打つてゐた。やがて夜が一段と更けて、壁の中から何か古臭い沈默が湧いて出るやうな氣配を、幾度となく感じはじめる時刻になつてゐた。——そのうちに、女中も踊から歸つて、賑やかな足取りを金比羅山の山續きのやうに土間の中に躍り込ませて來たが、すると、直ぐそのうしろからのこのこと頸を突き入れた小男を見て、凡太は愕然とした。それは疑ひもなくあの女衒で。——女衒は上框に腰を下して片足を膝に組みながら、鋭く凡太に一瞥を與れたが、すぐ目を外らしてそ知らぬ顏をつくり、二階へ上つた女中に向いて「もう上つてもよいのか」と、ひどく冷い横柄な言葉を投げた。それらの全ての物腰には、凡太にとつてとうていなずむことの出來ない冷酷な狡智を漂はしてゐたので、彼はむらむらと憎惡を感じて女衒の顏をうんと睨みつけたが、女衒は平然としてとんとんと二階へ上つてしまつた。「やいやい待て。そして戸外へ出ろ。喧嘩をしてやるから—

!」と、凡太は憤然叫び出したい勃々たる好戦意識を燃したが、やうやくそれを噛み殺して、一と先づ考へ直した。しからば女中を張つて鞭撻をしてやらうかと無性に癪にさわり出して、つまらぬ空想をめぐらしはじめたが、勿論張りがひある女ではないから、一晩中女衒と交代に女を抱くとしたならば、蓋し一代の恥辱であると痛感して、憤然居酒屋を立ち去ることに決心した。老婆と女中は驚いて、「旦那が先客でありますぞい、おとまりなさいまし」とすすめたが、決心止みがたいこと磐石も及ばざる面影を見出したので、「又どうぞ」と言ひながら奥から提灯を持ち出してきて無理に凡太に持たせた。家並の深く離りついた街道にさて零れ落ちて一歩踏みしめてみると、意外に泥酔が劇しく殆んど前進さへ困難を感じる程だつたので、手にした提灯のうるささに到つては救ひを絶叫してわつと泣き出したいばかりだつた。やり切れなくなつて振り向いてみると、幸ひ老婆がまだ戸口に佇んでこちらを見てゐたから、凡太はほつとして提灯を道の中央へ置き棄てたまま、一目散に逃走を開始した。睡つた街道の路幅一杯を舞踏にして鍵手に縫ひ蟠がりながら、時々立ち止まつては一息入れて遥ひに黒谷村の西端れまで來かかると、死んだ四圍の中に、不思議とまだ大勢の人達が路の中央に群れてゐて、それは隣村から踊りに來た若者たちがトラックに満載されて引き上げるところであつた。凡太は狂喜して駈け寄り、「僕も乗せて呉れたまへ」と提議したが、鉢巻姿の若衆は「お主は酔つておいでだから、それはなりませんぜの」と押し止めておいて、臭いガソリンの香を落したまま闇にすつぽり消えてしまつた。凡太は暫く呆然として、消え失せた自動車よりも、突然目の前に轉落した闇と孤独にあきれ果てたが、氣を取り直し、低く遠く落ちてゆく自動車の響きをも振り棄てて、金比羅大明神の參道をえいえいと登りはじめた。峻しい杉並木の坂も中頃で、凡太はつひに足を滑らしてけたたましく藪間ばかり轉落したが、もう起き上る氣持には微塵もならなかつたので、しんしんとして細くかぼそく一條の絹糸程に縮んでゆく肉體を味ひながら、皮膚に傳ふ不思議に靜寂な地底の香に耳を傾けてゐると、山の上から人の近づく氣配がした。凡太は頸を擡げてそれを待ち構へてゐたが、それはしかし人間ではなく、叢の中を動く昆蟲の類ひであらう、やがて高く頭上に當つて、杉の葉の鈍く揺れる酸んだ風音がした。彼はもつくり起き上つた。そして遥ひに辛酸を重ねて金比羅大明神の境内へ辿りつくと、果せるかなそれも

已にひつそりとした闇の一部に還元してゐて見えるものも聴えるものも無かつたが、洗石に地肌に劇しい荒れを感ぜられて、ことに圓舞の足跡が鮮やかな輪型に描き殘されたまましきりに其處にはたはた揺らめいてゐるやうな、何かなつかしい匂ひが鼻にまつわつた。凡太は暫らく瞑目して、素朴な社殿にいくつかの拍手を打ちならしたが、忽然と身を躍らすと目には見えない輪型の中へ跳び込んで、出鱈目千萬な踊りを手を振り足を跳ね泳ぐが如くに活躍して、幾度か身體を地肌へ叩きつけた。凡太はううんうんと痛快な苦悶の聲を闇に高く張りあげながら、その場一面に一時間近くのたうち廻つたが、やうやくいささか我に歸つて、再び嶮岨な坂道を轉落しながら檄覽寺の離れへ安着することが出來た。歸着してみると、當然暗闇であるべき宿の離れには一面にありありと燈りの白さが映えてゐて、流石に凡太の泥酔した神經にもこれはをかしいと思はれたが、しかし見廻すとただ白々と其處に虚さがあるばかり、人影はたしかに無い、いや、在つた、机の上に傲然と安坐して、一房のバナナが部屋一杯の薫條とした明るさを睥睨してゐた。言ふまでもなく由良の仕業に相違あるまい。凡太は堅く腕を組んで、ぢつとバナナの不敵な面魂を睨んでゐたが、腕をほぐすとゐざり寄つて、またたくうちに一つ殘さず平らげてしまつた。

翌日龍然は車に送られて歸つて來た。日の落ちるまで顔を合す機會は無かつたが、一風呂浴びて夕膳の卓に向き合ふと、ポツポツ語り出した龍然の話は、山奥に目新しいトピックであつた。龍然の招かれた先の豪家では、彼のかなり親密な友達であつた其處の次男は、急死とは言ひ乍ら、病死ではなくて、實は催眠薬による自殺であつた。縣内でも屈指の豪農であつたから、新聞社などはいち早く口止がきいてゐて、龍然に與へられた多額な布施の如きにも、それに對する心持が含まれてゐた。その男は多少學問もした人で、數年間歐羅巴へ遊學して來たりなぞした經歴を持つてゐたが、日頃無爲の境遇に倦怠して激しい虚無感を懐いてゐた。「自分のやうな無爲の存在は結局一匹の守宮ほどもこの世界とは關係を持たないらしい、廣々とした建物の中にぢつと坐つてゐると、其處に人間が居るのだか居ないのだか、まるきしその氣配さへ分らないし、たとへ其處に居るとは分つても、人々はこの建物に當然の樂ほどにしか考へない、守宮を發見した時のやうな賑やかな騒がしさでは誰も自分の存在を問題にすることがない。やがて自分は死ぬであらうが、

自分の死滅した後もこの古い嚴めしい建物はなほ儼然と存在してゐて、人々は尙その中に住みながら、むかしこの建物の中に自分といふ存在の染のやうに生きてゐたこと、今は已に消滅して見當らぬことなどを考へる者もなく、第一その話を思ひ出してさへ、かつて自分が存在しただらう確證を認識するにさへ困難して苦笑するであらう。いはば自分は死の中に生き續けてゐるやうなもので、結局生命にひけめを感じながら、生きてゐる限りは存在に敗北しつづけてゐるやうなものだ……」と、その男は結局これと同じ內容のことを種々の樣式によつて常日頃龍然に述懷してゐたが、時々昂奮して、ひと思ひに左翼へ走つて自分の生命力を爆碎したい、などと猛り立つたりした、そんな淋しい男だつたさうである。その男は、ほかに親しい友達が無かつたのであらう、死に當つて、龍然にも遺書を殘してゐた。そこには、長い間の友誼を深謝す、と、ただ、それだけの意味のことが數行にわたつて簡單に述べられてあるだけのことであつたが、その遺書は龍然の手に渡る以前に、すでに家族の手によつて開封されてゐた。勿論それだけのことならば、龍然のことであるから立腹する筈はなかつたであらう、不幸にして、この一家が死者に對する待遇は、恰も唾棄すべき不孝者を遇するが如き不潔な冷酷さを漂はしてゐたために、無論それは體面を重んずる豪家としては詮方ない次第でもあらうけれど、龍然は友人であるだけ甚だ氣に入らなかつた。彼は開封された遺書に對して一向に禮儀を心得ぬ卑劣な言譯をきくと、全く憤慨して、通夜の席上で大いに啖呵を切つてきたさうであつた。

「――實際大きな建物といふ奴は不思議な迫力を持つものでね。僕などもこのガランとした寺にぢつと坐つてゐると、その男と同じやうな漠然とした不安を、やはりしみじみ思ひ當ることが時々あるやうだね。單に建物とかその暗い壁だとか、そんな物に變にがつちりした存在を感じて敗北を嚙みしめるばかりではない、自分が現に存在し、又寺の一隅に坐つてゐることに對して無意味を痛感し、痛感するばかりでなく、そのことがすでに又無意味に思はれる程何かがつかりした倦怠を感じ、それと一緒に自分の存在がいつぺんに信じられなくなつてくる。それが、自分の心の中でさう思ひ當るばかりではない、自分よりももつと強烈な生命力を持つこの建物の意志の中に、妙にみじめに比較されてさういふ倦怠の氣配を感得するから、實に實にやり切れない心細さに襲はれてしまふ……」

「それはさうだらうね。君の場合には棲む場所が直接この强烈な建築だから、つまり建築を對象にしてさう感じてしまふのだらうけれど、僕の生活には建築なんぞ大した關係を持たないから、何か漠然とした一つの全體を對象として……」

凡太は同感してそんなことを言ひかけたが、議論の對象そのものが茫漠として所詮は一生の十字架であり、口に乘せて弄ぶのも無役であると思はれたので、さつさと口を噤んで沈默してしまつた。それに凡太は、由來自分の虛無思想に對して甚だ謙虛な心を懷いてゐて、自分はとうてい虛無に殉ずる底の深遠な實際を味得しうる人物ではない、自分は淺薄な男で、本來樂天主義者でもなく、常に何事も突き詰めることを避けるところのいはば一種の氣分的人生フアンで、取柄といへばその自分の人生に對して甚だ冷淡そのものであること、それくらゐのものであらうとあきらめをつけてゐたから、人生を理論で爭ふ意志は毛頭持たなかつたばかりでなく、他人の深い虛無感に對しては、常にこれを深刻なる先輩として、實際まじめな意味で若干の敬意を拂ふことにしてゐた。彼はただ、彼自身の立場としては全てを漠然と感じればそれでよい、それを單に言葉に表はして憂鬱なる一時をさらに憂鬱にすることは退屈以外の何物でもあり得ない――實際それは退屈以外の何物でもなかつたから、その時も彼はいそいで口を噤むと、もはや別の事をぼんやり考へはじめて、一體全體そもそもこの龍然と呼ぶどんよりとした坊主が、通夜の席上で啖呵を切つたといふ耳よりなゴシツプは果して眞實であるのか、と、そんなことにひどく興味を持ち出してゐた。

「いつたい、君が大いに啖呵を切つたといふのは、ほんとうの話かね？」

「それはほんとうの話さ。一座の連中をすつかり慄へ上らして來たよ。尤も腹の中では、僕は大いにいたづらな氣持だつたがね……」

と、龍然は例の至極あたりまへな顏付に、それに少し苦笑を浮べて、あああああ……と奇聲をたてながら實にだらしなく欠伸をした。

ところがその翌日、意外千萬な出來事が起つた。事件そのものが甚だ意外であつたばかりでなく、事件の原因をなしたところのものが實に奇想天外――いや、これも凡太の意識內に於ける不屆きな好奇心の說明であるが、とにかく奇拔千萬であつたために、凡太はひどく奇異を感じた。卽ち、龍然は通夜の席上で、實際憤然として

悲憤慷慨の演說を試みたばかりではない、しかも屢々過激な言辭を弄して資本主義ならびにブルジョアを攻擊したといふのである。勿論それは相手が縣内でも有數な勢力家であるために、針小棒大に誇告して司直の手を果はしたことかも知れない。しかしとにかく、嚴めしい佩劍の音が翌日山門を潛つたのは事實で、それは村の駐在巡査が一人の特高係を案内して寺を訪れたのであつた。特高係はしかし案外物の分つた男とみえて、田舍なまりの割合に溫和な口調で、無論相手が相手のことで物の分らない富豪のことだから、何かの反感で無理に口實をつけたのであらうけれども、その方面には弱い警官のことであるから餘儀なく義務上一應お訪ねしただけの話で、決して貴僧に疑ひをかけてゐるわけではないが……などと、くどくど長く述べたててゐた。凡太は隣室の唐紙に凭れて息を凝しながら形勢を觀望してゐたが、刑事の言葉には裏にも表がないやうに思はれたので、ほつと安心はしたものの實のところは氣拔けがして、虹の羽音のやうな話聲をもはやそれ以上注意して聽かうともしなかつた。すると突然大變な物音が隣室に湧き起つたので思はず彼は唐紙から身を離すと、それは丁度發狂した男がその最初の發作に襲するであらうやうな激越を極めた金切聲で、疑ひもなくそれは龍然の叫喚であつたが、龍然は單に叫喚するばかりではない、恐らくは部屋一面を無茶にして縱橫無盡に地團太踏んでゐるものらしい猛烈な物音であつた。聽いてゐると、しかしそれは單なる叫喚ではない、たしかに龍然としては何事か一意專心演說を試みてゐるのに相違ない、それが今迄演說とは氣付かなかつたのはあながち金切聲のせゐばかりではなく、正氣できいたら噴き出さずにゐられぬやうな支離滅裂を極めた句と句の羅列であつたからで、「大日本帝國は萬世一系の……」と言つてゐるかと思ふと、「ああ拙僧の名譽も地に落ちたり、忠君愛國のほまれも空し、ああ悲しい哉……」「印度に釋迦牟尼誕してここに二千有餘年――」等々々。

凡太は一體龍然の學識には相當の敬意を拂つてゐたのだつた。それは彼が初めてこの寺へ第一歩を踏み入れた夜のこと、龍然はその書院にかなり堆く積まれた書籍を隱すやうにしながら、「賣り拂ふ古本屋も山の中には無いので……」と恥ぢた顏付をした。凡太の經驗に由れば、書籍を所有することに心から恥を持つ人は、おほむね勝れた學識を持つ人達であつたから、龍然の學識に對しても、忽ちこの時から敬意を拂ふことにして、別にそれ

以來議論を交したこともないから、そのままその時の敬意を拂ひつづけてゐたのだつた。ところが隣座敷の狂態たるや支離滅裂も何もあつたものではない、土臺論理も論旨もあるわけでなく言葉の體裁をさへ調へてをらぬのだから、或は發狂したのであらうかと思へば、恐らくさうでもないのであらう、刑事もつくづく度膽を拔かれてやうやく龍然を宥めすかし、飛んだ疑ひをかけて相濟まない、今となつては寄天白日で貴僧の名譽に傷はつけないから――と詫びながら辭ふやうにして退却した。凡太もほつと安堵して玄關へ龍然を迎へに行くと、龍然はもう、どこを風が吹くのかといふやうに、いつもの通りあつけらかんと殘骸のやうなしよんぼりした顏をして戻つて來るところだつた。凡太が歩み寄つて龍然の肩をたたくと、別にそれに報いようとする顏付もせず、二人肩を並べて默々と書院へ歩き出したが、敷居を跨ぐ時、龍然は鼻を鳴居へ押しつけるばかりにして、あはあはあは……と笑ひ出した。凡太はすつかり毒氣を拔かれて、今のは芝居だつたのかい、と訊いてみるのも莫迦らしい程がつかりした氣落ちがしたので、いささか膽の白くなる驚嘆を味はひながら、一體この坊主は莫迦なのか悧巧なのか手に負へない怪物だと考へた。

其の後、もう來ないのかと思つてゐた女は、相變らず夜毎龍然を訪れて來た。どういふ變化があるだらうと聽き耳をたててゐても、別に變つた事もない、離れにぢつと瞑目して扒に凭れて頬杖をついてゐると、すぐ目の先にある小さな古沼、それを越してすぐさま丘の上にある墓地、その又上にひつそりとしてゐる山の腹、都合三段の靜寂な氣配がそれぞれのニュアンスを持つて、もうすつかり閉けてしまつた初秋の香りを運んだ。なぜだか、身體がやはり一つの氣配となつて朦朧とさまよつてゐるやうな、爽やかではあるが一種ぢつとりと落ちついた重い侘びしさが、物體に障碍されることなく一面に流れ漂うてゐた。いはば、まるで現實とは別種の感覺の世界を創造するもののやうに、目を瞑ると、甘い哀愁の世界がひろびろと窓を開いて通じてゐた。それは「無」――實際は、無といふにはあまりにも一色(ひといろ)の「心」に滿ちた、蕭條とした路であつた。それは事實、路といふ感じがした。

由良とも友達になつてゐるのだから、二人打ち連れて遊びにおしかけて來はしないかと、凡太はそれとなく待ち構へてゐたが、別に來るやうなこともない。龍然はあの夜のことを知らないのであらうかとある日訊ねてみた

ところが、ああ、さうさう、さういふ話をきいてゐた、君によろしく傳へてくれと言ふことだつた、いよいよ俺達も別れることに決つてね。などと落ついた返事だつた。

「あの女は別に女衒と一緒に東京へ行かなくとも良いのだから、君さへ邪魔でなかつたら、君の歸る時あれも一緒に連れてつて貰ひたいと言つてゐたよ。東京に知り合があると思へば心強く暮せることだらうからね。ぜひ一緒に連れて歸つて今後も力になつて呉れたまへ。いづれ今晩でも改めておひき合せしようから。まつたく僕もあの女と別れることになつてせいせいしたよ」

龍然はそんなことを言ひながら、無心に鼻の油を拭いてゐたりした。そのくせ、やはり女と別れることが、別れ切れない心持もあるのであつた。丁度その頃のことであつたらう、凡太と龍然はある黄昏の杉並木を金比羅大明神の方へ散歩にぶらついてゐたが、嶮しく高い坂道の途中で、偶然上の方からただ一人下りてくる例の女衒に擦れ違つたのであつた。女衒は手に短い杉の小枝を携へてゐて、それを弄びながら急ぎ足ですたすた下りていつたのだが――その時凡太は、それは恐らくその時の結果から推してさう思ひ當るのかも知れないけれど、もし自分が龍然の身の上で、そして今自分一人でこんな山奥に女衒と擦れ違つたとしたならば、或ひは自分は女衒を殺害して谷底へ埋めてしまふかも知れない……と、そんな風な空想をたしかその時めぐらしたやうに思ひ出されるのであつた。しかし龍然はまるで何でもない顔付で、女衒の存在にさへ氣付かぬやうな物腰でやり過してしまつたから、凡太はほつとして、これは龍然は女衒の顔を知らぬのかしら等と考へながら上の杉並木を洩れる空模樣を仰いで息を吸つた。するといきなり耳もとで、さつと風を切る激しい音がした。

「女衒はよくないぞ！」

龍然は坂の下をぢつと睨んで直立してゐたが、鋭く張つた四角な肩に激しく息を呑む氣勢が感ぜられた。凡太も坂下の方を見下すと、叫ぶよりも前に龍然の手から投げられてゐた下駄が女衒には當らずに、一本の杉の幹に痛々しい跡を殘して、尙ころころと一二間もころげて止まるのが見えた。女衒は腰を浮かせて逃げかけたが、龍然の氣配に追及のないのを見ると、卑屈にねちねちした度胸を見せて、知らぬ顔を粧ひながら麓の方へすたすた降りていつた。流石にその日龍然は、息の亂れを收めてもとの顔付にもどるまで十數歩の歩行を要したが、それも收まると、また超然とした殘骸に還元して、一方の足

は跣にしたまま長い坂道を傾きながら歩いた。凡太は何とも言へぬ寂寞を感じて、君、足は痛まないのかと訊いてみるにも言葉はもはや不用なものに考へられ、胎内に充滿してくる空虛を味得した。

もう山は秋が深い。それは、壹の明るさが尙寂寥に堪へがたくて、ひたすら死滅へ急ぐもののやうにしか考へられぬ蟬の音の慌ただしさや、已にいそがわしく遠い空に走り初めた幾流れもの雲や、そしてぽつかりと空洞に落ちたこの明るさ――ひとまづこれで、ぱつたりと杜絶する生活力の斷末魔が山といふ山に、路に、藁屋根に、目に沁みるリズムとなつて流れてゐる。女衒もすでに黒谷村を去つて、沈滯した村の軒からは、何か呟く呪ひの聲が洩れてくるもののやうに感ぜられた。そして龍然は、物置から埃まみれな草履を一つ探し出して、下駄とちんばにこれを突つかけながら、黒い法衣を秋風にさらし、流れはじめた雲の慌ただしさに狂躁を感ずるものの如く、村の法用に山門をいそがしく往來してゐた。凡太はぢつと歸ることを考へた、いやむしろ、立去つた後の黒谷村の侘しさを、恰かもそれが永遠に自分の棲まねばならぬ運命の地であるかのやうに、呆然と思ひやる日が多かつた。

もう九月に這入つた一日、凡太はいよいよ出立した。その未明、まだ明け切らぬ黒谷村の、人氣ない白い街道を、龍然と二人肩を並べて一言も物を言はずに通過してしまつた。谷間からどす黒い鶏が湧きあげて、近い山さへまるで視界には映らない、そして、銅の音が遠い森から朝の澱みを震はして沁みる頃、丁度朝の目醒めを迎へたであらう黒谷村は、振りかへつても、もはや下には見えなかつた。由良は汽車に間に合はせて、自動車で停車場へ來る筈になつてゐた。

「君、東京へ歸つたら、忘れずに手紙を呉れたまへ」

龍然はだしぬけにそんなことを言つて、まだ停車場へ七八里もあるのに、凡太に握手を求めた、「又來年もぜひ來てくれたまへ」と附け加へながら暫く手を離さなかつたりして。そして長い中絶の後に、もう一里も歩いてから、又さつきの話を思ひ出して、「もし來年も達者でゐたら……あははは――」と笑つたりした。さうかと思ふと、凡太の言葉にはまるで邪慳に耳もくれず、ただすたすた歩いてゐた。

「どうだい。君にあの女を進呈しようかね」

龍然は又、いきなりそんなことも言ひ出した。

「尤もあんな女ではね。しかし、女郎や淫賣よりはたし

かに清潔だから、そのつもりで玩具にする氣なら、いつでも自由に使用したまへ。どうせ女衒の手に渡れば、あいつは何をやり出すのか知れたものではないのだから」

そして凡太が困惑して、返事も出來ずにゐるうちに、彼は煙草に火をつけて、屈託もなくパクパクと煙を浮かせながら歩いてゐた。來る路に、鼈然が殘餞をねせたあの曲路(カヅ)でも、二人は休まずに通りすぎた。もう明るい太陽が、それでも尙朝の潤ひを帶びて、張りつめるやうに山一杯にかんかんと照り、二人を汗にぐつしより濡らした。停車場へ着いて暫くすると、乘合自動車も後から來て、由良は大きな行李を抱えながら崩れ込んだ。その時の疲勞で喉が塞がるもののやうに粧ほひながら、わざとはあはあと大息をして、實は空虛な白い氣持で喋る氣にもならぬのを、笑ひ顏で胡麗化してゐたが、笑ひ顏もひとりでに收まると、放心した顏を窓の外へぢつと見やつて、坐らうとさへしなかつた。三人は劇しく退屈して暗い顏を互に背(そむ)け合つてゐたが、誰が言ひだすともなくただ時々、夜の幾時に上野へ着く筈だね、もう東京も寢る頃であらうね、なぞといふ空虛な言葉を交し合つたりした。

汽車がついた。汽車に乘ると、由良はもう劇しく泣きはじめてゐた。

「達者でありたまへ」

鼈然は二人のどちらに言ふともつかず、そんなことを一言二言言ひすて、短い停車時間、ぼんやり窓際に立づたまま明るい空を見つめてゐた。

汽車は動きはじめた。さようなら。そして由良は泣きながら堅く窓にかぢりついて、激しく手巾をふつてゐたが、凡太も亦、彼はデツキのステツプに身を出して鼈然に目禮を送りながら、目に光るものの溢れ出るのを、どうすることも出來なかつた。もはや列車はするすると、屋根もない短かいプラツトフォムを走り出ようとしてゐた。人氣ないプラツトフォムにただ一人、超然として、全ての感情から獨立したやうに開いた兩股をがつしり踏みしめて汽車を見送つてゐた鼈然は、已に明るい太陽の下に一つ取り殘されて小さく凋んでゆくやうに見られたが、突然みにくく顏を歪めたやうに想像されると、小腰をかがめ、兩手の掌(ひら)にがつしりと顏を覆ひ、恐らくは劇しい叫喚をあげながら、倒れるやうに泣き伏した姿が見えた。——

イノチガケ

——ヨワン・シロータの殉教——

前篇　殉教の數々

一五四七年一月、一艘のポルトガル商船が九州の一角に坐礁して引卸しにかかつてゐると、丘の上から騎馬で駈け降りてきた二人の日本人があつて、手拭を打ちふり、その船に乗せてくれないかと叫びたててゐる。

四名の水夫がボートを下し岸へ漕ぎ寄せて聞いてみると、事情があつて追跡を受けてゐる者であるが、かうしてゐるうちにも追手の者が來さうであるから、船に乗せて一時の急を救つてもらひたいといふ頼みである。

水夫達は當惑したが、見れば一人はかねて九州ヒヤマレゴ（該當地不詳）の港で面識のある者であるから、とにかくボートに乗せて本船へ漕ぎもどることにした。

ところで同じ丘の上から十四名の騎馬の者が現れてきて、二人の者を渡さなければ鏖殺しにしてしまふと敦圍いて罵り騒いでゐる。そこへ又九名の者が駈けつけてきて、追手の數は二十三名となつた。

水夫達は驚いて急ぎ本船に漕戻り、二人を乗せて印度へ向けて立去つた。なかの一人を彌次郎と言つた。

この船の船長はかねて印度の開教者フランシスコ・サビエルの德を慕ふ者だつたので、彌次郎の行末を憫れみ改宗を勸めて、サビエルに會ふ手引をした。その年十一月、彌次郎は馬拉加でサビエルに會ふことができた。

印度土人は無智野蠻で、生活は本能のままであり、懶惰狡猾で信義がなかつた。基督教のいましめは彼等にとつて死を意味した。サビエルは布教の前途に失望の念を抱かざるを得なかつた。

さて、彌次郎と暫く起臥を共にして指導してみると、彼の天性怜悧であり、信義に厚く、信仰は又熾烈である。日本人とはこのやうな者であるなら、日本こそ布教すべき地であるとサビエルは思つた。彌次郎を遣はされたのも日本を傳道せよとの天父の聖旨であらうと信じ、ここに日本傳道を決意、彌次郎をゴアの學院へ送り、諸般の準備をととのへた。彌次郎はゴアで洗禮を受け、その教名をパウロと言つた。

トルレス神父、フエルナンデス法弟、その他の者を從へ、パウロの案内によつてその故郷鹿兒島へ上陸したのは一五四九年八月十五日、聖母まりや昇天祭の日であつた。

彌次郎の緣者知己はその轉宗を怪しまず、遠く海外を遍歴した勇氣を賞讃。島津貴久はパウロ彌次郎を引見して、跪いて聖母まりやの繪姿に禮拜し、改めてその油繪

を懇望したが、他に代るべき繪姿がなかつたので應じるわけにはいかなかつた。

一般に日本人は宗教に淡泊である。得體の知れない唐天竺の神樣でも、神樣とあれば頭の一度や二度ぐらゐいつでも下げるに躊躇しない代りに、先祖代々の信心にもそれほど執着してゐない。

日蓮が大きな迫害を受けたのは、彼自らが他宗を非難したからであり、基督教の布教でも、佛僧に宗論を吹きかけ、佛僧の墮落を難じ、事毎に異端に向つて敵對を示さなければ、彼等の受けた迫害も尠かつたに相違ない。

一般の善女善男はサビエル一行が天竺から來たときいて、佛教の本場の坊主が來たと思つた。

最も姦落なのは禪僧であつた。彼等は宗派のひとつぐらゐ增えたところで馬耳東風のたちだから、天竺渡來の坊主共をことごとく歓待し、大いに胸襟をひらいてみせた。

鹿兒島に福昌寺の忍室といつて博識の聞え高い老僧があつた。サビエルはこの禪僧と親交を結び、屢往來したが、或る日數人の坊主が坐禪を組んでゐるのを見て、あれは何をしてゐるのかと訊ねた。

「さればさ。あした貰ふ布施のことやら女のことでも考へてゐるのだらうて。どうせ碌な事は考へをらん奴等でな」と年老いた禪僧は姦落に答へてカラ〳〵と笑つた。

サビエルの偶像一方の精神に本來無東西の姦落は通じる筈がないのである。禪僧は己れの神も苦業も信じてはゐないと斷じ、佛教のこの大いなる不誠實を忽ち本國へ報告した。

豐後の國で深田寺のなにがしといふ禪僧はじめ數名の坊主と會見したことがあつた。

深田寺は禪問答の要領でサビエルの顔を熟視しながら見覺えのある顔だが貴公はその覺えがないかと言つた。

もとより知らない顔だから、その覺えはござらぬとサビエルは答へた。

すると深田寺は失笑して傍の坊主に向ひ、この仁は見覺えがないと言ふが、知らないふりをするのは奇妙千萬なと語つて、

「貴公は千五百年前、比叡山でおれをつかまへて絹五十反賣りつけをつた仁ではないか。今度もあの時の殘り物を商ひに來をつたのだらう。ワツハツハツハ」と言つた。

サビエルは禪問答の要領など聞知してゐなかつたから、佛僧共の無智傲慢な言說に啞然として、貴殿はいく

つになるかと訊ねた。

深田寺は五十二になると答へた。

サビエルはこれを聞くより儼然坐を正して佛僧を睨まへて、五十二歳の者がどうして千五百年前に絹を買ふことができたか、又、比叡山は開かれてから千年にも満たない山だといふではないか、とあたりまへの屁理窟を言つて、不謹慎な言説を責めつけた。約束の違ふ言ひがかりだから、禪僧は語に窮したとある。

禪問答には禪問答の約束があつて、兩者互に約束を承知の上でなければ、飛躍した論理も悟りも意味をなさない。そこでかういふ問答の結果がどうかと言へば、仲間同志の禪坊主だけ寄り集つて、狡猾湯で氣焔をあげてもゐられるけれども、然し、かういふ約束の足場は確固不動のものではないから、内省の鷹が忍びこんでくる時には曇如としてはゐられない。辛酸萬苦して飛躍を重ねた論理も、誠實無類な生き方を伴はなければ忽ち本據を失つて、傲然自恃の怪力も微塵に碎け散る惨狀を呈してしまふ。サビエルはじめ伴天連、入滿の誠實謙遜な生き方に壓倒されて、敬服せざるを得なくなるのである。

佛僧の切支丹轉宗は相繼いでかなりあつたが、その多くの者は禪僧であつたといふ。

忍室もサビエルの誠實な生き方に心服、自力の本據を失つた一人であつた。後年鹿兒島を訪れた法弟アルメーダに向つて、自分には禪僧としての地位名望があるので外聞をはばかつて控えてゐたが、死に先立つて洗禮を受けたいものだと言ひだした。老僧の孤影悄然木枯の荒野に落ちたやうに哀れであるが、このあつさりした轉向ぶりはカトリツクの執拗な信仰できたへたアルメーダには判らないから、インチキ千萬な坊主だと思つて拒絶してしまつた。

京畿地方を開教したビレラが將軍足利義輝に謁見して布教の免許を受けることができたのも、建仁寺の一禪僧の斡旋であつた。

サビエルも之に先立つて中國から京畿を廻つたが、當時は戰亂の最中で、京都は衰微の極に達し、布教どころではなかつた。この道中、喜捨はすべて貧民に頒ち與へ、自分はボロ服を着て、野宿をしたり食物にも事缺きながら、乞食のやうな旅行をつづけて說法した。熱帶からやつて來たので特に寒氣に苦しんで屢發病したが、乘物を用ひず、ミサの祭具を詰めこんだヅダ袋を背負つて歩いた。歐羅巴にゐた頃から傳道の生涯をかうして押通

してきたのである。諸方で信者はできたが、前途の隆盛を望み得るといふ程ではなかつた。

ところへ一艘のポルトガル商船が豐後へ來着して、當時山口に布教中のサビエルを招いた。

サビエルは招きに應じて例のボロ服にヅダ袋を背負ひ途中に發病してフラフラと辿りついたが、ポルトガル商船の方では六十三發の祝砲をぶつぱなし、盛裝したポルトガル商人が騎馬の大行列をねつて、彼等の敬愛する東洋布教長の來着を迎へた。一行は病み衰へたサビエルを見て切に乘馬をすすめたが、サビエルは肯じないので、一同も馬から下りて、聖師の後から馬の轡を引つぱつて戻つてきた。

府内の城で砲聲をききつけて、ポルトガル商船が海賊と戰爭を始めたものと考へた。早速家老を大將に加勢の一隊を差向けたが、サビエル來着の祝砲と分つて復命。改めて迎への使者を差向けたところが、ポルトガル商船の方では日本人の氣質を呑込んでゐて、十五發の大砲を放つて使者の來着に敬意を表したから、使者一行は大滿足で、サビエルの威光を肝に銘じて引下つた。

サビエルが領主大友義鎭に謁見の日が輪をかけた賑ぎであつた。砲聲殷々と響く中に、船長ガマを指揮官として、先頭に聖母の像を捧げ、ポルトガル商人水夫總勢揃つて金銀の鎖で飾つた色とりどりの禮服をきて行列をねり、左右二列の樂隊を配し、錦繡の國旗をひるがへして府内城下に乘込んだ。進物として異國の珍器を數々贈つたから、大友義鎭はじめ家臣一同絶大の敬意を拂つてサビエルを迎へ、基督教は一時に上下に浸潤した。

ここに於てサビエルは、日本人は威儀の旺なる者を敬ひ、又進物を愛することを痛感し、今後の布教にこの氣質を利用すべしと悟り、爾來續々來朝の伴天連はこれを日本布教法の原則のやうに採用した。

初めて信長に謁見したのは神父フロイスであつた。

一五六九年春光麗らかな一日のことで、かねて盡力を頼んでおいた和田惟政から俄に三十騎の迎へが來て、即刻出頭せよと傳へた。フロイスは黒い法衣をまとうて二條城の工事場へ行つた。

信長は狩衣をきて、堀にかかる橋の橋板の上に立ち、工事を指圖してゐたが、フロイスが遠か遠い所から恭々しく一禮するのを見て、さしまねいた。フロイスが近づくと、日が照るから帽子をかぶつてゐても構はないと言つた。

信長はフロイスの年齢や出産地やどこで坊主の勉强を

たかといふやうなことを訊いたのち、日本人がお前の教法を信じなかつたらお前は印度へ歸るのかと尋ねた。フロイスは答へて、たとひ一人でも信じる人がある以上は決して日本を去らないと言つた。談偶〻佛僧の上に及んだところ、信長は大きな怒りを表はして、彼等は驕奢放逸に耽り愚民の浮財をまきあげて酒食に費してゐるものだと大聲で罵つた。會談二時間に及んで、京都居住と布教の免許を與へた。

フロイスは信長に就て次のやうに書いてゐる。

「信長は尾張三分の二の主たる殿の二男で、その天下を統一し始めた頃は凡そ三十七歳であつた。體格は中背で痩形で、髯は少く、音聲はよく響き、非常に聰に長じ、武術に身を委ね、威嚴を好み、又賞罰に嚴であつた。常も己れを侮る者があれば假借しない。然し事柄によつては開濶で、又慈心にも富んでゐた。睡眠時間は少く、早起であつた。貪る心はなく、決斷に富み、戰鬪の術策に於ては甚だ狡猾であり、恐しく又强く怒る。但し必ずしも常に怒るのではない。部下の云ふ事に從ふのは稀で、又多くは之を用ひず、何人も彼を恐れ又尊敬した。酒を飲まず、小食であり、起居動作は極めて鷹揚で、顏付は尊大であつた。日本中の大名等に對して、何れも輕蔑して、彼等と話すには、自分の部下に對する樣であつた。氣宇が大きく、又忍耐に富み、戰が不利でも驚かない。理解がよく、判斷は明確で、神佛を拜む事や、異教の卜占や、迷信的習慣を總て輕蔑した。名目の上では始めは法華宗に屬してゐるやに見えたが、權勢の加はるに及んで、あらゆる偶像や神佛の禮拜を輕蔑し、又或る點では禪宗的見解を抱いて、アニマの不滅や、來世の賞罰等を考へなかつた。その家居には、非常に清潔を好み、何事でも極めて氣を配つて順序よくした。又人が話をするのにぐづ〳〵したり、長口上を述べるのを甚だしく嫌つたが、極めて卑賤な者や、最も卑しい奴僕に對しても心おきなく話をしかけた。特に好んだ事柄は、有名な茶の湯、良馬、利刀、鷹狩で、又上下の別なく、裸體で角力をとるのを見て喜んだ。何人でも刀を帶びて彼に近づくのは禁物であつた。然しどことなく陰鬱の暗影があつたが、困難な仕事にかかれば大膽で恐るる所なく、人々は言下にその命を奉じた」

一五七三年、信長天下を統一。佛教を彈壓し、諸寺を燒き、僧兵を打ち亡し、切支丹を擁護した。

信長は基督教を信仰してはゐなかつたが、切支丹を擁護し、佛僧を彈壓するのが彼の天下統一に便利であつた

し、坊主の墮落を憎んでゐたので、清貧童貞に甘んじて私欲なく貧民病者のために奔走する伴天連の誠實を高く買つた。

或る日のこと、信長は京都へ來たついでにオルガンチノとロレンソを招いて、彼等を別室へ伴つて侍臣を遠ざけたうへ、お前達は常日頃說いてゐる神の存在だのアニマの不滅だのといふやうなことを本當に信じてゐるのだらうか、今日は隱さず打開けてくれないかと秘かに訊ねた。いつぞや同じ事を佛僧に訊ねたところが、彼等は佛の存在も來世も信じてはゐないが愚民を諭すに便利だから方便として用ひてゐるのだと答へ、切支丹の伴天連だつて同じことで、嘘と知りながら信仰を弘めてゐるのだと附加へた。信長も神佛の存在だのアニマの不滅だのといふやうな事は馬鹿々々しくて信ずる氣持になれなかつたので、學識高い伴天連たちが愚にもつかない事を甚だ熱心に說敎するのが不思議でならなかつたのである。

オルガンチノは之をきくより彷にあつた地球儀をとりあげ、伊太利亞の地を指して、これは自分の生れた國伊太利亞であるが、本國を遠く離れ、數々の危險を冒して萬里の波濤を渡り、知るべもない國へ敎へを弘めるために來るからには、もとより一命は神に捧げてしまつてゐる。殿下も良く御存じのやうに自分達は齋戒窮苦の生活をもつて貧民病者のために又あらゆる人の幸福のために自ら求める所なく働いてゐるといふのも、現世を望まず、一命を天にまします聖主に捧げてゐるからに他ならない。神の存在を信じ、來世の幸福を信じなければ、どうしてこのやうな困苦の生活に甘んじることができませうかと言つた。

信長はこれをきいて、彼等の眞摯誠實な信仰を深く喜び、廉潔を愛し、毫も彼等の心事を疑はなかつたけれども、同時に、彼等の腦髓にはどうも異狀があるやうだと疑ふ樣子であつたといふ。

一說によれば、もし基督敎があくまで一夫一婦の掟を强ひなければ、信長も切支丹になつたであらうと言はれてゐる。然し、固より當てにはならない。豐臣秀吉ですら或る時神父に向つて、殿中の侍女のうちで切支丹を奉じる者の操行端正なことを賞讚したあげく、もし一夫一婦の掟をもうすこし緩めてくれれば自分も切支丹になつてもいいと公言した。もとより之は機嫌のいい時に人の喜びさうなことを言つてみる秀吉の癖であり氣まぐれであつた。

信長自身は一夫一婦に辟易したが、伴天連、入滿が清

貧窮に甘んじて厳しい掟に違ひ苟も私利のためには計らぬ緣を賞美した。かくて切支丹は天下統一者の保護を得て、一時に隆盛に赴いた。

信長の居城安土には、城の下の水邊に壯大な南蠻寺が建立され、有馬と並んでセミナリヨ（神父を教師にした洋風の學校）が設けられて、諸國の富年貴公子がここに集ひ、ラテン語を學び、油繪を描き、西洋の樂器をかなでた。

信長は教會の音樂を愛したといふが、後に切支丹を彈壓した秀吉も西洋音樂を愛好して殿中に樂士を招いて奏せしめたといふことで、一般に切支丹の祭儀の莊嚴、リタニアの音調が人心を惹きつけたことは甚大であつた。

ある佛教徒の大名は切支丹であつた息子の葬儀に參列してその壯嚴な儀式に感極まつて落涙、師父に深く感謝の意を表したと云ひ、ガゴが山口へ來て降誕祭の祭儀を營んだ時には、夜半のミサに信者達は感動して泣いてしまつたと云ふ。又長崎に初めてトドス・サントス寺院ができて、復活祭の祝をした時、その聖クワルタ（水曜）の日に、師父自ら十二名の貧民の足を洗つてキリシトの例に倣ひ、つづいて信者は行列を組んでヂシピリナで身體を打ち血を流しながら罪を悔いる誡を表はして寺院に繰込んだが、これを見る參詣の信者達は泣きだしてしまつた。

かういふ例は諸方に澤山行はれて、やがて切支丹は改宗の機緣をつくつたに相違ない。

セミナリヨの貴公子達も特に音樂を愛好して、巧に演奏する者もできた。まだ切支丹でない青年達も神父に就て語學を習ふことを誇とし、血なまぐさい職亂を經てきたばかりの安土城下は忽ちハイカラ青年の樂園となつた。

一五七七年、オルガンチノは、本國へ次のやうな報告をだして、日本人は氣の小さいのが大嫌ひで話の分らない人間を嫌むから、日本人に接するには特に大度が大切である。日本人自體が概して大度で自尊心が強しく、大袈裟なことをしたいと思ふと、その爲には盲進もする。又、頗る新奇を好む氣質だから、例へばエチオピアの黑人でも連れて來て見せたら大當りをとるだらう、と書き送つた。

ところが二年後、教會支部長ワリニヤーニが巡察使として來朝のとき、本當に黑ん坊を連れて來た。天正九年の復活祭の餘興に黑ん坊の踊りをだして絶大の人氣をよび、信長に謁見せしめた。信長も度肝をぬかれて、人間

の皮膚がこれほど黑い筈は有り得ないから作りものだと疑つて、着物を脫がせ、褌もとらせて仔細に點檢した後にやうやく正眞正銘皮膚の色に間違ひないと納得、以來この珍物が氣に入つて身邊に侍らせ、奴僕として使つてゐたが、本能寺の變に暗夜に紛れて行方不明になつてしまつた。暗夜に紛れる筈であつた。

一五八二年、信長變死。

秀吉は信長のあとを承けて、表面切支丹を保護することに變りがなかつた。

小西行長の母マグダレナの手を經て差出した願書に許可を與へて免許狀を下附し、安土の南蠻寺とセミナリヨを大坂に移させてその獻堂式には自ら參列、又、日本從管區長コエリヨに公式謁見を許して、支那朝鮮征伐の計畫をきかせたり、軍艦二隻の提供を賴んだり、平服に着替へてきて城内や工事場を案内して說明してきかせた。切支丹彈壓の氣配など微塵もなかつたのである。

ところが一五八七年、九州征伐のため筑前博多に出向いてゐた秀吉は、突然切支丹教師追放を發令した。陰曆六月十九日深夜の出來事であつた。

秀吉が九州征伐を終へて博多へ來たとき、從管長コエリヨは山口からやつて來て謁見して戰捷祝賀の辭を述べた。秀吉は大變喜んで、その答禮にわざわざコエリヨを船中に訪問して、益〻切支丹を保護することを約束した。これが陰曆六月十九日夜間の出來事であつた。その深夜追放令がでたのであるから青天霹靂で、秀吉自身も晝のうちは切支丹追放など夢想もしなかつたに相違ない。

その夜、秀吉は酒宴を催して大いに泥醉してゐたさうだ。侍臣兼侍從の施藥院全宗が御相手を承つてゐたが、醉つ拂つた秀吉に切支丹を總訴して焚きつけた。秀吉もその氣になつて忽ち切支丹教師追放といふことになり、追放令は酒宴の席で書き上げられて發令されたといふことである。

尤も一夜の氣まぐれにせよ秀吉が急にその氣になるためには何か理由がある筈で、丁度その頃平戸に來てゐた二艘のポルトガル商船を博多へ廻航させようとして布教長コエリヨに命じたところ、コエリヨは航路危險と海峽狹隘を理由に拒絶した。これは多分この日の靈コエリヨを船中に訪問したときの話であらう。秀吉は表面了解した風をみせたが、内心不快を禁じ得なかつたといふ話もあり、有馬の美女を側女にしようとしたが、いづれも切支丹で側女になる者がなかつたので、美女狩出しの役目を引受けた施藥院全宗が腹を立て、切支丹を奉じる者は

小娘まで殿下の命令をきかないと言つて焚きつけたのだといふ話もある。

天下統一を誇つてゐた秀吉は、命令が思ひ通りに行はれない時には忽ち威嚴を傷けられたやうに考へて癇癪を起し、思ひをかけた美女が手にはいらぬ腹癒せには千利久を殺し、蒲生秀行の會津百萬石を沒收した。有馬の小娘ひとりのことでも、醉餘の癇癪にまかせて、切支丹教師追放を思ひ立つてしまふぐらゐ、有り得ない話ではなかつた。

當時切支丹の勢力は天下に及びさうな形勢で、さういふ勢力に對する天下征服者の漠然たる反感不安もひそかに育つてゐたであらう。小さな癇癪から一時に爆發、一夜のうちに堂々たる追放令が出來上つてしまつた。

追放令と同時に、明石領主ジュスト高山右近に向けて、棄教命令の使者が立つた。小西、大友、黒田、蒲生有馬、大村など切支丹大名は澤山あつたが、彼等には沙汰がなく、唯ジュスト右近一人にのみ棄教命令が發せられたといふのは、ジュスト高山は領内の佛寺を毀し、佛僧を追放、家臣に改宗を命じる等極端な狂信ぶりであつたから、佛僧側の反感が特に强烈の爲であつた。棄教命令の文書には、唯一の天父を信じる者が異端の君主に忠義をつくす筈がないといふ眦々ツ子めいた理窟が書いてあつたさうだ。

ジュスト右近は棄教を拒絶、浪人した。

一方切支丹教師の方は追放令に服したふりをして有馬領に隱れ、法服をぬいで布教に從事、秀吉の癇癪の和らぐ時を待つこととしたが、折からアゴスチノ小西行長が肥後、天草の領主となつたので、彼等に保護を加へることができた。

醉餘の氣まぐれから發令された追放令であるから、徹底して行はれなかつたが、秀吉も亦固執せず、一々追究しなかつた。

切支丹の勢力には影響少く、却つて教師が追放されるとの噂に細川ガラシヤは急いで洗禮を受けたし、信長の次子北畠信雄やその叔父織田有樂齋など有力な大名も洗禮を受け、筑前山門の城主田中吉政も洗禮を受けてパルトロメヨと名乘り、家臣八百三十人もつづいて信者となつた。秀吉の弟大和大納言秀長や京都の所司代前田玄以は信者ではなかつたけれども、切支丹に同情して保護を加へた。

表面布教に從事することはできなかつたが、ロドリゲスやオルガンチノはこの最中にも通辭といふ名目で大坂

城に出入を許され、他日を期して秀吉の怒りを和らげることに力めて、朝鮮遠征軍には從軍教師を送ることもできた。

この時まで來朝の教師達はすべてゼスス會に屬してゐた。日本の傳道を統制するため、日本に於ける傳道はゼスス會に限るといふグレゴリヨ十三世の令書が發せられてゐたのであつた。したがつて、マニラに勢力をもつフランシスコ會、ドミニコ會、オグスチノ會は日本傳道を欲してゐたが、志をとげることが出來なかつた。

日本の教師追放令がマニラに傳はり、日本教會全滅といふ大袈裟な誤報となつて飛んできた。かねて日本傳道の機會をねらつてゐたフランシスカン達にとつて、ゼスス會全滅の誤報は、教皇の令書を無視して日本傳道に赴く絶好の口實であつた。

折からマニラのイスパニヤ商人達は、日本に於けるポルトガル商人の勢力を驅逐して貿易を獨占したいと思つてゐたので、ポルトガルと關係密接なゼスス會凋落の報に好機到來と見て、自國の宗派によつて日本教會の再興をはかり、貿易の便宜を得ようといふ魂膽をもつに至つた。

さういふ氣運のあるところへ、秀吉の使節と自稱してマニラに現はれた野心兒原田孫七郎が日比通商と教師派遣を說いたから、三者の魂膽一致して、フランシスコ會の神父ペトロ・バプチスタ一行の輕卒極まる日本渡來となつた。一五九三年のことであつた。

日本に上陸してみれば、教會全滅は全然誤報で、ゼスス會の教師達は秀吉の怒りを避けて法服を脫ぎ表向きは布教に從事しないふりをしてゐたが、教會の組織は微動もせず、信者にも變動なく、隱然たる盛運を持續してゐる。

ゼスス會への對立意識に盲いてしまつたフランシスカン一行は、日本の事情に通じたゼスス會と連絡をとることも爲さず、ひたすら關白の癇癪を避けて隱忍自重のゼスス會を尻目に、追放令下の國土たることを無視して、公然布教に從事しはじめた。

大坂に「プレムの家」といふ僧院をたて、長崎にサン・ラザロの寺をつくり、京都にはボルチユンクラ寺院をたててマニラから豐富な資金がくるにまかせて華々しく布教につとめ、又、癩病院をもうけて、治療の奇蹟を宣傳した。

この傲慢な布教ぶりは癇癪もちの太閤を刺戟するに十

分で、折悪しく突發したサン・ヘリペ號事件をきつかけに、切支丹の一大悲運は到來した。

一五九六年、土佐の浦戸にイスパニヤ商船サン・ヘリペ號が坐礁、五李行の一人增田長盛が出張して、法規によつて貨物を沒收しようとしたところが、船長デ・ランダは憤慨して、海圖を持出してきてフイリツピン、東印度、アメリカ諸州等イスパニヤ領の廣大なことを示したあげく、イスパニヤを侮辱する時は忽ち日本にも亂がくるであらうと威嚇した。

この報告に秀吉の激怒爆發、切支丹は國土を奪ふ手段であると斷じて、切支丹教師逮捕令を發令、石田三成に誅戮を命じた。一五九六年十二月九日であつた。

教師達は殉教の覺悟をかためて逮捕を待ち、諸國の信者は陸續京都へ集つて來た。ジユスト高山は死を覺悟して自首。京都所司代前田玄以の長子左近はその弟從弟と共に八名の近臣を伴つて篠山から上洛、師父と共に殉教を覺悟。内藤如安も死を決意し、細川ガラシヤは就刑の衣裳をつくつて命の下る日を待つた。

逃辯の役で大坂城に出入してゐたロドリゲスの奔走で石田三成を動かすことができ、その轡族によつて、切支丹全體の問題からイスパニヤ人を主とする逮捕令に變更。マニラから來た教師のみを死刑と決定。

ペトロ・バプチスタ神父、御昇天のマルチン神父等フランシスカン六名、ほかに日本人信徒パウロ三木をはじめとして十八名、合せて二十四名逮捕。十二歳の少年ルドビコ、十三歳のアントニヨ、十四歳のトマス等も加はつてゐた。

彼等は京都で耳を截りそがれ、京、大坂、堺の街を引廻された上、長崎へ護送。この途中、京都の大工で洗禮名をペトロとよぶ二名の者が護送の一行と共に殉教を志願、合計二十六名となり、一五九七年二月五日、長崎立山の海にひらかれた丘の上でクルスにかけられて突殺された。

ペトロ・バプチスタは讃歌を唱へ、槍の穂先が腋下に突き刺さる時、ゼスス・マリヤと叫び、少年アントニヨは聖母讃美歌を唱へ、槍を受けて後に、ゼスス・マリヤと叫んだ。パウロ三木は槍を受けるまで得意の熱辯で說教し、少年ルドビコは槍が腋下に突込れたとき天國々々と叫んだが、暫く兩手のみピク〳〵動いてのちに絶息。マルチン神父は詩篇を唱へ終つて、主よ我魂を御手に委せ奉ると云ふとき脇腹を突かれたが、槍の穂先が折れて腹中に殘つたので、刑吏はクルスへ登つて行つて槍を引

抜いて降りてきて、もう一度突き直して殺すことができた。

一五九八年九月十八日、秀吉永眠。

家康は貿易を望んでゐたので、切支丹に壓迫を示さなかつたが、秀吉の彈壓をきつかけにして、地方の諸侯に部分的な迫害が行はれ、殉教者が現はれはじめた。

加藤清正は領内の切支丹に改宗を命じて、法華經頂戴の誓をなさしめ、轡宗を拒絶したヨハネ南五郎左衛門とシモン竹田五兵衛は斬首。ヨハネの母ヨハンナ、妻マグダレナ、養子ルイス（七歳）、シモンの妻イネスは磔にかけられて殉教した。

マグダレナは第一の突きが外れて頭巾が落ち、兩眼を覆うてしまつたので、その時までキリシトの御名を呼んでゐたが、このとき、天が見えませぬ、と言つた。イネスの眼番が來たとき、マグダレナの殉教に感動した刑吏はイネスを十字架にかけることを拒絶したので、代りの者が現れてこれを上げたが、彼等は突き方が下手だつたので數回とも急所を外れ頭巾は用捨なく眼に落ちかかつて、イネスは息をひきとるまで天を仰ぐことができなかつた。この磔を執行した市川治兵衛は感動して、切支丹に改宗した。

刑場をとりまいた信者達は夕暮れ役人の制止もきかず刑場へなだれこんで、布切や紙や自分の遺物に殉教者の血をふくませて持歸り、翌日は血の滲んだ砂の最後の一粒まで持去つた。遺骸は解き放すことを許されなかつたので、くづれ落ちるにつれて集められ、長崎のコレヂヨの祭壇の下へ安置されたが、ヨハネとシモンの首だけは手に入れることができなかつた。

つづいて肥後の切支丹の柱石だつた三人の慘悲役が、四年間の責苦の後に斬首され（一六〇九年）、十二のトマスと六つのペトロが、今殺された父親の血溜の上で斬首されたが、六つのペトロが怯えも見せずに血海の中に跪いて小さな首をさしのべたので、三人の刑吏は斬ることを拒み、居合せた非人が斬首の役を引受けてペトロの首に三擊を加へたのちに殺すことができた。

清正の命によつて切支丹の逮捕處刑を司り、最も殘酷な迫害を辭さなかつた八代の奉行角左衛門は、處刑を終へて給を返しに來た役人に、自分は今日からこの槍をもつ資格がないやうな氣がすると言つてゐたが、やがて、切支丹にはだらなかつたが、手にかけた殉教者達を讃美し、その行蹟を世に傳へた。

毛利領では、その重臣、藝州三入の城主メルキオル熊谷豐前守が一族臣下百餘名と共に殉教。同じく山口で神父の代理をつとめてゐた切支丹の中心人物、盲人の琵琶法師ダミヤンが殉教した。

切支丹の熱心な信者でその領土にコレジヨやセミナリヨや多くの神父を保護してゐたドン・ヨハネ有馬晴信は、政治上の失敗から息子のドン・ミカエル直純に訴人されて斬首され、ドン・ミカエルは棄教して最も慘忍な迫害をはじめ、信者の重立つ人々を追放し、ミカエル伊東、マシヤス小市、レオ北喜左衞門等は斬首され、レオは上意打によつて突然首を刎ねられたが、切支丹の正しい死に方をするために、斬られてのちに腰の刀を拔きとつて遠くへ投げすてて、ことときれた。薩摩にも迫害が起つて、レオ七右衞門は片手にロザリオを片手に聖母の油繪を捧げて首を刎ねられて殉教した。

家康も漸次迫害を見せはじめて、先づ直參の切支丹を追放し（一六一二年）大奥に仕へてゐたジユリヤおたあを島流しにしたが、外國教師の大追放を行ひ、切支丹を國禁するに至つたのは一六一四年のことであつた。

家康が切支丹を默認したのは專ら貿易のためであつたが、一六〇〇年、オランダ船エラスムス號が難破狀態で豐後に到着、その水先案内をつとめてゐたウヰリアム・アダムスは德川家に召抱へられて、家康のために船を造り、數學の初步を敎へ、それまで日本に來なかつたオランダ、イギリスの商船を日本に引きつけるもとをなした。

オランダとイギリスは新敎を率じロマ敎會から分離して、カトリックとは仇敵の間柄であり、中にもオランダはイスパニヤ王なる皇帝の領土から脫したもので、イスパニヤの反逆者であつた。

オランダの東印度會社設立は一六〇二年のことで、ポルトガル、イスパニヤの勢力を驅逐して東洋貿易制覇の野心に燃えてゐたから、その仇敵たる國々を陷れるためには、卑劣な手段も擇ばなかつた。

彼等は日本の爲政者達が切支丹を疑惑視するのを利用して、中傷密告につとめ、「オランダ人御忠節」といふ日本語を生んだ。

オランダが正式に日本と通商を開始したのは一六〇九年であつた。

同じ年、前フイリッピン總督ドン・ロドリゴ・デ・ビベロ・イ・ベラスコは新イスパニヤ（メキシコ）へ赴くためにマニラを出帆したが、難破して日本に漂着、家康

の手厚いもてなしを受けた。

ビベロは駿府に於て家康に謁見したが、家康は二段から成る臺の上に坐り、その四步前に金張の衝立があつて、ビベロはその陰に坐つた。家康は六十ぐらゐで、中背でふとつてゐた。顏の色はそれ以前に謁見した秀忠に比べると餘程褐色が薄く、白味を帶びて、どことなく情味のある顏付に見えた。

偶〻謁見の途中に或る格式の高い大名が這入つてきたが、この大名は百步手前で平伏して、數分間面を疊に伏せ、二萬デユカットの金銀と絹を獻上して引下るのを目擊した。

この日、ビベロは家康に次の要求の覺え書を提出した。

一、帝國に在住する各修道會の司祭に對する公式の保護、並びにその駐在所及び天主堂を自由に使用すべき件。

二、皇帝とイスパニヤ王間に於ける同盟承認の件。

三、該同盟の證として、イスパニヤ人の仇敵にして最惡の海賊たるオランダ人追放の件。

家康には、國際間の重要な交渉に宗敎のやうな下らぬことを固執するビベロの氣持が分らなかつた。

當時新イスパニヤの坑夫は熟練をもつて聞えてをり、日本の坑夫は取り得べきものの半分も取り得ないといふので、家康は新イスパニヤの坑夫五十名の送付方をビベロに依賴したが、ビベロは之に對して、重ねて天主堂の自由使用と聖務執行の許可を條件とし、又、最惡の海賊たるオランダ人追放の請願を再び作製して差出した。

家康はこの請願に應じなかつた。

一六一一年、新イスパニヤの大使ドン・ヌーニヨ・デ・ソトヌヨールがフランシスコ會のソテロを伴つて來朝、日本の海邊測量の許可を受けた。

御忠節のオランダ人はこれを知つて勇みたち、新イスパニヤにせよルソンにせよイスパニヤ人が測量した土地は、いづれもやがてイスパニヤの領土となつたと說きふせ、日本の海邊を測量したイスパニヤ及びその同腹たるポルトガルは切支丹を利用して國土を奪ふものであることを家康に信じさせた。

家康はオランダとの通商開始後、切支丹を彈壓しても貿易は可能であるとの確信をもつに至つたので、切支丹は國土を奪ふ手段であるとの口實を得て禁敎を決意、一六一四年一月二十八日、切支丹國禁、外國敎師追放を發令。

大久保相模守は命を受けて上洛、南蠻寺を燒き毀し、

手當り次第に信徒を縛して、宗門をころべと命じ、之を拒む者は米俵に入れて、役人が街から街を押しころがして、ころべ〳〵と囃しながら練りまはつた。女は遊女屋に預け、裸體でさらすことをもつて棄教を强要、内藤ジュリヤは侍女と共に容貌をきづつけ髪を斬り落した。

外國教師の全部と日本人信徒の中の重立つ人々四百餘名は天川とマニラへ追放されることとなり、續々長崎へ送られてきたが、船の準備と順風の都合で、出帆は秋まで延期された。

長崎の感情は激發し、日と共に亢奮の坩堝に落込み、信徒達はマルチリヨの覺悟をかため、これに處する心得を胸にたたみ、日夜に會合をひらいた。

陽春四月、フランシスコ會はその布教長チチヤンが先導となつて大說教をなし、先づ癩病患者の足を洗ひ、上衣をぬいで自分をクルスに縛らせてキリシトの受難になぞらへ、この十字架を先頭に擔いで、信者達はヂシビリナで身體を打ちながら、受難の覺悟を示して大行列を開始した。

ドミニコ會は之につづいてペンテコステの月曜に殉教覺悟の示威行列。その翌日はアゴスチノ會が長崎全市を練り歩き、最も自虐してゐたゼスス會も劣りかねて示威行列。かくて日毎に思ひ思ひの行列が街から街を練り歩き、叫び、祈り、行き違ひ、或ひは合して、うねり流れた。

十一月七、八兩日、數艘の船に分乘して、教師信徒四百餘名天川とマニラへ追放。尙少數の教師は潛伏して日本に殘つた。

翌年三月、七十一名の身分ある信徒が津輕へ追放された。

ここに切支丹は全く禁令され、これより約三十年、切支丹の最後の一人に至るまで徹底的な探索迫害がくりひらかれ、海外からは之に應じて死を覺悟して潛入する神父達の執拗極まる情熱と、之を迎へて殲滅殺戮最後の一滴の血潮まで飽くことを知らぬ情熱と、遊ぶ子供の情緒に似た單調さで、同じ致命をくりかへす。

一六一五年（追放の翌年）イタリヤ人の伴天連アダミ、ポルトガル人伴天連コウロス、イタリヤ人伴天連ソラ、その隨員日本人入滿ガスパル定松、ポルトガル人伴天連パセオ、日本人入滿シモン・エンボ、ポルトガル人伴天連コスタ、その隨員日本人入滿山本デオニソ、ポルトガル人パルレト、日本人ニコラス・スクナガ・クイアン、いづれも天川へいつたん追放されたのち、引返して

日本に潛入。

アダミは潛入後十九年間潛伏布教、一六三三年長崎で穴つるし。コウロスは潛入後二十年潛伏布教、擬査に逼はれて田舍小屋で行倒れ。パセオは一六二六年長崎で火あぶり。ソラとガスパル定松は肥前肥後に潛伏布教、一六二六年島原で捕はれて長崎で火あぶり。シモン・エンボは一六二三年江戸芝で火あぶり。コスタと山本デオニソは中國に潛伏布教、一六三三年周防で捕はれて、コスタは長崎で穴つるし、山本は小倉で火あぶり。パルレトは一六二〇年江戸附近で衰弱の極行き倒れた。

一六一六年。ポルトガル人伴天連デオゴ・カルバリヨ、日本人伴天連シスト・トクウン潛入。

デオゴは奥羽に潛入布教して蝦夷にまで進んだが、一六二四年仙臺領の下嵐江（オロシエ）鑛山で坑夫信徒六十名と共に捕へられ、仙臺へ送られて、二月十八日の嚴寒、廣瀨川畔へ水溜を掘り杭を打ちこんだ處刑場へ縛りつけられて氷責。

第一日目は三間時後に引上げられて、マテオ次兵衛とジュリアン次右衛門が砂の上へ引上げられてから、絶息した。

二月二十二日、第二回目の氷責。膝までの水の中で、長く立たせ、又、胸までの水の中で坐らせ、二機の姿勢を繰り返させた。役人たちは拷問をうながしたが徒勞であつた。

夕方になつて水に氷が張つてきてから苦痛がまして、レオ今右衛門はひどく苦しみ、最初に息を引きとつた。デオゴは苦しむレオに向つて「東の間ですぞ」と叫びつづけてゐた。

二番目はアントニヨ佐左衛門で、三番目はマチヤス正太夫。神父は彼がまだ生きてゐると思つてゐて聲をかけたが、二度呼んで、絶切れてゐることが分つた。つづいてアンデレヤ二右衛門、マチヤス孫兵衛、マチヤス太郎右衛門が順次に息絶えて、神父はすべての信徒たちが絶切れるのを見とどけた。彼は夜半まで生きてゐた。すべての信徒が死んで後は、動かなかつたし、喋らなかつた。

日本人伴天連シスト・トクウンは長崎で穴つるし。

一六一七年。ペトロ三甫、ミゲル春甫、アントニヨ休意、ゴンザロ扶齋、いづれも天川へ追放されてのち、引返して潛入、一六二〇年捕へられて、いづれも火あぶり。

イスパニヤ人ガルベス、イタリヤ人リカルドもこの年潛入して、いづれも火あぶり。

この年、大追放の際逃れて潛伏、布教に從事してゐた

ペトロとマチヤードの二人が捕へられて斬首された。それから五日目、同じく潜伏して布教中のナバレテとエルナンドの二人は、逃げ隠れて效果の乏しい布教に餘命を消すよりはと、血といのちの布教を決意、公然法服を着て、長崎の入口に小屋をつくつて説教をはじめた。聽衆三千餘人。日は伊木刀で野外に祭壇を設けてミサ聖祭を獻げ、大村に乘込んで、棄教した領主に再び改宗をすすめる書翰を捧げて、捕はれた。

三日後、高島の海邊で斬首。訣別のために群集して叫び泣く信徒達を避けて、役人は舟で三つの島をめぐり、四つ目の高島に上陸。二人の神父は刑吏達に感謝の言葉を述べ、彼等の首を斬る筈の刀を借り受けて押しいただいたのち、各々片手にはロザリオを片手には點火した蠟燭を捧げて、ナバレテは一刀のもとに首を刎ねられ、エルナンドは第一擊で耳の附根まで切られたが、立ち上つて天の方を望まうとして、第三擊で倒れた。

屍體は棺に入れて三十尋の海底に沈められた。信徒達は二ケ月探し無效であつた。六ケ月目に一つの棺のみ浮き上つて海邊へあげられたので、屍體はひそかに本國へ送られた。

この殉教はマニラに傳はり、彼の地の信徒に大きな感動をひきおこした。必要ならば尙多くの致命人を送らうと、七人の神父が潜入を決意。一六一八年、商人に扮して潜入。

オルスツチとジュアンの二人は上陸後直ちに朝鮮人信徒コスモ竹屋の家で捕はれ、五年在牢して、火あぶり。

他の五人は各地に散つて潜伏布教、グチエレスは一六二九年長崎附近で捕へられて穴つるし。デエゴとマルチノは消息不明。アントニヨは一六二七年殉教。

一六一九年。クルスのデエゴ、アンデレのフランシスコ、ビセンテ、ペトロ、バラジヤスの五名潜入。前者四名は一六二二年いづれも火あぶり。バラジヤスは東北地方に潜入、一六三八年、仙臺で捕へられて江戸へ送られ、芝で火あぶり。伴天連火刑の最後となつた。

この年、十月十七日、京都で五十二名の殉教があつた。五十二名は十一臺の大八車に積込まれて刑場へ送られたが、先頭と最後の二つの車が男と子供で、ほかの車は全部女と乳飲兒であつた。大佛殿と向き合つてゐる加茂川べりに火刑の柱が立ち並び、少し離れて杜があつた。

火の手があがると、祈念の聲は煙の中で大きなひとかたまりの歌となつた。テクラの娘カタリナは「お母さん、もう目が見えない」と叫び、母親は小さなルシヤを

胸にしつかと抱いてゐたが、必死に娘の方を向いて「マリヤ樣にお願ひなさい」と叫びつづけた。テクラは餘りしつかと小さなルシヤを抱きしめてゐたので、死後、その胸から幼女の屍體を離すことができなかつた。

又、長崎では、十一月十八日、潜伏教師をかくまつた德庵、レオナルド木村、ポルトガル人ドミニコ・ジョルジュ、朝鮮人コスモ竹屋、ショーウン等が漫火によつて火炙りにされた。レオナルド木村は焔が綱を燒切つたとき、地面へ屈んで燃を掻きあつめて頭にのせて「主を讃め奉る」を歌つた。小舟に乘つた信徒の少年達は二つの唱歌隊に分れ、火の絶えるまで、樂器に合せて聖歌を歌ひ、殉教の最後を見とどけた。

一六二〇年。アゴスチノ會のズニガとフロレスは日本人で信徒の船頭平山常陳の船で潜入。直ちに捕へられて長崎で火あぶり。平山常陳も火あぶり。ほかに連累者十二名は首を斬られた。

一六二一年。天川から兵士に扮して潜入した三人のゼスイトがあり、カストロは肥前島原に潜伏布教して一六二六年島原山中で行倒れ。コンスタンツォは五島で捕へられて一六二二年田平で火あぶり。ポルセスは一六三三年長崎で穴つるし。

ワスケス、カステレド、ミゲル・カルバリヨの三名は交趾商人、マニラ人、ポルトガル兵士に扮して潜入。交趾商人に扮してきたワスケスは東洋的な容貌であつたと見えて、後には日本の武士に扮して牢内に忍び入り、とらはれの信者を慰問。カルバリヨと共に一六二四年火あぶり。カステレドも一六二四年捕はれて火あぶり。

一六二二年。嘗て支倉六右衞門をローマへ伴うた伴天連ソテロは日本人入滿ルイス笹田を隨へて潜入、直ちに捕へられて、二人共に火あぶり。

この年の九月十日に、長崎立山で五十五人の殉教があつた。三十名の日本人信徒が斬首され、次に二十五名の外人及び日本人の聖職者が火刑になつた。

出來るだけ苦痛を長くするために薪は柱から遠ざけられ、時々水をかけて火勢を弱め、又絶望の誘惑に陵されて逃げだすことが出來るやうに繩目がゆるく仕掛けてあつた。それは刑場を取まいた數萬の信徒達に、彼等の信ずる師父等の信仰の足らないことを納得させるためであつた。

カルロ・スピノラ神父が最初に死んだ。丁度一時間後であつた。一度衣服に火がついたので苦痛を長くするために多量の水がかけられた。然し、結果は窒息死で、遺

餓は長衣をつけたまま磔直してゐた。

驚くほどしつかりしてゐたのは日本人神父セバスチヤン木村で、死ぬまでに三時間かかり、腕を十字に組んだまま火を凝視めて遂に瞑目をくづさなかつた。

イヤシント・オファネル神父が木村師以上に長く生きて、眞夜中に、さうして最後に絶命した。丈高く強壯な彼の身體から「ゼスス！　マリヤ！」といふ極めて強いしつかりした叫びが三度發せられて、それが最後の時であつた。

結局、デエゴ柴、ドミニコ丹波といふドミニコ會のイルマン二人だけが火刑の苦痛に堪へかねて、繩目を外して、飛出してきて斬首の方を志願した。刑吏達は容赦もなく寄つてたかつて二人をつかまへ、火焔の中へ投げ入れて、上から鉤で抑へつけて、殺してしまつた。

信徒達は砂時計を持ちだして、轎柱者達の絶息を祈りつつ凝視めてゐたのであつた。

この年は、この外にも、長崎附近だけで百數十名の殉教があつた。

一六二三年。前年の大殉教はマニラの神父達を刺戟して、その血をキリシトに捧げるために、更に十名の教師が決意をかためて潜入した。奉行は直ちに嗅ぎつけて捜査したが一人も捕へることが出來ず、彼等は諸方に分散潜伏。數年或ひは十數年布教の後捕へられて、アゴスチノ會のフランシスコは火あぶり。カルバリヨ火あぶり。フランシスコ會のフランシスコとラウレルも火あぶり。ゴメスは江戸で穴つるし。カブリエルは一六三二年捕へられて殺され方は不明。ルカスは長崎で穴つるし。エルキシヤは同じく長崎で穴つるし。ベルトランは一六二六年癩病小屋に潜伏中逮捕。その宿主でマルタといふ癩病女は神父の捕はれたのを見て自分も共に捕はれて處刑されることを願つたが、許されず、マルタは天に向つて、自分をパアデレ樣より離し給ふなと叫びつつ神父に縋りつかうとしたが手先はなく、之を必死に追ひ縋つたが足先はなかつた。ラウダアト・ドウヌム、その他日本語のオラショを唱へ、パアデレ樣と離し給ふなと叫び追ひ、離れ去る氣配がないので、ベルトラン神父は火あぶり。マルタほか二人の癩病者は打首。

この年、江戸で原主水はじめ五十名、芝で火あぶり。つづいて、その妻子二十六名、同處で火あぶり。

一六二九年。日本人の伴天連が四人、故國へ潜入。トメ六左衛門は一六三三年長崎附近で行倒れ。ミゲル益田は江戸で穴つるし。ペトロ・カツスイも同じく江戸で穴

つるし。四人目のトメイ次兵衛は金鍔次兵衛（又は次太夫とも云ふ）の名によつて當時天下を聳動させた人物で、神出鬼沒を極め、切支丹伴天連の妖術使ひと信じられて、九州諸大名の軍勢數萬人を翻弄した。

トメイ次兵衛は大村の生れ、父レオ落合幸右衛門はつとに殉教し、彼は有馬のセミナリヨで學びラテン語に長じてゐたが、一六二二年大殉教の年、二十四歳でマニラへ渡りアゴスチノ會の教師となつた。潜入後は、長崎奉行竹中采女の馬廻り役に入込んで、自由に役所牢屋に出入することができ、大村に入牢してゐたアゴスチノ會のグチエレス神父と連絡して、給金をさいて給養し、通信を運んだ。一六三二年グチエレス刑死の後はアゴスチノ會の教師が絶えたので、トメイは獨力信徒の世話につとめ、隱れて市内近郷の信者を訪ねて、慰問し、告白をきいた。嗅ぎつけられて露顯したのは一六三三年秋であつた。

露顯、逃亡するや、大村領戸根の鍛冶師が彼を山中にかくまつてゐるといふ密告があり、大村藩では家老大村彦右衛門を指揮官に、同藩の記錄によると、城内番人と諸役人、小路町諸村押への者だけを殘して「家士殘らず諸村の給人、小給、足輕、長柄の者、土民に至るまで悉く相催し、各々頭巾行を定め、手合して警固目附を一組づつ相定めた」といふことで、藩内總動員を行つた。

長崎奉行は佐賀、平戸、島原の三藩から援軍を繰出させ、總勢數萬。長崎から浦上への往還筋から大村灣の西海岸全體の山中到る處に關所を設け、海には見張を出し、海岸線三十里とその山中に監視網を張りめぐらした。寄せ集めの軍勢だから同志打ちの危險があるので合印をつくり、佐賀勢は藁の占繩。平戸勢は大小の鞘に白紙三つ卷、島原勢は左の袖に白紙、大村勢は背三纏に隅取紙をつけた。各勢は列を定めて出歩く刻限をきめ、夕暮になると合圍して押止め、その場所に篝火を焚いて交替で不寝番を置いた。

かういふ騒ぎを三十七日間つづけて、たつた一人のトメイ次兵衛を追ひ廻したが、勞して功なく、この時すでにトメイは江戸へ逐電して、將軍家のお小性組の間を傳道して廻つてゐた。

江戸で布教の結果次第に感化が及んで、信者も多くなり、役人に嗅ぎつけられてきたので、再び長崎へ舞ひ戻り、一六三五年から七年へかけて二年間、又々長崎で大騒動をまきおこした。

トメイは刀の鍔のあたりに金のメダイユかクルスのやうなものを仕込んでゐたらしく、事あるたびにそれを手

にとる習慣であつたのが人々の注意を惹くやうになつて、その金鍔に切支丹妖術の鍵があるといふ風説がとび、金鍔次兵衛といふ名前が生れた。

一六三七年。つひに長崎の戸町番所に近い山の穴の中で捕はれ、十二月六日、穴つるし。

一六三三年。ゼスス會の巡察使ビエイラはじめ十一名潜入。

すでに警戒嚴重を極めて殆んど活動の餘地がなく、ビエイラは大坂で捕はれてのち、長崎へ送られ、幕府の特命によつて更に長崎から江戸へ送られ、將軍に差出す敎理要略を書き殘して、一六三四年、江戸市中引廻しのうへ他の六名と共に穴つるし。

一六三七年。イタリヤ人マルセロ・フランシスコ・マストリリ潜入。

彼は故國イタリヤに於て、血を以て日本潜入を決意。直接將軍に面接して說法の覺悟をかため、數年にわたつて渡來を計畫、イスパニヤ國王の援助を得てゴアに渡り、遂に單獨日本に潜入、薩摩に上陸して日向の沿岸を傳ひ江戸へと志したが、日向の櫛の津で捕へられた。

二百人の警衛づきで長崎へ引立てられ、水責の後、梯子責で失神、三日目に繞鑊。十月十四日刑場へ引きだされたが、途中說法のできないやうに口に詰物をかまされ、頭の右半分を剃つて左半分は赤く彩色し、膝までしかない赤い着物をきせて、肩から罪狀を書いた小旗を流し、鎖でつないで馬に乘せた。穴つるし。四日目にはまだ息があつた。

切支丹禁令以來、神父を入牢せしめれば牢番が感化され、斬首火刑に處すれば刑吏や觀衆が感動して却つて改宗する者がある始末に、この對策が頭痛の種で、死の莊嚴を封じることが、一代の大事となり、一六三三年、穴つるしといふ殺し方が發明された。この發明に二十年かかつたが、効果はあつて、滑稽異樣なもがきぶりは聊かも莊重を感ぜしめず、また一日や二日では死なないので見物人もうんざりして引上げてしまふやうになつた。

マストリリ潜入の年に四名のドミニカンが二名の從者を隨へて琉球に辿りついたが、捕はれて長崎へ送られ、皆殺された。刑の執行が祕密にされて、殺され方は分らない。

この年、天草と島原の間の湯ケ島に切支丹が會合して、次のやうな觸れ狀をつくり、島原天草領内に配布した。

「態と申遣し候。天人天下り成され候て、ゼンチョども

は、デウス樣より火のスイチョ成され候間、何者なりとも切支丹に成り候はば、こなたへ早々御越しあるべく候。村々の庄屋、乙名、早々御越あるべく候。島中此狀御廻し可有之候。ゼンチョ方にても切支丹になり候者、御免なさるべく候。恐惶謹言。

右早々村々へ御廻し成さるべく候由申入り候。天人の御使に遣し申候間、村中の者に御申附成さるべく候。切支丹になり申候者の外は、日本六十六國共に、デウス樣より御定にてインヘルノへ踏込成さるべく候間、其分御心得なさるべく候。天草の内、大矢野に此中御座なされ候四郎殿と申す人も、天人にて御座候。殿元に御座候間其分御心得あるべく候。已上」

天草大矢野に住してゐる小西の舊臣益田甚兵衛の子、四郎時貞といふ十六歲の少年を天人に擡ぎあげて、事を起さうといふ謀主たちの談合であつた。

かういふ陰謀があるところへ、百姓一揆が起つた。

敎會の記錄によれば、島原の領主が暴政を擅にして人民を虐げ、年貢の外にあらゆる名目をつけて重稅を課し、之に應じない者は嚴罰に處し、或ひは妻女を捕へて水責にする習はしであつたが、ここに平右衛門といふ百姓があつて、やつぱり稅の言ひがかりから美人の娘を召捕られ、水責の上、裸體で抗にいましめられて、松明の火で燒かれたから、平右衛門は狂氣の如くなり、日頃の壓制に堪へかねて加勢した村人と共に代官所に亂入して、代官はじめ役人三十餘人を殺したといふことであり、日本側の記錄によれば、有馬村で角藏、三吉といふ二名の者が、切支丹の靈を祀つてゐるところへ役人が踏みこんだところ、亂鬪となり、代官林兵右衛門を殺すに至つたといふ。とにかくこの騷動を口火にして、益田四郎一味の陰謀が合流、島原の亂となつた。

上使板倉内膳正は十數萬を指揮して攻擊したが却つて反擊され、内膳正は銃彈を乳下に受けて戰死。第二回目の上使松平伊豆守が代つて督戰、翌年春、原城を落して平定した。

謀反人三萬七千の軍勢は殲滅せられ、生き殘つた女子供は三日にわたつて全部斬殺された。松平伊豆守の子、輝綱の日記「剛ヘ童女ニ至ルマデ死ヲ喜ビ斬罪ヲ蒙ル。是レ平生人心ノ至ス所ニ非ズ。彼ノ宗門浸々タル所以ナリ」然し、武器をとつて反抗したかどによつて、この數萬の死は殉敎と認められてゐない。

島原の亂の結果は鎖國が施行せられ、切支丹の迫害は又その絕頂をきはめた。かくて全國の切支丹は急速にそ

の終滅に近づいたが、外國教師の潜入は尚つづいた。

一六四二年、巡察使ルビノは日本潜入を天父の使命と確信、計畫遂行に心を碎き、マニラ總督の援助を受けて、同志を二隊に分け、自分は第一隊を指揮して潜入。一行はパアデレ五人に從者三名。支那人に扮して來たが、蹉跎の一角で岩に乘上げて、捕はれた。長崎へ送られて、火責め、水責めの拷問で六ヶ月責めつけられたが、一人も屈する者がなく、奉行もうんざりして、死刑を決し、一六四三年三月十六日、大拷問にかけてのち、マストリリに施したと同樣の異樣な化粧をさせて引廻しの上一同穴つるし。

ルビノは五日目に死んだが、最後に三人生き殘つて、九日目にも呼吸が絶えないので、しびれを切らして、三月二十五日に首を斬つた。

一六四三年。ルビノ第二隊は先發隊を追うて筑前かぢめ大島に上陸。

教師五人に從者五人、合せて十名の一行で、一同さかやきを剃り、和服を着て、日本人に扮して來たが、直ちに怪しまれて捕へられ、長崎へ送られ、更に江戸小石川の切支丹屋敷へ移された。ここで樣々の拷問、誘惑を受けて、全員殘らず背教した。

この潜入は六十餘年後に行はれたヨワン・シローテの例外的な潜入を除いて、日本切支丹史の最後をなした潜入であつたが、この時まで一人の棄教者も出さなかつた潜入教師も、茲に至つて全員殘らずころんでしまつた。

この一行の長、ペトロ・マルケスはころんでのち十五年生きのび、八十歳で永眠。アロンゾは一度ころび、後に立直つて死んだ。アラシスコ・カッサロは切支丹屋敷の獨房へ女と一緒に入れておかれ誘惑に負けてころび、いくばくもなく永眠。ジュセッペ・キヤラは我國でジョセフ・コウロと呼ばれ、ころんで後は死刑囚の妻女であつた者をめとり同時にその死刑囚の名前をもらつて岡本三右衛門と名乘り、宗門改役の御用をつとめ、四十二年後八十四歳で永眠した。小石川無量院に葬られて、戒名は入專淨眞信士、日本人イルマンのビエイラはその本名は不明であるが、棄教して妻を娶り、切支丹屋敷に住んで南甫といふ名で呼ばれてゐたが、一六七八年、七十九歳で永眠。同じく小石川無量院に葬られて、大變立派な戒名を貰ひ、正譽順歸禪定門と云ふ。

從者のひとりに廣東生れの支那人で棄教後壽庵と呼ばれた者があつた。棄教後結婚して生れた娘に躋まであつたが、後に至つて痛悔して、立上らうと焦り、再び切支

丹を奉じる旨の上言を出しかけたのを家族の者が引留めた。一六九一年、八十一歳で永眠。同じく從者で交趾人トナドといふ者、棄教後は二官と呼ばれ、結婚して五十餘年切支丹屋敷に生き延び、最後まで生き殘つて、一七〇〇年、七十八歳で永眠した。日本切支丹は全滅した。

後篇　ヨワン・シローテの殉教

その一　船出

一七〇三年春の初めゼノア港を旅立つ一團の僧侶があつた。

その首長はアシテオキヤの總司教トマス・トウルノンと云ひ、教皇クレメント十一世の特派使節として北京に赴く人であつた。

この一行に加はつて船出した一人に、ジョヴンニ・バッチスタ・シドチとよぶ筋骨逞しい僧侶があつた。この人のみは途中一行に別れて、單身日本に潜入を志してゐるのであつた。

シドチはシシリヤのパレルモに生れ、貴族の子弟であつたが、羅馬に學んで、樞機官フェルラリの知遇を受け、年若くして重要な聖職についた人である。

少年の頃から日本潜入の夢をいだいて、コームで日本の古い書物を見つけ、その時から日本語の獨習を始めた。天正年間宣教師によつて洋風の印刷術が傳へられて天草學林で刊行したが、その中には外人教師の日本語獨習のため和洋兩樣に印刷したもの、又辭書なども有つたのである。

すでに日本の切支丹は亡びてゐた。

外人教師の日本潜入も記錄の上では一六四三年ジョセフ・コウロ一行十名が最後で、その後一六六二年にサッカノといふ神父が二十年苦心の後日本に潜入殉教した筈だといふが、日本の記錄には現はれてゐない。日本内地の切支丹も之と相前後して全く絶滅したのであつた。

昔より今に渡りくる黒船緣がつくれば鱶の餌となる
さんたまりや

昔、長崎にうたはれた小唄であるが、オランダ以外の紅毛船の航通もこれと前後して全く杜絶し、一六四〇年にやつて來たポルトガル公使一行六十餘名すら容赦なく殺されて、爾後偶然暴風に吹流されて漂着した紅毛人といへども悉く處刑すべしといふふれもでた。

シドチがゼノアを船出した一七〇三年といへば、すでに日本が歴史の底へ全く沈み落ちた後であつて、ひとと

ちの血で血をついだ氣狂ひ風ぎの情熱からは遠く離れたもの、全然新たな意志と冷靜な情熱があるべきだつたが、然しひとつの血脈をもとめることも、あながち不可能ではない。

即ちシドチの潜入に先立つ六十餘年、島原の亂の年に、長崎で殉教したマルセロ・フランシスコ・マストリリといふ神父があつた。

この人は日本潜入の神父のうちでは特異の人で、即ちマストリリを除く潜入教師がすべて天川やマニラに於て計畫を立て、潜入後は潜伏の信徒と連絡して潜伏布教を志してきたのに對し、マストリリのみは本國に於て日本潜入を決意し、潜伏布教を問題とせず、直接江戸へ上つて將軍に直談判し、布教の公許をもとめるために潜入した。

當時の日本の國情では亂暴極まる計畫で、將軍に會はないうちに命を落してしまふのが當然すぎる筋書だつたが、拷問、刑死は覺悟のことで、ただ日本開教者フランシスコ・サビエルの遺志を繼ぐことだけが一途の念願であつた。

マストリリが日本潜入を志すに至つたのは、瀕死の病中にサビエルの幻覺をみて日本潜入を約束し、忽然平癒したからであつた。

即ち、一六三三年のこと、ナポリの府知事が聖母無原始胎讃禮を執行しようとしてマストリリに祭式の補助を頼んだ。そこで彼は工人に命じて祭壇の裝飾を指圖してゐたが、壁工の一人が重さ二斤の鐵槌を落して、下にゐたマストリリの右額部に命中。マストリリはその場に嘔吐、昏倒し、早速收容手當をしたが、二日目に邪熱を發し、眼は一所を注視して動かなくなり、手足の筋は硬直、するし、胃は食餌を受けつけなくなり、精神錯亂を見るに至つて、醫者も全く全快を斷念してしまつた。

然るにマストリリはこの危篤の病床でフランシスコ・サビエルの幻覺を見つづけてゐた。サビエルは夜毒となく白衣を纏うて現はれてきて、看護婦問し、聖體受領も終つて愈々死を待つばかりといふときに、光彩を放ちながら病床に立ち現はれて、日本に渡つて天主のためにその生血を灑ぐ誓を立てるなら病氣は平癒するであらうと言つた。マストリリは命を捨てて教法を護ることを誓ひ、國土、肉身、その他一切の日本潜入を妨げるところの愛惜物を要絶する新誓を立てた。

このときマストリリは突如として危篤の病床から平癒した。いきなり起上つて、腹がへつたから肉を食はせてくれと言つた。看護の連中は驚いたが、瀕死の病人の言

ふことだし、長いこと流動物も摂れない狀態にゐたのだから、どうせ死ぬなら望みをかなへさせようといふわけで、肉を細切にして與へた。と、マストリリは人々の心配を嗤ひながら、忽ちムシヤムシヤと平らげてみせた。一日のうちに平癒してしまつたのである。

これが彼の一生の最初の奇蹟で、これから以後といふものは長崎で命を斷つまで雲に到る處で奇蹟を起した。印度で、日本で、又船中で、彼の現はれる所奇蹟の起らざるなしといふ有樣で、噴きだしたくなるやうなのがあり、信用しかねるものの方が多いのだが、かういふ數々の奇蹟が疑はれもせず語り傳へられるに至つたといふのも、サビエルの幻を見て危篤の病床から忽然平癒したといふのが動かしがたい事實であつて、まのあたり人々を吃驚させたからではないかと思はれる。

平癒後も折にふれてサビエルの幻を見た。遂にサビエルのフランシスコを自分に冠して、マルセロ・フランシスコと名乘り、一途に日本潜入を念願して日夜焦燥のうち、これも例の忽然平癒一件で座臥をぬかれ尊敬の念を起したイスパニヤ皇帝皇后の援助を受けることとなり、然る日本潜入を遂行。一足旅路にかかるより忽ち奇蹟を起しはじめる。

先づ彼がゴアへ一足かけるより、メリヤポルトのサン・トマスの祠堂の十字架から汗のやうに鮮血が流れはじめて二十四時間つづき、おまけに下の方から上へと流れて數枚のハンケチでも拭ききれない程であつた。又、折しもゴアのキリシトの像が突然パツチリと眼をひらき日本の方角を睨みはじめて、彼の行先を示してゐるやうであつた。

ゴアにはサビエルの墓があつた。

マストリリは日本潜入を決意以來、印度を通過する時には何とかしてサビエルの遺體を一見し、手を觸れてみたいと牢固たる宿願をかけてゐた。とはいへ聖者の柩をあばくといふ事が出來るものではないから、そこで本國にゐるうちから用意周到に企んで、イスパニヤ皇后をたきつけてサビエルの墓へ寄進の品々をことづかり、その品品の中に特にサビエルの遺體を蔽ふ一襲の外套を用意してもらつた。おまけに、聖師の遺體にこの外套を着更へさせるに當つては、マストリリ自らの手によつて之を執行すべしといふ命令書を貰つたのである。その驚情や怖るべく、その企らみも亦驚嘆すべしといふほかはない。

印度の司教もこの命令書があつては仕方がない。立會の司祭法弟を從へて、司教自ら深夜ひそかに柩をひらい

た。そこでマストリリが進みでて遺體の外套を着更へさせたのであつたが、遺體の頸にまかれた白布を解いてみると、これに染みとんだ鮮血がまだ乾いてゐなかつたといふ話なのである。

マストリリは自分の胸を刺した血で、わが生血を日本の地にそそぐであらうといふ誓言を紙片に書いた。柩を閉ぢるに當つて、この誓紙を遺體の指間にはさませたが、さて、終つてのち宿所へ戻つて、遺體の狀態を筆錄しようと試みたが、ただ感涙が溢れるばかりで、どうしても文を成すことができない。仕方がないので、立會の僧に代つて記錄してもらつた。それによると、遺體はなほ溫氣があつて異香馥郁とし、片腕は羅馬へ送られて無く殘つた片腕を胸に當て、面部は細長く色は黑ずみ、頭髮と鬚髯は斑白であつた。雙眼閉ぢず、威あつて猛からざるの顏色也とある。

マニラから日本へ渡る航海では、暴風と海賊船に苦しめられたが、その都度奇蹟が起つて救はれた。これは妖魔の妨げであつたとマストリリ自ら本國へ報告してゐるのであるから、これくらゐ確かな話は先づないやうなものであるが、然し思ふにマストリリは山師ではなかつたのであらう。彼自身はこれらの奇蹟を實際經驗しつづけてゐたのであらうと思はれる。

だいたい日本潛入を決意するに至つた瀕死の大病といふのが、抑頭部の打撲傷から始つたのである。病中精神錯亂したといふことであるし、潛入の決意も忽然たる平癒も共に幻覺の暗示から由來してゐる。忽然平癒したときには、マストリリはすでに日本潛入の觀念に憑かれた精神病者ではなかつたかと疑ふことも出來るのである。

何分にも一途の念願が日本潛入といふ至難の一事で、拷問も覺悟の上、その生血を流しきつて絕息も亦覺悟の上の仕事なのである。目的自體が超人的な大事業であつたから、マストリリの精神異常は見分けがつかず、却つて數々の奇蹟を生み殘した。曾てサビエルが苦しみ奇蹟によつて救はれた航海では、彼も亦同じ妖魔の妨げに遭ひ、又、天主の加護によつて救はれる奇蹟の幻覺を見つづけてゐたのであつた。

一六三七年九月十九日、薩摩の一角に上陸。上陸に當つてアンドレ籠手田といふ信徒と連絡したが、この人はこのために捕はれて刑死した。

マストリリはひとり陸路江戸を指して日向の濱邊を進む途中、林の中で焚火中に捕はれた。

長崎へ送られて馬場三郎左衛門の取調べを受け、水

責、梯子責の拷問を受けて失神、三日目に引出されて今度は燒鏝の拷問、棄教を迫られて屈せず、十月十四日處刑と決し、口中に詰物をして途中說法や祈りのできないやうにし、頭の右半分を剃り、左半分は赤く彩色し、膝までの赤い着物をきせ、肩から罪狀を書いた小旗を流し、鎖でつないで馬に乘せて街を引廻した。處刑は穴つるしで、四日目か五日目ぐらゐに絕息したらしい。

然るにこの殉敎に際しても數々の奇蹟が語り傳へられるに至つた。

先づ日向の濱邊で捕はれるに際しては天地鳴動したといふやうな件から始まつて、長崎の公廷へ引出されるや、彼の頭上に光彩がかかつて消えないので役人共が驚愕したとあり、彼の籠められた牢舍の屋根には夜毎に光明が走り流れ、穴に吊るされるや天人が天降つて額の汗をぬぐつたといふ。穴に吊されて五日目は町の祭禮に當つてゐて罪人の死一等を減じることになつてゐるので、四日目に引出して斬首することになつたが、切れども切れず、刀が折れ、マストリリの祈りが終つてのち彼の勵ましの言葉を受けて刀を振り降したところ一刀のもとに首が落ちたといふ。この時地は震ひ、天は忽ち黑雲を起し、又その屍體を燒いた日は、俄に大風が吹起つたにも拘らず、煙はまつすぐ天へ昇つた。

マストリリの殉敎がマニラや天川へ傳はると共にかういふ傳說が流布した。やがてこの傳說が日本へ逆輸入されて來たから、これを聞いた宗門奉行井上筑後守をはじめ、處刑に當つた役人達カン〳〵に腹を立てた。

マストリリは日本の記錄ではマルセイロとよばれてゐるが、これによると、穴の中で泣きわめいて死んだといふことになつてゐる。どつちが本當だかもとより斷定できないが、この記錄のある文獻の史料價値や事柄の事實性から判斷して、泣きわめいたかどうか、とにかく苦悶して息果てたといふのが多分本當だらうと思ふ。

だいたい穴づるしといふ刑にかかると、堂々たる死に方などは出來ない仕掛けになつてゐた。そのために幕府が三十年もかかつて發明した方法なのである。

マストリリの處刑から六年目に敎師五人從者五人合計十名の潛入がちつた。ジョゼフ・コウロ岡本三右衛門ことジュセッペ・キヤラの一行で、記錄に殘る日本最後の（シドチを除いて）潛入であり、この時までの潛入敎師に一人の棄敎者もなかつたのに、この時ばかりは十人一時に背敎したといふ異例の潛入樣事であつた。

井上筑後守を始め日本の當事者がマストリリの傳說に

どんなに業を煮やし大腹立ててゐたかといふと、ジョゼフ、コウロ一行の案教書約書の中にまで天川に流布したマストリリの傳說を持ちだしてきて「右の通り、天川にて爲申すを實と存じ此方へ渡り承り候へば、右の通にて無之、マルセイロ吊され、穴の中にて泣きわめき苦しみ相果て候由を承り、伴天連も驚き申候」云々といふ一札をとつた。この糾問の條文によると、この一札を入れない限り勘辨まかりならぬといふ決意の程がうかがはれ、「斯樣の誑りにあひ日本に渡り候四人の伴天連同宿共第一のたわけ者、異國にても人に勝れたるたわけ者ゆゑ、此の如くに候儀は日本國御名譽誰か是を論ぜんや。若し是を僞と申し候はば三右衞門を始め入滿壽庵トナト白狀いたさせ申すべく候」とあつて、天川の傳說は間違ひでしたと言はない限り車裂きにも致しかねない思ひつめ方、背を決し双肌ぬいで詰め寄る形相物凄い。入滿壽庵トナトとあるのは潛入神父の從者で、前者は廣東人、後者は交趾支那人であつた。

シドチは日本潛入に當つてマストリリから傳はるといふ十字架を携へてきたといふことで、二人は祖國を同じくし、伊太利亞の地に尙聖やかに語り傳へられるマストリリの英雄的な傳記がやがてシドチの强靱な決意を育てた搖籃の唄の一節であつたかも知れない。

すくなくとも、直接將軍に直談判して布敎の公許をもとめようとの潛入は、開敎者サビエルについでは、マストリリ、シドチの二人があるのみだつた。

シドチが日本潛入の公許を敎皇に願ひでたとき、その師たる人、敎皇だか樞機官だか分らないが、シドチに向つて、日本はつとに切支丹を國禁し、國禁を犯して潛入した敎師達はほぼ百名にも及んだが一人として生きて歸つて來た者がない。今また足下が潛入して、幸にもその使命が果されて布敎の公許を受けることが出來ればいいが、許されず、捕はれの身となる時は、日本の國法によつて裁かれるより仕方がない。國に入つてはその國法に從ふべきもので、斬首をもつて臨まれたら首を刎られて死ぬべきものだし、火炙りに處せられたら焼けて死ぬより仕方がない。いささかもその國法にたがふところが有つてはならないと言渡した。

果してそのやうに言渡した人があつたかどうかは分らないが、シドチは新井白石の取調べにさう答へてゐるのである。もとより骨肉形骸の如きはどうならうと國法に委せるだけのことであるとその時も師たる人に答へて來たと述べ、日本高官の取調べを受けて傳情のすべてをもつて訴へて尙且切支丹の公許を受けることができないなら萬やむを得ない話で、自分は本國をでる時から生きて歸る心だけは毛頭持合せがなかつたと言つてゐる。渡航の船すらも求めがたい國へでかけて歸るべき船を寡定することはともより出來得べきことではない。

彼の唯やむべからざる念願は、とにかく日本へ潛入して、全滅した切支丹を再興すべくその爲し得る爲ての努力だけはしてみたいといふことであつた。

渡航の機會をうかがふうち、アンテオキヤの總司敎トマス・トウルノンが敎皇の特派使節として北京に赴くことを知り、彼も亦日本潛入を敎皇に願ひでて、同行を許され、一七〇三年ゼノアを出帆。シドチは三十五歳であつた。

シドチがどのやうな資格で故國をあとにしたか？ 彼も亦敎皇の特派使節であつたかどうか。シドチは白石の取調べに對して、自分とトウルノンは敎皇の同じ使命を受けて、一は日本へ、一は北京へ赴いたものと述べ、敎皇と樞機官の會議に於て、昔チイナも切支丹を禁じてゐたが今は國禁を解いて天子の使が來てゐるし、スイヤムも亦同斷である。ひとりヤアパンニヤのみ國禁すでに年久しいが、先づメッショナリウスを送つて訴へ、次にカルデナアルを公使として遣したら國禁を解くことができるかも知れない、と衆議一決、シドチが選ばれて來たものであると言ふのであつた。

事の眞僞は分りかねるが、審問者の感情に對處して、これが適切な答辯であつたことは領ける。白石は大義名分を尊ぶ人であるから、公の使たる者がなぜ堂々と乘込まないで變裝潛入するやうな卑劣な手段を用ひたかと問ひつめてゐる。これは然し日本の外交史を無視した筋違ひの難問で、日本へくるなら潛入以外に手はない筈だが、然しかういふ詰問の裏を流れる白石の感情に對して、シドチの應對は聰明自在で、變に憐じ虛實をつくして答辯した。自分の利益のためではなく、自分の托された大いなる使命の達成のためであつた。

十一月六日、ポンジシエリ着。

一行はその地に於ける使命を果して、翌年七月二十一日呂宋へ向けて出帆。九月マニラに上陸した。

トウルノン總司敎の一行はここで新たな便船を得て北京へ向つて出發したが、シドチはひとり別れてマニラにとどまり、さて愈〻日本潛入の機會をうかがふことになつた。

そのころマニラには三千餘人の日本人が住んでゐた。

彼等はひとつの部落をつくり、本國の俗をそのまま傳へて士族は双刀を腰にさし、其他の者も一刀を帶びないといふ者がなかつた。そのかみ追放を受けた切支丹の子孫もあたが、三年前漂流してマニラへ着いたといふ十四名の漁師がゐて、シドチは特にこの人々から日本の新たな情勢をきき、また日本語を學んだ。

いくら待つてみたところで日本通ひの便船があるべき道理はなかつたし、金にあかして頼んでみても命を的の航海を引受けるといふ者もなかつた。遙々マニラまで辿りつきながら、一歩のところで思ふにまかせぬ悲運に日夜焦燥したが、徒らに落膽すべきではないので、彼は先づ聖ヨハネ院と名づける病院をたてて哀れな病者を收容し、日々自分で世話をみた。

餘暇には四方を駈け廻つて孤兒や寄邊ない老人や貧民を訪ひ慰め、食物を惠み、福音を說き聽かせたりやがて富裕な同情者を得て、病院の傍に聖クレメント學院を設立、教育のためにも働いた。

四年の歲月が流れた。

比律賓總督ドミンゴ・ザルバルブル・ルシェベルリはシドチの爲人を知つていたく敬服の念を懷いたが、その金錢の宿志をきいて深く憐れみ、一切の費用を負擔して一艘の大船を艤裝し、彼を日本へ送りとどける決意をかためた。

同時に、ミゲル・デ・エロリアガ提督は決死の航海を指揮するために、進んで船長の職務に當ることを申出た。

一七〇八年八月二十三日、聖三位號に乘込み、マニラ出帆。

途中三回の暴風にあひ、難航をつづけて、夢寐にも忘れかねた日本の島影を初めて認めることが出來たのは十三日のことであつた。種ケ島であつたらうと云はれてゐる。

その二　上陸

十月十日、聖三位號は屋久島海上にさしかかつた。風向をはかつて陸地に沿ひ一里ばかり沖合を進んでゐると、一隻の小舟を見出した。

双眼鏡で眺めると七名の漁夫が乘組んでゐる。彼等は異樣の大船を見て、陸地を指して急ぎ歸らうとする樣子である。

シドチは之を見て提督に向ひ、あの小舟に乘移らせて貰ひたいと願ひてた。得體の知れない漁船に托してこのままシドチを日本に送つていいかどうか、提督は躊躇し

たが、シドチのやみがたい切願に抗しかね、ともかくボートを降して、數名の水夫と、通譯として一名の日本人を乘込ませた。この日本人はマニラに漂流した漁夫の一人で、今この船の船員であつた。

シドチのボートは帆をはつて漁舟を追うたが、漁舟の方でも帆をあげて逃げはじめた。ボートの方では更に水夫がオールを下して力漕したので、忽ち差をつめ、十間程の距離をおいて停船を命じた。

そこで通譯の日本人に命じて先づ水が欲しいといふことを傳へさせたが、彼は何事か話し合ふうち俄に顏色蒼ざめて恐怖の色を現はし、頻りに本船へ漕ぎ戻りたがる樣子である。

そのわけを問ふと、國の掟が嚴重で異國人に一杯の水を與へてすら刑死をまぬかれぬ定めであるから、たつて水が欲しいなら長崎へ往けといふ返事であつたと言ふ。

それにしては顏色の變りやうが仰山であるし、恐怖の色がただ事でない。何か切支丹に關することを口走るか聞かされるかしたのではあるまいかといふ不安もあり、シドチは諦めかね、更にボートを近づけさせて自分で話しかけてみたが、彼の習つた日本語では話が全く通じない。

ただ彼等の樣子から、深く怪しみ、一途に怖れてゐることのみが分つたから、今は諦めて空しく本船へ漕ぎ戻るほかに仕方がなかつた。

既にかうして日本人に顏を見せてしまつた以上、風聞が傳はり、監視が嚴しくなるに相違ない。一刻遲れても時機を失ふ恐れがあり、躊躇すべき場合ではなかつたから、その夜のうちに急ぎ上陸を決行することにきめた。

そのかみの神父達の潛入は、當時は日本に潛伏の切支丹が澤山ゐて、それらの信徒と連絡して上陸するのが例であつた。伊太利亞で日本潛入の決意をかためでやつて來たマストリリですら、天川で日本の信徒と連絡して上陸した。が、切支丹全滅の今となつては連絡すべき何者もなく、樣子も地理も皆目わからぬ。

シドチはマニラで日本の武士の服裝を一揃もとめて來たが、これとて確たるよりどころが有るわけではない。昔の記錄によると、この變裝で潛入するのが先づ定石で、マストリリもさうであつたが、そこでシドチも腰に大小をさしこみ（日本の記錄によると大刀ばかりの樣子だが）さかやきを剃り、髭を落し、日本風に結髮した。

荷物は袋の中へひとまとめに詰めこんで、先づマストリリから傳はつたといふクルス一個、悲しみの聖母の額

一面、メダイユ四十二、聖油の小箱や香具その他聖祭用の器具一式、ディシビリナ、法衣二枚、書籍十六册、オラショ類を書いた紙片二十四枚等々、それに提督が餞別として贈つた黄金の延金百八十一枚と粒百六十、ほかにマニラで手に入れた日本の金貨若干と少量の食物であつた。

夜陰に乘じて船が陸地に近づく。どこといふことは分らぬ。ボートが下される。

ミゲル提督自らシドチの手をとつてボートに乘移つた。生命をなげうち絶東の異域へ單身布教に赴いて行く偉僧の上陸をわが目でしかと見屆けるためであつた。そのほかに水夫、水先案内、都合八名の者にまもられて、シドチのボートは暗闇へ消えた。

漕ぎ寄せた所は高いきりぎしに圍まれた小さな入江で、岩を噛んで打返すうねりが高くて、辛くもボートを岸へ乘りつけることが出來た時には餘程時間が過ぎてゐた。

遂にシドチは日本の土を踏みしめた。

はらからを棄て、ふるさとの山河をすてて一念踏む日を焦り祈つた日本の土であつた。やがて彼の墓たるべき土でもあつた。鐵石のはらわたからすら涙が溢れた。シドチは天を仰いで天父に謝し、感極まつて地に伏して、愛する日本の土に接吻した。

何ものの棲む所とも分りかね、ミゲル提督は心もとなく、別れかねて、シドチをいたはり、いくつかの小山を越え流れを渉つて、やや廣い谷間へでることが出來たときには、あたりが白みかけてきた。詮方なく「天主よ御身のために盡したるミゲル提督ならびに部下の人々を悉なく故國へ戻らせたまへ」といふシドチの祈りをあとにして、本船へ戻つた。

大隅の國囎唹郡の海上壓久島に出漁して、その島の栗生村といふ所に泊つてゐた阿波の國久保浦の漁師、船頭市兵衛その他七名の者が、湯泊といふ村の沖合二里ばかりの海上で漁をしてゐると、見なれない大船が現はれ、小舟を下して十名ばかりの異樣の者が乘込み、近づいて來て、水をもとめた。市兵衛はじめ漁師一同ひたすら拒絶して一途に陸地をさして漕ぎ戻つた。寶永五年八月二十八日（一七〇八年十月十日）のことであつた。

同じ日の夕方、矢張りこの島の尾野間といふ村の沖を、澤山の帆をはつた大きな船が一隻の小舟をひいて東をさして走るのを認め、村人が怪しんで濱へ出て見まも

るうちに、日が暮れて、行方は分らなくなつてしまつた。

その翌日のことであつた。

この島の湯泊といふ村に、藤兵衛といふ農夫があつたが、松下といふ所へ行つて炭を燒く木を伐つてゐると、うしろで人の聲がした。ふり向いてみると、大刀を帶びた男が手招いてゐる。

形はまさしく日本人で、さかやきを剃り、淺黄色の碁盤縞の木綿の着物をきて、二尺四寸程の刀を一本差しこんでゐるが、言葉が異樣で通じない。

水が欲しいといふ身振りをしてみせるので、藤兵衛は器物に水を汲んできて、これを地上において、自分はそこを立ち離れて男のすることを見まもつてゐると、男は器物を執りあげて水を飲みなほも手招きする。然し怪しんで近づかずにゐると、男はふと氣がついた樣子で、腰の刀を朝ぐるみ拔きとつて差しだした。そこで藤兵衛も近づいて行くと、四角板の形をした黄金一枚とりだして與へようとした。

昨日見たといふ船の者ではあるまいかとふと藤兵衛は氣付いたから、刀も黄金も受取らうとせず、一目散に逃げだして、先づ磯へでて海上濱邊を見廻したが、それらしい影は見えず、又ほかに人のゐる氣配もない。

村へ戻つて近隣に人を走らせ、これを告げた。

平田村の五次右衛門、喜兵衛といふ二人の者がこれを聞いて、藤兵衛と連立つて松下へ行つてみると、異樣の男は尚その場所にをり、彼等の來た方を指して、そちらへ行きたいといふ身振を示した。

疲れきつた樣子であるから、一人がそれを助け、一人は刀を、一人は袋を擔つて、湯泊の藤兵衛方へ辿りつき、食物を與へると、男は食べ終つて、黄金の四角板一枚と、まるい形をした二粒をとりだして差出したが、藤兵衛は固く辭して受取らなかつた。

このことが薩摩の國守にきこえ、宮の浦といふ所に牢をつくつてこの男を保護、長崎奉行所へ報告した。ローマだとかロクソンだとか、この男の言ふ異樣な言葉の斷片を錄したものを報告に添へて差出したが、長崎奉行所でオランダ人に訊きただしてみても、なんのことやら要領を得ない。

とにかく長崎へ護送させることになつたが、冬の末で海は荒れつづき、船は二度まで吹き戻されてしまつた。

男は長崎を忌み嫌ふ樣子で、ひたすら江戸へ行きたがる樣子であつたが、この男の望みにまかせるわけには行かないので、多くの舟でひき、網場といふ所へ上陸、陸

路長崎へついた。

陽暦十二月二十日長崎へついて、第一回審問は二十三日に行はれた。その三日間シドチは豫て用意の聖體を日に一度づつ拜受のほかは米も水も攝らなかつたが、奉行所では之を見て丸藥を用ひてゐると思つた。

長崎奉行永井讃岐守に別府播磨守の兩名。通譯として和蘭の甲必丹マンスダール、商人シクス、手代キッセール、それに羅甸語のやや解るドューウと者が立會ひ、彼等はこの日取調べる二十五箇條を箇條書にしたものを持ち、その答辯を書きこむ手筈になつてゐた。

男のさかやきはすでに一分ほど伸び、日本服の上に金鎖のついた木の大きな十字架を首から下げ、手に念珠をもち二冊の書籍を腋にはさみ、臂のやや上部を縛されて現はれた。書籍の一冊はヒイタ・サントルムといふ天草學林刊行の羅甸語と日本語の對譯本で、他の一冊は日本語の辭典であつた。

取調べは一時間半つづいたが、結局ローマカトリック教司祭ヨワン・バッティスタ・シローテといふ氏名が分つた程度であつた。氏名の訛は白石も亦同じやうに聞き違へて、結局彼は日本の記錄にヨワン・バッティスタ・シローテといふ氏名を傳へることとなつた。取調べが終つてのち、和蘭人の書込みを合せてみても殆んど要領を得ず、イタリヤ、パレルモ、ローマ、フランス、カナリヤ、天主、父、子、聖靈などとい單語がポツポツ通じたにすぎなかつた。

この審問にシローテは甚だしく和蘭人を憎み嫌ふ樣子が現はれて、オランダといふ言葉がでるたびに必ず頭をふり「たぶらかし、たぶらかし」と日本語で叫んだ。

かういふ風では和蘭人に訊ねさせても却つて沈默させる虞があるといふので、第二回目の審問には障子を距てて和蘭人を隱しておいてシローテの答辯をききとらせることにしたが、是亦皆目分らない。

シローテが袋につめて携へてきた品々も皆目用途が分らなくて、本人にただしてみても「れす・さくれ」と答へるぐらゐで得體が知れない。昔の長崎奉行所なら一目でそれと分る切支丹祭具で、捕吏達が鵜の目鷹の目嘆きまはつてゐた品々だつたが、最後の潛入からわづかに六十數年、十字架の何たるかまで分らないほど切支丹に縁遠い時世になつてゐた。

愈〻最後の試みで、ドューウに羅甸語で訊問させることになつた。

シローテが和蘭人を嫌つてゐるのが分つてゐるから、

和蘭人を上席において調べては返事をしないかも知れないと變な所へ氣をまはして、ドューウとシローテの席を並べておくことにした。と、今度はドューウが腹を立て、罪人と同席は不都合であると席を蹴立てて立去つた。奉行は困却してドューウをなだめ、かのシローテなる者は和蘭人を見ることも喜ばぬ樣子であるからまして上席から訊問を受けては返事も言ひしぶるであらうと思つてこのやうに取計つた次第で、事情を推察して忍んでもらひたいと　したが、ドューウは頑として聞き入れず、餘儀なく席を改めて、上席から立會はせた。

然しながら羅甸語の審問はどうやら通じて、この日のために用意した十七箇條は悉くシローテの明確な答を得ることができ、ここに始めて彼の來由が判明した。

如何樣にしても江戸へ上り、將軍に拜謁して宗門の說明をなし改宗をすすめたい所存であつたと述べ、屋久島で日本人に話しかけたのも一隻の船を雇つて江戸へ行きたい爲であつたと答へた。今も唯願ふところは、江戸へのぼつて將軍に拜謁したいこと、この一つのみであると言ふのであつた。

又、足下は何事か屋久島の村民に宗門の話をしなかつたかといふ訊問に對しては、もとよりその爲に來たのであるから自分は常にその話のみ致さなければならないのであると斷言した。

その三　江戸

この報告が江戸へ來て、新井白石が初めて之を耳にしたのは寶永五年十二月六日のことであつた。

この日西邸へ伺候して家宣（この時はまだ將軍ではなかつた）に拜謁すると、その年八月一人の蕃夷が大隅海上の島へついたといふ長崎からの報告が話題に上つて、ローマ、ロクソン、ナンバン、カスティラ、キリシタンといふ言葉などが聞きとれたが、ローマはとにかくとして、ロクソン、カスティラなどは甲必丹にも意味が分らなかつたといふ話なのである。ロクソンだのカスティラなど白石でも聞き覺えのある地名だが、甲必丹にも分らないとはをかしな話で、曖昧な報告であつた。

そこで白石は、家宣に向つて、その蕃夷は西洋の國から來た者に違ひありますまいが、然し、言葉がききわけられぬとは心得られぬ話です、と答へた。

家宣は自信たつぷりの斷言ぶりをあやしんで、心得られぬとはどういふわけだと尋ねた。

白石は之に答へて、昔の人の話によると、西洋の國の

者は極めて多くの言葉に通じ、その昔はじめてナンバンの人が日本に渡來した時も數日のうちに日本語を覺え、その宗門を傳へることもできたといふ話であるが、のみならず、その時以來數十年は西洋と交通があつて日本人が歐洲へ行くこともあり、又禁教の後は追放されてあちらへ移住した者も相當あつた筈である。それゆゑ西洋の者が自分の國で日本語を習ふことも不可能ではなく、まして何事か求めることがあつて遥々日本へやつて來る以上、日本語に通じなければその志を遂げることが出來ないわけで、必ず西洋にゐるうちから日本語を習ひ覺えて來てゐるのに相違ない。とはいへ元來言葉といふものには方言がある。又、昔の言葉と今の言葉とは違つてゐる。特に切支丹が追放されたのは今から百年近く前の話で、今回やつて來た蕃夷がそのやうな人達の子孫から日本語を習得して來たとすれば、現在我々の用ひてゐる言葉とは餘程違つてゐるに相違ない。だからさういふ心得で、方言だの昔の言葉だのを考慮に入れて訊きただして行けば、日本語で取調べて必ず通じる筈である。と言ふのであつた。

家宣も一理ある言葉であると頷いた。

寶永六年正月十日、綱吉永眠。家宣があとを繼いだ。

その年の十一月九日、家宣は白石を召し寄せて、大隅の國へついた西洋人が近々江戸へ送られてくる筈であるからその來由を訊問せよと命じ、長崎奉行の注進狀の寫しを與へた。白石の自信たつぷりの斷言を家宣は忘れてゐなかつ。。

長崎奉行がなまじ和蘭語などで訊問したからこんがらがつてしまつたので、日本語できけば必ず通じる。白石はあくまで之を信じてゐたが、地名だの宗門のことに關しては日本語になり得ない特殊の言葉がある筈で、この豫備知識がないことには取調べに困難であると思つたから、切支丹の用語の飜譯したものを借していただきたいと願ひでた。そこで宗門奉行が藏を探して切支丹のことを說いた三册の本を屆けてくれた。これは例の岡本三右衞門がころんで後に書き殘した切支丹の教義要略といふやうなもので、かなり明細に教義の大意が說いてあつたが、用語の飜譯と　ふものはなかつた。

寶永六年九月二十五日、ヨワン・シローテはとうまるかごに乘せられ、長崎出發。大通詞今村源右衞門、稽古通詞加藤喜七郎、品川丘次郎その他二十六名の者が附添ひ、十一月朔日江戸表へつき、小石川茗荷谷の切支丹屋

敷へ入れられた。

この道中、シローテはとうまるかごに入れられたまま夜もその中で寢なければならず、外の景色も太陽も皆目見えず、足を折り曲げて三十何日揺られ通して來たものだから、江戸表へついた時には全く衰弱し、第一兩足が腫れてしまつて不具となり、全然歩行ができないやうになつてしまつた。

諸設の準備がととのつて第一回目の審問が開かれたのは陰曆の十一月二十二日。場所は切支丹屋敷内の白洲で二人の宗門奉行横田備中守と柳澤八郎右衞門が立會ふことになつた。

宗門奉行といふのは作事奉行の兼官で、切支丹など一人もゐない時世だから、宗門奉行は名ばかりで切支丹のことなど何一つ御存じないのである。横田備中守が大通詞今村源右衞門に命令してシローテに詮議した十三ケ條といふのが愛嬌のある代物で、切支丹のことは一つもなく、「人參は南蠻イタリヤ國などにても朝鮮人參を用ひ候哉。但ロウマなどにも人參有之候哉。常々病氣の時分南蠻人も人參用ひ候哉」かういふことを訊いてゐる。「日本とイタリヤの丁度眞中は何と云ふ所だらうとか、蒼海には大魚獸や異形のものがゐるだらうといふことを詮議してゐるのである。大嘘好人物でのんびりしてゐて何一つ脈絡のない奉行であつた。

さて十一月二十二日、この日先づ白石は午前中に切支丹屋敷へやつて來て、シローテが携へて來た品々を檢分し、つづいて通詞の人々を呼び寄せて、その心得を言ひきかせた。つまり切支丹禁令以來その宗門の言葉を口にしただけで處刑される程であるし、まして禁令以來百年近い歲月が流れて切支丹の教義に通じた者も全くゐない。そのうへ通詞といつても和蘭語だけのことで伊太利亞の言葉が分らないのは是非もないが、然し萬國地圖を調べてみると、伊太利亞と和蘭は同じ歐羅巴の地續きであるし、長崎と陸奥ほど遠くは離れてゐない。だから和蘭語を元にして推察すれば伊太利亞語の七八に通じることが出來ないとも限らない。公のことに關しては推量で答へることは許されないが、今の場合は用を辨じればいいのであるし、又自分としては足下等の推量をそのまま鵜呑みにしようとは思はず、それを參考にして自分の判斷をするつもりだから、充分納得が行かず不安があつても構はないから、推量で大意を傳へてもらへば結構である。推量が違つてゐても咎めはしない。と言つたのである。

午すぎて、審問が開かれた。

シローテは歩行できないので、二人の番卒に左右から助けられて現はれた。非常な大男で六尺をはるかに越えてゐるやうに見え、番卒は左右の腋にもぐりこむぐらゐであつた。庭に榻をすゑ、これに彼をかけさせた。

シローテは木綿の白い肌着に茶褐色の袖細の綿入を着てゐた。これは薩摩の國守が與へたものであつた。すでに厳寒の候であるから、これだけでは寒さを防ぐに足りない。

そこで審問に先立つて、宗門奉行が着物を取り寄せて與へた。が、切支丹は異教徒の施與を受けてはならない定めであるからと拒絶し、毎日食物をいただくだけでも大きな恩惠を受けてゐるのに更に衣服をいただいては宗門の掟にそむくことは甚だしいし、この衣服でも寒氣を防ぐに充分だから、心をわづらはしてくれるなと言つた。

この問答が終つてから愈〻白石の審問にはいつた。

白石は先づ懐中から持參の萬國地圖を取りだした。

この審問の眼目は言ふまでもなく如何なる目的があつて潜入したかといふことであるが、歐羅巴の國情歴史風俗、さういふものを充分に辨へてゐなければ彼の來由を訊きただしても本意をつかむことが不可能であらう。白石はさう考へて、來由の詮議は後まはしにして、先づその前何回でも審問を開いて、歐羅巴の事情を得心ゆくまで問ひただし、そのあとで切支丹の問題にふれる豫定を立ててゐた。

ところが持參の地圖を取りだしてシローテに示したところ、その地圖は日本で刷られたもので精密を缺き、役に立たないといふ返事である。幸ひ宗門奉行所に外國版の古い地圖があるといふ話なので、次からそれを用ひることにした。

さてシローテの語る言葉をきいてみると、果して白石の確信通り、とにかく日本語を語りうるのである。しかも豫ての想像通り方言のごちやまぜで、畿内、山陰、西南海道の方言が主で、これを伊太利亜の巻舌で發音するから、ちよつと聞いては日本語のやうに思はれない。けれどもその心得で聞けば手眞似を入れてなんとか日本語で通じることが出來るのだ。却つて通詞達は和蘭語にとらはれてゐるので、白石よりも分りにくい時があつた。

そのうへシローテは自分の言葉を理解させたいといふ眞摯な情熱を持つてゐて、ひとつの言葉を必ず反覆して言ひ、通詞が理解できない時は何度でも根氣よく繰返し

て、どうしても理解させねばやまないといふ眞面目さがある。前掲の宗門奉行の愚劣極まる詮議の條々に對しても、彼の答といふものは誠實で、調子を落したり、いい加減でお茶をにごすやうなことはしてゐない。

この日は歐羅巴の事情の極めて初歩的なことをあらまし尋ねて、日の傾いたころ審問を終つた。

この時シローテは通詞を通して次のやうなことを申出た。

自分が日本へやつて來たのは教法を傳へてこの國の人々を刹し救ひたいといふ爲であつたが、しかるに自分が日本へついて以來といふものは事毎に多くの人々をわづらはすのみで洵に本意なく思つてゐる。あまつさへ江戸へ來てのちは、すでに年も暮れようとし、ほどなく雪の降る季節になつたといふのに、此處に詰めてゐられる士分の方々を始め番卒御一統日夜を分たず守りについていただいて、自分としては見るに忍びない思ひである。それといふのも自分が逃げてはとの御懸念からであらうが、自分の生涯の念願といへば、どのやうにもして日本の國へ行きついて教をひろめたいといふこの事のみで、萬里の風波をしのぎ、六年の歳月を費してやうやく一念を貫き、かうして今や江戸へ着くことが出來たのである。逃げるなどとは思ひも寄らないことであるし、よしんば逃げてみたところで、了見してそれと分る異國の者が一日も無事隠れおほせるものではない。とはいへ上の命令によつて御守り下さる上は務めを怠るわけには行かないであらうが、壹の守りはとにかくとして、夜間は手枷足枷をつけ牢につないでいただいて、せめて人々を安眠させていただくやうに御取計ひを願ひたい。

この言葉をきいて、二人の奉行をはじめ一座の人々一樣に哀れと思つた樣子であつた。

白石はこれを見て、この者は見かけによらぬ僞り者ぢや、と言つた。

婦女子風の感覺を嫌ひ、誠實の押賣りを厭ふ日本式の儒教論理は過去の外人神父達がいづれも應接に一苦勞した難物で、これに就いては、本國へ多くの報告がもたらされてをり、このへんの概念は漠然ながらシローテも懐いてゐたであらうと思ふが、事實に當つてぶつかつては誰でも驚く。

シローテは恨みをこめた顔色で白石を凝視めてゐたが、人にまことがないほどの恥辱がありませうか。まして私共の教では妄語を戒しめてをりますものを。私が事の情をわきまへてこのかた一言の僞りを申した覺えがあ

りませぬ。何故殿は私を偽り者と仰せられますか　と言つた。

白石はこの藪問に押しかぶせて、おまへは年の終りも近づき寒氣のきびしい折から番卒共が晝夜を分たず守りついてくれるのが見るに忍びぬと申すのであるな、と訊く。いかにも、それに相違ございませぬ、と答へた。

「さて、それならばこそ、おまへの申す言葉には偽りがあると申すのぢや。番卒がおまへを守るのは奉行の命令を盲んじてのことであり、又、奉行は公家の仰せを受けておまへを守つてをられるゆゑ、おまへの身に事故なきやうにと思ひはかられ、寒からうとの御配慮から衣服を與へよと仰せられる。もしもおまへの申す言葉がまことの情であるなら、奉行がおまへの身を案ぜられての御心配をなぜ安んじてあげないのか。眞教徒の配慮を受けることが出來ないといふなら、番卒の配慮も亦こだはるに及ばないではないか。それゆゑ、おまへの先程の言葉がまことなら、今の言葉は偽りの言ぢや。又、今の言葉がまことならば、先程の言葉は偽りの言ぢや。申しひらきもあるまい」

感情自體の偽僞を無視して昆理窟一點張りの日本風の論法であるが、白石は又このやうな非情の理窟を自らの生活として感賞に生きぬいてきた傑人である。奉行達の感動に反發して、紅毛人ごときにといふ强情で意地の惡い向ふ意氣もあるけれども、牢固たる信條とその信條に一貫せられた感賞も亦疑ひ得ない。

シローテはこれをきいて成程と思ふ樣子であつたが、ややあつてのち、まことに私のあやまりでございました。いかにも衣服をいただきまして御奉行の御心を安んじたいと存じます、と言つた。

好人物の御奉行はすつかり喜んでしまつて、よくぞ仰有つて下すつたと大いに白石を賞讃、感謝したとある。

ややあつてのち、重ねてシローテは通詞に向ひ、同じやうなことではありますが、綿類では私の心が安らかではありませぬので、木綿の衣服を給はるやうにお願ひ致します、とつけくはへた。

第二回審問は三日目の十一月二十五日で、午前十時頃から始められ、亭ら歐洲事情をききただした。シローテはすでに與へられた木綿の衣服をかさねてゐた。

白石はこの日から宗門奉行所に保存されてゐた萬國地圖を携へて行つた。シローテはこれを見て、七十餘年前和蘭でつくられた地圖であるが、今ではあの國でも得易

からぬ品物で、ここかしこ破れてゐるのは惜しむべきであるから、修補して後々まで傳へられるが宜しからうと言つた。

さて、この日白石が感嘆久しうしたことは、シローテがまことに博聞强記、天文地理をはじめとして諸學にわたり、企て及ぶべしとも見えぬ學才をあらはしたことであつた。

日がすでに傾いたので白石が奉行に向ひ、何時だらうかと尋ねたところ、このあたりには時を打つ鐘もないので何時頃とも分らない、と奉行が答へた。

するとシローテは頭をめぐらし、日のある所を見て、次に地下の影を見て、指を折りまげて數へてゐたが、自分の國では丁度何月何日だから何時何分頃に當りませう、と言つた。

白石は感いたが、然しこの程度のことなら、その方法を覺えこみさへすればまだ易しからうといふ推察はついた。

ところが例の和蘭版地圖を取出して、ローマはどのへんぞと訊ねたところが、シローテは通詞に向つてチルチヌスはありませぬかと先づきいた。通詞がないと答へたので、白石がなんのことだと問うてみると、和蘭語ではパッスルといふもの、ローマの言葉ではコンパスといふもののことであると言ふ。ところが驚いたことには流石に白石で、かねてコンパスを用意してをり、その物ならここにある、と懷中から取出してみせた。

シローテは之を受取つて暫く工夫してゐたが、このコンパスはネヂが弛んでゐて用に立たないが無いよりはましであらう、と言ひ、地圖の目盛に合せて測つてゐたが、やがてコンパスを立てて此處ですと言ふ。そこを見ると成程西洋の文字でローマと記してある。その他利國であれ江戸であれコンパスで測つて、さし違へたといふことがない。

白石は甚大の驚得を喫し、悉く敬服してしまつた。感嘆のあまりシローテに向つて、おまへは全てこれらのことを學び覺えたのかと尋ねた。いかにも習ひ覺えたのだが、これしきのことは至極易しいことだとシローテは答へる。いかにも尤もた答である。けれども白石はこの時つくづく長大息して、自分は數學に拙いからとても之だけのことは學ぶことが出來まい、と、之は又とんだ所で數學を引合ひにだして大きく嘆いたものである。これではシローテが慌てざるを得ない。否々、これぐらゐのことに數學など後學も必要ではなく、譬ごとき方であるな

ら極めて容易に覺えこまれる筈である、と言つて白石を慰めた。

三百年前の和蘭版萬國地圖といふものがどういふ仕掛けの物だか知らないが、コンパスで目盛を測つてさして當てるとはどういふことであらう。コンパスで目盛を測るぐらゐなら緯度經度或ひは里程を正確に暗記してゐる筈である。そんなら何もコンパスで測らなくつても地圖を一見してそれと指摘できないことがなささうだ。太陽とその影を見て時間を判斷するにしても一々指など折りまげなくとも良ささうで、どうもシローテのやることは白石の氣質を見込んだ芝居氣がありさうだ。

白石も亦白石で、これぐらゐのことで數學を引合ひにだしてまで驚くほどなら、なんのためにネチの弛んだコンパスなど懷中に入れてゐたのか分らない。

然しながら、シローテはかういふ具合に茶羅化すやうな人ではなかつた。

和蘭の戰艦には多くの窓があり、上中下の三層があつて各大砲をだしてゐるさうだが、と云ふことを訊きたかつたが、言葉だけでは通ぜず、手眞似でも表はしにくいことであつた。仕方がないので、白石はその左の手を横に立てて四本の指をだし、その間から右手の指頭を三本だして見せた。シローテは之を見て、打ち頷き、如何にもその通りであると答へ、通詞に向つて、殿は敏捷であらせられると言つて賞讃した。

又、通詞達がシローテのラテン語を和蘭風に訛つて發音するたびに、繰返し繰返し敎へ、遂に習ひ覺えて正確に發音すると大いに賞美するのが例であつた。

歐羅巴なら小學校の子供でも出來ることに數學を引合ひにして長大息する白石であつたが、シローテはその人物、その識見を決して見誤りはしなかつた。

と云ふのも、白石自體が實にすぐれて偉大であつたせゐもあらう。彼の質問は常に適切で要をつくし、しかもその主旨は一貫して歐羅巴文明の本質をつき、隙もなく弛みもなかつた。

白石はこの審問の後に十一月晦日に三度目の審問をひらき、この時も亦宗門のことにふれず、專ら歐羅巴の事情のみを尋ねたが、わづかに前後三回の審問だけでローマの何處たるかすら知らなかつた白石が、歐羅巴各國のみならず東洋各地、南北アメリカ等にわたつて、その各の地理歷史國情風俗等について殆んど餘す所なく、又殆んど誤る所なく記錄を殘した。

審問時間の總計から考へては想像に絕する記錄である

が、ひとつは白石の知識慾に最も敏感に應じることのできたシローテの偉大さも計算に入れなければならないであらう。

「まのあたり見しにもあらぬ事どもは」しるさず、又信じないのが白石の生涯を一貫した學的精神で、シローテ審問の要領も亦もとよりこの軌道の上にあり、科學的訓練のない當時にあつて眞に異例の精神であつたが、之に應じたシローテが又その知識に於てその誠實眞摯な信仰に於て遜る所のない人物であつた。

あるとき白石がヲヲランデヤノーワ（オーストラリヤ）は日本からどのぐらゐ離れてゐるかと尋ねたところ、その時までは問へば飽くまで熱心に答へてゐたシローテが、どういふわけだか口を噤んで答へない。

重ねて問ひただしたところ、シローテは通詞の者に向つて、切支丹宗門の戒めでは人を殺すより惡事はないと言はれてゐる。それであるのに人に敎へて他國をうかがはせるやうなことがどうして出來ませうや、と答へた。

白石は不審に思つて、そのわけを問はせたところ、思ふことがあつて、この地方のことは申上げることが出來ない、と言つて、それ以上答へたがらぬ風である。

尙も追究したところが、さらばといふ風をして、この殿を見受けまするに、日本に於てはどのやうな地位におはす方かは知らないが、もし私の國に生れ遊ばしたとしたならば必ずや大きな事業を殘さずに終られるといふ方ではない。ヲヲランデヤノーワは日本を距ること遠くもないので、この殿が侵略されることを怖れて、その旅程を詳らかには申上げないのである、と言つた。

白石の短所かどうかは言ふべき限りではないけれども、彼は元來自ら恃むこと洵に逞しく、その不羈獨立の精神から由來した自慢癖を持つてゐた。

太閤そこのけの大人物に見立てられて、氣のいい御兩人の御奉行が度膽をぬかれて讃嘆したに相違なく、白石はてれたふりをして、御奉行にきかれるのも片腹痛い限りで失笑した、などと書いてゐるが、大いに氣を良くしたに相違ない。

どこまでがシローテの本音であるかは知り難いが、又白石の氣質を見込んでの權謀術數もたしかに有つたと思はれる。

元來日本の切支丹禁敎令は宗敎をだしに使つて國を奪ふ魂膽であるといふ理由のもとに發せられたものであつた。德川家康は喰へない親爺で、彼の識見はもつと大きく深い所にあり、軍事上ばかりでなく經濟上その他のこ

とでも鎖國を救國の策と看破し、一應の口實を見つけて切支丹を國禁したが、案外彼自身は切支丹を道具にしての軍事的侵略などといふことを信じてはゐなかつたといふ見方もできる。

然しながら大御所の魂膽はとにかくとして、切支丹は國を奪ふ手段であるといふことは日本の上下に信じられ、又切支丹もそれを信じて、切支丹は人民救濟の宗教であつて何等一國の政策とは關係のないものであるといふ申開きが彼等の最大の念願であつた。この念願が達成して日本政府の理解を得れば、切支丹は再び日本に行はれるに相違ないといふことが彼等の希望であつた。

シローテの希望も元よりそれであつて、後日白石に向ひ、日本が切支丹を禁令したのは和蘭人が日本の爲政者を動かして國を奪ふ手段であると信じさせた爲である。然るに我ローマの國は國がひらかれてこのかた千三百八十餘年寸土尺地といへども他國を侵略したことがなく、むしろ和蘭の如きは侵略の常習犯でいつ何をやりだすか計りがたい國である、と切言してゐる。

又、自分が教皇の命を受けて日本潜入の決意をかためたとき、同時に三つの志を立てた。その一つは望み請ふところを許されて再び日本に切支丹が行はれるやうになるなら元よりこれにまさる喜びはない。二つには、望み請ふところが許されず日本の國法によつて處刑される場合は、もとより宗門のため又師のため自分の骨肉形骸の如きはどうならうと構ひはしないが、唯、國をうかがふ間諜のやうに沙汰されるなら、之以上の遺恨はない。三つには、師命を達し得ず、萬里の行をむなしくして、生きて本國へ還されるほどの恥辱はないといふ、以上三つのことであつたと白石に言つた。

かうして彼は折にふれ、機を見るたびに、切支丹は國を奪ふ手段でないといふことを信じさせようと努力した。彼とても亦、禁令の根本理由がそこにあると思ひこんでゐたからであつた。

偶ゝヲヲランデヤノーワのことに行き當り、ヲヲランデヤノーワといふからには、第一仇敵和蘭が侵略した土地であり、それを更に白石の侵略に引つかけて逆效果をねらひ、切支丹は決して他國を侵略しないと言ふことを暗に呑みこませようとした——さういふ風に考へて、必ずしも不自然ではないと思ふ。

ところがシローテのこの術策はてんで白石に通じなかつた。

白石がもしシローテの想像通り切支丹は國を奪ふ手段

であると信じてゐて、特にその點を意識して切支丹を危險視してゐる人であつたら、彼程聰明敏活の人が、よしんば如何ほど自慢癖に憑かれてゐても、シローテのおだてに乘つて氣を良くして、裏のことには氣がつかないといふことが有り得ようとは思はれない。さてはと忽ち氣がついて、食へない奴だと思ひついたに相違ない。

ところが奇妙な因緣で、白石は審問にかかる前から、切支丹は國を奪ふ手段でないといふことだけは、あらかじめ心得てゐたのであつた。

不思議な因緣で——といふのは、白石は審問の始まる前に、切支丹の特殊な用語の譯譯が知りたいと思ひ、宗門奉行から三册の本を貸してもらつた。これは背教者岡本三右衛門（彼はシローテとその國籍を同じくし、のみならず、ふるさとも亦同じシシリヤであつた）が背教後書き殘したもので、切支丹の教義侵略ともいふべきものであつたが、彼がこの一書の中で最も力說してゐることはと言へば、切支丹は國を奪ふ手段にあらずといふ一事であつた。人の悲しい弱さによつて力つき背教したとはいへ、彼も亦その志の一分だけは、神に背いてのちに秘かに果しておいたのだ。とはいへ同じふるさとの剛毅誠實な後輩の取調べに利用されようとは、もとより知らう筈がない。

白石はこの三册の書物を精讀して、取調べにかかる前から、切支丹は國を奪ふ手段にあらずといふことだけは否應なく分らせられてゐたのであつた。それゆゑシローテが常に最も意識してゐたことに、白石の方ではてんでこだはりを持たなかつた。

尤もシローテのこの術策の深い言葉には案外本氣も含まれてゐて、實際白石が侵略も致しかねない人物だと思つてゐたかも知れなかつた。

といふのは、シローテが日本潜入に當つて持參して來た十六册の書物の中には、タイカフサメ（西洋では秀吉をかういふ風に訛つてよぶ）の事蹟を書いた書物もあつたといふことで、タイカフサメは切支丹國禁の張本人になつてをり（シローテは決して家康のことを言はない）明ばかりでなくマニラ遠征を企ててゐた——企てもしなかつたが、マニラの方では企ててゐると思つてゐた——典型的な侵略家であつた。

さういふわけでシローテはタイカフサメの侵略精神に充分の敬念を持つてをり、白石の探究精神によつて根掘り葉掘り國々の事情を問ひつめられては、多少白石の魂膽を疑ふ氣持にもなつたであらう。

ひところの外人宣教師が日本の文化や國民の知能を高く評價してゐたことは非常なもので、當時の宣教師の報告がそれを充分に語つてをり、西教史の序文などでも、日本人は支那人などとは比較にならぬ高級な國民だと言ひ、西洋最高の文明國はローマだが、日本の文化のみは蓋し之にも劣る所がないなどと途方もない大讃辭が呈してある。

あるとき白石がシローテに向つて、同じ東洋のうちには日本の外にチイナがあり、その文物政教は古より中土と稱するほどであるが、その實狀はどうであらうか、と尋ねた。

この時シローテは答へて、日本人はまるい物を見るが如くであり、チイナの人は角ある物を見るが如くである。日本人の溫和なことはこのやうだと言つて自分の衣服を摑んでみせ、チイナの人の固く澁つてゐる樣は又このやうだと言つて榻をなでてみせた。さうして、近きを賤しんで、遠きを尊ぶべきではないと言つた。

ヲヲランデヤノーワはとにかくとして、東洋では日本人が最も優秀な國民だとは分つてゐたし、白石が油斷のならない人間だとは思つてゐたに相違ない。

彼は榻につくたびに必ず手を拱して一拜して、坐つてのちに十字を切り、目をつぶつて、坐つてからは泥塑のやうに身動きをしない。白石や率行が立つことがあれば、必ず自分も立上つて一拜してのち座につき、還つてきて座につかうとすると、彼の方が先に立上つて一拜して又座につく。この禮儀の正しさには傳教の行儀で鍛へてきた白石もほとほと感心した。

十一月二十五日の審問のあとで、シローテの獄中生活を見學したが、牢獄は大きな牢舍を三つの小部屋にしつたもので、シローテは西面の一室に住んでゐた。赤い紙を切つて十字架をつくり、これを西の壁にはりつけて、その下で經文を誦してゐた。

食物にも限度があるといふことで、長崎以來一定の食事をしてゐたが、平日は午と日後とに二度、主食物は薄い醬油に油をさしたものの中で小麥の團子と魚と大根とひともじを入れたものを酢と燒鹽をそへて食べる。菓子は燒栗四ツ、蜜柑二ツ、干柿五ツ、丸柿二ツ、パン二ツ。これを一日に二度食べるわけである。

齋戒の日は主食物は午の一度で、菓子だけは平常通り二度食べた。切支丹屋敷へ來て以來入浴したことがなかつたが、垢のついた跡もなく、食事の外には湯も水も飲

まなかつた。又、果實の皮や種はどういふ風に始末するのやら、あとを見たといふ者がなかつた。

父母はどうしてゐるかと白石が尋ねたところ、父は十一年前に死に、母の名はエレヨノーラ、今も生きながらへてゐるとすれば六十五歳になる筈であり、兄弟は四人で、長女は夭折し、次は兄で名はヒリプス、次が自分で四十一歳、末弟は十一の折死んでしまつたと答へた。

男子が國命を受けて萬里の行につくからは一身を顧ぬことは言ふまでもないが、おまへの母もすでに年老い、兄も亦壯んな年はすぎた筈で、おまへはそのことを案じる時がなかつたかと重ねて尋ねた。

暫く返答がなかつたが、顏に一抹の憂氣が流れ、やがてシローテは身を撫して、もとより一國の鴻擧により日本渡來の師命を受けてこのかたは、いかにもして日本の土を踏みたいと思ふほかには餘念のあるべき筈はなかつた。老父母といへども、自分が國のため又教法のため一身を棄てて赴くことを彼等自身の幸ひであると喜んでくれた。とはいへ、その血肉を分ちあつたはらからの事であるから、生きながらへてゐる限りはどうして忘れることが出來ませうか、と答へた。

審問は十一月二十九日にも開かれ、この日も亦專ら歐羅巴事情の究明に費して宗門の話には微塵もふれるところがなかつた。

シローテは折にふれ機を見ては頻りに宗門の話にふれようと焦つたが、白石は未だその時機ではないと心にかたくきめてゐて、むしろシローテの焦躁をあざけり樂しむぐらゐ冷酷な、一抹の底意地悪さをたたへながら、シローテが宗門のことを言ひだすたびに素知らぬ風をして全くそれに取りあはなかつた。さうして自分の訊きたいことだけは執拗に訊きつづけた。

その四　イノチの日

翌日白石は本丸へ伺候して、すでに審問三回に及び、歐羅巴の地理歴史文化風俗國情等一通りは訊きただし、又シローテの言葉を聞き違へるといふ恐れがなくなつたから、この上は愈彼の來由を糾問したい意向であると言上。前回の審問は宗門のことにはふれないので率行の出席をもとめなかつたが、次回は切支丹宗門のことにわたる筈であるからと言つて、奉行の出席を要請。愈來由を問ふこととなつた。

十二月四日、シローテがその一生を賭けて待ちかねた最後の審問がひらかれた。

この日シローテを呼出し、例の如く各々座についてのち、愈來由を問ふむね白石が申渡したとき、シローテは喜悦に堪へざる有樣で、日本布教の師命を受けてこのかた六年、萬里の風濤をしのいで日本の土を踏むことができ、遂に國都江戸に到着することも出來たが、折しも今日は本國では新年の初の日に當り（正月三日に當つてゐた）人々がお祝ひしてゐる時であつて、この日に當つていのちの念願が達せられ、切支丹宗門のことに就いて言上することが出來ようとは、これにまさる幸せがありませうやと言つて、かくて彼はその一生の熱血をこの一日に傾けて、キリシトの敎を說いた。

とはいへ、この紛間の座に於て、如何に辯を玄にしてキリシトの敎を說いてみても、國禁を解きうる見込みはすでに微塵もなかつたのである。白石には冷然たる批判の眼があるのみであるし、のみならず、彼の立場は布敎師にあらず、とらはれの一罪びとにすぎなかつた。

今はただ說くのみであつたであらう。誰に向つてといふこともない。白石が相手でもなかつた。その一生のいのちであつた念願にかけて、ただ專らに說き明し、專らに說き盡さねばやむべくもない思ひであつたに相違ない。

シローテは白石に向つて、本國を出る時から生きて歸る心だけは毛頭なかつたと述べ、さりながら、今なほ公敎の東漸すべき時機ではなく、一生の情を傾けつくして告げ訴へて、尙かつ布敎の公許を受けることが出來ないなら、萬やむを得ない話であつて、自分の骨肉形骸の如きはどうならうと元より誰を咎むべきでもありませぬ、と言つた。

將軍へ差出した白石の上書によれば、シローテの熱烈剛毅なる有樣、その志の堅固なる有樣を見ては心を動かさずにはゐられなかつたと述べ、すみやかに首を刎ねても到底その志を變ぜしめる見込みはなかつた、と附加へてゐる。

だが、シローテの說く切支丹宗門の本義に關してのみは、白石の批判は冷酷無幾で、博聞强記博學多識企て及ぶべしとも思はれぬこの人が、ひとたびその敎法を說くに至つては一言の道理にちかいものもなく、智愚たちまちに地を變へて、さながら二人の言を聞くやうであつたと述べてゐる。

彼はキリシトの敎を理窟にてらして一々說破し、超理的なるが故に人性の秘奧にむすびつく宗敎の本義に關しては恬として心を振向けようとしなかつた。

この紛間ののち、白石は獨馬人處置の獻議として、第一に、彼を本國へ返さるるは上策。第二に、彼を囚人として助けおかるるは中策。第三に、彼を誅せらるることは下策、といふ三策を立て、第一策によつて助け返さることを至上とすると進言した。

之に對して家宣は中策を採用し、囚人として切支丹屋敷に住はしむべしと命令。一國の使臣としてその宗門の無實を告げ訴へる爲に來た者ならばその國信といふべきものを携へてくる筈であつて、日本人に變裝して潛入したのは、たとへ彼の言葉が僞實であるにしても尙憐ぐるのが至當であり、即ち中策をとり、その生涯囚人として幽閉せしめるものであるといふ言葉であつた。後日に至つて一國の使臣であるといふ證據があつた場合は飜してやつてもいいといふ甚だ穩當な處置であつた。

切支丹屋敷內の北隅に一軒の家があつて、そこに長助はるといふ二人の老人夫婦が住んでゐた。

彼等は罪人の子供で幼時から切支丹屋敷に養はれ、日本へ潛入して捕はれた廣東人、背敎後は黑川壽庵とよばれた者の奴婢として暮して來たものであつた。黑川壽庵に同本三右衛門一行の潛入の際從者として共に潛入した一人であつた。

壽庵の死後も、そのかみ切支丹であつた者に仕へてゐたといふ理由によつて、長助夫婦は切支丹屋敷內から一足も出ることを許されず、一軒の家をもらつて住んでゐたが、シローテが幽閉されるに及んで、改めてその奴婢として身邊に仕へることとなつた。長助はそのとき丁度五十歲であつた。

シローテが幽閉されて五年の歲月が流れ、一七一四年冬の一日、長助夫婦は突然自首して、自分等は禁令の切支丹を率ゐる者であるから、國法に從つてどのやうにでも殺いていただきたいと申出た。

その告白によれば、彼等は先に仕へた黑川壽庵に感化宗をすすめられたが、國法に背くことを怖れて當時は敎に從ふことがなかつた。然るに壽庵の死後年月が流れて、シローテが幽閉せられることとなり、その身邊に仕へることとなつたが、この人がその一身をかへりみず萬里の風波をしのいで日本に潛入、とらはれの憂を見るにつけ、いくばくもない餘命を惜しんで地獄に墮ちる怖しさをひしひしと感じるやうになり、遂にシローテに願つて洗禮を受け切支丹となつたもので、隱してゐるのは國

聖に背く罪と信じ、死をかへりみず自首して出たものであるから、國の法に從つてどのやうな刑罰にでも處してくれ、と言ふのであつた。即ち教法のためと國恩のため一命を投げすて、殉教の覺悟をかためて自首したものであつた。

紹興の國へ大志を立てて潜入、その情熱のすべてのものを傾けつくして告げ訴へて尙かつその志を達することの出來なかつたシローテだつたが、幽閉五年、けなげな信徒を得たのであつた。

役人は直ちに彼等を引離して別々に監禁し、シローテは禁令の宗門をさづけた罪によつて改めて牢内に禁獄せられることとなつたが、ここに至つてその眞情やぶれ露れて（白石の言葉）大音をあげてののしり呼ばはり、長助夫婦の名をよびつづけ、たとへ死すともその教を棄てることがあつてはならぬと日夜を分たず叫びつづけてゐたといふ。

長助は一七一五年十一月十三日に牢死した。それから丁度二週間目の二十七日夜半に至つてシローテも亦牢内で死んだ。多分ゼジュン斷食をしたのだらうと言はれてゐる。そのとき四十七歳であつた。はるの最後は傳はらない。

シローテの墓の上には榎が植ゑられ、ヨワン榎とよばれてゐたといふことだが、今はすでに跡片もない。

風人録

一

この世には、とても有り得まいと思はれる事が、往々有りうるものである。しかし奇妙なことには、さういふ事に限つて、さて實際行はれてみると、人々になんの注意も惹かず、不思議な思ひすら與へず、有耶無耶のうちに足跡もなく通過してしまふ。

先年、ある男が鐵道自殺をしようとして、窃造してきた貨物列車に向つて、走幅跳の要領でスピードをつけて跳びこんだ。これによつてみても、自殺は必ずしもセンチメンタルなものではない。スポーツのやうに勇壯で、生命と青春に溢れてゐる場合もあるのである。

ところが惜しいことに、この選手は失敗した。といふのは、あんまり勢ひが良すぎたので、線路を飛び越してしまつて、間一髪のところで、線路の左右位置を眞にしたこの選手の生命を無事置き殘して、列車は通過してしまつたのである。

この男は列車によつてではなく、列車を飛び越したことによつて、瘤や傷をつくつたけれども、生命に別狀なく、且、この意外な結果にびつくりして、自殺を斷念してしまつた。

かういふ稀有な出來事も實際有りうるのである。この頃ことが實際起つた數年或ひは十數年以前に、我國のある戯曲家がかういふ稀有な場合を想像して（――恐らくこんなことが實際有り得ようなどとは思はずに――）一幕の喜劇を創つてゐた。讀者や觀客も亦こんなことが實際有り得ようとは夢にも思はず、作者の奇智を模しんでゐたのであつた。

この奇拔な出來事は翌日の新聞に、落し物や寄附の記事とまじつて、最も小さく報道された。さうして人々の注意も惹かず、尙悪いことには、かういふ事も有りうるといふ科學的役割を果すことなく、有耶無耶のうちに時の眼を素通りしてしまつたのである。

まつたくもつて新聞といふものは、その報道の理論的基礎が曖昧である。人殺しを五段拔きで報道すべきであるか、この不可思議な出來事を五段拔きで紹介すべきであるか、どちらが有益であるかといへば、これには多くの議論が必要な筈で、生憎我々の新聞の報道機構には、さういふ理論的檢討の基礎づけを見出すことが出來ないのである。

二

ところで、ある日、奇妙な出來事が起つた。

とある坊主の大學校――といつては何のことやら理解の出來ない讀者がゐるかも知れないが、佛教の宗派を細別すると何百何十になるのか坊主自身が知らないだけの數があり、大別して十幾つかの宗派があつて、これがみんな例外なしに各の大學校を持つてゐるのである。

この大學校の先生は言ふまでもなくみんな坊主で（これは間違ひない）同時に學者（この方はお釋迦樣だけが御存知だ）の筈なのである。

さういふ先生の一人に、なにがし先生といつて、婆羅門哲學の先生がゐた。齢はまだ三十七八で、見たところ格幅の良い紳士であるが、惜しいことには、いつも眠さうな顏をしてゐる。といふのは、概していつも宿酔氣味で、實際睡眠が不足のためでもあるのであつた。

この先生はまつたくだらしのない呑み助であつた。婆羅門哲學の解説を早目に切上げて、生徒よりも一足先にモーローと街へ消えてしまふ。次の教室へ二十分程遲刻して現れる時は、目のまはりだけいくらか薄赤くして、講義にとりかゝる前に三秒ぐらゐ椅子にもたれて、ぐつたりしてゐる。コツプ酒を三杯ぐらゐ傾けて來たのであるが、この先生は酒の勢をかりて不當に颯爽とするやうな原始的な素質がない。いつもただ樽のやうに嘗きがなくて、寂然モーローとしてゐるのである。

この大學校の學長先生や、その親分の管長猊下に愛妾があるとか、涼しい頭にソフト帽子をのせて待合などといふ所へもお經とは別の用事で出掛けるとか、とかく俗人共は高潔な人格にケチをつけて喜びたがるものではあるが、俗人共がケチをつけて溜飲を下げてゐるぐらゐであるから、誰もほんとに見たといふ者はなく、誰かがほんとに見たといへば、誰かがマサカと思ふのである。だから高潔な人格は待合の門をくぐり、その登龍は微動だもしないといふ鐵則の下に置かれてゐる。

この高潔な人格が夢を並べて揃つてゐる大學校では、寂然モーロー先生が、たつたひとり、實にみすぼらしく、惨めとも何とも言ひやうがないほど氣の毒なぐらゐ目立つのだつた。黄昏が來て、さてオデンヤでおもむろに傾けるのは思に角として、婆羅門哲學の解説を早目に切上げてモーローと街を消してしまふ。酒屋の店先一足這入つた所でポカンと立つて、太がおあづけをしてゐるやう

な恰好で、小僧がコップに酒を汲むのを待つてゐる。あれだけは止せばいいのに、と大勢の生徒の中には（これもみんな坊主である）變に力瘤を入れながらヤキモキする奇特な味方もゐるのであつたが、かういふ純粋な友情も寂然モーローの先生には通じる筈がないのであつた。）ところが、この先生にも相棒があつた。相棒と呼んで悪ければ、親友と言ひ直しても差支へない。

これもこの大學校の先生で、だからやつぱり元來坊主で、佛教史を受持つてゐる。齢はこれも三十七八といふところだが、これは又見るからに颯爽として、これが坊主の先生だとは誰の目にも分らない。常々リユウとした流行の背廣服を着用に及び、大股に風を切つて颯爽と歩き、胸のポケットからハンカチをとりだして指先でいじくりながらダンスホールへ急ぐやうに教室へ駈けこんでくる。

何を覺えてきたのだか確かなことは分らないが、とにかく外國を一まはりして來たこともあつて、坊主に關することだけしか知らないなどと考へては、大變失禮なことになる。

ところが、この先生は近頃思想が變つてきた。といふのは、誰の話にしても、坊主の學校の先生をして、一生の夢をその中へ封じこんで滿足してゐる筈はないが、この先生も近頃フツフツ坊主の先生に厭氣がさして、天下の政治家にならうといふ大きなことを考へはじめた。

かういふ派手な考へは、然し、この先生の肚の底に昔から潜んでゐたに相違ない。この先生が學者にならうと考へたのは、坊主よりは、坊主の先生が派手だといふ見當からであつた。その頃は坊主の學校の先生以上に派手な夢を走らせる自由がなくて、適〻口をすべらして天下の政治家になりたいなどと言ひだすと、墨染の衣ひとつで勘當になるのであつた。だから、かういふ派手な思想は浮かぶ餘地がなかつたのだ。愈〻學者になつてみて、天下の政治家になりたいといふ熾烈な望みは、ナポレオンの征服慾と同じ廣さで、みるみる天地にひろがつた。

念のために、分りきつたことを説明する愚かさを我慢していたゞきたい。といふのは、元來坊主といふものは、天下の政治家に大變良く似た商賣だといふことである。

あの坊主には素質がある、といふことになると、これはつまり、あの坊主はお經を覺える暗記力が旺盛だといふ意味ではない。尤もらしい話しぶりに妙を得てゐて、善男善女をまるめこむ素質があるといふことである。

尚その上にも素質があるといふことになると、これは卽ち、一山大衆の中で徒黨を結んで管長猊下改選のどさくさまぎれに一儲けする能力を藏してゐるといふ意味になる。だから坊主は政治家だ。一人前の坊主になるには、一人前の政治家と同じ修業を重ねたうへに、お經を讀むだけ餘計な手間がかゝるのである。

けれどもこの颯爽の先生に坊主の素質――つまり政治家の素質が果してあるかといふことに就いては私に斷言の確信がない。成程彼は辯舌まことに爽かである。そのうへ、態度が人を惹きつける。安つぽさがないのである。けれども私はかういふことを知つてゐる。つまり、善男善女をまるめこむには、相當地味な忍耐力がいる筈である。ところが、この先生には、地味なところが一つもない。たゞ派手である。さうして全然理想家である。理想政治といふことがあるから、理想家また政治家であるといふなら、無論彼ほどの政治家は尠い。

生憎坊主の政治家は先例が澤山あるのであつた。坊主の代議士といふのもあるし、坊主の大臣といふのもある。尚猥褻的なことには、坊主の學校の先生の代議士といふひどく似寄つた先例まであるのであつた。だから颯爽の先生はまつたく落付拂つてゐて、立候補の名乘りひとつで忽ち代議士になれるぐらゐに滿々たる自信をいだいてしまつたのである。

この先生の趣味として、この先生はオデンヤなどでチビリ〳〵と大酒飲んでゐることは嫌ひであつた。四疊半も性に合はない性質だつた。そこで寂然モーローの先生が一秒でも長く德利のそばに坐つてゐたい思想であるのに、この先生は無理無體に寂然モーローの先生をオデンヤから引ずりだして、巴里風の酒場へしけこむ習ひであつた。

そこは言ふまでもなく電髪の婦人がゐて、ショパンもジヤズも鳴りひゞいてゐる。

けれども、寂然モーローの先生は、かういふ所へ現れても、やつぱりどうもどこ一つとして颯爽とした素振りを見せない。やうやく此處へ辿りつく頃には常に益々モーローとして、一番手近かなソファーを見つけて忽ちグツタリのびてしまふ。けれども場所柄に順つて、ひとりの電髪婦人を膝の上にのせてゐる。電髪婦人も數あるうちには性來モーローとして無口の婦人もあるのであつたが、男の膝の上に乘つかつて二時間も默つてゐるのは既に性質の領域でなく悟道に關する問題である。だから、アラ煙草の灰が落ちたわよ、とか、何かしら喋らずにる

られない。けれども寂然モーローの先生は、凡そ天地に生あるものは運動するといふ法則を忘れて、瑜珈の斷食行者にしては少々だらしなくノビすぎて全然化石してゐるのであつた。

ところが、颯爽の先生は、これは又忙しい。彼は四五人の御婦人を周圍に侍らせ、談論風發、間斷なく喋つてゐる。さうして、時々、ビール瓶が鳴り響くほど、カラカラと笑ふ。さて周圍の御婦人にビールを差し、その都度、プロデットとか、チエリオとか、乾盃し、多忙である。と、講席の客をつかまへて迎へうち、自分の席へ拉し來り、又隣席へ割りこんで、談論風發、カラ〳〵と笑ひ、ビールをつぎ、プロデット、チエリオ、間斷たく乾盃してゐる。

彼の乾盃の相手にならない唯一人の人物といへば、それはたゞ寂然モーローの先生であつた。

寂然モーローの先生と、この二人がどういふわけで連立つて酒を飲みに行くのであらうか。世の中には色々人解き難き謎がある。友情とは何か。握手も乾盃も會話も不必要な無關心。さうかも知れない。握手だの會談などといふものは赤の他人か仇同志のすることだ。まことに二人の友愛は比類なく純粋深遠な交情であつた。

三

ところが、こゝに、更にも一人の親友がゐた。私は徒に讀者を混亂に陷らせてはいけないので、一人づつ登場を願つたわけであるが、先程御紹介に及んだ巴里風の酒場には、寂然モーローの先生と颯爽の先生のほかに、更にも一人決して缺けることのない一人物があつたのである。この三人は、二人だけで現れることもなければ、一人だけで現れることも先づなかつた。

この人物は坊主の大學校に縁故はあるが、[illegible]先生ではなかつた。或ひは明日にも先生になるかも知れないけれども、一生うだつが上らないかも知れない。彼はもう研究室に七年間も坐り通してゐるのであつたが、この調子では、もし先生にならなければ、さうして追ひ出されでもしない限り、遂に一生坐り通してとはの眠りにつくかも知れない。

この研究生は前記二先生の後輩で、年の頃は三十二三と思はれるが、常に落付き拂つてゐて、冷靜で、物に驚くことも尠く、これ亦立派な青年紳士であつた。

彼は至つて口數が尠かつた。無口といへば寂然モーロ

ーの先生も至つて喋らぬ生れつきであつたけれども、然し尙その職業柄一日數時間づゝ喋り暮してゐるに比べて、この冷靜なる居士ときては一日に數へる程しか喋つてゐない。然し寂然モーローの先生ほど、だらしなくはないのである。どこかしらに青春の生氣があつた。

たとへば今や自動車ポンプがサイレンを鳴らして學校の前を走つて行く。するとこの冷靜なる居士は何氣なく研究室の椅子を離れて、もとより同僚に一言半句物言ひかけることもなく、扉をあけ、扉をしめて、去つて行く。誰しも便所へ行つたのだらうと思ふことしか出來ないのである。

ところがこの冷靜なる居士は、靜かな足どりで階段を降り、便所の前も通りすぎて石段をふみ、街の方へと歩いて行く。もしも我々があとをつけてゐたすれば、さては煙草を買ひに行くのかとこの時やうやく氣がつくのである。

校門を出ると、[illegible]かに右へ曲る。けれども煙草屋を素通りして、折からバスが來たとすればバスに乘るし、生憎バスが來なければ、尙もまつすぐ歩くのである。こゝに至つて我々が、さてはと思ひ當ることには、冷靜なる居士が校門を出て曲る時に何氣なく行く手の空を見たことと、彼が椅子を離れる直前に學校の門前を右へ走つた自動車ポンプのサイレンがきこえたことを結び合せて、案外これは火事見物におでかけのところだな、といふ思ひがけない一事に氣付くのであつた。然しながら我々はこれを彼の歩きぶりから看拔いたのでなく、ほかの如何なる目的も想像しがたい理由によつて、かう考へてみるのであつた。

然し、この想像は正しかつた。否、多分、正しいのだらうと私は思ふ。

我々は日頃巷に自動車ポンプのサイレンを聞きなれてゐるが、その走り去つた方向に火の手を見たといふことがない。もし見たといふ人があれば、彼はまさしく神の恩寵を受け、奇蹟を行ふ人である。それ故普通我々はたとへ火の手が見えなくとも自動車ポンプの走り去つた方角に向つて二足三足走りかけてみることがないでもない。火の手に向つて走ることは今日も尙我々の宿命なのである。

けれども、火の手に向つて丁度手洗ひに赴くやうに靜かに歩くといふことは、我々の習慣ではない。且又、見えない火の手に向つて默々と歩くことも我々の習慣ではないし、たとへ自動車ポンプの走り去つた方角へ走るべ

スであるとはいへ、どことも見えぬ火元を指して靜かにバスに乘りこむことは、我々の血潮の中にも習慣の中にも決して見當らぬものである。

けれども、冷靜なる居士はバスに乘る。さうして、四ツ目か五ツ目あたりの停留場で靜かに降りる。もとより火の手が見えたわけではないのである。多分彼はやうやく諦めたのであらう。でなければ、四ツ目か五ツ目あたりの停留場が彼の夢と青春の限界に當るのかも知れない。

バスを降りて、冷靜なる居士はあたりを見廻す。それは火の手を探す爲ではないらしい。多分見知らぬ街の様子と自分の立場を結び合せる何かの手がゝりを探してゐるのだ。さうして彼が降りた街には常に平和な營みがひろげられてゐた。子供達は店先の舗道の上で遊び、オカミサンも亦店先の舗道の上で喋つてゐる。このとき彼は、はじめて煙草を買ふ。さもなければ、リンゴを買ふ。五ツほどリンゴを入れた袋を抱へて、さうして彼は再びバスに乘るのである。便所から出て來たやうに、研究室の扉をあけて、七年間の自分の椅子に坐るために戻るのだ。

かういふ彼の行動から判斷しても、彼は案外アツサリした氣質だといふことが判るのである。オデンヤで寂然モーローの先生の相手をつとめて唯徒に德利を林立させてゐる最中に、近所の横町で喧嘩がある。彼はやつぱり何氣なく盃を置き靜かに立つて横町の方へ歩いて行く。あの店、この店、隣の家から人が出て來て、忽ち彼を追ひ越して走つて行くが、それに釣られて一分一厘腰を浮かせることもなく、自分のペースで靜かに歩いて行くのである。かうして彼が横町へつくと、すでに喧嘩は終つてゐる。時にはすでに人影の唯ひとつすら見當らぬこともあつた。けれども彼はその場所を突きとめ、靜かに振りむいてオデンヤへ戻る。

かうしてこの冷靜なる居士は折にふれて火事見物にでかけるけれども、火事や喧嘩を認めて歸つて來たことが殆んど無いに近かつた。それで果して彼の心は滿たされてゐるのか？　これは誰にも分らない。然しながら我々は次のやうに推定せざるを得ないのだ。彼の心が滿たされないとするならば、彼の足は走るであらう。すくなくとも、彼の足は、走りたい誘惑にかられるであらう。彼は顔の表情を誤魔化すことはできるにしても、足の表情を誤魔化すことは不可能だ。だから彼は心が滿たされてゐるのであらう。火事や喧嘩そのものを認めることは必

ずしも彼の願望ではなかつたのだ。彼の夢と青春はそれに向つて歩くことを命じるけれども、その實體をまのあたり認めるために急ぐことは命じはしない。だから彼は研究室に七年間も坐りつゞけてゐるけれども、學者や先生になりたいといふ願望は、我々の愚かなる野心によつて、自分を彼に當てはめてはならぬであらう。つまり彼は限界のある執念と、アツサリした氣質とを持つてゐたのだ。

だからこの冷靜なる居士は酒場へ行つて、寂然モーローの先生が女を膝にのせたまゝ女を膝にのせた意味を忘却してのびてしまつてゐるやうなだらしない振舞ひは見せなかつた。

颯爽の先生に挑まれゝば、躊躇なく乾盃に應じ、女と一應の話もし、凡そ物事に卽した意味を忘れるといふことはない。至つて禮節正しいのである。そのうへ御婦人の申込を受けさへすれば、たちどころに立上つてダンスもするし、所望によつては巴里風の小唄をうたひ、決して啞でないことを立派に證明するのであつた。

が、この三人の若い學者が、そこで如何なる目的によつてこの酒場へ通つてくるかといふことになると、誰にも意味が分らなかつた。彼等は資金が豐富とみえて、大概二日に一夜づゝ通つてくる。もう三年も續いてゐた。寂然ローローの先生と颯爽の先生にはそれ〴〵ふさはしい令夫人があつたが、冷靜なる居士は獨身だつた。けれども冷靜なる居士ですら、敢てどの御婦人に懸想してゐる如何なる素振りも示さなかつた。

かういふお客は酒場の親爺にとつて親友の値打があつたけれども、そこに働く御婦人達にとつてはトンチンカンで意味をなさない。

この三人が現れると、番の女はそれ〴〵覺悟をかためなければならないのである。一人の女に寂然モーロー先生の膝の上で二時間あまり死んだ時間を持たなければならないと覺悟をかためる。又ひとりは對歐策とか對支開發政策などといふ遠大な計畫をたてつゞけにまくし立てられ間斷なくチエリオとかブロヂツトとか叫びをあげ、時々は御愛想に笑醉のひとつぐらゐは立てなければならないと覺悟をかためる。さうして最後の一人の女は冷靜なる居士にダンスを申込み椅子につまづいて靴をいためアラ平氣よなどと凡そ心にもないことを言はなければならないと覺悟をかためる。——

さて、私が御紹介に及んだのは、今から約三四年前の——つまり一九三六、七年頃の銀座の夜の一角の話であ

つた。わづか四年足らずのうちに、時勢はまつたく一變した。

支那事變が起り、地球の裏側では二回目の歐洲戰亂がまき起つた。私達がふと「今」といふ瞬間について考へる。恐らくあらゆる「今」といふ瞬間が、どこかしらの戰場で誰かしら血潮を流した瞬間だ。それは我々の同胞であるかも知れない。ロンドンの市民であるかも知れず、ドイツのパイロットかも知れないのだ。

かうして四年の歳月が流れ、突然話は地球の最も新しい或る一日へ飛ぶのである。

波子

一

「死花」といふ言葉がある。美しい日本語のひとつである。傳藏自身がさう言ふ。さうして、傳藏が、死花を咲かせるなどと言ひだしたのは、波子の嫁入り話と前後してゐた。

五十をいくつも越してゐたい年であるから、まだ死花には早やすぎる。けれども、芝居もどきの表現が好きな父で、その一生も芝居もどきでかためてきたから、うつかり冗談だと思つてゐると、何をやりだすか分らない。けれども、波子は、ばからしかつた。やる氣なら、默つて、さつさとやりなさい、と思つた。

母も、やつぱり、ばからしがつてゐると見え、苦笑し、ながら、父をたしなめてゐる。けれども、母はやがて、泣きだしさうな顏になつたり、失笑したり、表情を失なつてしまつたりする。すると、傳藏は、怒つたやうな聲になる。先に默つてしまふのは母であつた。

それを見物してゐる波子は、母が氣の毒だとは思はずに、父が可哀さうになるのであつた。年寄の冷水はおよしなさい。今更家名に傷をつけたり、財産を失ひでもすれば波子たちが可哀さうではありませんか、と、大概最後にいつぺんは、母がかういふ。それをきくと、波子は必ず、腹が立つた、私のことなら、餘計なお世話よ、と波子は肚に呟くのである。

死花を咲かせるとは、どういふことだらう。母に訊いてみる。投機に手を出すことだ、と母は言ふ。又、代議士になりたいのだ、と言ふこともある。ボロ鑛山を買ふ氣なのだ、と言ふこともあつた。要するに、母にも、得體が知れないのである。

傳藏は、仕事盛りの年頃に小膽で、これといふ大きなことはしなかつたから、大きな失敗もなかつたが、時々投機や政治や事業に小さくチビ〳〵と手を出して、合せてみると、相當大きく先祖代々の財産をすりへらした。女遊びもし、さういふことでも、大概、手切金をまきあげられて、先祖代々の財産をへらした。

長男を北アルプスの遭難で失つたのが、七年前で、そのとき、彼の生活が、一應、ガラリと變つたのである。投機も、やめてしまつた。政治も、やめた。女遊びも、やめたのである。酒さへ量が少くなつて、めつきり、老けてしまつたのである。

萬葉集だの、徒然草だの、芭蕉だのといふものを耽讀

して、俄か隱居の生活をやりはじめ、紅葉狩だの寺詣だの名所遊歷といふやうなことに凝りはじめ、波子も、稀には、お供をした。女房子供をひきつれて、諸國の料理を食べ歩いてきたことなどもあつた。金のかゝることと言へば、書畫骨董の類ぐらゐで、結婚して二十五年、はじめて安心したなどと、母の言ふのを、波子はきいた。

「山にゐまかりし我子にさゝぐ」といふ歌があつて、開卷一番、

さんま食ひなれ思ふ秋もふけにけりわが泣く聲に山もうごかん

などと詠んでゐる。

山はさけ海はあせなん、といふ名高い歌は、波子もかねて知つてゐたが、さんまを食つて泣き山をゆりうごかしてやらうといふ、實にどうも横着で、山の枯葉一枝ゆりうごかす實感も、なささうである。親父のやることは、風流まで、芝居もどきだと、波子はこれも、ばからしかつた。

二

死花を咲かせるなどと言ひだすやうになつてから、一時遠のいてゐた連中が、繁々と遊びにくるやうになつた。傳藏も亦、頻りに外へでて、呑んでくる。

昔の友達といへば、大概、鄕里の陣笠だの、先祖代々の財産をどうやら土俵際で持ちこたへて東京へ亡命してくる連中で、そのほかに、院外團のやうなのや、年中カバンをぶらさげて歩いてゐる男、金銀を探して年百年中山又山を流行する男、支那陶器の鑑定家、幇間のやうなものもある。奇妙奇天烈な連中が、入りかはり立ちかはり、やつてくるのだ。

ところが、この連中は、年中、用もないのに人を訪問してゐるものだから、ついでに娘の御機嫌などもとりつけてゐるものと見え、野暮かと思へば變通自在で、波子は內心この連中を輕蔑しながら、然し、この連中と話をするのが、決して不快ではないのであつた。

中に一人、謠の半玄人で、ブローカーのやうなことをやつてゐる楠本といふ中老人がゐた。流石に謠の半玄人で、人品骨柄、堂々たるものである。楠本にも年頃の娘があるさうで、寶塚のことだの、西洋映畫のことだの、變にくわしく知つてゐる。訪ねてくると、必ず、波子の部屋へも顏出して、一席、御機嫌をうかゞふのである。

「どうでんね。ちかいうち、いちど寶塚の方へ、お供せ

んならんと思ふてんのやが」と言ふ。楠本は關西の生れである。

「格子なき牢獄は、どうや。あれは、伴奏が、しんみりとして、却々えゝ」

楠本は、きまつて、波子の衣裳、着つけ、化粧などをひとわたり讃めて、時々、着物にさはつてみたり、手を掴つてみたりする。はじめ、波子は、なんの氣もなかつたが、衣節に觸り方が多くなつたり、手を握る時間が長くなつたりするので、忽ち、いやになつた。さう氣がつくと、楠本の眼つきが助平たらしくて、やりきれなかつた。それ以來、さういふことが始まりさうな氣配をみると、さりさと部屋をとびだすことにした。然し、楠本は平然として、報みながら逃げ失せにけり〳〵などと言つてゐる。波子は立腹し、扉に鍵をかけて、散歩にでかけてしまつたことがあつた。一時間ぐらゐして歸つてきたら、楠本はまだ悠々と部屋にゐて、鍵をかけられたのを幸に、机の上のノートブックだの手紙だのを見てゐた。机の中も、ひそかに探きまはしたのである。寫眞が一枚なくなつたのに氣付いたのは後の話であつた。

この男は、又、波子の部屋へくるたびに、必ず、お犀さん、どうどす、四五人、心當りがおまんのやが、と言ひだすのである。

波子に言ふばかりではなかつた。父にも、母にも言つた。年頃の娘のある家庭で、かういふ話は、時候見舞の挨拶のやうなもので、波子もうんざりするほど聞いてゐたから、氣にもとめたことはなかつたし、第一、あほらしい楠本の持込んできた犀さんなど見向きもしたくなかつたが、楠本は、實は眞劍に、傳藏を口說きはじめてゐたのであつた。

波子の緣談が急遽に一家の話題となつたのは、この時からのことであつた。

三

傳藏一家の遠緣に當る人が持込んできた候補者で、同郷の出身、三十歳、技師をしてゐる遠山といふ青年であつた。母の葉子が、すぐこの話に乘氣になつたのは、そのころ、楠本の口說が執拗を極めてゐて、傳藏が、いつ、その氣になるか測りがたい情勢であつたので、その對抗といふ氣分もあつた。

葉子は、傳藏の死花ぐらゐ厭なものはないと思つてゐた。死花といふ言葉だけでもゾッとするぐらゐで、その

死花をとりまいて集つてくる有象無象が、内心、最も不愉快きはまる存在であつた。この娘のことまで、この通中とつながりを持つに至つては――堪へられないことである。折から、遠山青年の話で、忽ち乘氣となり、ともかく交際させてみようといふ傳藏の贊成を得た。傳藏も亦、この話には、相當、乘氣を見せだしたのである。

修身の「ヨイコドモ」のやうな男が實在しようなどと、波子は夢にも考へてゐなかつた。ところが、こゝに、現れたのである。しかも、それが、自分のお犀さんだといふに至つて、黙からず、狼狽した。實に遠山青年は酒・煙草をのまず活動寫眞や芝居は義理によつて三年に一度ぐらゐ見物し、女の子には目もくれたことがない稀世の鍾馗居士であつた。

親の命令によつて、二人は時々散歩したが、話といふものが、まつたく、なかつた。遠山青年は音樂に趣味もなく、スポーツに興味もなかつた。と言つて、デイーゼルエンヂンに就て話をもちかけるわけにはいかないから、早慶戰ぐらゐのことは厭でも話しかけずにはゐられない。すると、さうですか、うちの會社にも、野球だのフットボールのチームがあるやうです、とだけ言つた。あるとき、二人で映畫見物に行くと、遠山青年は長蛇の列を尻目にかけて、それが切符を買ふ順を待つ人々だとは微塵も氣付かずに、横から手をだして、ケンツクを食つた。ケンツクはとにかくとして、蜒蜿長蛇の列が映畫見物のためであるとは！　彼の落きは深刻であつた。さて、映畫見物後、感想をもとめると、實面の横字を讀んで急いで寫眞を見直さなければならないので、非常に骨が折れた、とだけ答へた。映畫をみて、さういふ感想に就てだけ論じ合ふのでは、助からない。

遠山青年は近世稀な聖人である、と、波子は堅く斷定した。然し、とても一緒にくらす勇氣はなかつた。遠山青年と結婚するくらゐなら、孔子樣の寫眞を壁にはつて、尼さんになる方を選びます、と母に答へて、怒られたのである。

もと〳〵波子は結婚したいとは思はなかつた。二十一であつたが、二十三か四ぐらゐまで、映畫だのレビューだの見て歩いたり、友達と遊んだりして、それから結婚したいと思つてゐた。どうせ、しなければならぬ結婚であるから、それまでに、あきるだけ、遊びたかつた。

結婚の話がでるたびに、波子は、この考へを、率直に、父母に語つた。けれども、葉子は、さういふ思想を眼中に入れなかつた。とるに足りぬ流行思想だと言ふの

であつた。

「いつ間違ひが起るか知れたものでないから、早くかたづいてもらひたいよ」

と、あからさまに言ふのである。

そんなときの、娘の言葉などはてんで無視して、冷然と自説を押し通すときの母親ほど、綺麗に見えるものはなかつた。波子は、ほれぼれとするのである。四十五だといふのに、三十五六、もつと若く見えるほどで、ぬけるほど色が白く、端麗きはまる輪廓である。受け唇が、童女のやうに、あどけなかつた。纖にさはるほど、綺麗だと思つた。

この家庭へ出入の人々も、波子を綺麗だと言ふよりも、葉子の美しさに驚く人が多かつた。端麗な眼鼻にどことなくあどけない幼さが殘り、清らかな色情を漂はしてゐる。支那陶器の鑑定家といふ男など、酒に醉ふと、私は奥様の美を尊敬致します、などと鑑定した。

波子は母に腹が立つと、母の美しさが、まづまつさきに、意識させられて、いやだつた。いま〳〵しく、さうして、たしかに、嫉ましかつた。

父と爭つて、默つてしまふ時の母もやつぱり、特に美しい母であつた。特に美しい母であるとき、波子はきつと嫉ましかつた。さうして、母が氣の毒だと思はずに、死花を咲かせたいといふ父の方がいぢらしく、可哀さうになるのであつた。

死花といふ言葉についてだけ言へば、これはたゞばか〳〵しいばかりであつた。芝居もどきで、わづか四五人の家族相手に、せいぜい百人ぐらゐの知人を相手に、身につかぬ演技をして、贋の一生をすりへらした父。今となつても、まだ、死花などと言ひだして、うけに入つてゐる。ばか〳〵しいのである、けれども、ふとつた膝の上にのつかつてゐる小さな握り拳などを見て、ふと、父がいとしくなるとき、平凡で、小膽で、氣の弱い父、とても可哀さうになつてきて、ひと思ひに、死花を咲かせてやりたいと思ふことが、時々あつた。

思ひきつて、大きなことをやりなさい、家も、財産も、名譽も賭けて、みんな粉微塵にしてしまひなさい。ひと思ひに……時々、波子は、そんな風に叫びたくなつた。

四

あるとき、食事の最中に、やつぱり死花のことで言ひ爭つて「もう、孫のできる齢ぢやありませんか。年甲斐もない」母が叫んだ。父も母も、それきり默つて、重たい食事を運んでゐる。

波子だけは平然として、二人の顏をチラチラ見ながら、然し、母に腹を立てゝゐた。

孫ができる——孫なんか、できるものか。誰が、達山なんて朴念仁と結婚してやるものか。

その日、食事を終へて、外出する父に着代へさせたのは、波子であつた。波子は、着代へさせながら、父に言つた。

「死花つて、何をするつもり」

「……」

父はふりむいて波子を見たが、そこに「女」の笑顏を見ると、狼狽した。傳藏の眼は、怖しく、光つた。

「いゝのよ。教へてくれなくとも」波子は甘えた。「だけど、パパ。思ひきつて、やつちやつて……」

波子は、自分では氣付かずに、眼がギラギラ光つた。

「私のことなら、かまはないわ。文なしになつたつて、私は、平氣よ」

「馬鹿」

父は、呆れた聲で、波子の方を向かずに、叱つた。さうして、ひどく不機嫌になつて、出がけに、母に當りちらして、行つてしまつた。

傳藏が腹を立てたのは、ひとつには、自信がなかつたせゐでもあつた。子供の時から小心で、これといふ大きなことには、どうしても決斷のつかない性分だつた。人並以上のことを時々やりかけて、いつも、自信がなかつたのである。

長男を北アルプスで失つて、心機一轉、風流三昧の生活をはじめたのも、積り積つた失敗と悔悟の數々が、もはや、堪へがたい時だつたのだ。息子の遭難が、丁度いいキツカケとなり、彼を救つてくれたのだ。なんとかして、足を洗はなければならない時であつたのだ。お前のおかげで、助かつた——後日、傳藏は、息子の靈に、かう呟いたほどである。

さうして、風流生活が始まつた。

それから七年、彼としては、よくつゞいた方である。性來の浮氣性で、脂ぎつた、賑やかなことにふつゝり訣別できる傳藏ではなかつた。再びヤマ氣が頭をもたげる。死花を一花咲かせて、といふわけであるが、かう宣言して、そのことで毎日葉子と爭ひながら、然し、性來

の小心で、一番不安で前進の勇氣がないのは、實は、誰よりも本人自身であつた。やらないうちから、すでに、自責と悔恨が、ちらついてゐた。

風流三昧が、何より性に合つてゐたのだ……すでに、傳藏は沁々とかう考へることがあつた。

娘が、美しい小蛇のやうな「女」であらうとは。傳藏は胸に針の痛さを感じた。驚くほどの色情を見たのであつた。

思ひきつて、やつちやつて……と言ふ。私のことならば……傳藏は、眼をとぢて、救ひを神に求めたかつた。息づまるからだをうねらせて、燃える言葉を吐いてゐる。ギラギラ光る眼であつた。

脆いほど、鋭く、かたい。いつ、崩れ、いつ、とびちるか、分らない。崩れゝば地獄へおちる。傳藏は、思はず、眼をとぢずにはゐられなかつた。

あの色情を北アルプスで失つた方が、俺は、よつぽど、助かつた……傳藏は、思はず、呟いた。

何よりも、娘をかたづけることが、第一である。遠山藤藏居士に限る、彼は思つた。否應なく、あの青年に押しつけてしまふに限る、と肚をきめてしまつたのだ。

その日から、死花をめぐる相談ごとのドタン場へくると、傳藏は一瞬沈默して、何氣ない風をしながら、實は必ず波子の顔を浮べて、然し、それに就て何か考へをまとめるといふわけでもなく、たゞ漠然と、餘裕をつくることにしてゐた。さうして、

「娘が、色々と、私のことを心配して……」傳藏は、非常に爽やかな笑顔をして、人々の顔を見廻す。「年寄の冷水だ、と、ひやかすのです。またつく、孫のできる年で、あんまり無茶な、青年のやうな勇氣にはやるのも大人げないと、だん〳〵思ふやうになつてきて……」

彼はひどく好機嫌になつてきて、人の思惑に頓着なく、自分勝手な話をはじめる。さうして、その結びに、女房に泣きつかれるのは驚かないが、娘の意見といふものは、こたへるものだ、と附加へて、したり顔になる。益々機嫌よくなつて、フツハハツハと笑ふのである。

五

傳藏のお供で、母と三人、京大阪から中國九州まで食べ歩いたとき、波子は家族といふものに就て、この人生の、いや、地球の土臺のやうな心棒が、案外たよりない足場のうへに出來上つたグラグラした安普請のやうな氣

がして、ふと、一番だいじな信念をなくしたやうな頽廢になつた。

人生に疲れといふやうなものがある。さういふ魔物めく實體を、その時まで、知らなかつた。

波子は、家庭といふものに就て、自分がこれから結婚し、さうして作る家庭。それに就ては、不安もあれば、希望もあつたけれども、自分が生れ、さうして、育つた家庭。これは、まつたく、別のものだ。それは地球の自轉のやうに、意識することも疑ふことも不可能な、微動だもしない母胎だと考へてゐた。

この家庭が、幸福かどうかは、とにかくとして、平凡ではあるが、平和であると考へ、いや考へもせず、これは、たゞもういふものだと信じきつて、疑はなかつた。

考へてみれば、家族づれの遊山といふやうなものを、この家族は、殆んど經驗したことがなかつた。ピクニックも、芝居見物も、先づ三人そろつて出掛けたといふことは、殆んどない。

波子は、自分だけ、友達と映畫を見たり、買物へでかけたり、好きなものを食べに行つたりして、それで充分慰しかつたから、よその家族が一家そろつてピクニックだの芝居だのと出掛けて行くのを見聞しても、まつたく羨しいと思ふことがなかつた。けれども、それが、憧しい筈だといふことも、決して疑つてはゐなかつた。

それは波子が女學校を卒業した翌年の春であつたが、さうして、今から思へば、それが丁度傳藏の風流三昧の最後の訣別になつたけれども、突然、一家三人で、關西へ食道樂の旅にでた。

汽車の窓を早春の畑が走り、青々として海原もひらけ、さうして風が吹いてゐた。波子はそれを眺めて、綺麗な景色には、いつも、綺麗だと思ひながら、然し、この旅行のあひだ、一番はつきり眺め續けてきたものはたゞ、蕭々と吹く風であつた。それは直窓を吹くばかりでなく、目をとぢれば目と目とのあひだ、又、物思ひのあひだ、愁ひと愁ひのあひだをわけて、涯もなく、ただ、吹いてゐる。西からきた風でもなかつた。たゞ、風。

父と母、さうして、生れた家。——それは、波子にとつて、別々のものでなかつた。いつも、三つがひとつのもの。さうして、それだけが、ほかの世界と對立してゐた。さう考へたわけではなく、昔から、當然、さういふものであつた。

然し、生れた家を出て、汽車の中で、すでに波子は、奇妙な現實にふと目覺めた。そこに、父はゐなかつた。

たゞ、父とよばれる一人の知らない男と、母とよばれる一人の知らない女とがあた。

父が今、何を考へてゐるか、母は知らない。母が今、何を考へてゐるか、父は知らない。……さういふことが、なぜか、沁みるやうな切なさで、わけもなく考へられてくるのであつた。得體の知れない他人同志が、今まで、何十年も、一緒にくらしてきてゐる——疑ふことのできない事實なのだ。さうして、いつか自分といふ子供が生れ、これが又、子供とよばれる他人にすぎない。自分が今、このやうに考へてゐることすら、二人の他人は知らないではないか。……汽車は畑を走つてゐた。子供達が汽車に手をふり、叫んでゐる。波子は、突然立ち上つて、窓をあけて、蜜柑の網袋を子供達に投げてやつて「バンザイ」手をふつた。膝にのせてあつた雜誌が落ち、お茶がひつくりかへつた。

「氣違ひのやうに。みつともない……」

母とよぶ知らない女が、たしなめる。波子は笑ひだす、窓外は春の花曇り。眼をとぢると、眼をつきぬけて、蕭々と風が吹いてゐる。さうして、波子は。風を見た。知らない人の心をつなぐ、暗い、ものうい風を見た。その風の吹き雪る涯がない。その風につながれた心のむすぶことがないやうに。

大原寂光院へ行つたとき、それは四月の始めであつたが、もう祇園では花見のよそほひであつたのに、雪がチラチラ降りだした。

手をあげて合圖をすれば、バスはどこでも止つて乘せてくれるといふ話であつたから、清流づたひに、八瀬へ戻る道を歩いた。雪がチラついてゐるといふのに、傳藏は無理な風流が好きなのだ。比叡の山々は、たれこめた雲にかくれて、半分見えなかつた。

溪流がまがる所に茶店があつて、素朴な立札があり、「ちよつと休んで行かしやんせ」と書いてある。ちやうど、そのとき、溪流の藪のなかで、沁みるやうに冴えた聲で、鶯が啼いた。たれこめた雲、冷え〳〵と流れる山氣、さうして、溪流にふりこむ雪。けれども、それらの鋭い冷めたさにもまして、さらに冷めたく冴えきつた鋭く目覺ましい一聲だつた。

傳藏は、立ち止つて、首をひねつた。

「おい、ちよつと……」

傳藏は、又首をひねつた。

彼は今、休んで行かしやんせ、に應じる名句を思ひださうとしてゐるのである。茶店へズイとはいりながら、

その名句と共に乘込んで、妻子や茶店を賑はしてやらうといふ肚なのだ。あひにく、うまく、浮かばない。雪の降りしきる山中で、さう〳〵首をひねつてゐるわけにもいかない。あきらめて、

「ちよつと、休んで、行きヤンしよう」

と、はいつて行つた。

何事に首をひねつてゐるのかと思つてゐた二人は、行きヤンしよう、に噴きだしたが、鶯のあの一聲に比べて、人の言葉のあまりにも甚しい貧しさに、波子は胸をつかれた。

「パパが下手くそな洒落を言ふから、もう、鶯も、啼いてくれない」

「アッハッハ。鶯も啼かしやんせぬかい」

雪が、急に、ひどくなつた。もう、歩けない。茶店で、バスを待ち、傳藏は、山をつゝむ垂れこめた雲を見上げ、やがて、口をあけて、うと〳〵してゐる。葉子は、シバ漬といふ名物を買ひ、風呂敷に包み、やがて、その漬物を好みさうな知人の名を思ひだして、奥に向つて、改めて追加の註文をする。それを風呂敷に包み直して、又、知人の名をさがしてゐる。

「志田さんの御家族は、いくたりかしら。あなた……」

葉子は、ふと傳藏に話しかける。傳藏は、びつくりして、目をさます。

「なんだい。え？　バスが來たのぢやないのか」

「いゝえ。この寒さに居眠りして、風をひくぢやありませんか。志田さんの御家族は幾人。お子さんが、四人、五人？」

「さて。志田さんの子供は、と。五人ぐらゐだらう。それが、どうした」

葉子は、それに、答へようともしない。それよりも、これが大事だといふやうに、又風呂敷を包み直してゐるのである。たゞ、思ひついて、きいてみただけなのだ。

傳藏も亦、強ひて訊いてみようとはしなかつた。

「おや。雪が、つもりだしたぢやないか。ほら、笹の葉が、まつしろだ」

傳藏は叫ぶ。

「……」

葉子は、顔をあげようともしない。傳藏の茶碗に、茶をついでゐる。……

父も母も、どうして、こんなに、平然としてゐられるのだらう。……波子は、奇妙に、胸苦しかつた。用もなく、居眠りの人をよびおこす。居眠りの人は目を覺まし

て、然し、べつに、腹を立てた氣配もない。てんてんが、バラバラのくせに、どうして、こんなに、平然と、安心しきつてゐるのかしら。

夫婦になる。子供を生む。――夫とよばれ、妻とよばれて、そのよびかたに安心しきつて、身をまかせてゐる。夫とよぶ知らない男と、妻とよぶ知らない女が。

何もかも、てんでんにバラバラだ。溪流の藪に鶯が啼いてゐる。茶店に、立札がある。雲はたれ、いちめんに、雪が降つてゐる。すべて、それがバラバラのやうに、夫とよぶ知らない男と妻とよぶ知らない女と、子供とよぶ知らない娘と、それが、てんでん、バラバラに、集まつてゐるだけである。……

それにしても、あの溪流できいた鶯は、はりつめた山氣すら鋭くつんざき、めざめるぐらゐ美しい一聲だつた。さうして、あの雪のふる溪流も、あれは都から何里も離れない所だといふのに、人の訪れを映したことすらもない碧氣にみちた色調だつた。

だが、その鶯も、啼聲の美しかつたことだけは忘れてゐないが、もはや耳には、思ひだせない。さうして、溪流の深い色も、心の底に、もう、色あせてしまつてゐた。たゞ、今も尙、忘れることのできないものは、旅のあひだ吹きつゞけた、あの涯のない風であつた。からだのまはりに何物もなく、縋るべき一人の知りびともなく、靡々と吹く風のみがあつた。眼をとぢれば、眼にその風が、見えてゐた。さうして、今も吹いてゐる……。

六

遠山青年の最後の話をもとめられたとき、波子は、兩親に、堅い拒絶を表明した。

酒・煙草ものまなければ、映畫を見たがりもしない。會社のほかに、何ひとつ、これといふ道楽を持たないといふこと――母が、それを、世に稀な美德として推奬するのは無理もないが、一生を道楽ですりへらしてきた父が、本氣でそれを賞美し、推奬しようとは、波子は信じることができなかつた。

父がこの縁談に乗氣なのは、娘をもつ父親のかういふ話に處すべき一應當然な態度にすぎなくて、底を割れば、もつと寛大な、融通もきゝ、冗談もまじつてゐると思つてゐた。あんな藍殿居士、とても私の性に合はないわ、と言へば、アツハツハ、さうか、と言つてそれで濟んでしまふことだと思つてゐたのだ。

だが、傳藏は、むしろ母よりも、執拗だつた。波子の拒否を受けとると、最も諦めわるく、最も煮えきらぬ態度で、應じたのである。

厭なら、厭でなくなるまで、いつまでもかうしてゐるぞ、といはぬばかりの、底に執拗な心をかくして、何かといへばチクチクとそれにふれる。凡そ割りきれぬ肚の底を、さりげない顏につゝんで、いつも、時機をまつてゐる。

波子は、ふと父に就て、考へ直した。ふだんは至極ザツクバランな、悟りきつた外面を見せながら、いざ事に當ると、小心で、不鍛錬な肚の底をのぞかせる。今迄は、波子と父との關係では、不鍛錬な肚の底を見せられるほど重大な事に當つた例がない。だから、外面の呑みこみの良さに氣をよくして、これが父だと思ひこんでゐたのであつたが、輕率きはまることであつた。父は小心翼々として、執念深く、煮えきらない人である、と波子は氣付いた。

私の意見に不服なら、自分の意志を押しつければいい。その方が、どれだけハツキリして、清々するか分らない。波子は思つた。私は私で、私の意志をハツキリ、押し通すだけの話だ。――

それにしても、趣味の生活に生き甲斐を見てゐる管の傳藏が、何ひとつ道楽のない青年を、青年の中の寶石のやうに言ふ意味が、波子には、呑みこめなかつた。

羽目を外すこともできる人、けれども、限度をわきまへてゐる人、さういふ人が好ましいのだ、と波子は父にハツキリつげた。

ある日。母がゐない日であつた。女中が波子を呼びに來て、旦那樣がお呼びです、と言ふ。波子は、父の書齋へ行つた。

傳藏は、書齋の、ちやうど中央に坐を構へて、波子のくるのを待つてゐた。膝のあたりで指を組んで、坐禪といふ構へである。波子が顏をだして挨拶すると、頷いて、それから、しばらく、目をとぢてゐた。坐れ、とも言はない。目をとぢてはゐるが、別に、むつかしい顏でもない。泥鰌髭が笑つてゐるやうなたのしいもない顏である。

「何の御用」

波子は、うんざりして、再び、きいた。壁にもたれて、窓を見ながら。

傳藏は目をあけた。と、急に、モノモリと立つて、いつになく莊重な顏をしながら、

「ちよつと、來てくれ」
波子をともなつて、幾つか部屋を通り、佛間へ來た。おや〳〵。これは、お芝居が深刻なことになつた、と、波子はなかば觀念した。
「ちよつと、こゝへ坐つてくれ」
波子を坐らしておいて、傳藏は佛壇の扉をあけ、燈明をともし、珠數をつまぐり、ピタリと坐つて、しばらく念誦してゐたが、それを終つて波子の方に向き直つた時には、まつたく重々しい顔付に變つてゐた。傳藏は、先づ、肚に力をいれ、坐り方を吟味した。
「御先祖御一同樣の前で、あなたに頼みたいことがあります」
傳藏は、かう言つた。言葉の重大さに調和する顔付を崩すまいと、苦心してゐるのである。眼玉を大きく見開かうとする意志と、開かせまいとする志向と、二つのものが入りみだれてゐる證據には、たうとう半眼に釘づけになる。けれども、大いに波子を睨みすくめる心掛けでゐるらしい。やがて、萬策つきはてるのは、分りきつてゐるのである。あなた、だの、あります、だのと、敬語を使つて、いつたい、何事をやりだす目論見なのであらうか。

と、傳藏は、突然、ピタリと、兩手をついた。驚くべし、娘に向つて、敬々しく、頭をたれたのである。そればかりではなかつた。頭を疊にすりつけて、殆んど一分間ぐらゐ、平伏してゐる。
「どうか、遠山さんと結婚して下さい。父の一生の、お願ひです」
父は、平伏しながら、叫んだ。ふりしぼつたやうな聲だつた。まさか、泣いてゐるのではないだらう。
波子は危く噴きだすところであつたが、然し、實際冗談もひどすぎる。母が見たら、泣くであらう、と波子は思つた。いつたい、これは、どう始末すべきものやら。手のほどこしやうもない。まさかに、父は氣が違つたのでもないだらう。
傳藏は頭をあげた。波子は、こまつた。どんな顔付をしたら、いゝのやら。仕方がない、黙つて、父を、みつめる。實際、父をみつめた。いつまでも、みつめた。
傳藏も、波子を、みつめる。然し、荷のすぎた努力である。彼はたうとう、眼をとぢてしまつた。
波子は、答ふべき言葉が、分らなかつた。問題は、このやうな話の持ちかけ方によつて、左右さるべき性質のものではない。それだけは、分るやうな氣がした。答ふ

べき言葉が分らぬ以上、傳藏が何を言つても、黙つて、かうして坐つてゐよう、と決心した。もう、いゝ、と父が言ふまで、いつまでも坐つてゐる。そのうちに、答ふべき言葉が見つかつたら、返事をするまでの話である。
どれぐらゐの時がすぎたか、こんな稀代な場合にのぞんで、とても時間の測定などは及びもつかない。五分だか、二十分だか、とても分らぬ。御先祖御一同樣が、どんなお顔で御覽になつてゐるだらうか。波子は、まつたく、がつかりした。
丁度いゝぐあいに、そこへ女中がやつてきて、楠本の來訪をつげた。なるほど玄關の方に當つて、龍りいでたるは〳〵、と險る聲がきこえてゐる。
女中の取次をうけて後も、傳藏は、しばらく、身動きもしなかつた。こゝが大切なところである。傳藏は、それを考へてゐたのであらう。と、再び彼は平伏した。頭を疊にすりつけた。やゝ、長い時間。さうして、立上ると、一言もあとに殘さず、又、目もくれず、立去つたのである。
父の聲音が消えてしまふと、波子は、突然、めまひがした。あらゆる力がぬけて行く。あらゆる思考が、ぬけて行く。さうして、小さな悲しさが、胸の底に、ひとつ、殘つた。
波子は、孤獨をだきしめて、長いこと、坐りつゞけた。さうして、父に答へる言葉が、だん〳〵ハツキリと分つてきた。御先祖御一同樣に誓つて、どうしても遠山青年と結婚しない、と心に堅く、きめたのだ。
波子は佛壇につゝましく、合掌し、燈明をあげ、鉦をならした。
「ワタクシはキンゲン居士と結婚しなければなりませんか。ワタクシはキンゲン居士がキラヒです。ですから、ワタクシはキンゲン居士と結婚イタシマセン」
ねむたくなるやうな、ものうさであつた。

七

遠山青年の家へ遊びに行つてくるやうに、と吩咐かつた日は、映畫見物に行つてしまつた。遠山青年が遊びにくるといふ朝は、普段着のまゝ、女中の下駄をつゝかけて裏口からでゝ、隅田川へ、ボート競走を見物に行つた。
その日は、夕食も外でたべて、人々の寢しづまる頃に歸つて來た。友達も誘はず、一日、ひとり、歩きくらして來たのである。

どこへ行つても、人がゐる。人、人てある。人のゐない場所はなかつた。人の一人もゐたい所へ行つてみたいな、さう考へて、歩いてみた。けれども、人は、どこにでもゐる。

どうして、人のゐない所へ行きたくなるのだらうか。誰も自分に話しかけたり、邪魔したり、しないのに。人に、聲音をたてる。人は、喋る。子供は、泣いてゐる。ボールを投げてゐる。ハモニカを吹いてゐる。

けれども、深山にも、鳥は啼き、溪流はいがう〳〵とどろいてゐる。森林も、風をはらんで、どよめき、海すらも、鳴りとゞろいてゐるのだ。なぜ、人のゐない所へ行かなければならないのだらう。

隅田公園のベンチに休んで、汚い水面を眺めてゐる。ウオー。ウオー。ウオー。ウオー。と密林の野獣のやうに、叫びたくなる。ウオー。ウオー。ウオー。密林では、誰も返事をしてくれない。自分の聲が、木魂になつて、歸つてくる。その調をきく。氣を失ひさうな、ひろさ。變に喉の乾いたやうな、空々しい思索がある。自分は、今、ひとりぼつち。はつきり、分るのは、多分、それだけであらう。だが、公園のベンチにも、やつぱり、人は、ひとりぼつちに變りがない。石を拾つて投げる。コロ〳〵ころがり、汚い水面へ落ちこむ。面白くも、ないのである。

淺草へでゝ、知らない雜沓にまぎれる。人波につきあたり、人波をくゞりぬける。ふと、スリに就て、考へた。もし、自分が、スリであつたら。……

レビューと映畫を見て、家へ歸つた。

その夜、波子は、自分のために涙を流す母の顔を、はじめて、見た。

葉子の母、波子にとつては祖母に當る人であつたが、それは、女に珍らしい奔放な人であつた。孫の波子を愛し、波子のために面白くもない實家へ屢々つきあつてくれて後に、甚だファンになつたが、その祖母が、波子を評して、人に涙を見せない女、と常々言つてゐるといふ。

涙を見せない女とは、どういふことだらう。あまり利巧な子でもないし、だいゝちお掃除もしたがらない怠惰な子だが……つまり、祖母によれば、取柄といふのは、涙を見せないことだけなのだ。時々泣くことも、なきにしもあらず、であつた。それは、本人が、よく知つてゐる。祖母の評言も甚だ當てにならない、と波子は笑ひ、深く心にとめたこともなかつたのだ。

母の眼に涙を見て、波子は、ぶと、氣がついた。涙を見せない女。涙と。波子は涙の貧しさに、あつけにと

られた。あの美しい母が、涙のために、なんと貧しいことだらう！　あの端麗の輪廓も、涙のために、くづれてはゐない。あどけない幼さも、くづれてはゐない。涼しい眼すら、涙のために、決して曇りはしないのに。母の貧しさ！　泣く母も、なほ美しかつた。けれども、貧しく、やせてゐた。

波子は、母をみつめる。

「今まで、どこに、ゐましたか」

貧しい女の聲は鋭い。波子は、答へようとしない。貧しい女をみつめる。その貧しさを、みつめてゐる。

「誰か、好きな人が、あるのですか！」

貧しい女は叫ぶ。

波子は、答へない。

不思議な、深い緊張が、波子の全身をしめつけてきた。一途に鋭くひきしまり、わけの分らぬ叫び聲が、でようとした。好きな人！　貧しい女は、わけの分らぬことを言ふ。今、たしか、言つたのである。波子は、なにか、とらへようとした。然し、みんな、逃げて行く。一本の線のやうに、ひきしまるからだ。たゞ、眼だけ、大きくひらかれる。

「言つてごらん！　誰ですか。あなたの好きな人は！」

「ハ、、、、、」

波子は笑ひだした。ぼてつた頬に手をあてゝ、立上つた。

母も、立上る。顔色が、一時にひいた。

「おまへは。――まさか……」

母は狂暴な野獣に變り、とびかゝる身構へになる。立ちすくんで、娘をみつめた。

「アハ、、、、、、」

波子は、けたゝましく、笑ひしれる。

波子は、手を洗ひ、ぬれたタオルで顔をふく。タオルを投げだして、寢臺に、からだを投げた。

「もう、行つて。私は、ねむい」

自殺したいやうな氣がした。

八

傳藏は、娘の拒否が激しすぎたのに、やうやく、氣付いた。氣まぐれや、流行思潮でもなささうだ、と氣付いたのだ。けれども、それが、氣まぐれではなく、思ひつめたあげくではあつても、二十一の娘に、何事が分つてゐると言へようか。男の心も知らない。結婚とは。家庭

とは。幸福とは。それが、どのやうに味氣ないものであるか、それも知らない。二十一の娘には、二十二の人生すら、分らないのだ。まして、三十の人生も、五十の人生も、知る筈がない。知つてゐるのは、夢ばかりである。

平凡。傳藏は、それに就て、考へる。もし、人生にたつたひとつ、狂ひのないものがあるとすれば、それは平凡だけである。あとはみな、狂つてゐる。けだものである。瘋癲病者と同じことだ。

だから、波子の拒否がどのやうに激しくとも、遠山青年をあきらめることができなかつた。波子は何も知らないのだ。どのやうに思ひつめて遠山青年を嫌ふにしても、その根據は凡そ薄弱な筈である。波子自身の將來のために、危險ではあつても、利益ではない。

然し、思ひつめて、自殺でもしたら。——傳藏は、そこまで、考へて、うんざりする。長いものには捲かれろ式の氣持となり、波子の意志を酌むより仕方がないと思ひはする。けれども、再び、平凡に就て考へて、遠山青年の平々凡々そのものの風貌に思ひ至ると、どうしても、あきらめきれなくなるのであつた。

傳藏自身の一生も、平凡ではあつた。大局から見れば、平凡そのものの一生と言ふよりほかに仕方がない。

然し、それですら、多くの波瀾を孕み、無數の瘋癲人を孕み、さうして、多くの波瀾と無數の瘋癲人を押しつぶして、やうやく、平凡であり得たのだつた。妾も、何人となくつくつた。株に手をだして、失敗もした。政治にかつがれて、落選し、當選しても、莫大な金を失つた。關係した事業は、ひとつとして、成功しない。——ふりかへれば、その足跡のある所には、必ず、ひとりの瘋癲人が、うろついてゐる。今もなほ一家を構へ、安穩に暮してゐるのが、不思議なくらゐのものである。

娘の聟として、自分自身をあてはめてみるとき、先づ、まつさきに、落第であつた。妻子を路頭に迷はせもせず、今もかうしてゐられるのは、たゞ、偶然の結果にすぎない。自分ばかりではないのだ。大多數の瘋癲人が、幸くも、人生の生計を營んでゐる。一萬人の九千九百九十九人にすぎないのである。偶然、人の生計を維持し得てゐるにすぎないのだ。

傳藏は、死花に就て、考へる。これは、又、これで、別であつた。所詮、瘋癲人は、その一生を終るまでが、瘋癲人であるよりほかに、仕方がない。二十五歳の青年のとき、五十歳の自分が、大人げもなく酒に醉つて狽談し、陣笠の夢を捨てきれずにゐる。それを想像すること

ができたであらうか。碌々として生を終る。自分自身の一生に就て、さういふことは感じてゐた。碌々たるに變りはないが、すてきれず、あきらめきれぬ老醜であつた。

老骨よ。何處をさまよひ、何處へ行くか。傳藏は、悲しかつた。軍需工業の小さな工場を建てたいといふ男がある。傳藏を口說き落して、金主にしようといふのである。三日に一度はやつて來て、事業の有望なことを說いて行く。その男が立去る。すると、又、有望な金鑛を見つけたといふ男がくる。いきなりトランクをあけて、鑛石をとりだして見せ、分析表をひろげて說明しはじめる。五萬分の一をひろげて、朱線を入れた區域を指し、隣村に、溫泉もあります、と力瘤を入れて、つけくはへる。一度是非實地見分を願ひたい、と言ふのである。この男が立去る。すると地方新聞の社長がくる。金を貸してくれ、と言ふのである。南支で人魚を食つてきた話、滿洲で狼と戰つた話。壯大な話に傳藏を盧に卷いて、悠々と戲つて行く。すると、又——

我、木石に非ず、である。入り代り立ち代り、亡者にかこまれ、亡者の熱辯を聽き、機嫌よく、調子を合せる。調子は板についてゐる。我ながら巧妙に、拒絶の意を表明する。亡者も亦、甚だ好機嫌に歸つて行く。

葉子が、來客の立去つたあとへ、現れる。なんの話でしたか、と言ふ。石炭の鑛區を買へといふ話さ、と傳藏は答へる。葉子は、顏色を變へて、傳藏の顏をぬすみ見るのである。まさか、御返事はなさいませんでしたでせうね。さうしてひとりごとともつかず、波子の結婚をきめてからにしていたゞきたいものですね、と言ふのだ。

我、木石に非ず、であつた。あの鑛區を買へばよかつた。傳藏は、ふと、思ふ。とにかく、實地にだけは、調べてみればよかつた。……だが、それを顏色にも出しはしない。然し、葉子は、知つてゐる。どうせそれぐらゐの所だらうと呑みこんでゐるのである。一目見て、ゾッとするやうな眼付ですこと。きつと、油斷のならない人ですわ。葉子は、さういふ言葉をつけ加へて、自分の不賛成を明かにする。

ひと思ひに……傳藏は、時々考へた。だがいつも、勇氣がなかつた。さうして、常に、自信がなかつた。昔も自信は、なかつたのだ。けれども、昔は色々のことをした。まるで、夢のやうである。今は、もう……瘋癲人としてすら、老いさらばひ、衰へてしまつた。

「今更、事業だの、政治だの、年齡を考へてごらんなさい」と、葉子は言ふ。「成功する人なら、とつくに名を

なしてゐなければならない筈です、私は、平凡で、たくさん。今更、あなたに、名をなしていたゞいたり、財産をふやしていたゞかうなどと、夢にも望んでゐませんよ。安穏に暮せれば、それで幸ではありませんか」

娘なら——傳藏は、ふと、思ふことがあるのであつた。娘には年老いた瘋癲人の、この悲しさが、分つてくれるかも知れない。虚空に向つて、怒の息吹のやうな、ヴオ、ヴオ、といふ涯のない長嘆を吹きあげてゐるにすぎない暗さであつた。年老いた瘋癲人。娘の手をとり、その胸に、年老いた醜い涙の頬を隠す。娘は、年老いた瘋癲人の半白の髪をさすつてくれる。

「泣かなくとも、いゝのよ。パパ、遠い所へ、旅行しませう。南の國へ。青々と光る海。さうして、かゞやく杜の中を、歩きませう」

娘は、年老いた瘋癲人の苦い涙を、細い指で、ふいてくれる。

さうして、二人は、旅にでる。……

波子と旅行にでかけよう。傳藏は思つた。

さうして、二人は、旅にでた。

山峡の溪流で、鮎釣にのり、二人は、無限に、鮎をたべた。波子は五尾で滿腹した。大きな、爽やかな鮎だつた。

汽船にのり、うねりの高い初秋の海を越えて、島へ渡る。その島には、カトリックの寺院があつた。數へるほどの戸數しかない小さな漁村に、明治初年の古めかしい寺院があつた。禁令三百年、血をくゞつて傳承した切支丹の子孫が、今もこの島に住み漁り、さゝやかな山峡の畑を耕してゐる。三百年前の十字架が、サンタマリヤが、教會の壇に飾られてゐた。

このあたりの村々では、往昔、無數の切支丹が、その鮮血を主に捧げたといふ。今は、山も、杜も、海も、ただ青々と鬱蒼もなかつた。が、波子は、なにか、なつかしかつた。

島の旅館は、普通の民家のやうに、小さく、二人の氣まぐれな旅行者以外に、一人の宿泊人もなかつた。あいにく、風呂のわかない日で、と、宿屋の娘がことはりにくる。傳藏は、その風呂をわかせるために宿屋の主人を舞み倒さねばならなかつた。

その夜、波子は、父に話しかけた。

「ねえ、パパ」

切支丹の島で、最後の返事をきめてもらはう、と波子

は思ふた。

「ねえ、パパ。私ね。結婚しなくとも、いゝでせう。遠山さんと」

傳藏は、本能的な、むづかしい顔をした。

「その代り、ほかの人ならパパのすゝめる人と、大概、結婚するつもりよ」

傳藏は答へなかつた。とりあげた本の頁を、たゞめくつてゐた。

「パパ。私の身になつて、考へてちやうだい。あんなキンゲンな人と結婚するのは、まるで、人身御供に行くやうな氣がするのですもの。私は、わがまゝな、ばかな女です。もうすこし、私に似た人を、さがしてちやうだい。おねがひよ。パパ」

傳藏は、むつゝりと、おしだまつてゐた。

「その話は、東京で、お母さんと、三人で、きめよう」

ほどへて、たゞ、それだけ答へた。

まもなく、彼は、部屋の片隅に、すゝり泣く波子に氣付いた。

はじめて、父に、涙を見せる波子であつた。傳藏は途方にくれたが、やがて、忽ち意地の悪い大人になる。入り代り立ち代り現れてくる亡者達に應接する同じ大人になるのであつた。

涙ぐらゐで……彼は思つた。たゞ、女の、涙ぐらゐで。この良縁をさう簡單にあきらめることはできない。女の涙はぢき、かはく。女は、泣いたことすら、覚えてはゐないものだ。否應なく、結婚させてしまはなければ。——彼の心に、けだものが、見境もなく、たけりはじめる。

瞬間、彼は、やゝ眼に憎しみをこめて、すゝりなく波子を突きさす。

明日は、東京へ歸らう、と思ふ。切支丹の娘達が殉教したといふ島。然し、波子は、死にはしない。この良縁が氣に入らないとは、憎い奴だ、といきまいてゐる。

竹藪の家

——首縊つて死んでおまへ！　お前が、さう言つたんぢやないか。早く首縊れつたら。莫迦莫迦莫迦ア！　なぜ早く首縊らないのだ——

家の裏手には一面に、はや年を經た孟宗のひつそりとした林が深い。朝朝の陽射しが水泡のやうにキラキラと漏れて、深い奥にもまばらに零れ、葉が落ちて濡れてふやけた簟の土肌から、いきれた臭氣がムウンと顔に噎せながら其處ら一面に凝んでゐる——その簟が曲者であつた。

郊外の（一足踏み出せば、もはや涯も無い武藏野の田圃が展けてゐる——）この傾いた破れ長屋に居候を始めてから丁度二週間にもなるのだが、硝子窓を炒るやうな鋭く呀えた朝朝の太陽に蹴散らかされて、樹原獣夫が濁つた目覺めを迎へると、それが晴れた日の合唱でもあるやうに、裏の簟から夫婦喧嘩のざわめきが、この上もなく明らかに聽きとれてくる。獣夫はアアアンと變にシヨボシヨボ欠伸をして、間の抜けた朝の陽氣にてれながら、まだ敢漫な神經を搾るやうに寄せ集めて、簟の高い物聲を捉へるために二つの耳をジインと澄ませる。寢床から其れのみ擡げられた一つの首が、明るい朝の光線の中へ花瓶のやうにユラユラと浮び上つて搖らめいてゐる、其れが又晴れたる朝の序曲でもあつた。

——お前は首を縊つて自殺するのだと、いま斷言したではないか！　なぜ早く死なないのだ。早く首縊れつたら、首を縊つて足をバタバタ顫はせて、ギユツと雖みたいに唸つてくたばれ！　それがお前に一番よく似合ふ恰好だあ。氣の强いおん坊なんざ惚れちまは。邪魔せずに眺めてゐるから、早く首縊つて牛肉屋の牛肉みたいにおとなしいブラブラになりやがれ！　早く牛肉にならないか、不潔な肉の塊めえ！

——お前こそ汚い性慾の塊ぢやないか！　人殺しの半蟲泥棒だ！　お前こそブラブラぶら下つたら、裏なりの絲瓜みたいに長く細くつて良く恰好が取れてらあ。榮養不良の絲瓜ぢやないか！　ブラブラ竹藪にブラ下つて、日の暮れるまで風に吹かれて搖れてろ！　ア、ア、ア、痛々々々……ア、痛い、人殺し！　ヒ、人殺し！　畜生！　弱い女を打つ奴があるものか！　食物の中へ猫イラズを仕込んでやるから覺えてろ！

——チエツ、屋女め、ぬかしやがつた。てめえこそ自己のお百だあ。出て行きやがれ！　てめえなんざ不潔極まる肉塊だぞ。悪德と性慾の塵溜みたいな奴だ。醜悪でえ！

——フ、フ、フン。お前が死ぬまで出て行かないからさう思へ！　紫色の斑になつてお墓へ行け！　坊主に拂ふお布施も無いや。死に損ひの肺病やみい！　札附きの氣狂ひで出來損ひの落伍者ぢやないか！　共同墓地へ埋まつて、雨の降る晩にお化けになれ！　アア、いい氣味だ。ざまみろ！……

この家の主人野越與里、野越總江の兩名は、簟の深い沈默に於てのみ夫婦喧嘩を試みる居常の習慣也と思はる。思ふにそれは、老いたる母への氣兼ねから此の簟へ隱れ去るものとも推定されるが、又何等かの由來があつて、此の簟と其の爭論と、彼等の心に密接な共鳴作用を起すものかも知れなかつた。まことに、野越與里、野越總江の口論は、恰も村の往還を日日通ふ幌馬車のやうに、律儀頑固な鐵則を以て定められた晴れたる朝の合唱であつた。——昔は心に思ふこともろくろく口に出す術を知らなかつた與里であるが、暫く會はずに經過した數年來の生活苦に變れば變るものである。思へば人の一生は（重荷を負うて坂道を登る如しか！　萬歲へ！）一番貴重な物までが（——それはあの悪の華の詩人に由つて——蜂鳥と浮く不思議なる雪の翼と歌はれてゐるが）得體の知れない宿命に殘酷なまで蹂躙されるもののやうにも思はれる。思へば何か感慨の心に騒ぐ氣配もし、苦い胃液の鋭く喉に込みあげてくる思ひもする——そんな氣持もするにはするが、それは又唯それだけの當然な話で——ウツラウツラと寢床に伏して流れ込む朝の光を眺めてゐると、何事もそれは結局それだけのことで、古今東西一として驚愕に價する物もない、さういふ虚しい肯定のみが別に確たる根據もなく唯ひしひしと煙のやうに漂うてくる、しづ心なく花の散るらむ——なぞと言へば餘り莫迦げた長閑さすぎると思はれるかも知れないが、何んだかヂツと瞑目して明るい日向に項垂れてゐると、胃囊の中にヒツヒツと頻りに花の降る音が遠く遥かに續いてゐる。時として、何故とも知らずホツと洩らした溜息の引き去るあとに耳を澄ますと、朝も晴けた簟の廂い沈默から、筍の幽かに幽かに太る氣配が聽かれたやうに思はれて了ふ。氣がつけば、あの廂高い爭ひの聲は益々劇しく響いてくるが、深く耳を澄ましてゐると、其れも撒かれた霧のやうに明るい空の百方へヂンヂンとして掠れて

しまふ。言ひやうもない靜けさ！　獸夫は煙草に火を點けて、白い日向へ押し込むやうに煙をふかした。煙はか細くユラユラと搖れ、幾條の淡く柔らかな縺れとなつて暫く部屋に漂うてゐるが、やがて生き生きと動き出し、素早く長い絲となつて光の戯んだ窓の外へふいと流れて逸れてしまふ。明るい日向に泳ぎ出で、キララな光線の中へ顔を擡げてチツとしてゐる。空洞な眼蓋を大きく開いて涯しない蒼空の奥へまで長い視線を注いでゐるが、何一つ定まる物は見てゐないのだ。燦々と降る光の泡に胸は一杯に息を塞がれ、廣い視界は唯一つの、白金の光芒を放つて、チリチリと旋回する一點の塵と化してゐる。――一匹の蜂がだんだら模樣の腹をうねらせて硝子窓に跳ね反つたり……

……やがて階下にコトコトと無器用な足獸の音が鳴りはじめる。高齒の足獸を庭先へ持ち出して、さも大儀げにそれを引きずる聲音である。わづかに數歩行くうちに其の聲音は立ち止る。破れた石垣に手を掛けて危險な横枝なぞを拂ふために工夫を凝らしてゐるのであらう、間もなく、其處も通過して、朽葉をガサガサと踏み分けながら、篁の靜かな奥へ消え去つてしまふ――

「……もう止しませんか、これ……」

ふと氣がついて耳を澄ますと、ムウンと深い篁の奥の戯みが漂うてきた……

篁へ消えた聲音は興里の老いたる母であつた。成程、暫く忘れてゐたが、その頃篁の喧噪はいよいよ嵩高い叫喚となり、それの劇しい交換の合間々々に新手の喚きが――四五歳の幼年らしい狂つたやうな泣き聲が、聽きとれてくる。總江の裾に縋りついてゐるのだらうか。或ひは一人遠く離れて置き棄てられてゐるのであらう、彼等の一子多次郎の張り裂けるやうな泣き聲であつた。

「……もう止しませんか！　これ！　これ！　これ！……」

一家四名の家族達は、一名の居候を二階へ置いて、總勢餘すところなく深い篁へ集合したことになる。一段と空虛になつた家の氣配が、なぜか懷しい旅愁のやうに、シインと廣い耳鳴りとなり深く顳顬へ沁みてくるのだ。ただ理由もなく廣々と笑ひ出したい――あの懷しい靜けさである。

篁へ勢揃ひして野越家の一家族――彼等の韻に、彼等の肩に、彼等の裾に、まばらに落ちる水泡のやうな光の玉が燦爛としたポツポツを、矢張り一面に零してゐるに相違ない。大いなる口を開いて、かの悪魔をも辟易させる呪の言葉を吐く度に、彼等は舌に同じくまろいポツポ

ツを受けて、太い瓣積の波と一緒に腸潔く呑み込むであらう。

ええん、うえん、うえん、うえん、うおん、うおん、うおんといふ號泣が益々高く鳴り出してゐた。

――畜生婆あ！　鬼婆あ！　人でなし！　お前達母子でグルになつて、一人の可哀さうな女を虐めようてんだろ！　血も涙もない母子ぢやないか！　多次郎、多次郎、多次郎！　お前はお母ちやんの味方だねえ！あの鬼婆あの喉笛へ喰ひついておやりつ！　仇をとるから覺えてやがれ！　ア、ア、ア、痛々　痛い――

――いけませんよ！　これ！　これ！　さうするんぢやないと言つたら――。お前はいいからもうお家へお這入りつ！……お前さんも亦いけませんねえ。何ですか、こんな紐なぞ持ち出したりブラ下げたりなんぞして。

――それあね、この女がそこへブラブラぶら――

――お獸りつ！　お前は家へお這入りなさい！　これ、お前さんも良くないんだよ……

――莫迦莫迦莫迦！　婆あなんぞが知るものか！　死に損ひの老毒めえ！　口惜しい口惜しい口惜しいッ！

うえん　うえん　うえん　うえん……

……泣くんぢやありませんよ。泣いても初まりやしないのに。誰もお前さんを虐めてやしないのに、ねえ――

――ほつときや止みますよ、お母さん。引きあげた方がいいんですよ……

興里は引きあげて來るらしい、次第に近づく聲音のガサガサと朽葉を鳴らす音がしてゐる。暫くして破れた垣根を大きく跨いでゐるらしい音、狹い庭をブラブラと數歩のうちに歩き過ぎて、泳ぐやうな力の拔けた有樣でポンヤリ縁側へ上つたらしい。突然クルリと振り向いたものか、深い篁の奥へ向つて聲一杯にかう怒鳴つてゐる――

「やあい。仲通りの牛肉屋のペスとそつくりの鳴き聲だぞ！　えん　えん　えん、うおん　うおん　うおん……まるで區別がつかねえや……」

言葉の途中から深い反省と無意味とを痛感したものらしい。言ひ終ると、恐らくは深い放心に襲はれて、眞つ暗な家の奥へヒョコヒョコ身體を運ぶやうに歩かせる音がしてゐる。やがて崩れるやうに坐したのだらう、シインとして、其處からは物音一つ聽えなくなつた。

篁では、總江と多次郎の號泣がいよいよ凄じい合唱となり、鋭く空を裂くやうに鳴り續いてくる。竹に雀といふことがあるが、成程さすがに竹林には雀の遊ぶもので

ある。時時一番の雀等が一つの大きなさんざめきとなつて、塊まりながら奥の繁みへ轉がり落ち、高い羽搏きをあげながら孟宗の末枝を劇しく鳴らし騒いでゐる。又一杯に朝日を受けたトタン葺きの廂の上へ一羽の雀が歩きに來て、コツ、コツ、コツ、と、長い間隔を持つ聲音がそれのみ音であるやうに長く單調に續いてゐる。

やがて低い遠音が、緩く階段を登つてくる。與里が上つて來るらしい。

「どつこい。俺も起きようか――」

寢蟲よりもダラシ無い階上の居候は、やうやくモツクリ起き上つた。

二

青。

青い色から、君は何物を一番早く聯想するだらうか？……「そ、さうさな、僕あ、海、空、夏なんて物だらうかな。尤も僕は、詩人するわけでは毫もないんだけれども、生來のれつきとした汪潤者でね、青と言や青だけしか思ひ付かない性なんだあ。青は斷じて青なんだよ。由來俺そのものの腦味噌には、同一律の法則だけしか働かない何かゼンマイの弛んだところがあるんだよ。チツと斯う考へてね、ウウ、ところが第一巻へてなんかゐないのさ、微塵も動かないクツタ一つの黒幕が眼玉の前で變に斯う、一杯詰つてゐるやうな。ドンヨリした感じかな。マ、言つてみれば、黄昏の曇みたいな心境でもあらうかなア、さうだ、實にそつくり曇だ曇だ、斷じて間違ひなく曇なんだあ、ウアワア、そつくり俺はソノ黄昏の曇なんだよ。」……「僕はね、青い色を見てゐると、痛い鋭い神經を思ひ出すのだ。鋭くて薄くて多のやうに冷たくてね、觸れるとスウツと切れさうな双のやうな神經をね。……」

さう言ひ乍ら悄然と、薄い神經の影のやうにビリビリ顫へて俯向いて了ふ奴なのだ、與里といふ奴は。與里は全く神經の影みたいな奴だ。いつでも妙に繁繁としてゐやがる。目を伏せてその伏せた目の薄い瞼が、奴の愛せた滝小僧へ投輪みたいにヨボヨボと緩く幽かに落ちて行くのが見えるくらゐだ。窓から押し込む横殴りの強い陽射しといふ奴は實に又遠慮會釋もない奴である、影みたいな與里の身體に矢張り莫大な黒を落して、伏せた瞼から顔の下へジツトリ湧いた黒色は、何んだか變に與里の存在そのものをキナ臭く思はせてしまふのだ。

チツと變くさうしてゐて、やがて與里は細々とした左手を透すやうに眺め出したが、今度は又其の手を獣夫の鼻先へ何か硝子の彫切のやうに差し伸して見せた。獣夫は（――實に此奴は黄昏の曇である！）突然ビツクリ顔を上げて（思ふに多分又しても同一律の法則に順ひ「手は手だ手だ、斷じて手だ！」と尻切れトンボの腦味噌を擂らし乗ねてゐるのであらう）パンとふやけた鳩のやうな眼の玉をクルンクルンと廻した。

「……神經を思ひ出すとね、それから僕は水膨れのやうな青い血管を思ひ出すのだ。固執しだすと斯奴くらゐ海氣味の悪い奴も無いもんだね、不思議に斯う頸の中へ沁みついてピクリピクリと蚯蚓みたいに曲りくねつて這ひ出すやうに思はれるのだ。じつさい、何んだか變に斯う……」

與里は自分の眼の下へ其の手の甲を引き寄せて、チツと其れを凝視めたり透したりしてゐたが――

「變に斯う……やに佗しいものだなあ――」

そして含羞み乍ら笑ひ出した。すると又、獣夫は可笑しな奴である、咄嗟に劇しく感動して自分の右手を仔細に透して眺め廻してゐたが、間もなくハタト行詰り急に當惑してこれてしまつた。その感動の餘り輕率で空虚であり、慌て過ぎた事に氣付いたのだ。そこで彼は自分の意見（從つて概ね出まかせである）を述べ初めた。

「お、俺なんざあね、青々とした血管を見るとさね、昨夜呑んだアブサンに再會したやうな……ウウ、金が無いからアブサンなんざ滅多に呑まないけれどもさ――ム、まあさう言つた氣持にならあ、ね、ね、ね。ア、さう空想して見つめると、ヘヘエ、俺の手は又何んて綺麗な手だらうなあ、オ、驚いた！　すつかり感　感　感心しちやつたわい。我が手には青きアブサンの毒這ひ滿てり、青き毒はね、夜な夜な脈々と昇天して青白き空の星となるんだとさ。實に幸福ぢや！――」

獣夫は首をいきなりガタガタ揺すぶつて、酔つたやうに跳ね出した。

「ガクガクガクガク……酒はとにかく良きものだよ、此の所説には自信がある。ガクガクガクガクうん、さうだつけ、俺は仕事を探しに行かなきや――」

と彼は慌てふためいて立ち上つたが、竹竿に吊された干物みたいに寄邊なく有様をして、彼自らの魂魄を探しあぐねた翹翹のやうにウロウロ四邊を眺め廻した。

――ウヘツ、何んだか俺の存在は、我思ふ我在り、みたいに頼りがねえよ……」

醉ひ痴れたもののやうに物凄い聲をたてて階段を馳せ降ると、階下の婦人達へ挨拶なぞも先づ忘れたと想像して差支へない、轉げるやうに往來へ飛び出してゐた。酒も呑まぬに醉つたやうに喚き立てる此の瞬間が歌夫の一番愉しい時で、無口な、まるで岩塊のやうな憂鬱を叩き潰して、此の話術を會得するまでには、長い修練の年月を經たのである。今でさへ、餘程良好な咄嗟の調子に乘らなければ、おいそれと此の痴態には耽り切れるものでない。

歌夫は往來へ突つ立つて、白い光の戯き詰めた路の最中に踊るやうな樣をしながら、二階の窓際に佇んで彼を見送る與里を見上げ、眞上に擴がる莫大な渺茫とした蒼空を指し示してみせた。

「ドドド、どーんなものだい！　青い青い青い空だぞ！　眞青だなあ！　空空空！　空！　素敵だあ……」

息込み過ぎて皮膚の何處かが破けたんぢやないか！　蒼空にほてり過ぎて喚き過ぎて目がショボショボに縮んでるぢやないか！　與里も思はずクツクツ笑ひながら、その莫大な蒼空に眼を與れたが——

「……」

一言も物を言はずに、細い左手を頤の高さに擡げ乍ら、其の手の甲を歌夫の方へチツと示した。それが精々與里なる男の洒落氣であつた。

——チツ、チツ、チツ。淋しい奴……

「ぢや、さよなら。行つて來るぜ」

「行つといで、さよなら」

街と畑への分岐路は與里の家から二丁程もあるであらうか。その十字路は高い欅に取り圍まれて、四つの角の一角に「氷、燒芋、煙草、雜貨」と標された唯一軒の店がある。其處を起點にポツポツと街へ向けて樹立の深い田舍家が散見し、ものの七八丁もするならば、兎も角一つの映畫館さへ見出される街の眼はひへ續くのであつた。（その場末の常設映畫館に與里は映寫技手を勤めてゐた——）又その十字路を起點として街と反對の方角には、已に其處から廣茫とした武藏野が遮る物もなく展けて見えるのであつた。

——如何にして本日の日沒を迎へるべきであらうか？　街にてか畑にてか？　歌夫は十字路の中央に立ち止り携へた杖を倒して方向を占つた。

西——

西は廣漠たる麥畑を一文字に過ぎるなら、ささやかな部落に出でて川越街道へ續くのである。其處は絡繹と終

日牛車の絶える事がない。

そして仕事は？——仕事なんか、神に誓つて！　探さない事に決心したのだ。およそ積極的に生活せんとするあらゆる意志と氣力とを歌夫は已に記憶の中にも失つてゐた。自分の生活を他人任せ成行任せに押し流して、玉蜀の陰であれ、よし星空の下であれ、許された限りの睡りを貪り、分ち與へられた食物に滿足して——斯うして萬端切羽詰まつた擧句の果に、幸ひにして死ぬことも無く思ひ掛けぬ生活力が浮かび出るなら、何といふ思ひまうけぬ悦びであらうか！　流されるだけ流されてやれ！　彼はさういふ懶惰の底に暮のやうに腰を据ゑたわけであつた。

廣茫とした武藏野は一見平坦な廣野に見えて、實は一面になだらかな起伏を隱してゐる。見渡せば、見渡す限りのなだらかな起伏は、唯ひたすらに麥の青に掩はれて、風の吹き渡る度毎に、麥の靡きが銀色の波頭を振り立て乍ら緩漫な傾斜をひろびろと登つて行くのだ。そして又はるばると眩け下りてゆく。掠れて見えない空の奥に雲雀の音が停滯してゐた。

一つの起伏の頂點に歌夫は思はず立ち止つた。まん丸い空の隅々を飽くこともなく眺め廻してみたかつたのだ。遠ければ秩父の山、近ければ空へ打ち込む欅の杜、それらの餘白に低く幽かに一線を引く一流れの黒は、地平線ではあるまいけれど餘程離れた森であらうか。……見廻して、偶然歌夫が一と廻りして今來た道を振り向いた時、人氣ない今來た道を茫然と近づいてくる一つの人影を認めた。その人は悄然として俯向き乍らトボトボと歩いて來るが、その人の背に展けた一線の野道は、遙々と遥に小さな一點と化し凋んで果つる所まで何物の姿をも他に印してゐなかつた。

與里である、その人影は。——

歌夫は幾分意外を感じ、路傍に寄り麥の畑に腰を下して與里の近づくのを待つてゐたが、項垂れてボンヤリ歩いてゐる與里は路傍の歌夫に心附かずに數歩向うへ過ぎて了つた。歌夫は畑から飛び下りて與里の肩先を叩いた。

「おいおい、君は何處へ行くんだい？」

「……」

「ど、ど、どうしたのさ、君は？——」

「ア、君と一緒に散歩したいと思つてね、追つかけて來たのだ。淋しくてね……」

「ウウ、さうか。でも良く分つたもんだね、僕の此方へ

來たことが――」

「それあ遮る物も見えない畑だもの、四ツ角から君の姿は丸見えなんだよ」

二人はなだらかな傾斜を降りはじめた。遠い果から廣々と野面を渡る長閑な風が送られてきて、足もとの藷を戰がす毎に、ムウンと鈍い昆蟲の羽音が一しきり透明な中空へ湧き起つた。與里は尙ほ、悄然として俯向いたまま歩いてゐたが、何んだか泣いてでもゐるやうな、グショグショ濕つぽい暗さを漂はしてゐた。

「厭んなつちまふ！　暗い暗い、眞つ暗だ！　みじめすぎる！　ほつと息を吐いてみたい、生きてゐるうちに！　死んでからぢや、つまんない。僕は死にたくないからね、どんなに悲慘な生き方をしても、ね……」

「動めに行かないの？　今日は――」

「十二時から――。君は？　仕事を探しに行かないの？……」

「ウン、仕事はね……」

獸夫はてれて蒼空の中でニヤニヤ笑つた。

「畑へ仕事を探しに來る奴もないからね……」

「フフフフフ」

「白狀しちまふとね――」

獸夫は改めて與里の顏色を偸み見た。考へてみると、獸夫が野越家に居候を初めてこのかた、與里に向つてさへ其の心境を打ち開けたことは一度もなかつた。打ち開けぬことが祕密臭いわけでもなく、又氣詰りといふわけでもないが、ヂックバランに打ち開けてみるのも又淸々として宜しいであらう。もとより獸夫にしてみれば、それはどちらを選ぶにしても深く氣に病む程の事ではなかつたから――そこで、又獸夫は醉ひ痴れたやうに喧ましく、身體全體を踊るやうに動かせ乍ら、ガアガアと喚き立てて物語りはじめた――

「ハク、白狀しちまふとね、君ん家へ居候を初めて以來、仕事を探しに行つて來ますつて言ひ乍ら飛び出すけどね、あれあ皆んな大嘘さ、仕事を探したことなんか一日だつて有りやしないんだよ。毎日毎日、どうしたら此の退屈な一日が暮れるだらうかと心配しながら歩いてゐるとね、兎に角どうやら日が暮れかかつて來るんだよ。僕はもう神經的にどうして生きようといふ根氣を持つことが出來ないんだ。流される通りに流されて、生きてゐようと死なうと――（ウウ、死にたくはない！　だらうがさ――）それあ兎に角さういふ將來の事は大したことぢや無いんだあ、ね、ね、何處へ行くんだか目當が無い

といふ事はね、僕みたいに斯う度胸を据ゑて了ふとね、夢の中の見知らない街みたいに唯わけもなく醉つ拂つて幸福なものだぜ！（――と言つたやうな物さ！）。……君ん家で、どれ程迷惑してゐるかと言ふことは良く分つてるんだけど、自分で當がないから自發的に出て行くといふ氣持は動かないんだ。ただ君が「出て行けッ」つて言ひさへすれや、僕は喜んで出て行く、それあ本當だ！　僕アさういふ具合に何時もパッシフに押し流されて動きの取れない所まで行く積りなんだ。だから君が僕に出て行けつ！　て命令する事は不人情でも冷酷でもない、僕にとつても其の言葉は苛酷ではないのだ。僕はただ次なる生活へ――（虹の懸つた青い並木のある街だあ！）鱗がつて行くだけの話さあ。コロンコロンコロンとね！　僕はむしろ、君達の迷惑をおしてまで厄介を掛けるのが心苦しく困るんだから……）

「いいんだよ！　いいんだよ！　何時まで君が居たつて、迷惑なんかしやしない！……」

與里は突然激して、獸夫の手頸を浚ふやうに掴みかかり强く强く握りしめたが、ピクピクピクピクと痙せおとろへた肩の上を波のやうに顫へるものが走つて行つた。與里は顏を冷たく伏せて、大粒な涙を頬一面に劇しく流した。

「――何時まで君が泊つてようと迷惑なんかしやしないよ。女達のケチな氣兼ねなんかいらないんだよ。僕達はみじめなんだね。救ひを求めるのがいけないんだ。お互に嘆き合ふよりほかに仕方が無いんだから……」

獸夫は甚しく茫然として與里の劇しい慟哭にたじろいでゐたが、與里の涙を食べるためではあるまいけれど、大きな口をポンヤリ開けて了つたのだ。そしてそれでも自然の作用で次第に悲しげな顏貌だけは調和させる事が出來たのだが、それも亦、息込みすぎた反射のハズミで莫迦莫迦しい程途方もない、悲痛すぎて動きの取れない泣顏を涙へ上げてしまつたのだ。獸夫は息苦しげに胸を張つて、辛うじて唸り出した。

「オ、オ、俺達は餘りにも悲慘だ……」

「ね、ね、だから君、何時まで君が泊つてゐても、迷惑なんかしやしないよ……」

氣が附くと、――獸夫にとつては餘りにも氣羞かしい話であつたが、二人は丁度濡人のやうに堅く彼等の手を執り乍ら、漂ふやうに蒼空の下を歩き續けてゐたのであつた。斯うして、莫大な明るさのみの張り詰めてゐる廣い武藏野の麥畑を、二人は獸々として一周したわけでゐ

つた。

三

柳の下に泥鰌がゐた！　麗かな晴れた日のことで、武藏野を潺湲する小さな流れに沿ひ乍ら孤り目當なく歩いてゐた時の事だが、柳の下へ一匹の泥鰌がヒョイと顏を突き出したのである。程經て馱夫は、此れは實に可笑しな事柄だと考へた。言ひやうもなく可笑しくて笑ひたくて堪まらないではないか！　と思つたのである。そこで彼は音に出してハアハアハアと笑ひ崩れてしまつたのだ。ところが、一旦笑ひ出してみたところが案外自分は其の事柄を可笑しがつてゐるもしない事に心附いたので、止むを得ず途中から笑ひ聲をひつそりと改めて了つた、が、思ふに此れを可笑しがらなかつたなら世の中には一笑に價する何物も在る筈がないではないか！　と又むらむらと可笑しくなりだした。かういふ事柄にでも笑ひ興じてゐなかつたなら此の退屈な一日が暮れさうも無いからさ――と自分乍らさもしい戒めを密かに諭してきかせたのでもあらうか、又愚かな意地からでもあらうか、さういふ妥協をしなくとも何んだか本氣で可笑しくて笑ひたくて堪まらないやうに思はれてくるのだ。成程――斯んなに可笑しい話といふものは稀にしか無い！　斯んなにも笑ひたくてヂリヂリ込み上げて來て一寸でも壓してみたなら一つぺんに爆發しさうな可笑しさつたら無い！　馱夫は又堪まりかねて唐突に笑ひ轉げて了つたのである。何んて虚しい莫迦くさい笑ひ聲であることか！　可笑しい事は何も無い！　かと思ふと實に全く可笑しくて可笑しくて堪らない！　斯うして彼は尙も自棄くそとなつて同じ事を四五遍繰返してみたが、しまひには「笑ひ」といふ一種特別の形態を具へた生物が馱夫の胃囊から分離して蒼空の下にフワフワ漂ひ乍ら、彼方へ飛び此方へ踊り、ベタベタと吸ひついたり剝がれたり、擦り拔けたりするやうな氣がした。ガツカリして持餘して了つたら、何が何んだか知らないが、凡そ思ひ當る全ての物を一緒くたに籠めたところの實に莫大な何物かを對象にして、遣り切れない程切迫した無性に變テコな可笑しさが込み上げてきて、息苦しくて、馱夫は皆目見當を見失つて分解しさうな思ひがした。その時、彼は烈日の下にあつてカンカン照りつけられてゐたのだが、恰も自分はクタクタに使ひ古された布片であるかのやうな感を抱き、廣漠たる田園の一隅へ忽ちヘタヘタと崩れ落ちて、凋む

かの如き殘酷な無我を覺えためであつた。――

馱夫にとつて最も切實な問題は、如何にして斯の退屈な毎日を浪費するか！　といふことにあつた。何か珍奇な出來事に突き當れば良いが――さう思ひ乍ら朝朝出發するのだが、時時何か愉しげな街頭の人群に出會つたりすると、むしろ其れを憎むやうに慌ただしく行き過ぎてしまふ、どういふ理由かと言ふに、どういふ理由だか自分も知らないのである。彼は多忙な事務家のやうに急ぎ足で其處を通り過して、何でもない路傍の日蔭や日向で長いことボンヤリ休息してゐたり、或る時は又人群から程離れた塀や電柱に凭れて、ただ何といふこともなく黑い塊りの動きを眺めてゐたり、軒並の門札毎に小頸をかしげて「乃木太郎氏」を探し乍ら歩いたり、ザツとそんな風に歩いてゐた。多少とも彼の感慨を促す風景があるとすれば、それはあの小學校の授業時間である。――夢見心地で街を漂うてゐる時に、ふとあの合唱の音なぞが幾つかの屋根幾つかの樹樹の向うから湧くが如くに流れて來ると、その時だけは其の方向へ彼の足取が自然に曲げられて了つてゐる。樹立の竝んだ靜かな校庭に沿ひ乍ら無心に徑を辿つてゐるとたんに讀本の齊唱なぞがふと一齊に湧き起る時、不思議な色彩に粉飾された靄のやうな一つの心が、急に叩かれたやうに躍り出すのであつた。――（言葉で表はせば其のやうな物にもなるが、實際は其れに似通つた多少の感が僅かに漂ふ氣配の如くに心に覺えられたと言ふだけである――）雨の日は又恰好な休息場所として停車場のベンチがあつた。其處では、慌ただしげに出入する老若の人人が、晴れたる日とは趣きの違ふ心構へで呟きを殘し染を落して變轉し、空虛なる人の心を慰めもし紛らせもする。そのくせ、さういふ愉しさも豫想でき、又其處へ行きさへすれば豫想の通り實際愉しく此の一日が暮せるのだと分つてゐても、無理にも其處へ行きたいといふ頑固な意欲がうるさくて、遂ひドシヤ降りではあるげれど足が他處へ向いてしまふ。さういふ時はその時なりに、佗しさや苦しさや無意味さも亦それ相應の色彩を持ち、人の心に沁むものであつた。又ドシヤ降りの泥濘を傘を忘れた人の樣してフウフウと懸命に駈け拔けてみるのも咄嗟の遊戯としては面白いものだ。何處か商店の軒先なぞに雨宿りの人の姿を見掛けると、自分も其處へ割り込んで忙しげに濡れた着物を絞りなぞし、如何にも其の人と同じ離儀に惱むかの如き素振を示して、一種家庭的な同感をそれとない雰圍氣にして味ふのが悦びであつた。

全くそれ等は流れるままに漂うて、時に順ひ享楽する街の景物とも言ふべきもので、此れならば何を措いてもやり遂げたいと欲する事が何一つ有つたわけでは無かつたのだ。何一つとして積極的にしたい氣持は動かなかつたが、それでも一つ、探してみれば斯樣な意欲が有ることは有つた。ほかでもない、乞食をしたことである。出來得る限り自分自身を辱しめて、動きのとれないみじめなものにしてみたかつた。街を軒並に遍歴して「哀れなる流浪の者で御座ります、一飯の御喜捨にあづかりたい——」と物乞ひし乍ら、いと悲しげに辭儀を重ねて歩きたかつたわけである。この衝動は時々餘りにも強く切實に突發して、流石の獣夫をも困惑させ苦笑せしめたものであつた。案ずるに自分を最もみじめなものに、最も卑しげなものに貶しめて恥しさで消滅したげに狼狽へ顧ぐ自分を眺め「ざまみろい！　萬歳萬歳！」と罵り乍ら自棄くそな有頂天で騒ぎたかつたものであらうか。

あれは矢張り實に麗かな春の一日のことであつた——（その麗かな空模樣を今もありありと覺えてゐるが——）とある寂しげな村落を街道傳ひに彷徨うてゐた獣夫は、道に一つの閑靜な寺を見掛けて突然この氣持に強く壓されたのであつた。その寺は丁度嶮しい坂路の途中に位し坂の下から坂の上へ、其處ら一帶の地域が樅や松や椎なぞの鬱蒼とした喬木林に壓し包まれて、しんかんと冴えた晝時のしづもりに人の心は靡し難い一種の旅情を捨も遍路の人のやうに離らせる場所であつた。一つにはさういふ雰圍氣の所爲もあらう、又一つには其れが寺院であるために比較的恥を伴ふ率が少い、そんな理由もあつたのであらう。その日、この突然な衝動は極めて自然に獣夫の全部を占領して、彼ははや咄嗟に足を山門へ向けて靜かな街道を遍れてゐた。放浪の旅の者で御座います、一飯の喜捨と一夜の宿泊にあづかりたい——」哀れげに聲を落して拆う申し出るつもりであつた。彼は咄嗟に逆上して、自棄まじりに泣き出したい程もしやくしやし乍ら、捨身のやうな小走りとなり已に山門に片足を掛けた途端であつた。

——坊主々々山の芋、坊主々々山の芋！

遙方もない合唱が聲高々と街道から湧き起つたものである。深く潜んだしづもりが一入しんと冴え返る程、高く黄色い金切聲の合唱で——それは、獣夫の直ぐ後から同じ坂道を登つてきた數名の少年達の惡戯であつた。彼等は學校の歸路であらう、或者はだらしく鞄たぞを振り廻して、隊伍堂々と行進して來た。

獣夫は丁度山門の下で、その時いきなり振り返つた。

「俺も坊主だぞ！　やいコラ！……」

少年達はギクンとして、其處は山門からかなり間隔も離れてゐたのだが、彼等の身體を擦り合はすやうに密集させ、チリチリと後退した。

「アハハハハ、アハハハハハハッ！　冗談だよ。驚かなくつてもいいんだよ。僕と一緒に遊ばないか……」

「チエッ！」

少年達の或る一人が、矢張り尻込みを續け乍ら舌を鳴らして憎々しげに赤んべいを作つた。それから一團の彼等が又、皆それぞれ憎惡を示し同じやうな輕蔑をあらはした樣をして「チエッ！」——矢張りピッタリと密集を續け乍ら、街道の道幅を出來るだけ遠まはりして、山門の前を擦り抜けて行つた。

「坊主々々山の芋！

味噌すり坊主！　馬鹿坊主！

キチガヒ坊主！　キチガヒ坊主！……」

彼等が怒鳴つてゐるあたりは、山門からは無論見えない坂の上だが、彼等は其處に勢揃ひして、力の限り喚き續ける魂胆らしい。獣夫はてれてニヤニヤし乍ら、ついでの事に乞食の眞似も止しちまはうかと考へたが、ええママよ、どうにでもなれ……廻れ右して寺の境内へ、風を喰つて飛び込んでしまつた。

慌ててゐたので入口を探し出すのに骨が折れたが、植込の陰にそれらしい物を見掛けると、案外、何の躊躇もなく顔面もなく重い格子戸をガタガタ開けて案内を乞うた。眠に胡散な闇暗が奥の方から靄いできて耳の邊りへ絡まりつくが、獣夫はフウフウそれを吹いたり深く吸ひ込むやうにしたり、それからジンと耳を澄まして、奥の氣配と自分の動悸と二つ一緒に感じ初めた。その時彼は「御免下さい」と言葉代りに「お頼み申します、エエ、お頼み申します……」といふ言葉を用ひたのである。案内に應じて、取次の人が立ち現れた。極く靜かに——（全く——）極く靜かに、其處へ立ち現れて鄭重に一禮した。それは、何處から見ても當り前な婦人で、あまりにも當り前な當然でありすぎる爲に、凝視めてゐると、危ふく變に懐しくて、フッとあの幼い「思ひ出」の中へ氣を失つて迷ひ込みさうな……さう、年の頃は二十四五、柔和な女の顔形は十人並、或ひはもつと其れよりも綺麗な人だと言つたところで見てゐた人は無いのだから……。獣夫も亦、改まつて、馬鹿丁寧にお辭儀をした。彼は妙

に骨の髓まで安心しきつて阿呆のやうにグッタリし乍ら、底の知れない落膽の上にグデグデ醉ひどれてゐた。

「御主人は御在宅ですか？」

「ただ今生憎用向きで、朝早く出ましたきり留守なんでございますけれど――今日は夕方まで歸るまいと思はれますが、何か……」

「さうでしたか。では又、いづれ改めて參ることに致します」

「あの……どちら樣でございませうか？」

「古い友達です。極く古い、昔の友達で、エエ、左樣、名前は、モミハラ・ダフ、機原駄夫といふ者です。丁度この近くまで用向きがあつて來たものですからお寄りしてみたのですが……いづれ又お目にかかる折もありませうから……」

駄夫はポンヤリ彷徨ひ出でて重い格子戸を閉すと、山門から立ち去らずに裏手の墓地へ廻つて行つた。――古い昔の友達であるとか、尤もらしく自分の姓名だとか、殆んど無意識に出まかせに而かも極めて自然のうちに述べ立てて來たが、其處を出て墓地を彷徨ふ今も尙ほそれが極めて自然なものに思ひ浮んで來るばかりである、可笑しくもなく變でもなかつた。ただ妙に茫茫として和やかな、まるで一色の闇のやうに潤んだものが彼をトップリ包んでゐた。

墓地の中にも樹立が多く、爽やかな影と日向のだんだら模樣が、缺け崩れて深く窪んだ古い石にも息づいてゐる。墓地の四邊を取り圍む深い樹立は皆一樣に蒼空高く梢を喰めた、欅、樅、檜、ポプラの類ばかりで、又中に佗しげな柿があり無花果があつた。彼はただ足の行くままに目當もなく、墓地の片隅から發足して墓石の文字を一字づつ在るがままに讀みつぶしては歩いてゐたが、時々氣に入つた墓を見出す度毎に、自分の親しい知人達を一人づつ靜かに其處へ埋葬して、そのまま忘れたやうに其處へ埋めて歩いて行つた。「刈田傳二・行年七十二」彼はさういふ墓の下へ、昔は一しきり足繁く往來し合つた一人の老人――今も尙髮鍬として死ぬ色もない漁色家の老いたる友を埋めてしまつた。それから、彼の半生に最も心に殘つてゐる（まるで沙漠の迷ひ子のやうに！）一人の女性は、何んだか昔肺病で長逝した墓のやうな、變に濕つて薄汚い石の下へ埋めてしまつた。それから、彼自らの墓墳は、彼の弛みない探索によつて探し當てたものであつたが、墓地の全く片隅の濕りの深い垣根際に、無花果のバサバサとした葉の陰に、鈍くブスブス燻され

てゐた。高さは一尺にも尙足るまい、棄て去られたもののやうに列の外へハミ出してゐる其の墓は、ひどく愉しげな地藏尊（？）の形式に刻まれてゐた。何かの折に虐待せられたものであらうか、頭の半ペタは缺け崩れ、又、右膝から下の部分は缺け落ちてゐて最早ない。跛の彼は長々と大いなる空に向つて絶えざる欠伸を放つもののやうでもある。腹のあたりに刻まれてゐる汚れた文字は享和二年壬戌と讀み分けることが出來た。駄夫は暫く睨んでゐて、缺けた頭を叩いたり鼻を撮んだりしてゐたが、やがて其れにも倦怠を覺えて、跛なる地藏尊の型の如くに、彼も亦長々と欠伸を放つて立ち上りついでのことにポカリと頭を蹴飛ばしてみたが、見掛けによらぬ坐りは確かな石佛で、彼の爪先へ痛々と思ひもよらぬ疼痛を復讐した。彼はまどかに息を吸ひ、晴々として澄み渡る葉越の空を眺め乍ら、無花果の根本へ小便を垂れた。時々間違へた振りをして地藏尊の缺けた頭へ浴せかけたが、濡れることには馴れてゐるのか、忽ち全身に沁みてしまつた。彼は朗らかに笑ふことが出來たのである。斯うして、彼は斯の日頃永らく文學を忘れ藝術の雰圍氣に遠ざかる者であつたが、この日ゆくりなく一片の即興詩を（――生れて初めての經驗であつたが――）歌ひ出す悅びを持つたのである。彼は墓地を彷徨し木陰を縫うて、日沒の迫る頃まで魂を籠め（――まだ幸ひに落失さなかつた！）幾度か推敲に耽つたのであるが、技巧を弄ぶに從ひ其れは次第に眞心を遠ざかる物となり、結局素朴な原型である即興詩のみ此の際最も適切な物であることを認めて滿足した。

旅人は
野越え山越え村越えて
幾度しよんべんするものぞ！

黄昏の迫る頃、彼は俄かに我に歸り、墓地の裏門を廻らずに、倉皇として垣根を破り、犬の如くに逃走した。彼は街道を慌ただしく通り過して、專念に竹藪の家へ歩いた。

四

或る朝ふと目を覺ましたら、その日は直ぐと階段の降り口に、それ故丁度沓脱のあたりであらうか、殆んど枕の横手あたりに聽きとれるほど程近い階下にあつて、明里

の一家は細高い叫喚を張り上げ乍ら口論に耽つてゐた。それでは今朝は斯の乎論の喧しさに起されたものかと思ひ、其の儘それに吸はれるままに何氣なく耳を澄してゐたら、その時細高い音聲は殆んどちかに獣夫の耳もとに鳴り響くにも關らず唯ガヤガヤ意味を持たない一聯の音響に聽きとれたばかりで、それの意味を打ち消してしまふほど戸外は更に猛烈な雨風が荒れてゐた。紫吹をあげてザザザザーツ……と頭を搖ぶる竹藪の音が、激浪のやうに荒れ狂ふ裏手一帶の劇しい走伏を未だ一杯に溫氣の籠めた朝の部屋に歴々と描き出して見せてしまふ、かと思ふと、突然硝子を射拔くやうな太く眞つ直な雨脚がチチチチチチィーと一頻り窓に噛みつくのであつた。すると又あたりは急にホツとして、ずうつと遠い向うの林や廣屋根の上を激しく叩いて被つて行く遠い雨脚の音が聽えた。——さう言へば、今朝方未明の事であらう、ふと目を覺ました極めて僅かな瞬間のうちに激しい嵐の唸り聲を——それは遠かに武藏野を遠く鐵渺と吹き捲るもののやうに聽きとれたが——とりとめもない唯それだけの險しい唸りを、二重にも亦三重にもボンヤリとして殆んど夢心に近いであらう朧げな耳に殘したやうな記憶があつた。それは夢であつたのかしら？……たとへば夢であつたにしても、それは遠い嵐の唸りに違ひはなかつた。——そして獣夫は、今朝も亦、(それは毎朝のことではあつたが)誰よりも遲れて目を覺ました氣まづい不覺を、ボンヤリと頭を抱へて後悔した。

——お母さんはあんまり冷酷だよ。それぢやあ、まるで殘酷と言つた方がいいくらゐだ！ それあ意氣地のない僕のことだもの、死にたくて「死にたい」なんて言ひ出す筈はないんだ。如何にも甘つたれた氣紛れな氣持の方が寧ろ強いには違ひないけど、それでもそんな厭な言葉を言ひ出すには矢張り其れ相當の譯の分らない歎きといふものが有るからなんだ。それをいきなり「死ねもしないくせに」なんて、そんなに冷酷に嘲笑ふ奴がゐるもんですか！ せめて親子の間ででも斯んな甘い歎きを認め合はなかつたなら、僕達の生活なんぞに一つだつて喜びや生き甲斐の有りやう筈はないんだあ！ それに、お母さんは頭ごなしに「死ねもしないくせに」と僕を冷笑するけれど、人間なんぞはそんなにハツキリ死にたくつて死ぬものぢやないんだ。厭々ながら死ぬ奴だつて、それああるんだぞ！ お母さんなんぞは嚴く反省することが足りないから、手近に在るものを輕く見積る悪い癖があるんだが、それあ何だつてさういふ意識で觀察すれば、

手近に在るものはみんな淺薄な多分に過失を含んだもので、よしんばどんなに張り切つた貧乏にだつて甘さや餘裕が目につくものですよ。だけど、ハタから見れあ、僕の家なんぞ幾つ自殺が有つたつて母殺しだの一家心中だのと騒いだつて、誰も不思議と思はない程立派な根據があるんだい。死ぬんだつて殺すんだつてみんな一寸したハズミなんだい。どんな氣樂な奴だつて、生きてさへあたら、死んだり殺したりやりかねない變テコなところが有るもんだぞ！ やつてみなきや、誰だつてやれるとは思へないんだ。それが、僕に出來ないと思ふならそれあ笑つてゐる奴は一生怒れないと定めてしまふ程輕率な間違ひだぞ。僕あねちねち死ぬことばつかし考へてゐる時は、どうせ死にたくても死にたくない程ビクビクして意氣地がないんだけど、いきなりカアツと逆上せたら僕にだつて僕のことが分りやしないんだから……

そして興里の激しい悲嘆は、堰きあへず、高い嗚咽に噎せはじめて消え入るやうな愁訴に變つた。それはある時、込み上げる太い歎きに胸つぶれ、絶え絶えに辛くも噴き上げる脆い息吹にきこえたり、又ある時は鋭く細い一條の歎きとなつて地を這ふやうに荒涼と引き流されてきこえたりした。時々、舞ひ狂ふ嵐の腹が絶叫に似た唸りをたてて棟を打ち飄と戸外を嚙み狂ふ度に、一頻り重苦しげに軋みたつ鈍い家鳴に打ち雜つて、絶え入るやうな興里の愁訴は忍び泣きの心細さに吹き千切られ、漠々と這ひ又やや高く蹌踉して遣瀬なく物凄いものに聽きとれてきた。——とは言ふものの、これは又何といふ鬱積した沈默の階下に蟠ることであらうか？ 何といふ無氣味な沈默へ向けて、興里はその激しい歎きを鎖め込めてゐるのであらうか？ 殆んど幽かな溜息さへも最早其處から湧き起らうとは思ひも寄らない。いや、ホツとして一つ吐息を洩してさへ、人は大いなる悲嘆に沈む緣因となり、醫し難い後悔に身悶えせねばならぬであらう、それゆゑに、鬱積した長い吐息を嚙み殺して鈍く白々と顏を青ける沈默である。恐らくは太い怒りを胸に藏して僧々しげに素知らぬ顏を作るところの斯る敵意の沈默であつた。——痩せ衰へて思案深い興里の老母は、日頃物憂げに針を手にして部屋の片隅に凭れたまま、日を終るまで一手動かす氣配もなく思案に耽る樣子であつたが、この朝は如何ばかり忙しげに顫へる手先を爪繰らせて嚴しく糸を噛んでゐようか！ 又あのガサツな、ヒステリイの興里の妻は？ 又泣き蟲の多文郎は？……たとへば今日の口論が興里とその母の交渉であるにはしても、今朝

に限つて、ガサツな總江が映かぬことも不可思議である。これ程の息苦しげな洸獣に、業腹立てて一醉搾らぬことがあらうか？……

又、嵐の太い一うねりが、鋭い家鳴を響かせて押寄せて來た……

そして、結局、與里の激しい悲嘆は、この日の長い爭論の終幕であつた。捨鉢詞とも言ふべきものを、與里は殊更に置き捨てようともしなかつた。そして高い一うねりが屋根に軋がしく卷き狂ふ時、家鳴に紛れて屋外へ去るぼやけた與里の影法師が、戸の開閉に暗示せられてフオツと目前を通り過した。……それでは矢張り起き拔けに獸夫のそれとなく推定した通り與里は沓脱に居たのであらう。それも爭論の始めから、已に外出の支度を了へて靴を穿いてゐたものかしら？　それとも長い歎きの終りにあ今の先刻わづかに途切れた靜寂のとき紐を結んだものであらうか？……

獸夫は窓際へ這ひ寄つて、ソツと窓掛を揚げてみた。……果して今朝の口論は與里が全く出勤の支度を了へて沓脱へ立ち下りて後、勃發したものと推定せられる。與里は毎日の詰襟服を身に著けて、さらに又ドス黒い厚羅紗の、膝から下へだらしなく垂れ落ちた冬の外套を纏うてゐた。それは破れて、肱や衣襞は綻布だらけであつた。春の外套を持たぬのだ、勿論それが第一の理由であらう、しかし又、與里はここ數日以來激しい發熱を訴へて乾いた唇を噛んでゐたから、この種の重い冬の衣裳が、高い悪熱に要求せられた結果でないと言ひ切ることも出來はしない。――何といふ寒々とした薄い影！　お前の草臥れた神經は飽くまで蒲柳と色蒼ざめて襟巻外套の背筋にまで、何んとまあ鈍く光澤なく滲み出てゐることか！

與里は辛くも半ば開いた重苦しげな番傘へ肩から上をスツポリもぐり込むやうにし、生氣の失せた長身をだらしない「く」の字に曲げて、積殿りの繁吹のなかを、何か冷い決意を迫ふかに息を詰めて歩いて行つた。しかしそれは、一見變に突き詰めてゐて忙しく大股に見られるものの、又なにがしの太い氣落ちと、ガツカリした何か無限の弛緩が見えた。二階から祕かに窺ふ獸夫の氣配に傷心の與里が氣付かう筈もなかつたし、長い歎きを閉ぢ能めて來た濡れた戸口へ首をめぐらす感慨に浸かされる甘さもあるまい、丁度嵐の遠のいて行く妙に四邊のホツとした變に白々と味氣ない虞さの中を、與里はただ何のこともなくヂヤブヂヤブと――獸夫の眺く小さな視界

を、或ひはまるで平べつたい舞臺の中を、硝子戸越しに一人悄々と横切つて、瞬くうちに見えなくなつてしまつた。

遠い林に、遠い家並に、嵐の叩く深いうねりと梢の搖れる顫がしさとが聽えてゐる。――思ひ出の、遠い幽かな、物に怯えた夜更けのことや、爐邊夜話、夜鷹や梟の啼く悲しげな闇夜のことや、さては又古い數々の夢の奥には、少年の歎きに沁みた嵐の叫びが顫顫の深い奥手にきこえはしないか？……見るともなしに眼を上げると、獸夫の無意味に撮んでゐた其の薄汚い窓掛は世の常のそれではなくて、メリケン粉の古い袋を切り開いて縫に數枚縫ぎ合せた慶物利用の代物らしい、如何にもだらしなくダラリと垂れて、丁度目の向いたあたりに譯の分らぬ商標を讀みとることが出來た。變にいきれた黴臭い布の匂ひがまつはつてきた。鼻のあたりへチツと擦げて嗅ぐともなく見るともなしに見たり嗅いだりしてゐたら、激しい嵐の一うねりが今しがた引いたばかりの空虚の中に、まだ引き殘りのケチな小嵐な突風が小雨を殴り小枝を叩いて間の拔けたフオツと明るい往來の上でシミツタレな小嵐ぎをたててゐた。――ふと氣が付いたら、階下からは相も變らず物音一つ聽えてこない。獸夫はソツと窓掛を手離して再び寢床へ歸着すると、忽ちグツタリ仰向けに寢倒れたまま空洞な眼を閉ぢもしないで、次から次、次から次へと取り止めもない物の像を額へ運んだ、全く何等の意識もなしに。……そして漸く我に返つて、埃つぽい白けた溫氣を蹴散らすやうに勇ましく、ところが矢張り悄々として兎も角然し間遠ひもなく跳ね起きはして、ふやけた寢床を片附けてゐたら、又してもあの高いうねりがひどい凄さで縹渺と荒れつのりつつ一際鋭く押寄せて來た。そしていきなり次の瞬間には家の脾腹に打ち碎けて、獸夫諸共に搖すぶりながら裏手一帶の竹藪に舞ひ狂ふのがきこえてゐた。

獸夫は變にモソモソして、何んだか妙に瞬ばかり爲たいやうな氣になりながら、階段に浮かぶ朦朧とした薄暗がりを吸ひ又吐いて靜かな階下へ降りて來たら……

（果して！）――與里の老母は壁に凭れて右手を右脇に差し入れたまま唯グツタリと項垂れて殆んど其處に一年間も動く機能を忘れ果てて坐したる人の面影をしてゐた。朝の挨拶を述べ乍ら獸夫がその前を通り過ぎる時、途端にチラリと[illegible]を――それも漸く獸夫の胸のあたりへまで重苦しい[illegible]持ち上げはしたが、すぐと又下へ落して最早そのまま動かうとする氣配もなかつた。ただ、首

を擡げて直ぐさま落した物憂げな動きのなかにも、それを會釋に代へようとする幽かな素振りが見受けられた。その時、朝の挨拶も確かに答へたもゐらしい、だがそれも殆んど幽かな呟きで、音には聽えずに氣配だけが感ぜられた。

裏の戸口をガタガタ開けて嵐の吹きすさぶ井戸端へ出る迄――歇夫の通り過ぎた部屋はと言へば、それが即ちこの家全體の間數を縱斷したわけで、階段を降りた場所が不思議に明るい三疊の間、その隣りには興里の老母が有るか無きかに凭れてゐる朦朧とした六疊の部屋、そしてそれだけが全部であつた。さう言へば、二階では何のことも無かつたが、來てみれば階下はひどい雨漏りである。二階の窓の眞下のあたりが漏るものらしい。其處にはバケツや鍋なぞを竝べて、ポタポタ落ちる黑い滴を受ける工合に計られてゐたが、しかし幾分雨漏りの場所が多くて鍋やバケツが廻らぬらしく、雜巾や新聞紙を敷きなぞして、それが又濡れて崩れて、そこら一面に目も當てられぬ樣子であつた。臺所へ來てみたら、其處はもう雨漏りどころの段ではない――明取や建付の惡い戸口から自由に吹き込む嵐のために、床板は無論のこと、壁も釜も庖丁も一樣に濡れてギラギラしてゐた。

成程、今朝に限つて、あの裂くやうな總江の喚きが聽き取れぬのも解し難いと思つてゐたが道理なことで、探ね見廻はす迄もなく家全體に彼女の姿は影も無い。――この嵐に用達しといふことがあらうか？　恐らくは腹立ち紛れに走り出て、多次郎を引摺りながら、街を（――畑か？）彷徨ひ歩くものであらう。この一家には變哲もない、其れは行事にすぎないのだから……

歇夫はモソモソと家を歩いた。そして此のジメジメとした臺所で間に合はぬこともなかつたが、故意に井戸端へ出て顏を洗ふ氣持になつた。立ち出づれば、吹き荒れる風の冷たさよ鋭さよ打ち拉がるる悅びよ！　何といふ溢れて盡きぬ快適の込み上げてくることであつたか！　湧くものの如く壯快のひたすら胸に顫へるのを彼は感じた。歇夫は大きく胸を張り又深々と肩を引いてヂツと首を空の一方へめぐらしたら、靜かに擡げた首の彼方に、倉皇として低く走る大いなる雲を見たのであつた。歇ふが如き心をもつて――彼は涯しない無氣力をひろびろと目に得たのであつた。

暗い室内へ戻つて來たら、それでも興里の老いたる母は何時の間にやら歇夫のために階下の六疊へ食膳の支度を調へておいた。そして其の老婦人はと言へば、已に又

一年間も動かぬ人の面影をして、もとの場所にチツと俯向いて坐つてゐた。眺めたら、新聞紙は取り換へられ、雜巾も亦絞り直されて、變に慎しくシヤツチョコ張つて竝べられてゐた。

老いたる興里の母親は、睡つたやうに何時もグツタリ歇りこくつてゐる人だつた。神經の影法師かと思はせる興里の母だけのことはある。彼女も亦、鋭く寒い神經の老さらぼうた成れの果かと思はれる有樣であつた。日永一日を伏目勝ちに、興里と同じく眉を險しく寄せ乍ら顫へる手先に何かしら仕事をしたり弄つたりしてゐる――黃色い顏にはさらに光澤といふものがなく見るからに深い老を漂はしてゐるのに、その割に皺の少い頰のあたりは、鋭い智力を閃かしてゐる廣い額と相俟つて、高い理智を暗示する氣高いものに思はれたり、又或る時は病的な薄刄のやうな神經を痛々しげに印象したりするのであつた。昔は立派な家庭の主婦で、むしろ豪奢な半生を過して來たのに、（その當時から歇夫と興里とは已に友達であつた――）一種の利權政治家である連合は晩年種々の畫策に齟齬を來して「生ける屍」の如き凋落に會ひ、興里の學資にも窮してゐたが、その人の死亡とともに一家は更に斯んな悲慘な生活へまで墜ちてしまつた。凋落の頃からかけて連合の死亡前後へ立ち至るまで、この理智的老婦人は最も激しいヒステリイに惱まされてゐた。いや惱まされたのはむしろ家族がひどかつた。――その主婦に劇藥を投入される愁があつて日毎の食事に猜疑や不安を感じ續けたものである。それでも連合が死んでしまふと――まるであらゆる精根が根こそぎ盡き果てたもののやうに！　この人のヒステリイまで枯木のやうに鎭まつてきた。そしてそれからのことである――木偶のやうに動きを忘れた投影の深い靜物と成り果てたのは！　およそ人の生活苦を個人の上へ累積して、ここまで疲勞困憊を人の像へ具象化するには仇おろそかな年月にては及ぶまい――骨董を玩味するほどの輕い氣持で一寸皮肉を（――人間の生活苦へか？　それともお前の人生へか？　ヘン、人間樣の生活苦へさ！　あたりまへ！）吐きたくもなる奏である。日永一日グツタリとして殆んど口を利くこともない、それでゐて、ふと、時々一旦喋り出すとき、驚くばかり美麗な言葉が――（何といふ深く光澤ある聲であらうか！）滔滔として湧き起り、今に終るかと思ふ度に次より次へ展開して、聽き人の呆れた顏付が如何にも間抜けに見えるほど暫しのうちは途絕えもしない。その瞬間に此の病み疲れた老婦人は、華麗な客室に

深く埋もれ多彩な思ひ出をあたり一面にぼかすところの、斯る老いたる貴婦人の一人の如く思ひ做された。ただ此の人の饒舌には、ただごとでない神經の穂がチクチク揺れて話の前へ滑り出てゐた――聽き人の神經に絡みつくとき、それは堪へ難いものとなつた。

獣夫が食事を終へるまでに、それでも矢張り老婦人は動かぬこともないのであつた。暫くチツと獣つたまま項垂れがちに何かと指先をクネクネと爪繰らせてゐたが、まるでテリヤ種の犬かのやうに、急にピタリと張り切つた顔を擡げてゐた。なにか咄嗟な神經に彈かれでもしたやうに、そして又、長い夢からふと目を醒した人のやうにとぼけた顔にも見えたのである。すると坐つた形のまま緩やかに方向を變へ、腰を折り兩手を下ろし、兩湯りのする敷居の方へ伸びて行くやうに聲りはじめたが――其處まで行けばわけないものを、三尺も手前の場所に動きを止めて、ガナガナと顫へる腕をやうやく疊とすれすれに伸しきり、辛うじて新聞紙に屆かせることが出來たら、少しづつ滑らすやうに動かして、兎に角に紙の位置を一尺あまり動かすことが出來た。成程そこは、つい先刻から漏りはじめて、長い間延びた間隔を置き、忘れた頃に丸い大きなつぶらな玉が一つづつポタリと落ちて

彈いてゐた。まだ鮮新しい至極小さな水溜りがいやにふつくら盛り上つてユラユラしながら、少しづつずらされて行く紙の陰に隠れてしまつた。さうしたら――（この痩せた、蜻蛉のやうな老婦人はいつたい何を思ひつくのだ！）折らでもの骨折りをして兎も角も紙はうまく動いたのに、やうやく作業が終りをつげたと思つたら今度は急にチリチリと聲り寄つて一尺あまりの近さに寄り、妙に眞面目な顔付をして紙の面を眺めてゐる。その紙は未だに滴を浴びないで、全面に爛るやうな鈍い白さが輝いてゐた。何か目を引く記事や寫眞があつたのかしら？それとも果して、新聞なんか讀んでゐるのか、ゐないのか？――長いことチツと其處にさうしてゐて、そして獣夫が矢張りチツと凝視めてゐたら、いつまでも結局それは嗤だそれだけで終つてしまひ、それはそれだけのことであつた。さうしたら、何んだかサツト鈍く光つた一つの玉がチラチラしながら落ちてきて、新らしい紙の上で平らたい音をたてながらパチンと散つて轉げてゐた。老婦人はビクンとして――（今にもキヤンと啼くのかと思つてゐたら）やがてモソモソ向きを變へて、後も見ずに元の壁際へ還つて行つた。

「御馳走様」と言つたら「いいえ」と言つて尙ほ下を向き

――獣夫が二階へ上つてきたら、いきなりガチヤガチヤと茶碗のぶつかる音がしだした。ずゐぶん手荒い音であつた。（冗談ぢやアない。それが倒れたらあしたから御飯を食べる茶碗がねえや。困るんだよ、まさか俺だつて金盥から飯も食へめえ。）――獣夫はゴロリと寢轉げて欠伸をなぞし、勝手なねつに耽りながら滿腹の倦さを堪能した。鼻の喰りが耳についてい、やがて次第に、[illegible]中でそれが靜かな波のやうに引いていつたら、脊骨のへんからジインと證んだ音がしだした。それで獣夫はシンとして身體を起して洋服を著けはじめたら、いろんな取止めのない昔のことが聲のやうにノコノコ生えたりパツと消えたり又現れたりした。矢張り出掛けねばならぬのである。自然に身體が出掛けるやうに動くのか、出るよりほかに仕方がないのか、やはり外氣はひろびろとして物憂い心にも宜いのであらうか――ま、どうでもいい。幸ひ雨は小降りになつて、雲の斷れ目が薄く白く覗いてゐる。

突然階段を登る足音がきこえた。足音であらうと思つてゐたら、やはり足音に違ひはなかつた、實に幽かな音ではあつたが……。丁度ズボンをはき終つて、ボタンをはめてゐるところで獣夫が斯ういふ姿勢のまま鋭く戸口を窺つてゐたら、痩せた頭が迫り出してきて次第に半身立ち現れたが、そのまま這ひ込むやうにして戸口の壁際に吸ひつき靜かに坐つた。勿論與里の母である。登る時から疊ばかり凝視めてゐて、險しく[illegible]ら見守つてゐる獣夫の眼付は素知らぬ顔に、大變自由な物腰で靜かに坐ると、膝の上なぞ直したりした。そして――

「ほんたうに困りましたよ……」

と險しく眉を寄せながら呟いた。獣夫は直ぐと喧い愚痴話の氣配を察したので、又神經につかまつちやつたー――と厭な顔をし、空々しく脇見をし、天井を仰いだり空の工合を窺つて舌打ちしたりしながら、ズボンのボタンをはめ終へると、わざと大袈裟にバタンと轉げて安坐をかいた。

「――まあ、大變な嵐ですこと、ねえ……」

「ええ。それでも割りに漏らないぢやありませんか。ことに二階なんかはね。僕は昔、家の中で傘をさした覺えがある……」

「ほんたうにクサクサしますわね。ねえ、モミハラさん。いつそ死んだら、ずゐぶんせいせいするでせうねえ」

「そら、つまんないや。僕の友達でね、一人自殺しそこなつた奴があるんですけどね、そいつはね、死んだら何んにも分らなかつたんだつて。だから死ぬのはつまらな

いつて、さう言つてた。そら、さうだらうな……」
「あんな生意氣な奴つたら、ありやしませんねえ、子の身分として親を打つたり蹴つたりしてねえ。今朝もいきなりあたしの此處を（顳顬のあたりをおさへて）ビシリーツつてね。それあ幾度も――もう血相をすつかり變へて、おお！　こはい。――ねえ、モミハラさん。あいつ又狂つたんぢやありませんかしら？　額のここがグツと吊つてたでしよ。近頃……眼の色が濁りを帶びて底光りがして、腰の付け根が斯うフラフラしてねえ、變ですわね……」
「そら違わア。氣狂ひつて、もつと人相が鋭く變るものですよ。あれア風邪で熱の高いせるなんですよ。だから氣持だつて幾分並みぢやアないんですさ。――それに、貴方も矢張り悪いよ。あなたは興里の氣持を察してやらないから悪い。たとへば興里が多次郎や總江、[illegible]を叱つてるでしよ。するとはたの貴女までいい氣になつて總江さんや多次郎を遷込めようとしたりする。――いつたい家庭の喧嘩つてものは靜かな平和が欲しいからやり出すことで、現にね、喧嘩をしてガンガン喚いてゐる奴が一番それを痛切に欲しがつてゐるんだ。だから貴女がとりなしてやれア興里だつて喜ぶものを、貴女ときたひには、憎しみ一方でいい氣になつて人の喧嘩に輪をかけるんだ。そん時の貴女の態度といふものは、見てゐても、あんな憎々しいものつたらないよ！……」
「あいつはね――ほら、四五年前の春さきに狂つたでしよ。自動車に、毎日毎日乗り廻してあんなにすつかり重役のつもりになつたりなんかして……あの頃のことでしたよ。いきなりあたしを押し倒してねえ、馬乗りになつて、二度――さう、一度は畳、一度は夜中のことでしたけど、ねえ、モミハラさん、あいつツたら目の色を變へて、かう額をグツと吊りあげて、頬がすつかり斯う落ちてねえ、いきなりあたしをギユウツと絞め殺さうとしたんですわよ……」
「それア、いたづらですよ。人間てものは腹の中と表とはまるで違ふものだから。――」
「腹では愛して、表では殺して――へえ、殺されるのにいくらか違ひがあるんですかしら……？」
「ちげえねえ。全くだよ！　お前さんはいい頭だよ！　何だい、あああ、俺も死にたくなつたよう！」
「おお、寒い。まあ、ここから冷た[illegible]がはいる……」
「チエッ！」
成程寒いのもことわりである。老婆のもたれてゐた場

所は、肩が丁度壁から半分はづれてをり、頸筋に窓の隙間が當つてゐた。そこで老婆はジリジリと横に動いて身體をすつかり壁の陰へ入れてしまひ、暫しの間苛立たしげに手を顫はせて、メリケン袋の窓掛を窓の隙間へ當てがふやうに引つ張つたり押し込んだりして工夫してゐた。獣夫はゴロリと寢轉げて、知らん顔をした。
「あいつはねえ、氣が狂れると腰から上を斯う、フラフラふらふらとさせてね、兩手をダラリと斯んな風に持て扱ひに苦しみ乍ら、肩から下へダランダランと振り動かして――それはそれは莫迦らしいことばかり喋るんですよ。――」
「もういいぢやありませんか！　第一興里はもうこれから先狂ふ心配はないやうだし、貴女さへ温い心を忘れなきや、この一家は何時に限らず幸福な團欒が營めるわけなんだのに」
「――そしてねえ、あいつときたら、俺は世界で一番偉い哲學者だとか、一番偉い豫言者だとか大威張りでねえ。世界中の女はねえ、フフン、みんな俺の自由になるんだ――ですつてさ……」
「チエッ！」
獣夫はあきらめてソツポを向いた。かうなると、手に負へないのだ。ありたけの厚意を寄せて觀察しても、この人が斯んな工合に捩れてくると、憎々しげな憎悪ばかりがこまかい神經の隅々にまで滲み出てゐて、心の裏の温かさがこればかしも感じられない。あまり憎悪が激しいから大概はこちらの方も呑まれてしまひ、ただボンヤリと敵を罵る呪詛とのみ聞いてゐるうちは差支へもなかつたが、ふと氣がついて、實子を呪ふ言葉也と反省する時には聞き苦しいものであつた。
それに、この人は斯んなふうに物語る時、何だか不斷に相手を冷笑するやうな――變な工合に唇を歪めて、實に冷酷な犀利な顔付をしてゐる。よく見ると、どうやら其れは悪い意識から出たものではなく、本來こんな顔付だけしか作れない人だとも思へるし、又ある時は案外てれ隠しのやうな氣の毒な顔に（最もロマンチツクに考察して！）見受けられないこともない。――それにしても其れが冷笑ではないと斷定することは出來ないので、兎に角いい氣持にはなれなかつた。そのくせ「ねえ、モミハラさん――」だとか「さうですわねえ、ダフさん――」だとか、厭に馴れ馴れしく押付けがましく切り込んできて、まるで獣夫を一味同腹の徒黨なみに扱ひながら、憎々しげに、興里や總江の陰口ばかり叩くのである。獣夫

も甚だうるさいから「うんうん」といい加減に頷いたり——頷いてばかりゐるうちには、何んだか自分まで莫迦にされてゐるやうで癪にさはつて堪まらなくなるから、そつぽを向いて欠伸したりするのだが——するうちに又、頬筋のあたりに絡んでくる老婦人の粘りつこい罵言が、ひどく冷笑的にネチネチときこえてくるので、根こそげ厭らしく思はれてしまふのだ。この人の神經にこちらの神經を絡ませたら、もう抜き差しの出來ないことを獣夫は百も承知してゐた。

「分つた　分つた！　もう分つた！　貴女はもう、ぶたれた分だけ悪口を言ひ返したよ！」

——今日といふ今日はほんたうに、それはそれは腹が立つて……」

「分つたつたら！　今日に限つたことぢやアないんだからー」

「こんな暮しをつづけてまで、生き永らへてもつまらない話ですもの、ねえ。あたしだつて自殺の出來ないことも……フフフフ、ねえ、モミハラさん。いい年寄りがあんまり恰好の宜いものぢやありませんけど、首絞りでもするぶんには——鴨側へでも扱帯を掛けてぶら下がるぶんには、ねえ……」

「なんでい。つまんねえや。そんな話はね。ちつとも面白かねえや。それに——」

「あいつの鼻先へぶんやりとね。ダランとブラ下がつてブラブラぶらぶらとネ——フフ」

「チエッ！」

獣夫は腕組みをして汚ならしく横を向いた。彼は先刻から又起き上り、坐り直して、雲の動きを眺めてゐたのだ。別に故意とするわけではなかつたが、自然にそらぞらしい素振りをつくり、老婆の言葉を莫迦らしいものに思ひ乍ら、内心厭な・陰惨なものを意識せずにはゐられなかつた。矢張り、多少おどかされたのである。それで、その時ふいに口を噤んで獣り込んだ老婆の奴は、又例の變な工合に唇を歪めて小憎らしい冷笑を浮べてゐるのではあるまいかと思はれたので、チラリと一瞥を與れてみたら、思ひがけなく黄色い板のやうな顔付をして、まるで表情を失つたままチツと一つところを凝視めてゐた。

獣夫の下腹部に、厭な、重苦しい蟠りがひろがつて來た。

するうちに——激しい物音を跳ね散らして、階下へ總江が戻つてきた。戻つたかと思ふうちに——殆んど下獣

も脱ぐか脱がぬに、いきなり多次郎を突き飛ばして打擲してゐる。さういふ物音がきこえるのである。多次郎はベソをかいてゐるらしいが、高く泣くのが恐ろしくて、變な工合に吃逆つたり、ウオンウオンと鈍く喚いたりしてゐる。——その泣き工合をきいてゐると、これは隨分長い長い泣き聲の連續で、思ふに總江に曳摺られ乍ら道といふ道の長さを泣き通して來たのであらう。

獣夫は立ち上つて窓際に寄り、硝子に頬を擦りつけ乍ら雲の有様を覗いてみた。雨は全くあがつてゐたが、幾つた風は、まだ飄々と吹き荒れてゐる。その雨もまだ時々降るかも知れない、断れ目は見えるが、空の灰色は尚ほ深いから。……知らぬまに手に觸れてゐた窓掛がどうしたわけか、妙にジツトリ濕つてゐた。調べたら、窓の隙間から吹き込んでくる繁吹のためにやられたらしい。さう言へば、その邊一帶の壁まで矢張りジツトリ濕つぽいのだ。

「ゐないの？——二階にゐるんだらう？　獣夫もゐるんぢやないか！……」

下では總江が喚きながら二階の氣配を窺ふやうな様子であつたが、やがて直ぐ跫音荒く登つてきた。あれだけの嵐に吹かれて餘程癇癪も醒めたらうに、薄暗い家へ着いたら尚ほ興激しくぶり返してきたものであらうか。二階へ現れた顔を見たら痩せてゲツソリ窶れた顔はいつもの通り黒光りで、頭は水でグショグショだつた。額から頬へかけては潭山に赤茶けた毛が垂れ下つて、それがさもさも不精たらしく見えるのに、其處を又、滴が垂れて鍵々に曲りくねつて這ひ落ちてくる——それでもこの人は氣にも留めずに、三角眼玉を險しく尖らせ、ひどくふくれて突つ立つてゐた。總江は二人をかはるがはる睨みまはした。

「——またあたいの陰口を言つてたんだろ。もうろくたかりめ！」

「嘘だい！　お前さんの美德に就いて褒めてたんだよ。見上げた人だよ！　お前さんは！」

「うるせえ！　獣つてろ！　居候め！　こくつぶし！出て失せろ！」

「ああ、また、ヒステリイ、ねえ——」

「何だと！……もうろくたかり！　お前は氣狂ひを生んだ親ぢやないか！——」

「よせよ——」

獣夫はヒョイと立ちはだかり、老婆の方へつめて行く總江をおさへた。そして、否應なしに後を向かせ階段の

方へ押しやつて、背を押し乍ら自分も一緒に降りてきた。總江はふくれて地蹈鞴ふんだり首を張つたりしてゐたが、割りに素直に、それでも下へ辿りついた。

「お前さんはなかなか立派な奥さんぢやないか。昨日だつて、與里と君と話してたのを聞いちやつたよ。君達は昨日、勵まし合つて感激してたんぢやないか。ちやんと知つてるんだよ。——ま、君は下にゐた方がいい。階段てものはね、つまりさういふ役目もするんだつてさ。一人が上にゐる時は一人が下にゐるために、て、そのための境界線も或時は之を階段と言ふんだつてね、西洋の偉い人がさう言つたんだ。知らねえだろ……」

總江は降りると、多次郎の顔や手足を拭いてやつて、別な著物と著代へさせた。多次郎は全身グツショリ濡れてゐたのだ。

「お前さんは仕事を見付ける當てがあるの？」

「あるさ。今日なんざ、重役に會ふんだぜ。三井銀行のね」

「チエツ！　笑ひ事ぢやアないんだからね。ほんたうに早く仕事を見付けるといいね。そして此處を出て行つてくれると助かるんだよ。お前さんが一人ゐると、ずゐぶん暮しがかかるからネ……」

「ウン、さうだろ……」

「でもね、お前さんが家にゐたつて邪魔ぢやアないんだよ。淋しくないし、みんなとても悦んでるんだから——ほんと。だからお前さんが仕事を見つけて、いくらでもいいから口前を出して、此處から通ふやうになつたら、それアいいね」

「さうださうだ、全くだア！　今にさうなるよ。なんでも月に五へんくらゐ、圓タクに乘つて歸つて來ようか！　さうなると、第一に、いくらヒステリイの時だつて、ダフダフなんて呼び捨てにする人はゐなくなるだろ」

總江は部屋近くの縁側に屈んで、雨漏りに當てがはれた雑巾を絞り直し、濡れた疊や床板を拭いてゐた。多次郎は、雨滴れの溜つてゐるバケツの縁へ手をかけて、はじめは母親の機嫌のことを考へてゐたが、別に叱りさうな氣勢はないのでジヤブジヤブと手を掻き廻しはじめた。總江はただ何も言はずに、多次郎の泥だらけな足を丁寧に拭いてやつた。

「お前さんは口が悪いね。女と口をきくときには、特別と、變な工合にぞんざいですれてゐるよ。悪い女と遊びすぎたせゐだろ……」

「さうさ。昔は不良少年だつたんだい」

「アハハハハハハ」

總江は急に腹を抱へて笑ひ出した。胸を突き出したり、腹を捩つたり、仰反つたりしてゐたが、笑ひ疲れて眼をショボショボと凋ませ乍ら、漸く笑ひを收めたら

「メエンメエン」と言つて口を尖らせ、多次郎の鼻先へピヨツトコみたいな道化た顔を突き延した。多次郎がエヘンエヘンと笑ひながらガチヤガチヤにはしやぎ出したら、總江は大變機嫌の良い顔をして、多次郎の遊んでゐるバケツをガタガタ振つてみせたり、突然チユツ！　と多次郎のおでこへ接吻したりした。

馱夫は二階へ引返した。それでは出發しようと思ひ、上衣を取りに來たのであつた。

何の氣なしに登つてきたら、老婆はいまだに同じ場所にグツタリして、無表情な顔をしたまま俯向いてゐたが、馱夫の姿が近づいてくると顔をそむけ、肩のあたりへ垂れてゐる窓掛けをちよつと揭げて外を見てゐた。外はまだ、飄々と狂ふ風であつた。馱夫が上衣へ手を通してゐたら——

「フフフン。下のヒステリイは收まりましたわねえ……」

と言つた。

「さう言ふもんぢやありませんよ。だから貴女はいけないつてんだ。貴女はさういふ風にして自分の不幸をまねくんだ。貴女の不幸ばつかりぢやない、他人の不幸もね！」

老婆は例の冷笑らしい唇を歪めて、白々と窓から外を眺めてゐたが、別に何とも答へなかつた。「ぢや、行つて來ます」と言つて、馱夫は老婆の前を通り、さつさと階段を降りかけたが思ひ直して階段の途中に立ち止り首だけを伸して

「仲良くする方がいいんだがなア——」

と、苦々しげに非難するやうな口吻を洩らした。ほんたうは、斯んな老成振つた生意氣な言葉でなしに、何かもつと力强い慰めや、又例へば景氣のいい應援歌（？）でも一つ喚いて、ワツとばかりに風を喰つて戸外の嵐へ紛れてしまへ！　といふ氣持であつたのだが、其の小僧らしい、冷笑らしい顔付を見たら、つい、いまいましい氣分になつて、別に言ひたいのでもないが自然に大人振つた呟きを浴せてしまつた。馱夫は厭な氣持がして、フラフラフラツと降りてきた。重苦しくつて、莫迦莫迦しくつて憂鬱の寄せてくるのが感じられる。

下へ降りたら、階段の横に總江が突つ立つてゐて、ソツと立ち聞きをして上の樣子を窺つてゐた。

「何だい？　何の話をしてたんだい？――」
「いいんだよ！　チェッ！　うるさい女だ」
「何言ってやんだい！　又あたいの陰口だろ」
「お前さんは偉い女だよ――」
そして獣夫は縞はずにスタスタ沓脱へ下りて冷い靴を穿いてゐたら、今度は臺所へ引返して其處を拭きはじめた總江が、首を突き延ばして――
「ほんたうに今日、重役に會ふのかい？――」
「バカ言ひでら。玄關番にも會へやしねえや」
「それでも――いい仕事を探しておいでよ。何處に口があることかも知れないから……」
「俺は遊びに出掛けるんだい！　俺はね、仕事を探すなんて、そんなシミツタレた事は大嫌ひなんだよ。此處へ來てから、まだ一つぺんだつて仕事なんか探したためしはないんだよ。仕事を探すくらゐなら遠慮なしに乞食にならい――」
「何んだと！　もう一つぺん言つてみろ！」
「俺はね、此處へ居候を初めてから、まだ一つぺんだつて仕事を探すやうなアハレな行ひはいたしません、てんだ」
「……ぢやア、てめえは、これから先どうして暮さうてんだ――」
「ここの二階で往生するのさ。なんと哀れな身の上ぢやないか！」
「馬鹿野郎！　嘘つきの大かたり！」
「何だい、フォックスめ！　アハハハハ　ハッハッハッ！　フォックスつたつて分るめえ。お前さんの綽名だよ。俺がチヤンとつけておいたんだ。上の婆さんは「カマキリ」さ。フォックスつてね――英語だよ。知つてるだろ。お前さんだつて昔は小學校の訓導だからね。ソックリどうも、良く似てゐるよ。黒光りのした焦茶色のフォックスなんて動物園にも見當らない代物だ――」
「出て行きやがれ！　トンガラシめ！　てめえなんぞ腐つたトンガラシだぞ。もう戻つてくると永知しねえから――馬鹿野郎め！」
總江は激しく息を呑み、いきなり手にした濡れ雑巾を投げつけたが、それは遙方もない方角へ飛んでいつた。獣夫は笑ひ乍らパチンと戸をしめて嵐の中へ飛び出した。まだ細い小雨が幾らか殘つてゐて、物凄い風に殴られ乍らビユツと横ざまに吹きかかり、地べたと並んで何處までも低つ直平に走り去るやうに思はれてしまふ。繁吹を浴びて歩き出したら、突然鋭く二階の窓が開け放

たれて――（もうあの女は二階へ駈け登つたのか！）眼玉を三角にした總江が食ひつきさうな顔を出した。
「DAFの馬鹿ア！　DAFの馬鹿野郎！　トンガラシ！　戻つてくると承知しねえぞ！」
「ワアイ、ふおつくす！」
獣夫はいきなり往來の眞ん中で、まるで風に乘るやうにして、ステテコを踊つてみせた。
「DAFの馬鹿野郎！　DAFの馬鹿野郎！」
「ふおつくす！」
そしてもはや振り返らずに、獣夫はサツサと歩き出した――後には總江の高い絶叫が彼に呼びかけてゐたけれど。
ひどい空虚が身體一杯に詰まつてゐて――吃逆のやうに込み上げてきては、何んだか變に舌にざらつくやうである。白つぽい、厭に大きな舌ざはりだ。ついでの事にと言ひたいのだが――欠伸を放つ氣持にもなれなかつた。冒はうやうなく長い疲れの込上げてきた感じである。實にだらしない有様であり、又みじめなるものであつた。
一・二町して、街と畑の分岐路へ出は出たが、この日は杖を倒すことをしなかつた。もし杖を倒したならば必定のこと泥まみれとなるであらうし、それに此の日は改めて方角を占ふ手數もいらなかつた。――この邊一帶の畑の徑はまだ新しく切り開かれたばかりであるから、この嵐には一とたまりもなく柔い泥濘となり、とても歩ける筈はあるまい。……
それでも獣夫は一應分岐路に立ち止り、頭上に當り樺の荒れ狂ふ音をききながら、ただ孤々と嵐のみ吹き渡る武藏野を見るともなしに覗いてみた。――荒涼としたものである。近くに見える畑のものは一面に吹き倒されて伏してゐたが、また物凄い風のうねりが寄せるたびにだらしなく、もはや切なげにバサバサと寒い葉なぞを揺さぶつてゐた。
さて、街の方角へ振り返つて（その方向も亦暗澹として薄暗い――）徑のまつすぐ向うの奥を遙かに望み、兎も角も歩き出したら――激しい風に送られて、まだあの糎高い絶叫が嵐の隙りに吹き千切られ、きれぎれに聽きとれてきた。
「DAF・DAF・DAFの馬鹿、DAFの馬鹿……」と。
そしてどうやら、今度は五歳の多次郎までが、二階の窓から冒を突き出し、總江の傍に縋りながら、母を眞

似て一緒に怒鳴つてゐるやうである。その舌足らずの叫喚が矢張り幽かにきこえてゐる。

「DAF・DAF・DAF・バカ……」

畑の方からまつしぐらに、激しい嵐の一とうねりが、この徑を遠い向うの街へ目指して駈け抜けるとき、獣夫もそれに送られてピョコピョコと數歩急ぐのである。徑にはほかに誰も見えない。尤も人家といふものが、ここ數町の間といふもの極くまばらにしか無いのである。――アア、厭な天氣だ！　それでも風は颯爽として――顔や手足にうるさいけれど――空氣の澄んだすがすがしさは胸に沁みてくるやうである。

五

一日吹き荒れた嵐は、それでも午過ぎる時分から幾らか風ぎはじめて――

軈て今にも暮れようとする薄明の頃に、重苦しく垂れ籠めてゐた薄暗い空の、突然小さな一部分に雲の破れるのが見られた。それは全く纔かに小さな穴ではあつたが、其處を通して青々と光る深い空を――其處にもすでに深い暮色が流されてゐた――覗いだ放心を押し展くやうにはるばると眺めることが出來た。すると忽ち、二ケ所、三ケ所――玲瓏とした天藍を覗くことが出來たのである。そして、そのまま、荒れた一日は暮れてしまつた。明日はうらうらと晴れるであらう。

夕暮れ、獣夫は、この稀有な美しきものに、靜かなる驚きを感ずることができて、竹藪の家へ戻つてきた。今日も亦、かくて一日は終れり……あきらめと思へば、あきらめとも言へるところの、穏かなものではあるが心細い慰めを、一日に一度づつくる黄昏は、獣夫の心に植ゑてしまふ。

入口に來てふと氣がついたら、家の中は暗闇であつた。見上げたら、二階からも一條の光さへ洩れようとはしてゐない。そしてさういふ瞬間にも、すべて暗闇はひつそりとして、人の氣配を暗示する何の物音もきこえなかつた。そつと戸を押してみたら、それでも戸は、ガタガタ搖れて、思ひもよらず開いてしまつた。と、ほんたうにだしぬけに、突然にぶい電燈が障子越しに點されて、總江の大きな影法師が湧き出るやうに被ぶさつてきたが、シンと一秒もしたかと思ふと、荒々しい語氣で

「何だい、お前か。DAFだらう――？」

「俺だい――」

「チエッ！　てめえ――DAFの馬鹿野郎！　平氣な顔で歸られた義理か！」

ケ――今朝のことか、すつかり忘れ果ててゐた！　獣夫は歴々と――朝の思ひ出を浮べるよりも、極めて深い皺にして、むしろ微笑を刻まずにはゐられなかつた。途端に、荒く障子をグッと開けて全身を乘り出した總江が――

「ヤイッ――」

「ウ。參つた――參つたよ。御免々々。一日ブスブス怒つてゐたのかい」

「嘘つき！　恩知らず！　何だい、お前はニヤニヤ笑つてるんぢやないか！」

「ウ――。これはね、仕方がないんだよ――」

とてれながら、尙おかしくて笑はうとするのではあるが、矢張り自然に氣持の改まるものがあつて、總江といふ人が、滑稽と言へば滑稽千萬であるけれども其の無智な幼さは、笑つては濟まないものに思ひつかれて、急に眞面目な眞劍な顔付をしたら――總江も急にグシヤグシヤと縮むやうに萎れたかと思ふうちに、見る見るなさけない顔に涙をいつぱい溜めてペタンと坐り

「ねえ、獣夫さん。お前さんは本當に頼みにならない人だよ。それア、何かのハズミだつたりフザケた氣持だつたりして、つい悪いことも言ひ過ぎたかも知れないけれど、まだ本氣でお前さんを邪魔者扱ひにしたことなんか一度だつて有りアしないし……それどころか、心の中ではどうぞ獣夫さんにいい職が見附かる樣にと、どんなに毎日氣を揉んでゐるか知れないんだよ。それだのに、お前さんといふ人は人を茶化してばかりゐて、人の心といふものがコレッパカシも分らない人なんだから……」

「分つてゐるよ。分つてるんだよ……」

「いいえ、分りやしないんだよ。まるであたいがお前さんを追ん出すことばかり考へてゐる悪魔のやうに思ひ込んでゐるんだから……」

「そんなことはないさ。僕の方こそ、大概のことはアベコベに顔に出さうとしてゐるから間違へられることはあつても、あんたを誤解したことなんか無い――それどころか、ずゐぶん感謝してゐるんだ……」

「どうだか分るもんか。心にあることは顔に表れるつて言ふんだもの。お前さんといふ人は、ほんたうに……」

「ああ悪るかつたよ。ほんたうに悪るかつたよ――」

そして獣夫が帽をぬぎ、上へあがると、總江は六疊の眞ん中の、ぼやけた電燈の下へ今度はグッタリと坐つ

て、もう泣顔はしてゐないが變にシンミリした樣をしながら

「ねえ、馱夫さん。もつとあたいを信頼しておくれな。お互にどん底暮しをしてゐる同志なんだもの、恥も外聞もいらないわけなんだし、物質でどうかうつてわけにはお互に何も出來ない貧乏者の集りだから、せめて氣持は溫くありたいもんだねえ。あたいがこんなに馱夫さんの將來のことを氣に病んでゐるといふのに、ほんたうにお前さんは頼みにならない人……」

「參つたよ。もうスツカリ參つた」

「これからあたいを信頼するね」

「ああ、スツカリ信頼するよ——」

と、明るい、道化た、悄げた樣子をして言ひきると、總江は急に、張りつめた氣が拔けたやうにアハハアハハと笑ひ出したが、流石にすぐと少してれて肩を落し、今度はシヤンとして變にシンミリと、シミジミと前方を打ち眺めて、安らかに息をしてゐる。いい氣なもので、馱夫を慈愛する母のやうな形でもあり、笑止千萬なものではあるが——馱夫は別段笑ひたくもなかつたし——それに馱夫は、人間の斯る甘さに特別の好感を持つ男だから(——そしてそれ故人間が好きでもあるから)彼も亦いい氣になつて、かかる機會にかかる沈默に迫まられたことをいいことにして、チツと瞑目を逞うした。斯る機會に、斯る雰圍氣に包まれて最も寛大なそして自由な放心に浸り得ることは、好ましい一種の道草ではないか！それ程のことでもない——無論、それ程のことでもない——ああ、夜は靜かなものである。廣い掌に顏を掩うて何も思はずに俯伏してゐたい。安らかな自分の呼吸が、夜の靜けさと一緒になつて、遙かに遠く息づいてゐるやうである。ひろびろと、深い深いものである、夜は。——

人は、ぼんやりしてゐると、さまざまな事を思ひ出してしまふ。うつかりしてゐると、その聯絡もなく忽然と浮かび出てきた事柄を、ひたすらに心を籠めて思ひ耽つてゐたりなぞ——靜かな夜は、するものである。それは靜かな航海に似てゐる。目の、耳の、身體の四圍に、靑々と廣い海原が、靜かな水音を響かせてゐる。

「ああ、僕も、何んとか身のふりかたをつける必要を痛感したね。又、放浪に出ようかしら」

「アアア、それだから、アアア、ほんたうにお前さんは頼りにならないといふの。何も面當がましく出る出るつて言ふ必要もないだらうに。行先もない宿無しが、何で

簡單に出られるものか」

「ああ、惡るかつたよ。——しかしね、それは、出て出られないこともないさ」

「フン。夢といふものはネ、野タレ死をすることだつて綺麗に見えるものさ」

「アハハハハ。やられたわい——」

と——なほも圖に乘つてカチンと身構へ、おでこを光らせていい氣持の總江の顏へ、降伏のしるしに笑ひを殘し、わざと這々の體をしてバタバタと跫音高く、馱夫は二階へ駈け登つた。其處には夜が轉がつてゐる。電燈の笠をとらへ、ポンヤリとスイツチを捻つたら、たわいもなく夜は窓外へ散つてしまつた。着物に着代へ、ソツと疊へ倒れてみたら、深い耳鳴りがジンジンと湧き出してゐた。

心靜かに、大いなる夜を迎へたい……

それは、こころ貪婪な、むなしい希望ではなかつた。夜毎に、夜は、ひろく、大きく、靜かであつた。——しかし又、それはこころ貪婪な、虛しい希望であつたとも言ふ事ができよう。夜毎に夜は廣々と靜かであるが(ああ、ほんたうに森閑としてゐる——)靜かな夜といふものは、涯しない遠い未來を考へさせてしまふものだ。甘い追憶を繰り展ろげると同じやうに。——それは、痛い。それは、痛いものである。神に祈れ！ ありとあらゆる神々を祈りつぶし奉れ！ そして長々と欠伸をしたい、欠伸をしたい。

心靜かに、大いなる夜を迎へたい……

睡れ睡れ
安らかに睡れ

(何だい！ 子守唄かア——)

ブレケケケックス

「馱夫さん。御飯をおあがりよ。支度ができたから……」

下では機嫌のいい聲で、總江が高らかに呼んでゐる。

「うん——」と答へて階段を下りるのも、思へば頼り無い話だ。「各々の家に各々の階段あり」といふ言葉を何處かで覺えてきたのだが、變な、しかし、いい言葉だ。

下へ降りたら、總江はガチヤガチヤ、音やかましくちやぶ臺の上を工夫してゐた。さういへば——

「どうしたの？ お母さんも坊やも見えないやうだね——？」

「ウン、一寸出掛けたの」

「へえ、珍らしいんだね。二人でかい」
「ウウン、四人でさ――」
「フウ。誰と誰？」
「それがねえ――」
「ウン――」
「――ねえ、歇夫さん……」
總江は茶碗に御飯をよそひ、それを歇夫に手渡してから――突然ガクンとして、又オロオロと泣き出しさうな顔となり
「ねえ、歇夫さん。あたいどうしよう……」
急に肩を窄めてホツと溜息をついたかと思ふうちに、忽ち凋むやうに崩れてしまひ、顔一面を鐵だらけに泣き歇りはじめた。
「どうしたの？」
「あいつが來たんだよウ……」
「アイツつて――ア、兄さんだね？」
「フンフン」と頷き乍ら、大粒の泪を頬にいつぱい湛ひくねらせてシクシク鼻を鳴らし――
「あたいはほんたうに不幸者だよ。あたいはもう虐められ通しなんだョウ歇夫さん、あたいの力になつて呉れるねえ――」

「ああ、ああ、それはなるとも。いつたい、どうしたといふんだい？――」
總江は鼻面をいそいで擦つて、ホツと太息をついた。そして見るからに怯えたやうなギョッとした顔付をつくつて
「あいつはきつと何か悪いことをして逃げてきたんだよ。懲役ものかも知れやしない。あんな油斷の出來ない奴つたらあるもんかね」
「ウン、それ程のこともあるまいよ」
「いえいえ、分るもんかね。やりかねない奴なんだよ。まるであたいのことなんか舐めきつてゐるんだから……」
「いつたい、何處へ出掛けたんだい、みんな？――」
「散歩だつてさ。チエッ！（と首を縮めて憎々しげに舌を鳴らし――）家庭圓滿なことさ。あたいは他人だと言ふんだらう。もうろくたかりめ！　憎らしいたらありやしないよ。デレデレしやがつて、あたい一人を繼子いじめにしようてんだもの……」
「そんなことはないさ。それは本當の母と子だから、たまに會つて仲の悪い筈はないよ」
「だつて、だつてさ。――現在自分を見棄てて逃げたやうな子供ぢやないか。さんざん苦勞をかけて親不孝を置

ねて家出をした子供に、たまに會ふがらつて、目の色變へてチヤホヤする婆あがあるもんかい！　弟の郷里へ對して、そんな事は出來ない義理だよ。こんな血の出るやうな暮しに婆あ一人襲ふつたつて容易なことぢやア無いやね。それを當り前のやうにのさばり返つて、毎日々々イライラした面ばかりしやがつてさ。おまけに、畜生！　そんな踏みつけた眞似をされて、こちとらは歇つてゐられるかい！……」
「それは婆さんも良くないよ。しかし、お前さんも、まあ……」
「ああ、あたいはほんたうに虐げられた人だよ。歇夫さん。あたいはこれから先、どうなるんだらう。あいつ夫婦は此處へ居候しようてんだつて。あたいの力で追ん出すわけにも行かないことだし、結局あたい一人が虐められる役割なんだよ。その又女が、生意氣な氣位の高い奴さ。ああ、あたいはみんなにお世辭を使つて、ペコペコ頭を下げて、女中みたいに扱はれる運命さ」
「俺の同僚が二人ふえたわけか――」
「夜逃げをしてきたんだつて。夜逃げもないものさ。荷物なんか、何一つ有らしないんだからね――」
今宵は戸を開けるから、總江の態度がどうも變だと思、つてはゐたが、かういふ出來事があつたのである。きいてみれば氣の毒ではあり――それに又、いい加減で此のお喋りに蓋をしないことには、とてもやりきれた物ではないので「珍らしいうちは、親子だもの、仲のいいのは當り前さ。でも、兄さん夫婦が悪い人なら、どうせそれが長續きのする筈はないから、こんどは反動で、總江さんと婆さんととても仲が良くなるかも知れないよ。僕もせいぜいさうなるやうに努めるから、腹を立てずに辛抱した方がいいよ」
と言ふと
「ありがとう。さう言つてくれるのは、歇夫さん、お前さんだけだよ――」
なぞと飛んでもない詠歎を述べて、よよと泣き伏してしまふのである。莫迦々々しいやら情無いやら、歇夫もさんざんの體で、天井をヂツと仰いだり、汚い壁や破れた障子を見廻したり――虚しい視覺や聽覺なぞで繪かに心を詐りながら、冷い手觸りの茶碗を把りあげるよりほかに仕方がなかつた。その放心の底を探ると、俺は、もう、この家を立ち去らねばなるまい――と、茫漠として雲のやうな一つの心を拘ひあげることが出來た。ゆらゆらと、靄のやうに搖らめいてゐる心の影に靜かに頭を向

け合はすとき、晴れた日の、すきとほつて縞のゆらめく大海へ浴するやうな安息を感じてしまふ。

「あんたは？　……御飯を食べないのか。總江さんは？――」

「……」

總江は急いで坐勢を立て直すと、俯向いたまましきりにせつせと自分の御飯をよそひ、つきつめた顔を涙に醜く泣きよごして、ガツガツと飯を食べはじめた。そしてもう、喋らうとしなかつた。

興里の兄は（名を玄也と言ひ）馱夫も昔から顔だけを見識つてゐた。まだ中學生の頃興里の家を訪れると、そのころ實業學校の生徒であつた玄也は、弟の友達風情と口をきくのも恥であるといふ氣合で、ひどく氣取つて腕を組み馱夫をジロリと睨んだりなぞしてゐたものだ。時々留置場へブチ込まれたりしてゐたが、その實業學校も滿足には卒業しなかつたものらしい。本人は學問が嫌ひであるし、丁度その頃から家運も傾き出してゐたので、なんでも何か商店へ（百貨店であらうか？）暫く勤めてゐたやうである。さういへば、その頃のことを考へてみると、リユウとした玄也の洋服姿を、ひどくポンヤリとではあるが、記憶に殘してゐるやうな氣にもなるのだ。

家出してもう七年にもなるさうである。ところが、突然近頃になつて、玄也からの消息が竹藪の家へ配達されてきた。勿論馱夫はその事を知つてゐたが、それが如何樣な手紙であり、又、その消息をとりまいて、この佗びしい竹藪の家ではどんな評定が開かれたかも彼は知らずに過してゐた。竹藪の家では、それが毎日の慣はしではあるが、喧嘩以外に殆んど言葉の交される模樣が、窺はれないのであつた。

食事の終る時分から、總江は再び氣を取り直して、シヤンとして手際よく跡片付けに精を出したり、全く機嫌のいい顔をして「馱夫さん、泣いたりして濟まなかつたわね――」なぞ言ひ乍ら笑ひ出して、坐り直したりした。

さうかうする中に、幾つも幾つも入りみだれた跫音が突然間近かに湧き起つたかと思ふと、忽ち低い話聲もガヤガヤ聽きとれてきて、急に入口の戸が開け放たれたが――するともはや陽氣なぞめきが戸の内側に舞ひ込んでゐた。

「ただいま――」といふのは聞き馴れない跳ねるやうな男の聲で、續いて矢張り耳に馴れない若い女の聲がした。履物を脱ぐ亂れた音がしたかと思ふと、先登に現れたのは小柄な男で、無論それは玄也であらう、現れるな

りいきなり一座へ先づ一瞥を投げるといふ、斯る種類の人間とみえる――前こごみにヒヨイと明るみへ出たと思ふと直ぐさま馱夫をみとめて――（馱夫の瞳は弓にきいてゐたのであらう）

「やあ、暫くだね……」

「やあ――」

「覺えてゐる……」

「ウン――」

「ずゐぶん變つたね」

「さうかい」

そして素早く横手を指して、敷居のわきに項垂れて遠慮がちに控へてゐる若い婦人を、「これは俺のワイフだよ。どうぞ宜しく――」と紹介した。「至らない女だから……」と、馱夫に向つて言つてゐるかと思ふと、ツと腕を差し伸して――明るい部屋へ戻つてきてポンヤリ坐つてゐる多次郎の頭から、まだ脱ぎ忘れてゐる帽子をヒヨイと取り上げて、すぐ立ち上つて其れを柱へ掛けてやり、ついでにヒヨコヒヨコ歩いて行つて、少しばかり開いてゐる臺所の障子をカチンと締めたかと思ふと、何食はぬ顔をして、靜かに元の坐へ戻り、懐中から手拭ひを取り出して脂に光澤のある額を丁寧にぬぐつてゐる。恐ろしくコセコセした、恐ろしくこまめな、どうもよく氣のつく男である。

玄也の妻君は――つまりワイフのことであるが、名を紅子と言ひ（どうやら之は玄也の好みに順つた變名らしい臭みがするが……）二十二三と思はれる溫和な婦人であつた。氣がついたら　斷髮にしてゐた。一見して、女給か、師子でもあつたのかと思はれるが、又妙に田舍臭くて、小料理屋の女中といつた感じでもある。大柄な（――玄也よりもむしろ大きい）五尺二三寸はあるらしい身體であるが、痩せてゐるのがかなり鋭く目にたつやうだ。目の窪みから頬骨のあたりへ深い陰が湧いてゐて、それが險しく見えるけれど、それもむしろ淋しげなものを强調して、いつたいに穩かな感じを與へてゐる。著物は――無論、馱夫の乏しい眼識の及ぶところではなかつたが、その柄の素敵に派手な事だけは輕い驚きをもつて認めることができた。

成程、總江としては、かういふ女に一種の嫉妬を感ぜずにはゐられぬであらう。決して美人といふのではないが、そして決して花やかなものではないが――竹藪の家へ現れるには似合はしくないのだ。この燻づた竹藪の家では、その傾いた屋根の下の、あらゆる物、あらゆる空

氣、あらゆる心に、こんな豪華（！）な裝飾を導き入れる何の用意も出來てゐない。それは確かに唐突であり、一種のいはば横紙破り――穩やかでない、さういふ思ひがするのである。この家にこの六疊に坐ってゐると、獸夫の目にもさう見えたのだ。人間といふのは可笑しなものだ。何を見るにも多少の偏見がまつわるとみえて、決して紅子に惡意を懷いたわけではないが、獸夫はそぞろに總江といふ人が、氣の毒な、いぢらしいものに思はれてしまつた。

獸夫は紅子と鄭重な挨拶を交し――さういふハズミで、ゴソゴソと物音のする入口の方へ目を遥らしたら、老婆は喘い沓脱へ屈んでそれぞれの履物を始末してのち、やうやく塵へ這ひ上つて明るみの方へ泳いで出たが、一座の方は全く見ずに部屋の隅ばかり沿ぶやうにして、ひとり靜かに何時もの壁際へ寄りそひ影のやうに坐つた。

「ぢやあ、僕は少し仕事がありますから……」

と言つて獸夫が立ち上ると、

「でも、まだ、いいぢやないか。久し振りで會へたんだから。お茶菓子があるんだよ。ア、奥さん、相濟みませんけど、お茶を……」

「ウン。でもこれから、毎日會へるんだから。僕は夜分に勉强をしなければならないんだから」

「餅菓子を買つてきたんだよ。ほら……」

と急いで包みを取り出してみせるのを、獸夫はそれでも至極機嫌のいい笑ひ顔を作つてみせて「とても忙しいんだぜ――」と言ひながら、大袈裟な樣をして、踊るやうに轉はず二階へ上つてしまつた。

この町の、場末の映畫常設館の映寫技手を勤めてゐる與里は、小屋がはねるまで――かれこれ十時をまわらなければ歸宅しない習慣であつた。

電燈を捻ると、又しても劇しい耳鳴りがジンジンと湧きはじめた。大の字に寢て眼を瞑れば全てはウネウネと轉回する黑い塵であつた。まるで靡爛とした有樣である。雪くして、ソツと起き上つて窓に寄りそひ、靜かに窓掛を引いてみたら、ひそかに豫想してゐた綺麗な星空はまだ見えないで、すぐ眼のさきへ壓しつまつてゐる一杯の闇ばかりであつた。氣がつくと、矢張り多少の風の殘りが、まだ颯々と小枝を鳴らしてゐるやうである。雲の流れは、まだ低く、まだ倉皇と速いのであらう。

すると玄也がお茶とお菓子を運んできて、机の上へ丁寧に並べ「おあがり――」と言つただけで忽ち下へスツと消えて無くなつた。どうも手際のいい男だ。

と、下からは、しゃきりなしに笑ひ聲がたちはじめた。總江の聲が一番高い。玄也の聲も同じ程度に時々鋭く跳ねてくるし、耳に馴れない紅子の聲も決して低いものではなかつた。

獸夫は靜かに机に向つた。露店で買つた用箋をひろげて、文字といふこともなく、繪といふこともなく、ただ無駄書きをしてゐると、自分といふものを全く忘れて、ふと書き棄てた繪や文字の中に、なんだかいきなり動きさうな不氣味な生物を見出してしまふ。靜かな部屋に點された燈火は、時々地味な、不思議な魔法使ひである。夜といふものは、やりきれないほど懶いものだ。たとひ、雞小屋のやうな笑ひ聲が響いてきても、夜は、ああ、厭になるほどヒツソリとしてゐる。

それから獸夫は、つれづれなるままに、丁寧に目盛を刻んで、ある空想都市の設計圖を引きはじめたりした。

ずゐぶんと長い間、そんな事をしてゐたやうだ。虚しくただ、身をゆだねてゐると、身體の中へトツブリと夜が更けて、ただシンシンと押し流されて行くやうである。

すると――もうすつかり忘れてゐた時分になつて、急に又玄也が襲手をしながらトントンと躍り込んできて

「下へ來ない？」

「ウン。でも今、書き物をしてゐるから――」

「小説？――」

「違ふよ。俺は本來繪描きだよ」

「アア、ピクチユアか。秋に滅法忙しい商賣だね」

「ワア　ワア　ワアワアツハツハ。ピクチユアだ。ウン。秋に滅法忙しい商賣だ」

「こんど、暇があつたら俺の肖像をかいとくれよ」

「ただちやアいやだよ。十圓出せ」

玄也は多少ムツとしたものとみえて――しかし、それは色にも出さず生眞面目な顔をしながら、繪描きといふものはどうも尊大で處世の術に疎いから商賣になるまいとか、もともと美術といふものは贅澤物で不景氣の當世には役に立たない代物だから、ヘツポコ豊家はオマンマの食へないのが當然だとか、お前さんも一枚十錢の似顔繪でも描きやアいいのに、なぞと、實にさりげない當り前な顔をしてチクチク皮肉を言ふ奴である。かと思ふと、だしぬけに腕を差し伸して、獸夫の著物からヒヨイと絲屑を拂つてやり、少うし別な顔をして、しかし、とにかく藝術家は神聖な、俗を超越したところの仕事である、と、頻りに今度は頷いてゐる。

すると、ソツと總江が登つてきて、階段の上り口か

ら、心配さうな、いぢけた顔を突き出したが――「獣夫さん。……何してんの？……下へ降りておいでよ……」
「下りないんだよ、この人は。モミハラ君、下へ行かうよ」
「ああ、ああ。今に行くから。一區切りつくと直ぐに行くから――」
「ぢやア、きつとね。待つてるから……」
と、又ドカドカと、二人の男女は消えてしまつた。その途端に、空になつた菓子皿と茶碗を玄也はチヤンと持つて降りたのであつた。どうも鮮やかな奴である。
小男のくせに妙に身體のガツチリした、苦味走つた中々の美男子であるが、商人――といふと其れとも違ふ、出來損ひの渡世人といつた風な感じである。どう見ても、興里の兄弟と思へる節はないのだが、流石に遺傳は爭へないものとみえる。さりげなく皮肉を吐いて時々チラリと伏目になるとき、額にクツキリと浮かび出る神經の波を、見逃すことはできなかつた。その神經は、興里にあつては物靜かな彼の心を暗示するのに、この玄也では妙に圖太い彼の度胸を見せてしまふ。ひどい冷たい感じがした。
彼等が消えて暫くすると、下ではひときわワアハハ、ワアハハと湧き崩れる笑ひ聲が騒しかつたが、突然突き拔けるやうな玄也の聲が呼びかけて――
「おうい。樅原一本やられたよ、全然繪描きだと思ひ込んだね。うまく擦がれたよ。君もまるで變つたもんだね。すつかり肝膽相照したよ。降りておいで。よう。降りて來ないか――」
「獣夫さあん。降りておいで。ワアハハ　ワアハハ――ほんたうに、あの獣夫さんは、氣さくい面白い人なんだよ。おいでよ。獣夫さんつたら――」
總江もまた、けたたましい鳥のやうに喚いてゐる。それでも獣夫が降りようとしなかつたら、いきなり聲音高く、又もや玄也が駈け登つてきて
「よう、降りておいで。まだお茶菓子があるんだから――」
「殘り物は食ひたくねえや」
「チエッ！　別の新しい包みだぞ」
「豆かなんかだらう」
「甘く見たね。おいしくはございませんが羊羹です、と――」
すると其處へ、總江が又、今度は猛烈な勢で登つてきて――登る階段の途中にも、グツグツと笑ひを軋ませ乍

ら、殆んど玄也をも跳ねのけるやうにしていきなり獣夫に飛びかかると、その片胸をグツと掴んで
「おいでよ、よう。グズグズしないで――」と力まかせに引つ張るのだ。
「いてえよ。行くから、止せ」
「ワアツハツハ　ワアツハツハ　おいでよ。おいでよ」
と、二人は獣夫を先登に立てて、その肩を押すやうにしながら降りてきた。階段の闇を下りながら見下すと、目の下に鈍く輝いてゐる矩形の中では、紅子が明るい笑顔をして三名の者を迎へてゐたが、その横に多次郎はもう寢ついてゐたし、老婆は壁に凭れたまま尙ほもグツタリ項垂れてゐた。
「獣夫さん。初對面の人と挨拶もろくすつぽしないうちに引つ込むなんて、ひどいね。ねえ、玄也さん。獣夫さんと玄也さんはきつとつきあへるよ。とても良く性格が似てるんだから。今夜はうんとお喋りしようね」
「さうだよモミハラは子供の頃から面白い奴だつたよ」
「お前は面白くなかつたね」
「やられた！」
「この人は口が悪いんだよ。だけどシンはとてもいい人なんだから、玄也さんも誤解しては困るんだよ。それア腹は綺麗な人なんだから――さうだらう、ねえ、獣夫さん……」
「それア一目でチヤンと分るよ。誤解なんかすることアないよ。これでも人間を見る目は肥えてゐるんだから……」
と、てれもしないで、額を光らせながら、玄也はさう言つてゐるのである。その樣子が、ほんたうにいい氣になつて、幾分の氣取りをさへ持ちながら言つてゐるやうにも見えるのだ。かと思ふと、ヂツトかう、人の氣持を底の底まで見拔くやうな油斷のならない目付をする。得體の知れない奴である。いい加減にバツを合はしてゐたら、突然、「ア、さう、さう」と言つて何處からともなくスラリと小さな包みを取り出し
「これは失禮だけど――」
と言つて――おみやげのつもりであらう、安つぽいボマードを一個、獣夫に與へたのである。そしてその拍子に「お茶をおあがり」と言つて獣夫にすすめ、伸した腕を決して無駄には使はなかつた。
しかし――
竹藪の家では、稀に訪れた不思議な瞑ひを、思ひもうけぬ出來事によつて中絶しなければならなかつた。その

ために、夜が一時にきたやうであつた。

興里が歸つてきたのだ。

上り框までやうやく這ひ込んだ興里は、もはや其處から動くことが出來なかつた。

數日來風邪氣で惱んでゐた興里は、この朝も、春だといふのに寒たい冬の外套をきて、嵐の繁吹を浴びながら出動したのだが、無理が遂に祟つたらしい。

人々は、明るい電燈の下へ、興里を抱き入れた。劇しい悪寒のために、身體が支へきれぬほど、ひどい顫へが來てゐるのだ。敢て、動けぬこともなかつたらうに――この聰明な、この寛大な、この氣の毒な、そして、あらゆる甘さを打ち拉がれたこの冷靜な若者は、どういふものか、家族に對して莫迦らしいほど獣々ッ子であつた。母や總江と爭ひながら、興里が眞つ先に大人げもなく泣き出す場合が多かつたし、その爭ひが概ね興里の言ひ掛りで、實に下らないことばかりだ。少し加減の悪い日は

「死にさうだ。ああ死にたくない、死にたくない――」

と手足をバタバタ顫はせて泣き喚いたり「こんなに死にさうな身體なのに、お母さんは無理に僕を勤めに出さうといふのか――」と、無理な言ひ掛りをつけて、家族の者を困らしてしまふ。さういふ興里を、しかし、獣夫は最も穏らかな、淋しいものに感じてはゐたが――

人々は布團を敷き、すぐと部屋の眞ん中へ興里をねかせた。

興里によつて開け放された戸口から、危大な夜が沓脱へまで通じてきて、そこから更に、寳の談笑にふやけた空氣を凛冽するためのやうな、うそ寒い夜氣を運んできた。玄也は素早く沓脱へ下りて、大きな夜を探るやうに一寸首を突き伸したが、靜かに戸を締めて戻つてきた。

「星があつたか？――」

「ウン…」

苦しさうに呻きたつ興里に向つて「玄也さんがお見えだよ――」と總江は囁いたが、興里は頑固に目を瞑つたまま唇を結んで、「今日はソッとしておいて呉れ。明日だ、明日だ。苦しい、寒い――」とただ呻いてゐる。興里は道でアスピリンを買つてきたのだ。それを總江に取り出させて、貪るやうに呑み込んでゐた。玄也は總江をせきたてて、タオルを水に浸したり、布團を重ねたり、盛んに手際よくやつてゐた。どうやら、今宵が終つたやうだ。

この日まで、獣夫と老婆は階上に睡つた。今宵から、三名の居候は二階へ上り、竹藪の一家族は下でねむる。

二階では、各の寢床が敷かれ、一日のあらゆる音が濟んでしまふと、ふと、忍び泣きが洩れてきた。嬰ふと、女は寢床の上へ坐り、燈火の方へ背を向けて、袂に顔を捲ひながら泣いてゐたのだ。自分でも、とめどがなくて、持て餘して涙にまかせてゐるやうである。――しみじみと、獣夫はそれを聽くことができた。

なぜ泣くのだか――自分でも、知らないのではないだらうか。ただ涙が溢れ出てくるのではないか。恐らくは、さうであらう。心靜かな旅の宿りに於てさへ、心丈夫な旅人も、往々にしてさうなるものだ。まして、定まる家を持たない人は、まして、女は――別して興里の崩れ込んだ惨めな事件は刺戟が強い。わけの分らぬ寂寥は甚だ貴重なものである。

玄也は――ツト立ち上つて一寸女の側へ寄つたが、あきらめたのか直ぐさま戻ると、苦り切つた顔をして、自分もフツと坐り込んだが、やがて甚だうとましげな、表情の死んだ顔をして布團を被るとねてしまつた。

窓はもう、まばゆい星空であらう――

獣夫はわざと起き出でて、便所へ下りてきたら――下では總江が何かと未だに立ち働いてゐたが、獣夫の降りきるのを待ち構へてソッと近寄り

「あいつ達――ねむつた？――」

「ああ、ねたよ」

そして、獣夫が便所から立ち出でたら、どうやら悪寒は引いたらしい興里が今度は劇しく水を求めてゐたが、獣夫をみとめて――

「まだ、夜は明けないか？――」

「もうぢき明ける。どうだ？　いくらか氣分はいいのか？――」

「ああ、ずつといい。だが、まだ、とても苦しいのだ。早く夜が明ければいいが…」

やがて興里は、又ウトウトとしてゐるやうだ。暫く獣夫はその枕元に坐つてゐたが、そこに零れてゐた檢温器を取り上げて、見るともなしに眺めると、それは九度八分を指してゐた。

――やがて、俺も、此處を立ち去ることにならう…

二階へ戻つてきたら、女は已に伏してゐた。背伸びをして靜かに電燈を消してみると、しかし女は、まだ低く泣いてゐるのだ。

さあ、心靜かに、ねよう。

明日は――雨の風、うららうらと晴れたお天氣になれ！

六

朝未明、竹藪の奥にひそかな物音が騒いでゐる。足元に心を配り、忍び足して厚い朽葉を踏む音であるが、二足三足するたびに暫く途絶えるところをきくと、市へ出る農夫達の筍を掘る音であらうか。

「……」

暫くして、人の呟きも洩れ聞えた。間もなくそれに應ずる聲もしたのである。同じ一つの竹藪の深い奥手の方であるが、二人の位置はかなり離れてゐるものと見える。意味は勿論聞き取れないし、低音の、抑揚のない唯一本の囁きに聞え、其の儘急にひつそりとしてその人聲は途切れてしまひ、暫て遠音も消えて了つた。旭は東天に未だ昇らず、部屋の中は深い暗闇であつた。

その時から、又一睡して後であらうか、それとも、あの時の淡い目覚めの直ぐさま續きであつたものか――まだ明けやらぬ窓の下をゴトゴトと軋きをたてて馬力の通る音を聴いた。すると、明け近い空の遠くに冴え冴えと朝の電車の動きだす倉皇とした音も聞えた。――窓下の靜かな道に馬力は暫く佇んでゐて（馬の奴馭々と催しおつたか？――）やがて間もなく馬が動いて、それから車の揺ぎ出す音――軋りつつ、車は牽かれ、車は急ぎ、それも聞えなくなつてしまつた。

今日は晴れ。うらうらと晴れたる空を見るであらう。――ふと馭夫は、沁むが如くにその一事のみを心に思ひ、再び睡りに落ちてしまつた。

翌れば（果して――）まぶしい朝の蒼空が隈なく天に輝いてゐた。靜かな深い睡眠から馭夫は突然覺醒して、はじめに運らした一つの思ひは、矢張り天候のことであつた。そつと布團を押し開いて覗くやうに窓を見たら、だしぬけに流れたものは爽やかな朝の光、つぶらな白い輝やきを空一面に張り詰めた噎ぶやうな透明であつた。滿ちたる白く輝やくもの、それは、窓一杯の廣さをもつて流れ込む遠い深さの波紋に見え、モヤモヤと薄いうねりが輝き乍ら漂うてゐる。舞ひ揺らぐ無數の塵や、輝やく中にも更に輝やくものが見えた。

一人のうのうたることの此の悦び――

斯様に靜かな目覚めの後に、そして馭夫はやうやくにして自分はこの部屋に孤獨になること、そして昨夜は不思議に花やかな訪れがあつて、二人の新らしい登場者達と枕を並べて寢た筈のこと、夜更けて病める興里の歸宅

のことなぞ――そしてそのころの闇の奥にも綺麗な星が煌めきだした……失はれたこんな記憶の斷片を一つづつ透明な空のさ中へ撒かれるやうに思ひ起した。それは不思議に柔らかな色と色との交錯した、アネモネの花のやうな一夜に見えた。

思ひ出は朝の目覚めに夢かのやうに見えるけれども、あれは夢ではないのだつた。部屋の隅には疊まれた男羽織と、赤い裏の覗いて見える女の着物が置かれてゐて、無關心な一瞥にさへ暗澹とした現實を（――それは馭夫に目を背けたい意欲を與へた）なぜかしら身のひき締まる思ひと共にその人々の暗澹とした全貌を甦らせたやうであつた。音もなくシンシンと降る蒼空には溶け難いものが其處に見えた。

馭夫は階下へ降りてきた。外の光も知らぬげに興里は六疊に臥せつてをり、臺所には立ち働く總江の姿を見ることができたが、玄也夫妻は見當らぬし、老婆も多次郎も姿が無かつた。何か白らけた出來事があつて興里と總江は氣重い無言を固執してゐたものとみえ、空々しい薄暗がりが其處ら一杯にはびこつてをり、興里の痩顔は激しい空虚に殆んど間抜けなものに見えた。馭夫の姿を認めると興里は忽ちホツとして救はれたやうに活氣づいたが、力の無さは詮方もなく寢床の上へ首だけを擡げて

「昨夜は迷惑をかけて濟まなかつたね」とか「今朝もまだ八度あまりの熱があつてフラフラして――」なぞと、痩せくたびれた頬から瞼を吊しあげるやうにして無理に笑顔をつくらうとしてゐる。すると總江は臺所から突慳貪な聲を絞つて馭夫に呼びかけ

「憚り乍ら今朝はオマンマがおそいよ。なんしろ珍客が朝の御散歩におでましだからね。腹がへつても我慢しな。こちとらのせゐぢやねえやな。面白くもねえ――」

「默つて爲るだけの仕事をしろよ……」

と顔を背け、興里は呟くやうに言ふ。

「面白くもねえ……」

興里の言葉に力がなく意外に弱々しかつたためか、氣負つた總江は之も亦不思議なくらゐ弱々しく句尾のみを繰返して、突然寒い顔付をしながら、途切れるやうに言葉を呑んだ。それは恰も少年が巷に受けた重い侮辱に興奮して、唯一の慰撫を彼等の母に甘えるあまり、母に向つて怒りを放つ幼い感情に似て見えた。そして疊擦は斯るとき怒りの底に寶石の如く悔いと悲しみを深め襲ふものである――）總江は殆んど訝かしげに、凄まじい相貌をして我自らをも疑ぐるやうにおし默りながら、まるで

意識の伴はぬ空虚な動作で何かと邊りへ爪繰るやうな手を動かしたが、煮えたつ鍋にふと手を掛けてアツと叫びさま指を銜え、大袈裟に背けたたましく後退りした。そして暫くチツとして焦けた壁に凭れたまま指をしやぶり、ボンヤリ鍋を凝視めてゐたが――歇夫はその目に姿のみえぬ泪があると想像した。しかし歇夫はその感傷に格別心も動かさず、鍋と總江の間を抜けて靄かな戸外へ――井戸端へ立ち出でた。

心靜かに洗面して戻つてきたら、其の時も矢張り炊事に專念してゐた總江は忙しげに盤盤の上へ踞んで――その實は何んでもない何物かをいじくり廻してゐただけのことだが、恐らく歇夫の戻るのを待ち構へてゐたのであらう、しかし決して歇夫の方を見ようとはせず故意に空々しい樣子をして「いいお天氣ねえ――」と呟くやうに言ふのであつた。そのあまり心細げな佗びしさに吐胸の突かれる思ひをした歇夫は、氣の毒な總江の樣を見るに忍びず、戸口の中へ片足を踏み入れたまま咄嗟に後を振向いてしまひ、ほれぼれと靜かな空をふり仰ぐやうにして

「ああ、ほんたうに、素晴らしい天氣だね――」

すると果して其の素晴らしさが目に沁むやうに思ひつかれて、暗い心も須臾のまに溶け飲るほどの感激を覺え、コツコツと咳きいるやうに顔を顰めて爽やかな光を呑んだ。

目の前の竹の梢に雀が一羽遊びに來て、物案じげな樣をしながら囀のうちは動かなかつたり――見てゐたら、ときどき隣へ飛び移つて又暫くは動かなかつたり、暫くして又動いたり、やがて隣へ移らうとして、止まり損ねて向ふの奥へ逃げていつた。この物靜かな朝のしじまに、それだけの動きが寧面のやうに面白く又鮮やかに映つたのである。

すると、氣づかぬうちに總江も外へやつて來て、歇夫とボンヤリ肩を並べて首を突き伸し、うつろな顔で矢張り何かに見入つてゐる。何を又どういふ氣持で眺めてゐるのか？――總江に構はず歇夫が雀を凝視めてゐたら、やがて雀が去つてしまふと、總江は歇夫に呼びかけるやうに、アハアハといふ笑ひを洩らし、ホツと兩肩を落して空を仰いだ。矢張り同じ一群の雀を見てゐたらしい。歇夫は若干苦笑して、雀の行方を見送りはせず、沈默を噛みしめ乍ら直ぐ振向いて家の奥へと這入つてきた。

すると總江はその背後から機嫌のいい聲をかけて

「歇夫さん、お腹はどう？　へつた？　なんならさきに

食べてもいいよ。もう支度は出來てゐるんだから――」

「ああ、ありがたう。でも、みんなと一緒にすることにしよう」

「さう。――ほんたうに、今朝はいいお天氣だね」

興里は平たい板のやうにグツタリ力なく臥せつてゐたが、寢床の中には身體があるとも思はれぬほど全てが平な布團に見え、ジメジメとした暗がりの中に其れは殆んど物凄い眺めであつた。歇夫がふつと理もなく坐り込むのを待ち構へて、顔の場所から靜かな聲で

「とてもいいお天氣らしいね」と言ひ、それから又人のいい笑顔をつくつて、今日は一日、日當りのいい二階で寢そべつてゐたいものだと言ひ出した。

歇夫もそれには贊成して、フラフラと泳ぐやうに立ち上る興里を助けて二階へ伴ひ、布團を二階へ運びあげた。それは汗で熱くさい臭ひがしてゐた。總江は二人の男達がヂタバタ無器用に立ち働く場所へ來てニヤニヤしながら眺めてゐたが、別に手傳ふこともせず面白さうに佇んでゐて、歇夫が布團を抱きかかへて階段を登りかけると後から覗き上げるやうにして

「三人だけで先に御飯にしようかね――」

「ま、みんな歸るのをまつて一緒にしようよ」

總江はニヤニヤ笑ひ乍ら歇夫と布團ののぼりきるまで眺めてゐたが、それから默つて振返り、臺所へと歩き去つた。

二階へ來ると興里は暫く窓際に立つて、耀やきの中へ溺れるやうに茫然と外を眺めてゐたが、決して誇張した感慨は顔にも出さず、言葉にも表はさず、靜かに寢床へあほむけにねて吸はれるやうに眼を閉ぢた。

歇夫は興里と入れ換りに窓に凭れて、ムンムンと土のいきれの立ちのぼる朝のうららかな竹藪を目に入れた。光の裏には深い影が息づいてゐた。

行春や鳥啼魚の目は泪

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也。船の上に生涯をうかべ、馬口とらへて老をむかふる物は、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊のおもひやまず……

間もなく、四名の人々は喧ましい活氣を運んで歸宅した。皿や茶碗を買ひ購めてきたものとみえ、包紙の破か